



『リッコ冒険記』

～夏休み・異世界旅行～

(講談社投稿用)
『青い鳥文庫』
小説賞
(2018年)

※ ! 落選! ※

霧樹里守
(きりぎ・りす)

目次

(借景資料集)	1
【速報!】 第2回 「青い鳥文庫小説賞」	2
(第4稿)	
(第4稿) as (最終稿)	7
(添付挨拶状)	8
(あらすじ) (2018年9月23日)	9
【 移転 の お知らせ 】	10
序章 《朝日ヶ森》	11
第1章 リツコ、異世界へ行く。	14
第2章 リツコ、異世界で目覚める。	18
第3章 リツコ、皇女様にあう。	28
第4章 リツコ、仲良しができる。	40
第5章 リツコ、旅に出る。	48
第6章 リツコ、旅をする。	55
第7章 リツコ、取材する。	62
第8章 リツコ、囚われてはいないお姫様にあう。	71
第9章 リツコ、役に立つ。	78
終章 リツコ、地球に帰る。	83
(第3稿)	
(第3稿)	89
(表紙)	90
(あらすじ) (2018年9月16日)	91
序章 朝日ヶ森学園	92
第1章 リツコ、異世界へ行く。 (2018年9月16日)	95
第2章 リツコ、異世界で目覚める。 (2018年9月16日)	100
第3章 リツコ、皇女様にあう。	115
第4章 リツコ、仲良しができる。	131
第5章 リツコ、旅に出る。	142
第6章 リツコ、旅をする。	150
第7章 リツコ、囚われてはいないお姫様にあう。	174
第8章 リツコ、戦う。	180

第9章 リツコ、地球に帰る。	185
(第2稿)	
(第2稿)	197
(あらすじ) (2018年9月8日)	198
1-0-0. 朝日ヶ森「学苑」(おもて)	199
1-0-1. 朝日ヶ森(うら) (2018年9月8日)	201
1-1-0. リツコ、呼ばれる。 (2018年9月8日)	203
1-1-1. リツコ、出かける (2018年9月8日)	205
2-0-1. リツコ、異世界に着く。 (2018年9月9日)	208
2-0-2. リツコ、挨拶する。	211
2-1-1. リツコ、清峰鋭にあう。	214
2-1-2. リツコ、異世界の村へ行く (2018年9月9日)	216
2-1-3. リツコ、空を飛ぶ。 (2018年9月9日)	220
3-0-0. リツコ、悪夢をみる (2018年9月10日)(加筆)	222
3-0-1. リツコ、起こしてもらおう。	226
3-0-2. リツコ、情報交換する	229
3-1-0. リツコ、朝寝坊する。	231
3-1-1. リツコ、右将軍にあう。	234
3-1-2. リツコ、皇女に会う	236
3-1-3. リツコ、マシカとあう。	238
3-1-4. リツコ、市場へ行く。	241
3-1-5. リツコ、天幕に泊まる。 (2018年9月11日)	245
4-0. リツコ、早起きする。	248
4-1. リツコ、パレードに参加する。	250
4-2. リツコ、誇大広告される。	253
5-1. リツコ、旅をする。	256
5-2. リツコ、記録する。 (2018年9月12日)	258
5-2. リツコ、話せるようになる。	262
6-1. リツコ、囚われてはいないお姫様にあう。	265
第6章 リツコ、旅をする。	269
(第1稿)	
(第1稿)	273
(あらすじ) (2018年8月17日)	274
(目次) (2018年8月18日)	276
0-1. (おもて) (2018年8月18日)	278
0-2. (うら) (2018年8月18日)	281
1. リツコ、親善大使になる (2018年8月18日)	283
1-1. リツコ、出かける	286
2. リツコ、異世界へ行く。	289

2-1. リツコ、挨拶する。	292
2-2. リツコ、清峰鋭にあう。 (2018年8月19日)	295
2-3. リツコ、運ばれる。	297
3. リツコ、白王都へ着く。 (2018年8月22日)	300
3-1-0. リツコ、寝坊する。 (2018年8月22日)	304
3-1-1. リツコ、皇女に会う (2018年8月22日)	307
3-1-2. リツコ、マシカにあう。 (2018年8月24日)	309
3-1-3. マシカ、市場へ行く。 (2018年8月24日)	312
3-1-4. マシカ、天幕に泊まる。 (2018年8月24日)	315
4-0. リツコ、目覚める。	317
4-1. リツコ、行列に参加する。	319
4-2. リツコ、センデンされる。	322
5-1. リツコ、記録する。	325
5-2. リツコ、観察する。	329
6-1. リツコ、囚われてはいないお姫様にあう。 (2018年8月26日) ()	332
6-2. リツコ、小鬼を救う。 (2018年8月26日)	335
7. リツコ、まきこまれる。 (2018年8月26日)	337
8-1. リツコ、魘される。	339
8-2. リツコ、龍にのる。	341
9. リツコ、会議にでる	343
10-1. リツコ、よばれる。	345
10-2. リツコ、地球にかえる。 (2018年8月26日)	347
(草稿&没原稿)	
(草稿&没原稿)	353
(1) 朝日ヶ森 (2018年6月3日)	354
『リツコへ。 第一日』 (@中学.....1年か2年?)	357
(あらすじ) (プロット&目次)	
(あらすじ) (プロット&目次)	363
【投稿用】プロットメモ (2018年7月22日)	364
400字~800字程度のあらすじ。 (2018年8月17日)	366
(設定資料集)	
(設定資料集)	371
このコだ! 「鍵になるキャラ」...っ! www (2018年6月30日)	372
((ことばよ、つうじよ!)) (2018年8月9日)	378
(サ行前の雑談など)	
(サ行前の雑談など)	383
【ぐれてる理由】。(- ;)。 (2018年5月13日)	384

『リッコ冒険記』 ～夏休み・異世界旅行～ (1) (2018年6月3日)	386
(案の定【天中殺中】で頓挫している) (2018年7月22日)	390
...ちっ! ...やっぱり...『落ちた』か...★ (2018年8月12日)	392
次い征くぞ! 次っ! (2018年8月12日)	395
★ 【講談社『青い鳥文庫』の呪い!?!】の謎。 ★	398
奥付	
奥付	409

(借景資料集)

(借景資料集)

【速報！】 第2回 「青い鳥文庫小説賞」

<http://aoitori.kodansha.co.jp/news/1/98.html>

【速報！】 第2回 「青い鳥文庫小説賞」

最終選考結果発表！

第2回「青い鳥文庫小説賞」に、たくさんのご応募ありがとうございました！
最終選考の7作品は、さらにつわものぞろいの魅力的な作品で、いままでになくアツ〜
イ選考会議になりましたよ！

それでは、たいへんお待たせいたしました！

応募総数 179 作のなかから選ばれた、
第2回「青い鳥文庫小説賞」受賞作を発表させていただきます！

セキュリティ上、画像はサーバーに登録してあるものしか使えません(http://aoitori.kodansha.co.jp/content/images/shosetsusho-banner_2nd_last_oshirase.jpg&width=526)

第2回「青い鳥文庫小説賞」

【大賞】

吉岡みつる 『神様のお医者さん！—真墨と不思議な診療所—』

【金賞】

日部星花 『DEATH ★ガール！』

大賞・金賞に選ばれたおふたり、本当におめでとうございます！

=====

読者が小中学生であること、彼らが主人公に感情移入して読めることを考えながら、より魅力的な本に仕上げてください。

=====

「青い鳥文庫小説賞」は、第3回の募集も予定しています！

こちら、青い鳥文庫サイトでお知らせします。みなさまの力作を、お待ちしております!!

(第4稿)

(第 4 稿) as (最終稿)

(第 4 稿)

as

(最終稿)

(添付挨拶状)

拝啓 時下貴社益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

以下拙作を添付させていただきます。

なお、北海道地震（震度5弱）の被害により

プリンタに支障が生じてしまいましたが、

収入も激減したため、買い替える余裕がありません。

御見苦しい状態での提出となり、大変申しわけございません。

ご笑読いただければ幸いです。

敬具

2018年9月23日

きりぎ・りす（霧樹里守）

(あらすじ) (2018年9月23日)

『リッコ冒険記』...夏休み・異世界旅行...

霧樹里守(きりぎ・りす)

(あらすじ)

高原リッコは家族の事情で、私立学園の寮に住んでる。

その学長から「夏休みの手伝い」を頼まれた。

なんと、「異世界への親善大使」!

ええ?!... と思ったけど大人たちや先輩たちはみんな忙しくて行けないらしい。

「行って、みんなと仲良くして、まわりをよく観察して、レポートを書いてきてくれば、それだけでいいのよ。

行ってくれたら他の夏休みの宿題は、ぜんぶ免除してあげる!」

大好きな学長がそう言ってくれたので、喜んでひきうけた。

地球の《姉世界》と呼ばれる大地世界《ダレムアス》では、漫画かアニメの王子様?...か
と思うような超美形! の、優しいお兄さんに世話してもらっちゃうれしい♡

食べ物は美味しいし、お祭りは楽しいし...

...あいにくながら、残念な性格の皇女サマには、意地悪されたけど...

もうひとつの異世界《ボルドム》との戦争終結のための講和準備会議? とか、

同じ大地世界のなかでも、民族紛争とか、皇位継承争い? とか...

そういう深刻な問題には、ショックを受けたけど...

たっぷりのレポートを抱えて、友達と涙でお別れして、

リッコは夏休みの終わりとともに、元気に帰国しました。

【 移転 の お知らせ 】

☆
☆ 超？ 大幅に、加筆&改稿した2023年版、
☆
☆ こちらに移転しました。
☆
☆
☆ 「 ... 異世界よッ！ 」☆
☆
☆ ～ リッコ冒険記 ～
☆
☆
☆ <https://novelpia.jp/novel/3761>
☆
☆
=====

講談社「青い鳥文庫」投稿用) (2018年) (! 落選!)

=====

序章 《朝日ヶ森》

『リッコ冒険記』…夏休み・異世界旅行…

霧樹里守（きりぎ・りす）

序章《朝日ヶ森》

序章 1（おもて）

朝日ヶ森学園。

知ってるかな？

「天才児が集まる」ので秘かに有名。

超のつく贅沢な校舎と独特の自由奔放なカリキュラムの秀逸さ、そして学費の高さでも知られていて、我が子を名門私立に進学させたい親たちにとっては、憧れの学園だ。

基本は全寮制だけど、都心から遠距離通勤・通学してくる生徒や先生もいる。

緑の豊かな地方の新幹線の停車駅から、自動車なら迂回ルートで二十分くらい。

歩くなら、県立公園のなかの遊歩道をまっすぐ抜けてくるほうが速い。

自転車？…まァ、モトクロスを乗りこなせる人なら、抜けられる道だと思うよ…？

学園の敷地は広くて、一見すると壁とか塀とか柵とかの仕切るようなものは何もない。

でもセキュリティは万全で、目立たないところに監視カメラ網がぼっちり。不審者は入り込めないけど、内部の見学とかは許可制の予約ツアーに参加すれば入れる。

校舎や講堂や寮の建物は、一見シンプルだけどしっかりお金のかかった造りで、見た目は繊細で温和な感じだけど、どんな災害にもまけない頑丈な耐震骨格なんだって。

もちろん、屋外と屋内の両方に冷水と温水の競技用プールがあるし、体育館とか柔道場とか剣道場とか弓道場とか、もちろんスケートリンクもテニスコートも、全天候対応型のやつが、それも学年別とかで、複数個所にある。

さすがにサッカーコートとラグビー場とスキー場は屋外だけ。らしいけど…

図書館ときたら外部の大人が泊りがけで調べものをしにくるほど、質量ともに充実した蔵書を誇る。

広大な敷地内にはゆるやかな起伏があって、四季折々の豊かな緑花がきちんと手入れされている。

天気の良い日はあちこちの芝生や木の下で、生徒たちが一人でゆったり寝ころがったり、賑やかにグループ課題を片づけていたりする。

もちろん複数ある学内食堂は合計すれば二十四時間営業で、メニューはもちろん各自で好きに選べる上に、無添加とか有機栽培とか産地指定とか、どんなにうるさい親でも納得させるだけの厳選素材を使って、健康管理やアレルギー対策には十二分に配慮されている。しかも調理法は一流シェフによる監修で、名門レストランなみに美味しいと評判だ。時間割は自学自習に重きを置いていて、選択科目が多くて自由。

各学年のクラスは三つに分かれてる。

都心から新幹線で週1程度のスクーリングにくるだけでいい通信クラスに在籍しているのはテレビ撮影や映画出演で忙しい、超のつく有名子役やアイドルの卵が多い。学内では主に「タレ組」と俗称されている。

それから学園の売りの「天才組」は、その名のとおり生まれつきの知能指数が平均よりはるかに高い子どもが集まっていて、その分かなり変人が多くてつきあいづらい。

そして生徒のなかでも一番多いのはやはり、親が金持ちとか有名人とかセレブやVIPで、コネと金を使いまくってお受験競争を乗り越え、我が子をここに「押し込んだ！」と自慢してまわるような家の子たち。なんだけど...

...それ、本当はちょっとだけ、気の毒な話なんだ...

なんでかって...?

ここはあくまでも、関係者からは「おもて」と呼ばれている外向きの場所（学苑）で... 本当の朝日ヶ森「学園」は、「うら」とか「真」とか呼ばれていて、もっと別の秘密の場所にあるから。なんだ...

序章 2（うら）

さて。

「うら」とか「真」とか呼ばれている「ほんとうの」朝日ヶ森について...説明するのは、難しい。

場所は秘密で、首都圏からは「裏日本」なんて蔑称されている地域の、辺鄙な山の奥にある。

こちらも敷地は広大だけど、目立たないように全域が頑丈な壁できっちり囲われていて、特殊な警護部隊が昼夜をわかつたず厳重な監視をしている。

さらに一見はまばらに点在して見える贅沢な造りの低層建築群は、実は主に地下通路でつながっていて、むしろ地上より地下部分のほうが質量ともに広大な、実質的な本体だ、とも噂されているが、実は在学生でも現職の職員でも、その全貌を把握できている人は、ほとんど居ないらしい。

ほとんど「秘密基地」という構えだ。

こちらに在学する生徒の種類も、おもに三つに分かれる。

ひとつは国内外の要人、つまり政治・経済的なVIPの子どもたちで、なんらかの事情で家族とは一緒にいられない者...生まれつき病弱とか、テロや誘拐の対象にされる心配があるとか、相続争いによる暗殺の危険を避けるためとか、はたまた、隠し子で正妻に

は内緒でないとまずい存在とか...そんな感じの。

だからちょっとひねた性格のやつらが多い。

ふたつめのグループは、もっと特殊で...

「ふつうの人間じゃない」能力や外見を持って生まれた、「特別な家柄」の跡継ぎとか、先祖返りとか...

角や牙があったり、鱗や翼があったり、魔術や呪術が使えたり、過去や未来や、人の心が読めたり、はたまた、操れちゃったり...

本人たちはそれでも「神でも悪魔でもないから、いちおう人間なんだけどー」と主張する人が多いが、今の世の中ではうっかり一般社会を出歩くことができない。

それで、「一族だけしかいない隠れ里に閉じこもってばかりでは世間にうとくなるし、幼なじみと親戚以外は友だちも恋人も探せない人生なんて!」...という理由で「社会体験」と称して「朝日ヶ森学苑に遊学」しに来て、広い構内で文字通り「翼（はね）を伸ばして」学園生活を楽しんでいたり...する。

生徒の内の三つめのグループについては...

長くなるので、また後で説明しよう。

まあそんなふうに、観た感じからして不思議な...秘密の、「朝日ヶ森・学園」。

このお話は、そんな場所から始まる。

第1章 リツコ、異世界へ行く。

第1章 リツコ、異世界へ行く。

1-1. リツコ、呼ばれる。

朝日ヶ森「学園」生徒の第三のクラス・通称「ただびと組」に属する普通人のリツコは平凡な子どもで、セレブの子女でも天才児でもなく、美少女戦士でも子役アイドルでもないかわりに、妖怪変化の類でもなかった。(こう書いたら「失礼ね!」と、妖怪変化な学友たちから怒られた。)

しいて言うなら、特技は木登り。

親から習って育ったのでキャンプとか大好きで、野外炊飯なら得意。

虫とか蛇とか平気で、まゝ女子からは引かれるけど、いざって時のサバイバルには向いてる。

見た目は十人並み?

顔はのっぺりしてハナはちんまりして黒目はキョロっとでかくて、日焼けしてソバカスだらけで、へろへろのくるくるの天パの髪がコンプレックス。歯並びだけは自慢で真っ白で、まゝ時々「笑うと可愛い」くらいは褒めてもらえる。

ご飯はよく食べるけど、それ以上に暴れてる。...から、まだそんなに太ってはいない。...たぶん。

前の学校では野球部で、三年生にして県大会優勝投手。(全国は初戦敗退)。

投げたら当たる。これはけっこう、...長所?

まゝそんな程度のただのおてんば娘のリツコが「うら」の朝日ヶ森にいるのは...事情があった。

そんな事情のひとつ、「大叔母様」からの呼び出しがあったので、とある七月の昼下がりに学長室までとことこ歩いて行った。

全寮制の学園はすでに夏休みに入っていて、家のある生徒たちの大半は帰省か家族旅行に行ってしまった。

今を盛りと鳴きすだくセミ時雨のほかは静かな構内の、広大な芝生と緑の濃い木立ちと、英国庭園風のベンチをしつらえた花壇や迷路の中を、小汗をかきながら十数分ほど歩いて、ようやくレンガ造りの事務棟に辿りつくと、勝手知ったる建物内には無言のまま入って、こんこんと学長室のドアを叩いた。

「はい。どうぞ!」

若々しい声の大叔母様の返事を聞いてからドアを開け、一応「失礼します」と頭を下げる。

大叔母様というのは都合上の呼称で、本当は、祖母のイトコだ。

「なんですかー？」

「お願いがあるのよ！」

元気な声でいきなり言われて、リツコは面食らった。

「欠員が出ちゃってね！ 代わりに行ける人がいま他にいないの。バイトと思って引き受けてくれないかな？ お礼として、夏休みの宿題はぜんぶ免除するから！」

…この「大叔母様」の名前は清瀬律子という。リツコと同じ「りつこ」だ。

やはり美女でも妖怪でも天才でもない「ただびと組」のはずだが、朝日ヶ森の卒業生で、なぜか今では学園長まで務めてる。

リツコの母はこの気さくな美人叔母（ほんとうはリツコの母の母の従妹だ）が大好きで、たまたま彼女が事故で行方不明になってもう死んだかと思われていた頃にリツコを身籠ったので、思わず名前をもらって付けてしまった。という話…（そしてその後けろっと本人が生還したので、親族一同は呼び名の区別に困った。）

…まあその話はいいけど。

「朝日ヶ森『学園』の生徒の、欠員の代理って… それ、『ただびと』のあたしでも務まる用事？」

そっちのほうが当面の問題だ。

「だいじょうぶよ！ なんて言うか…そう！ 親善大使！ みたいな役目だそうなの。行って、滞在して、まわりの皆さんと仲良くして… 最後の会議で、コレを私の代理で音読してくればいいの！」

渡された手書きの便せんにざっと目を通して、それから声に出して読んでみた。

「…` みなさん、おまねきありがとうございます。今日のこの会議の”…」

ちょっと長いけど、読めないほど難しい漢字とかは、無いよね…？」

「…行っても、いいけど… どこ…??」

「異世界よ！」

ちからいっぱい無邪気に宣言した大叔母さんの予想外なセリフに、リツコは「はぁ？」と口を開け、目を点にした…。

1 - 2. リツコ、出かける。

「…あ、あらっ？…ウケなかったかしらっ？ イマドキの『ただびと』…いえっ、『普通世界』で育った子どもには、こういう言い方のほうがウケる…いえ、判りやすいかな～？ と、…思ったんだけど…っ？」

いつも穏やかで余裕ありげにニコニコしている大叔母様が、真っ赤になってわたわた取り繕うという珍しい光景を、リツコは口をあけたままあんぐり眺めた。

「…べつに危ないことは無いと思うのよ？ 戦争は終わったっていうし、和平会議なんだし、おばさまの初恋の人とか、向うに行ってるしっ」

「…は？」

「だからねっ！…だからっ、私と同じ名前の、血のつながったあなたが、向うでっ…あ

の人に、...会ってきてくれたら... 本当に、わたし、...嬉しいのよ...っ！」

真っ赤になって、照れながら、なにやら意味不明に身もだえしている。

...え〜と...。...ハツコイの、ひと...?????

...とりあえず、何も解らないけど、断れそうにないらしい。ということだけはリツコにも判った。

「.....わかった。とにかく、行ってくるから.....。」

「ほんとっ？」

小さい子どもみたいに身を乗り出して喜色満面になった大叔母様（たしか七十歳は過ぎているはずだ...）は、それから慌てて咳払いなんかしながらやっといつもの調子を取り戻して、色々と説明してくれた。

「...持って行ってほしいものは、もう購買に頼んで取り寄せてもらってあるから、部屋に戻る前に受け取って行ってね。それから、旅仕度に必要なものは何でも『おばさまの支払いで。』って言えば、好きなだけ買えるようにもう伝えてあるから。」

そう言いながら渡されたのは「絶対に！ 持っていくもの」と書いてある買い物リスト。

- ・計算尺 1つ（購買にもう頼んであります。）
- ・ノギス 1つ //
- ・大学ノートかリングノート（リツコの好きなほうで）10冊くらい（持てて書けるだけ、なるべくたくさん！）
- ・鉛筆（ボールペンやシャーペンじゃなくて）1ダース（1箱）か、もっと。なるべくたくさん。
- ・色鉛筆（カラーペンじゃなくて）1セット以上、欲しいだけ。
- ・消しゴム（多めに）
- ・鉛筆削り（忘れないで！）

「...この計算なんとかと、ノギスって...なに？」

「それは向こうからのお土産のリクエストなの。着いたら渡してあげてね。」

「...わかった。...ねえねえ。色鉛筆って、二十四色のやつ買ってもいい？」

思わず目をきらっと光らせながら聞くと、

「四十八色のでもいいわよ！」

大叔母様が笑って言い切ってくれたので、リツコは大いに気をよくした。

（自分のおこづかいだけじゃ買えないやつだー！）

それからこまごまと書いてくれてあった、行先への道順の説明をよーく読んで、解らないところは質問して、細かいところの打ち合わせもして。

その後ひとりで購買に寄って、言われたものを忘れずに全部と、リュックとか下着とか、要りそうなものをよく選んで買って。

それから夜遅くまでうんと考えて、必要最低限の着替えと小物だけを揃えてしっかりリュックに詰めて、翌朝、列車内で食べるお弁当と飲み物を、予約しておいた食堂で受け取って、お気に入りの籐製の手提げバスケットに詰めて...

用意した荷物を念のため大叔母様にもチェックしてもらってOKをもらって出発の挨拶してから、駅まで向かう朝一番の路線バスに、リツコは飛び乗った。

1 - 3. リツコ、一人旅する。

最寄駅から普通切符を買って鈍行に乗って、乗り換え駅から特急に乗り換えて、検札に来た車掌さんに目的地までの特急券を頼んだら、

「小学生が一人で？」と、やっぱり不審がられたから、大叔母様から教えられた通りに、

「ママのお墓参りに行くんだけど、パパは夏休みが取れなかったのー！」

と無邪気なふりしてにこにこ返事して。

「降りる駅に着いたらちゃんとおばあちゃんが迎えに来てくれるから。」と言ったら車掌さんは安心して向こうへ行ってしまった。

それから慣れない長距離列車にちんまり座って揺られていたら半袖ではクーラーが寒くてござえてしまい、鼻水垂らしてぐずぐず言いながら、ちょっとだけ、うとうと眠って。乗り降りの仕度を始めた他の乗客たちのざわめきに、はたと目が覚めると、もうすぐ、降りる駅で...

慌てて起きて、乗り換えて、また乗り換えて、乗り継いで...

日暮れ前によくたどり着いた二面戸町駅のホームの待合室でくると三回転半してから振り向いて、後ろの正面の七つと三番目の教えられたとおりの秘密のドアを、特別なやりかたでひねって開けると。

「高原リツコ様ですね？ 多元旅行社の送迎サービスの者です〜！」

... どう見ても二足歩行の巨大なカエルの人？ がいて、曲がりくねった不思議な山道を、おかしな形の、タイヤのない変な車で案内されて...

教えられた森の中のこぶこぶした不思議な形の大木に、よじよじと必死で登って。

「...今ですよ！」

『地球の大地の端から、太陽の端っこが、完全に沈んで消える瞬間』... ちょうどに！

教えられた通りの大木の幹の空洞から、えいっと、勇気を出して...

目を閉じて、しっかり荷物を抱えて、真っ暗な穴のなかに...

飛び降りて、どすんと...

...いえ、ふわっと...

なにか柔らかいものの上に、落ちて...

目を開けたら、そこは、異世界？

だった...

第2章 リツコ、異世界で目覚める。

第2章 リツコ、異世界で目覚める。

2-1. リツコ、仔猫につかまる。

ちょっとの間だけ、気絶していた？ らしい。

はじめ何も視えなかった。とにかく眩しかった。

(...太陽...? あれ? だって「陽が沈む瞬間に!」って、飛びこんだよね...?)

変だなど思いながら、明るすぎて何も視えなかったので、とりあえず薄目だけ開けて、両手で自分のからだとまわりの様子を探してみる。

...怪我はない。まわりは...もふもふ? もこもこ?...している...???

しばらくしてようやく、自分が何か柔らかくて丸っこいものの山の中に、かなり高いところから落ちた勢いのまま、ぼふーんと埋もれこんでいる...? ことが判った。

その何かふかもこしたものが、落ちて来たリツコを受け止めた衝撃で弾け跳んだらしい綿埃?...らしいものが、ほぼ真上から降り注いでくる金色の陽光の中を、ぶわぶわと舞い飛んでいる。

触ってみた感じでは、リュックもバスケットも、壊れたりはしていない。

とにかく眩し過ぎたので、薄目だけ開けながらもっそもっと動いて姿勢をかえて腹這い向きになり、それから手探り膝さぐりで、1mほどのふかもこの斜面をのそのそとよじ登る。

ちょうどその頃から、まわりのあちこちから、声が聞こえ始めた。

「...ま〜るめる! まるった! えら。えららう。まるる〜ん...???

「えるった! らう!」

「あらえ!」

「まるえ? えら。あらう。...あろ、...あっかせっか!」

「か〜いせ! えのっかあるっか、らうらうらう。あごん!」

「あうのいあ!」

...そんな感じの、まるまるした声の、可愛い響きのコトバで...

もちろん、ひとつことも、解らない...!

(.....ほんつとに、異世界...? ...来ちゃった〜...???)

そう思いながら、もこもこの山の上からようやく顔を出す。

「...えらっ! あまっ! あまま、ままま? あまま、あそっ?」

可愛い仕種で、どうやら

『だいじょうぶ～?』と心配してくれているらしい声が、あちこちからかかった。

(...か、.....かわいい...っ♡♡♡)

目じりが思わずハート型になってしまうような生き物たちが、いた。

全体的に、白っぽくてもこふわ。サイズはかなり小さそうだ。一番大きいコでも、リツコの膝までぐらい?

うさぎのような、モヘアのような、ふわふわ毛並みの、横長のまるい顔立ちの、大きな吊りあがりぎみの、黒くて丸い眼の...見た目は、むしろ、猫...?

エプロンドレスのような...巻きスカートのような...きんたろさんのような...形はそれぞれ違うけど、手織りの手縫いらしい可愛いパッチワーク模様の、色とりどりの服を着た...

二足歩行の...、仔猫...??

「...あいじゃ! うにゃう?」

心配してくれているらしい、表情豊かな大きな瞳が、とてもとても、愛らしい。

(これ、意味、たぶん、『だいじょうぶ? けがはない?』って聞いている感じかな...?)

リツコはとりあえずばたばたと手を振ってみた。

「ごめん! コトバわかんない! ケガはないよ～。だいじょうぶ!」

それからちょっと心配になって、体の下のもふもふを手にとりてよく見てみた。

白猫? たちとよく似た色だから、生きてる仲間を下敷きにでもしたかと思って。

(...違うみたい。...これは...毛玉?...繭...???)

なにかカイコのような形の肉まんくらいの大きさの、毛玉? のようなものが、いかにも「落ちてくるもの受けとめ用クッション」という形に、高さ数メートルくらいにもりもりと盛り上げられている。

その小山を取り囲む(...風から護っているのかな...?) ふうに張り巡らされた、屋根はないテントのような... 帳幕のような... 場所の、前は大きく開いていて、見晴らしが、すごく良いことにリツコはやがて気がついた。

おそらくとても高い山の斜面に広がっている森のなかの大樹の、節くれだった太い幹の上のほうに開いている大きな空洞の、その真下にリツコは落ちたのだった...

2-2. リツコ、白ウサギに挨拶する。

『何かが木の洞から落ちてきたら』受けとめられるようにと、平屋建ての小さな家くらいの勢いで積み上げられていた『もこもこ』の山の斜面をずるずると滑り降りてみて、そこでしばらくリツコは困り果てていた。

二本足で歩く『しゃべる猫にんげん?』... としか思えない、白っぽくてふわふわの小さい生き物の群れに、わらわらと取り囲まれて...

「まうまうまう!」

「あうれ?」

「あっかのおっか?」

「おねうおねう！」

「まうまうまう！...まうまうまう！ まうまうまうーっ！」

などなど...まるっきり解らない言葉で、おそらくたぶん質問責めに？ されたあげく、とりあえず適当に日本語で受け答えをしている間に、よじよじとリツコの脚や腕に登り始めて、頭の上にもまで座っちゃったりされて埋もれてしまって、うかつに身動きできない...

(.....えーとお。これは～.....っ☆)

ふかふか自体は可愛いので、思わずもふもふと撫でてみたり、へろへろと笑いながらも、ちょっとかなりこれからどうしたらいいのかと困り果てていると、すこし離れたところから、いくらか低めの声が響いた。

「...えっけれねん！ あうら！ かなりっこさる！」

とたんに、リツコを取り囲んでいたチビ猫さんたちが、慌てて散って逃げた。

「あけーなーね！」

なんとなくリツコにも意味が分かった。

『あんたたち何やってるの、だめでしょ！ 離れなさい！』

『ごめんなさーい！』

...くらいの意味じゃないかな？ たぶん...

ちびさん達がどいてくれた隙に慌てて立ち上がると、後からやってきた人？ たちの姿がようやく見えた。

(...あれ...?)

膝丈ほどのちびさん達は、どうやらとにかく『子どもの』猫(?) だったらしい。

やってきたのはたぶん大人？ で...、ちびさん達よりだいぶ大きい。とはいえ、地球の日本の小学生高学年としては標準サイズのリツコと、同じくらいしかない。

子どもたちは横丸な顔で耳も短くて、地球の猫によく似て見えるのに、やってきた何人かの大人？ たちはおそらく、育つにつれて顔も体も縦長になり...とくに耳が長くなっていったん立ち上がり...やがてもっと長くなると重さで垂れて...地球でいう「垂れ耳うさぎ」が巻きスカートのようなエプロンドレスのような手織りの服を着て、荷物を手で持って、二本の足で立って歩いてやって来た。...としか、思えないのだった。

(...えーと！)

リツコはとりあえず大叔母様から「皆さんと仲良くしてね。」と言われて来た、自分の『親善大使』という役割を思い出して、ピシッと「気をつけ！」の姿勢をとった。

「こんにちは！ はじめまして、高原リツコでございます。よろしくお願ひします！」

きちんとした大人たちがきちんとした時にきちんとやるみたいに、きちんと前に手をそろえてきちんと頭を下げ、きちんとした挨拶を試みた。

おとなウサギ？ たちは、一瞬キョトンとした後、やおらそれぞれの長い耳をゆっくりと頭上に掲げてぱたぱたと左右にうちふり、両手はいったん体の横に垂らして手のひらをリツコのほうに向けてから、なにかを持ち上げるような仕草で左右に開きながら上げて、同時に膝をちょっと折って前かがみになって、

「...まうまうまう！」と声をそろえた。

(まうまうまう?) とリツコは慌てて考える。

(さっきから何度もちびちゃんたちから聞いてたコトバだな～、アイサツだったのか!)
了解したので慌ててまねっこをして両手を耳のかわりに頭の両脇にたてて左右にふって
みて、それから手のひらを相手側に向けておすもうさんみたいに広げて。膝をびよこん
と折って前かがみもまねして。

「もうまうまう？」と、首をかしげながら挨拶を試みた。

おとな兎たちはリツコの発音の悪さにウケたらしくて笑いながら、元気に声をそろえて
「れいまうまう！」と返事してくれた...

ので、リツコは嬉しくて、えへへと笑った。

2-3. リツコ、『王子様』にあう。

「...えっけれねん、あうりっこさるれうある？」

「あっかいおす、おっかいねん？」

...再び意味が解らない...

えへへと頭をかく仕草でごまかしながら困り笑いをしていると、おとな兎たちのうしろ
から、新たな声が響いた。

「...ごめんごめん！遅れた！やっぱりちょっと時間の計算に誤差があったね！」

(.....日本語だぁ～.....!!!!)

生まれて初めての『ことばの壁』に疲れて、早くもホームシックになりかけていたリツ
コは、自分がものすごく安心して気がゆるんだことに気がついて、むしろ驚いた。

「ミキーレ！」

「ミキーレ！あうのあさるのみえ、えれ？」

おとな兎たちは歓迎しているらしい声で、ふりむいて何かを説明？している。

『あうれりぁ、おうのおうあえら。』

少しだけ違う発音で、だけどごく流ちょうなウサギ語？で受け答えをしながら斜面を
登ってきて、リツコの視界に現われたのは...、ものっすごい...美青年！だった...

リツコと同じくらいの体格のおとな兎たちの背後からひょいと胸半分ほど出る背丈の、
すらりとした細身で、薄茶色のさらりとしたまっすぐな髪は肩にかかるくらい長くて、
薄い水色のメガネをかけている瞳も澄んだ明るい茶色で、優しそうな笑顔に、ものすご
く賢そうな白い額がきれいに広くて、三国志みたいな青い上衣と長めの外衣を羽織って、
動きやすそうな細めの水色の袴？を履いて、さりげないけどセンスのいい服装をして
いる。

...なんだか雰囲気全体がきらきらしていて...少女漫画かアニメの美形キャラのよう
だ...と、リツコはこんなに綺麗な青年をリアルで見たことがなかったので、呆然と見惚
れる。

ぼかんと口を開けたまま固まったリツコに、美青年はちょっと困った笑顔で、

「...リツコだよね？遅れてすいません。迎えの者です。」

「...はいっ！高原リツコですっ！高天原から天を抜いたタカハラ！リツコはぜんぶカ
タカナっ！」

リツコは思わず大声のフルサイズで自己紹介をしてしまった...

「...どうぞよろしく？ ぼくは、清峰鋭（きよみね・えい）といいます。」
ウサギたちからは『ミキール！』と呼ばれていた青年の自己紹介に驚いて、
「嘘っ？」...リツコは思いっきり大声で反応してしまった。
「...え？」
「...だって！...それ大叔母さんの同級生の人！七十歳は過ぎてる筈でしょっ？」
「...あ〜、聞いてないかな？ 向うとこっち、時間の流れも、トシのとりかたも、違うんだよ〜？」
「...聞いてないっ！」
断言したら、美青年なお兄さんは、困ったような顔で、にっこり笑った。
「...じゃあ、解らないことは何でも聞いてくれていいから、とりあえず、移動しようか？」
なんだか有無を言わさない迫力ある笑顔に気圧されて、リツコは、ハイと頷いた...

2-4. リツコ、異世界の村へ行く。

「この世界は《ダレムアス》と呼ばれていてね。意味は《大地の世界》。いま僕らがいるのは世界の真ん中の《大地の背骨》山脈の端っこで、あの大河を渡ったところにあるのが、これから行く《仮皇都》」
見晴らしのいい山腹の草原の道を並んで歩きだしながら、リツコが質問するより速く美青年が教えてくれる。
空は地球と同じような色の澄みきった青で、流れる白い雲と乾いた風がとても気持ち良くて、リツコがよく知っている地球の日本の森とは少し違う樹木が密生している大森林には色とりどりのたくさんの蝶や小鳥がたくさん飛び交っている。
「...きれ〜い！」
リツコは思わず深呼吸して叫んだ。
「最初は地球と似て見えると思うけど、空と太陽と星だけが共通項って言われてて、けっこう違う点があつてね。まず電気製品とか電子機器とかが一切使えないんだけど、それは聞いているかな？」
「あ、それは聞いてた。...あ、ほんとだー！」
言われて思い出して歩きながらリュックから端末をとり出してみたが、『圏外』どころか画面も真っ暗なままで、何度スイッチを押しても、うんともすんとも言わない。
「金属加工の技術はあるんで、水力発電施設なんかも造って見たんだけど、全く反応しなくてね。まず何しろ魔法なんて非科学的なものが存在してるくらいで、根本から物理法則が地球と違ってるんだ。」
「...そうなの？ 見て目は似てるのにねー？」
(...ブツリハウソク...って、電気とか重力？ とかの仕組みとか、そういう話だよな...?)
リツコはこっそりと頭のなかでおさらいをして、慌てて相槌を打った。
「それから生き物がさうとう違ってる。...まあ、見れば判ると思うけど...」
わきやわきやと賑やかに足元に絡みついてくる子猫？ なこどもたちと、垂れ耳ウサギなおとなの女性たちと、その中間で立ち耳ウサギみたいな、リツコと同年代か上？ くら

いの少女？ と一緒に、山腹の平地に開けた村まで降りて行くと、そこにいた垂れ耳の犬？ そっくりなひと？ たちは、どうやら、おとな兎な女性たちと同じ一族の男性？ らしかった。

子ども時代はみんな横長の丸い顔に短く上がった三角耳で、色はオフホワイトやアイボリーとか「だいたい白系」のもふもふ毛並みなのが、ちょっと育つてくると耳と顔と胴体が長細くなってきて、色は薄くなるのと濃くなるのに分かれて、毛の長さも短くなるのと長くなって巻くのに分かれて。それがもっと育つと、短い真っ白い毛の垂れ耳うさぎ似のおとなの女の人？ と、濃色の長めの巻き毛の垂れ耳の犬に似たおとなの男の人？ に、なる。という種族であるらしかった。

その他に、なんとなく鹿似のひと？ とか、どう見ても丸ごと犬だけど喋ってる？ みたいな人？ とか、服を着て立って歩く熊？ っぽい人とか、歩く観葉植物人？ とか樹木な人？ とか、とか...が、村の中心らしい街道を賑やかに行き交っている。

それから地球人と言っても通る『普通の人間』に見える人たちや、目や耳の形や色彩がちょっと違うけど『ほぼ地球人と同じ』な人たちや、角や牙や尾っぽがあるけどだいたい人間に近いような形、という人なんかも、本当に色々と、たくさんいるようだった。街道沿いになんとかの等間隔で並んでいる家々は丁寧な細工の木造で、まるで白雪姫の小人の家みたいな可愛らしいサイズ。なので、体格的に、うさぎいぬねこ人の家には入れない大きさのひと？ たちは、村のまんなかの広場や、わざわざ大きめに造ってあるらしい休憩所風のあずま屋とかに座って、なにか飲んだり食べたりしていた。

2-5. リツコ、観察する。

そんな人？ たちが、降りてきたリツコたち一行に気づいた。

「ミキーレ！」

「リール！」

「イーキレ！」

「リレク！」

地球の日本人の清峰鋭と名乗ったはずの美青年に、親し気に何種類もの名前？ で呼び掛けながら、わわっと群がってくる。

「まうまうまう！」

「ぐわーごっば、うわう〜」

「アマルカッシュュッ！ パキヤワシュ」

「ギャギャギャガノキュ、ギギュイユギギ！」

「ゴワーガ！ ヴォ〜ノ” マーレ！」

...なんだかとても多種類の、それぞれぜんぜん違う言語に聴こえる...

リツコは混乱して固まった。

それにまた平然と、それぞれの言葉を使い分けて返事をしている？ らしい隣の地球人を見上げて、リツコはまた困り笑いを浮かべて、ちょっとかなり、後ずさってしまった...

「...えーとあのう...、清峰サン...？」

思わず敬語付きになってしまった。

「鋭でいいよ？ リツコって呼んでいい？」

「いい德斯けど...」

「ですじゃなくていいよー？」

にっこり笑う顔にまた思わず見惚れてしまいながら、

「いい、...けど？」と、リツコは言い直した。

「...この世界って、言葉が何種類くらいあるの？ で、鋭は、何ヶ国語が喋れるの...？」

美青年がちょっと驚いた顔をして、ふわりと嬉しそうに笑った。

「...今のを聴いただけで、ちがう言葉が何種類もあるって判った？」

「...うーんとね。」

リツコは説明を試みる。

「もちろん意味は全然わかんないんだけどー...昔ね、おばあちゃんがまだ生きてた頃、近所におばあちゃんの友達で、翻訳の仕事の人がいたの。で、おばあちゃんと一緒に遊びに行くと、大人たちが喋ってる間、子ども向けの色んな言葉のビデオとか観せてくれたの...だから、地球にも、色んな国の、色んな言葉があって、色んな挨拶とか習慣とか、違う考え方とかがある...ってことだけは、解るの。」

「...それは、貴重な体験だったね。」

きれいに笑って美青年が言う。

「...だけど、この世界の言葉が全部で何種類あるかって、たぶん誰も数えられたことないんじゃないかなー？ なにしる《朝日ヶ森》では『天才組』のトップにいた僕でも、まだ習得してない言葉のほうが多いし？ 本人たちは同じ言葉を話してるつもりでも、お互いすごい訛ってて、全然通じてない。なんてこともよくあるし...。みんな言葉が通じないのに慣れてて、あんまり気にしないで何とかしてるから、リツコもとりあえず日本語で喋ってていいよー？」

「...うん解った...。」(ていうか、それしか出来ないしー。)とリツコは苦笑した。

2-6. リツコ、歓迎される。

どうやら目的地に着いたらしくて、村で一番大きな家の前の大きな木の下の地面と同じ高さに、敷く...というか張られた？ 地球のウッドデッキのような木の床に、鋭はリツコを案内しながらすすたと靴のまま上がった。

「靴は履いたままでいいからね？ こうやって、床の上にじかに座って、片膝を立てて片アグラをかくが、こっちの世界での正座...これきみの食器。各自で持って歩くのが習慣だから、なくさないようにして。で、立てたほうの膝のうえにこう『膝敷き』を乗けて、その上にお皿かお椀を乗せて左手で支えて、右に置いた小盆から食べるものに合わせて箸か匙を選んで、使い分けて食べるのが、こちら式。」

「...へ～え。お箸なんだ...」

渡された小さなお椀とお皿とその蓋にもなるお盆と、お箸とお匙のセットの木彫りの丁

寧さや、鍋敷きならぬ膝敷き？ の刺繍の細かさを眺めて感心している間に、鋭は代表者っぽい貫禄の人としばらく話して。

「...ごめん。実はぼくの計算ミスで、きみが予想より二時間ほど早く着いちゃったものだから、お昼ごはんの仕度がまだ出来てないって。それでお茶とお菓子の略式の歓迎会になっちゃうんだけど、ごめんね？」

「お昼ごはん？」

リツコはちょっとびっくりして言った。

「あたしあっちで太陽が沈む瞬間に飛びこんだのに？」

「...うーん...。時差がやっぱり昔の記録とずれてるなあ...まあ遅くなるよりは、早く来てくれてよかったよ？」

鋭の言ってる意味がリツコにはまったく解らなかったが、さっきの人たちや初めての人たちが色々、わらわらと同じ木の床の上に集まってきて、何やらそれぞれの言葉で今度はリツコに、あらためてきちんと挨拶をしてくれている雰囲気だったので、とにかく日本語で一生懸命、「こんにちは！ よろしくお願ひします！」と挨拶をしまくった。

それからリツコは、こんなに色々な種族のたくさんの外見の人？ たちが一堂に集まっているのだから、てっきりこれが挨拶をしなくちゃいけない『講和会議』なんだと思って、挨拶せめがちょっと途切れたすきに、こっそり聞いた。

「ねえ、鋭。大叔母様からの手紙は、どのタイミングで読んだらいいの？」

「えっ?...ああ、違う違う。その会議は、もっと先の、ずっと西へ行った後の話だよ？ 今日のこれは、はるばる来てくれたきみに挨拶がしたいって地元の人たちが主宰の、たんなる歓迎会。」

「...あ、そうなんだ...。」

気負っていたリツコは、勘違いが恥ずかしくて赤面した。

それから乾杯の音頭みたいな全員一緒の挨拶？ があって、その後、木の床の真ん中に敷かれた清潔な敷布の上に、冷たい果汁や温かい香草のお茶や飾り切りの果物や、木の実を潰して焼いたお好み焼きみたいなお菓子？ だか軽食だか等々が、色々次々に出てきた。

もちろんリツコは勧められるままに「いただきます！」と手を合わせてからきれいに全種類たいらげて、「ごちそうさま！ おいしかった～！」と、もう一度手を合わせて言った。

2-7. リツコ、誉められる。

「もひとつごめん。質問たくさんあるとは思うけど、ぼく先にこの人たちと色々打ち合わせしなくちゃなんだ。ちょっと待っててくれる？」

「うんわかった。」

そう返事して、食べ終わった後かなりゆっくりお茶を飲んでても、隣の席の鋭はまだ反対側を向いて、入れ替わり立ち代わり座りにやってくる大勢の人たちと次々に「打ち合わせ」とやらを続けている。

...のを見て、暇になったリツコはやおらリュックの中から大学ノートとペンケースと、古い小さな日本語の辞書を取り出して開いた。

まずは一頁一行目に日付と時刻を書こうと思ったけど、携帯が使えないので判らない。仕方がないので『訪問1日目。昼？ ご飯のあと。』と書いて。ざっと報告の文章は箇条書きでメモだけ書いて。

それから「四十八色！」入りの色鉛筆の缶をわくわくしながら広げて、子猫とおとな兎とおとな犬を家族風に並べて、簡単なスケッチ風の落書きを、丁寧に手早く描いて。

「...ねえねえ、このひとたちは、なんていう名前？」

ちょっとだけ暇ができたらしいタイミングをねらって鋭に聞く。

「...本人たちは《マウレイレイ》って名乗ってる。《賢く礼儀正しい一族》みたいな意味かな。まわりからはもっぱら《兎犬猫族》とか《森中族》とか... リツコ、イラスト巧いね？」

「あ、ほんと？」

えへらっと笑う。

「うん。簡単な線なのに、特徴をよくつかんでる。」

「わーい褒められたー♪♪」

素直に喜ぶリツコのへしゃっとした笑顔に、美青年もつられて笑った。

「...適任者が行くわよ！ って、清瀬のほうの律子さんが手紙に書いてきた意味が分かったよ。」

「なんてー？」

「前に来たオトナの人は、電波が通じなくてもソーラーで充電しながら、デジカメとパソコンで記録は撮って帰れるだろ。って思ってたらしくて...記録用の機械が全滅で、報道マンとやらのアイデンティティーが崩壊してた。」

「...うーん...」

リツコは苦笑する。

アイデンティティーって言葉は解らないけど、オトナって...たしかにときどき、「アタマが硬くて使えない」時があるよね...。

2-8. リツコ、空を飛ぶ。

「ところでリツコ、きみは馬には乗れる？」

ひと段落したらしい鋭が唐突にそう聞いてきた。

「...ウマ?...動物園とか観光地とか、10分1000円とかの体験乗馬しか乗ったことない...」

「じゃあやっぱり、運んでもらったほうがいいねー。」

「？」

リツコがきょとんとしている間に、鋭はまた他の人たちとそれぞれのネイティブ言語で会話して、何かの伝言を追加すると、しばらくして、

「...そろそろ、行くよ？」とリツコに声をかけて、どうやら「ごちそうさま」に相当する

らしいお礼のコトバを言って、席を立った。

リツコも慌てて同じコトバを真似して挨拶して、忘れ物がないように気をつけながら手早く荷物をまとめて後を追う。

「...ねえ！ 今日って、ここに泊まるんじゃないの？」

「うん。地球に帰る時は別の道を通るから、もうここへは戻って来ないよ？」

「えー！ もっと猫ちゃんたち、モフリたかったー！」

「.....もふる？ ...って、なに？」

鋭は『モフる』という日本語を知らなかった！

鋭が地球にいた頃には、まだ無かった言葉。らしい...。

それから、ちょっともじもじしながらトイレの場所と使い方を、鋭に通訳してもらって女のひとに聞いてもらって。その後。

集まっていたみんながぞろぞろ見送りについて来てくれるなか、来た方向とは逆の、もう一段下の崖の上の広場につくと、そこに待っていたのは...

翼の生えた...鳥？ ただの鳥じゃなくて... 喋るから、鳥人間?...の、人たちで...
なんだか見た目が怖い上に、...槍？ ...剣かな?...で、武装？ していて...
...なにか、運動会の球入れのカゴのような、でかい入れ物？ が置いてあって...

「...リツコ、高所恐怖症じゃないよね？」

にっこり笑って超絶美青年が指示するのでやむなく、リツコは恐る恐る、その籠に乗りこんで...

ことばを喋る大型猛禽類？ たちが4人？ がかりで、そのロープをそれぞれの両脚の手？ で、ガッシリ掴んでやおら舞い上がり...

(.....きゃーーーーー.....っ！)

見送ってくれる人たちに挨拶をする余裕もあらばこそ。

必死で絶叫を呑みこむリツコだけを乗せて、カゴはどんどん空高くに上がって行き...
...ようやく揺れが収まってきてから、恐る恐る見下ろしてみると...

清峰鋭は随行の騎馬の一団とともに、はるか下の草原を駆けているのが...
遠目に見えた...

(嘘つきーーーーっ！ 「道中、何でも聞いて？」 って言ってたくせにーーーー)

心中で絶叫すること数時間。

強い風にも、怖い顔の猛禽類たちにも、だんだん慣れてきて...

広い広い《大地世界》を上から見下ろして...いや、背後に広がる《背骨山脈》とやらの山頂は、それよりまだまだ、はるかに上に霞んでそびえたっているのを眺めて...

眼下は草原と森、丘陵と谷、畑地と街と村と荒野と...

少し風が寒いけど、この世界は平和で。平和で。平和で...

...地球の日本の日没とともに異世界行きの穴に飛びこんだ後、まだ午前中だった異世界に着いてからさらにまた半日以上も、がんばって起きていた、小学四年生のリツコは...

いつのまにか、深く深く...寝入ってしまって...いたのだった...。

第3章 リツコ、皇女様にあう。

第3章 リツコ、皇女様にあう。

3-1. リツコ、悪夢をみる。

リツコは、うなされていた。いつもの夢だ。

懐かしい家。山のふもとの、ちょっと不便な、だけど緑が豊かな南向きの斜面にある... 温かい木の壁の家。

いつものように休みの日の朝には家の裏の土手を登って、日当たりのいい上の畑からお昼ごはんにする野菜や果物を採ってくるのが、リツコの当番だった。その日はお母さんのリクエストで、小ネギとラディッシュとミニトマトを沢山と、葉レタスを1株採った。ちょっと重たくなった収穫カゴを抱えて、崖道を降りようとする...

村はずれの集落へと向かってくる行き止まりの一本道を、見慣れない車の集団が、凄い速さでやってくる...

.....見慣れない車.....

...だけど、あの色は...!

リツコは急斜面をころげるように横切って走りながら、叫んだ。

「お母さんッ! 大変ッ! 逃げて!」

「...リツコ? どうしたの?」

お母さんとお父さんがのんびりした顔で、台所の窓から一緒に顔を出す。

「.....お姉ちゃんッ! 緑衣隊よ、逃げてッ!」

家の下のほうの斜面で洗濯物を干していた5歳上の姉にリツコは叫んだ。

...もう遅い。

妖しくてらてらと光る変な緑色の特別な自動車の一群は、家の前の小道にがっとなり入り込んで次々に急停車するなり、ばたんばたんと音を立ててドアを開け、ばらばらと降り立って来た妖しくてらてらと光る変な緑色の特別な制服の男たちが、びっくりして動けないままシートを握りしめて立っていた姉を、数人がかりで乱暴に捕まえた。

「.....きゃあッ!?!」

「エツコ!」お母さんが叫ぶ。

「何をするッ!?!」お父さんが怒鳴る。

「高原ワタルとシズカだな?」

男たちのリーダーらしいヤツが、すごく嫌な声で怒鳴った。

「反政府罪で逮捕する。逃げたら...」

「きゃあッ！」頭に銃をつきつけられて、お姉ちゃんが絶叫した。

「...エツコ！...やめて！やめてッ！」

「...わかった！頼むからやめてくれ！娘は関係ないッ！」

「ふん。反逆者の娘は、しょせん反逆者の娘だ。」

「お父さん！逃げてッ！」

なおも崖の上から叫んだリツコをめがけて、男達の何人かが、ばらばらと走り始めた。

「リツコ！逃げなさい！」

「お父さん！逃げてよッ！」

「エツコを置いて逃げられない。おまえは逃げなさい！お婆さんの所へ行くんだ！」

「リツコ！逃げて！あたしは平気！」捕まったままエツコが叫んだ。

「逃げなさい、リツコ！...きゃあ！」

叫んだお母さんが乱暴に殴られた。

「...やめろ！抵抗してないだろう！」

怒鳴ったお父さんも殴られた。何度も... 何発も。

「お父さん...ッ！」

リツコは、叫びながらそれをただ見ていた。何も出来なかった...

絶望した。

そして崖を駆けあがって来る大人の男達の、動きの速さを悟った...

...急がないと、逃げ遅れる！

「.....お婆さんの所で待ってる！」

叫んで、あとはもうふりむかずに、一目散に、山の中に逃げ込んだ。

勝手知ったる裏庭山だ。大人には通れない深い崖の上の細い枝をするすると渡り、ターザン顔負けの軽業で幹から幹へ飛んで、とりあえず秘密の場所に逃げ込んだ。

隠しておいたお菓子と缶ジュースで一息ついて、様子を見ていたのだけど...

妖しい制服の男たちがリツコを探して山狩りを始めたらしいので、陽が沈む間際を狙ってこっそり逃げて、今までは「子どもだけで入っちゃいけません！」と言われていた、奥の奥の神山のふもとへ逃げ込んだ。

そこから、月明りだけを頼りに、山伝いに、歩いて、歩いて...

...おなかが空いて、でも見つかるから、街へは降りられなくて...

何日も、山の中で眠って、歩いて...歩いて... おなかがすいて...

雨が降って、寒くて...

...いつもの夢だ。怖い夢...

もう、起こってしまったこと。

リツコは、何もできなかった...

ただ自分ひとり逃げるばかりで...

家族を... 救えなかった...

「...逃げてよ、お母さんッ！逃げてえ.....ッッ！」

眠っているのに、涙が出てくる。

リツコは、叫んだ...

3-2. リツコ、起こしてもらおう。

「……………リツコ！ リツコ！ ……起きて！ ……夢だよ、起きて…！」

「……………お母さんッ!？」

リツコは飛び起きて、声をかけてくれた人に、必死でしがみついた。

「…ああ、良かった… 無事だったのねっ！」

「……リツコ…… 大丈夫だよ……。」

優しく抱きしめて背中をぽんぽんしてくれた人に、ぎゅぎゅぎゅ〜…っと、抱きつきかえしてみたら…

…………… ん?? ……違う…?

リツコはまだ半分寝ぼけたまま両腕で相手の背中を探ってみて、目をぱちくりさせた。

……細いし… なんか、硬い? し…??

…これ、お母さんじゃないし… お父さんでもないし…

お姉ちゃんでも、大叔母様でもないし…

「…………… あ!? 鋭? ……ごめんねっ? ……あ、あたし… 寝ぼけて…っ」

ようやく頭がはっきりして… びっくりして飛びすさったら、

「ううん〜?」と、美青年は優しく笑ってくれた。

…やっぱり美形すぎて、思わずまた目をハートにして、見惚れる…。

鋭はまた困った顔で苦笑して、

「…それにしても、度胸がいいねーえ? 気がついたら天荷籠のなかで爆睡してたって。

鳥人のみんな、呆れて笑いころげてたよ?」

寝ぼけたことはとりあえず無視してくれて、にやにやと揶揄ってくる。

「…え? ……ええ?」

リツコは慌ててあたりを見回した。

…知らない部屋だ。

「……ここ……?? どこ…?」

「うん。日が暮れる前に《仮皇都》に着いたんだけど。いくらゆすっても起きないからさ。

失礼ながら運んじゃった。」

「……うわーっ?? ごめんね??」

「ううん〜? 軽かったし。」

「え〜? ……軽くないよ〜?? あたしけっこう重いよ〜??」

リツコはばたばたと意味もなく暴れ、顔とか髪とかに慌てて手をやって赤面した。

…こんな美形のお兄さんの前で、もっと小さなコドモみたいに、寝こけて寝ぼけるなんて……っ

「…だってさっ! だって、向う側の地球の木の穴から、えいって出発したのは夕陽が沈んだ時だったのっ! こっち着いたらまだお昼前で! だからお昼ご飯二回も食べて、しかもたくさん食べたでしょ? 飛んでるあいだ、あたしは暇だったしい…っ!」

とりあえず必死で言い訳なんかしてみる。

「…うん。きみが環境適応能力のとっても高い、度胸のいい大物だ。ってことは、よく

解ったよ？」

意味は解らない単語が入っていたが、なんだか皮肉られていることは判る。

「いや～んっ！」もっと赤くなって身もだえしながら叫んだ。

「...知らないところでさ。一人で目が覚めたら、いやでしょ？ お腹もすいてるだろうと思って。」

ふっとまじめな顔に戻って優しい声で言うと、リッコが寝かされていたベッド？ を脇から覗き込んでいた鋭は、ひょいと背筋を伸ばして向うへ歩いて行き、部屋の中央に置いてあった食卓と椅子らしい家具のほうに戻った。

机の上には色々な...分厚い本らしいもの？ とか大きな紙？ の図面？ とか、地図のようなもの？...なんか色々広がってある。

部屋のようにすは何というか...和モダン風？ 木と紙と竹?...と、布や皮や毛皮かなにかで出来てて...落ちついた感じの、優しい色調だ。

明かりは小型の竹の灯籠？ のようなものが何か所かに置いてあって、開け放した窓からは月明り？ も射してる。

風はないけど暑くはないし、半袖一枚でも寒くもない。

...秋の初め？ ...かな？ とリッコは思った。

「ごはん用意しておいたから、食べられそうだったら食べて?... あ、手と顔が洗いたかったらそっちね。トイレもそっちの奥。」

「...ありがとっ！」

リッコは気持ちのいい木の床に敷かれた模様入りのゴザのようなものの上をぱたぱたと裸足まま駆けて行って、教えられた場所でトイレと洗手洗顔を急いで済ませてから、またぱたぱたと走って戻った。

「あのね！ それでね！ 大叔母様からおみやげ?... 預かってたのに、渡すの忘れてたー！ ごめんなさい！」

タオルを出し入れしたおかげで思い出したので、購買部で受け取ったままの状態でリュックに入れっぱなしだった包みを二つ、急いで鋭に渡した。

「...あ、持って来てくれてたんだ？ ありがとう！」

「...これでいい、の？ ...ていうか、それ、なに？」

「ノギスと計算尺って言ってね... こっちの世界には無い道具なんで、あったら便利だろうな～って思ってたんだけど、ぼくの記憶だけじゃうまく作れなくて... これなら関数電卓とかと違って電気は要らないから... うん。やっぱり、使えそうだね！」

「...ふうん...？」

なんだか分からないけど、すごく嬉しそうにして鋭が早速あれこれいじくり回して試しに使ってみたりしているので、リクエスト通りの正しいお土産だったらしい... よかった。とりあえず一つくらいは役に立てたと安堵したリッコは、急におなかが空いた。

「これ食べていいの？ ...いただきます！」

今度は木の床ではなくて木製の椅子に腰かけて座るとちょうどいい高さの木の卓の上に置いてあった箱形の木製のお盆?... 日本語だと時代劇とかに出てくる『箱膳』に似てるかな?... の蓋をとると、ふわりと優しい香りが立った。

「...わぁ、美味しい！」

「そお？良かった。」

何種類かの野菜と山菜？とキノコと、何かの柔らかい肉と、小海老？みたいなのを、香草と一緒に蒸して、ふんわりと優しい味の餡でくると和えてある、簡単だけどすごく美味しいおかずが山盛りと、濡れせんべいと焼き味噌おにぎりの中間のような、しっとりした噛みごたえの、何かの穀物の粉を練ったのかな？...平たく焼いた、主食らしいもの。

浅漬けみたいな感じの薄味の生野菜の色どりのきれいな盛り合わせと、箸休めのなギリギリした何か。それから、食べやすいように綺麗に切ってくれてあった、汁けたっぷりの...甘酸っぱい...香りのいい、果物！

もう夢中になって猛然とがっついてる間に、七輪というか炭火の卓上コンロ的なもの...日本語だと『火鉢』って言うかな...？の上でしゅんしゅん沸いていた鉄瓶からお湯を注いで、鋭が温かいお茶を淹れてくれていた。

3-3. リツコ、情報交換する。

「.....ふ〜う。おなかいっぱい！...ごちそうさま！」

「落ち着いたら、もう一度眠るといいよ。まだ朝まで時間があるから。」

「.....もしかしなくても、あたしのために起きててくれたの？」

リツコはちょっとぎょっとして、それは申しわけなかったなと思いつつ聞いてみた。

「まあやることも色々あったし。『夜中に寝ぼけますからよろしく』って、清瀬の律子さんからの手紙にも書いてあったし。」

「...ええ?!」(...はずかし〜っ!)...と、頬に両手を当てて身もだえしてみせると、鋭はまたふふっと笑った。

「まあフツウ組のひとが朝日ヶ森に保護されてるからには、何か事情があるとは思ってたけど」

「鋭は、地球のジジョウについては、どれぐらい知ってるの？」

リツコは聞いてみた。なにしろ知らないことだらけだ。

「う〜ん？清瀬さんからは何も聞いてないの？」

「そんな暇なかったもん。鋭のこと『初恋の人なの〜!』とかノロケ始めちゃったし。」

「...ええ？それ初耳！」

「え、うそ？しまった！」

リツコは慌てて口をふさいだ。遅いけど...

「.....言っちゃったこと、内緒ね...？」片目で様子をうかがうと、

「う〜ん、まあ時効だし...？なにしろぼくはこんな見た目のまんまだけど、地球の時間だと、あれからもう五十?...六十年くらいかな？経っちゃってるし...

でも清瀬さんとは、ほんと喋ったこともあまり無かったんだよ？数十年ぶりにやっと地球と連絡がとれて、手紙の返事に当代の朝日ヶ森の学園長が清瀬律子サンって署名してあっても、最初は同じ人だとは思わなかったくらいで。」

「そうなんだ？」

「うん。...そもそもなんで彼女が朝日ヶ森にいるのさー？」

「え？ 同級生だったんじゃないの？」

「その前にいた全く普通の地元の小学校でだよ。今のキミと同じ、4年生の時にね。清瀬サンは転校生だったし。そのころ口がきけなくて挨拶も筆談だったし」

「あ、それは聞いたことある。子どものころ一族みんな死んじゃった時に、心因性ナントカってショックで、しばらく喋れなかったんだって。」

「そうだったんだ...」

『一族』という単語が出たところで何か納得してくれたらしく、鋭は話題を換えた。

「それで僕は、IQ高かったんで普通の学校から《センター》に誘拐されて。」

「ええ？」

「《センター》は、まだある？」

「あるよ！」

「緑軍のために安く効率的に人を殺せる強力な武器を開発しろー！...なんて勉強をさせられてさ？ 人体実験とかやらされるの厭だったんで逃げ出して、山中で生き斃れかけてたらマーシャに拾われて、朝日ヶ森に保護されて... そしたら何故か清瀬さんも朝日ヶ森に保護されてて... まあ色々あって僕は天才組だし彼女はフツウ組だし、あんまり喋る機会もなくてさ？ 結局そのすぐ後に僕はマーシャの... あ、あした挨拶につれてくけど、こっちの世界の皇女サマのことだけど。ごたごたに巻き込まれてこっちに飛ばされちゃったから、以来まったく数十年間？ お互い音信不通。」

「...そうなんだー？」 リツコはちょっと目を丸くして混乱した。

話の全体像がよく解らないけど、そんなに長く時間がたっても、大叔母様は『初恋の人なの〜！』...が、忘れられなかった？ のかー... (...もしかして、それで独身?) と思ったが、それはいま鋭にいう話でもない、慌てて考えなおした。

「あたしはほんとにフツウなのー。お父さんとお母さんが反政府って地下活動やって目えつけられちゃって。緑衣隊が逮捕に来たから『逃げて！』って言ったけど遅くて。あたしだけ走って逃げて山中でサバイバルしてたら大叔母様に頼まれたって朝日ヶ森の魔法組のひとが保護しに来てくれて。家族もみんな無事に救出されてたんだけど、あたしより先に亡命しちゃってたんだ。で、次の亡命船が確保できるまで、朝日ヶ森で待つてなさいって。」

「...そこまでは、ほぼ僕と同じ状況らしいけど...。...それを『普通』って言っているのかなあ...。」 鋭が苦笑して遠い目をする。

「...それでか。『こっちとそっちの行き来を兼ねて、地球の別の場所に出られないか』って、清瀬さんからの質問」

「...え？」

「聞いてない？ リツコこっちに来たあと、またすぐ朝日ヶ森に戻すか、このままこっちで暮らすか、もし可能なら、地球上の別の場所に戻してくれてもOKって。」

「そうなんだ...」 それは聞いていなかったなと思いつつながらリツコはうなずいた。

「日本から外に出さえすれば、まだわりと移動の自由はあるって？ ストリームラインと連絡さえ取れば、お母さんたちと合流させられるって。でもキミの今回の二時間ずれ

た件もあるし、こっちとあっちの昔の通路はほんとに、ほとんど埋もれたり忘れられたりしてたから、まだ調査が足りてなくてね。情報が、かなり不確実なんだ…。うっかり抜けたら下に受け止めるクッションがなくて地面に激突とか、時代がもっとズレて浦島太郎になっちゃったりとかしたら、嫌でしょ？ 絶対安全って保障できる通路が用意できるかどうか、もうちょっと待っててね。」

「うん。わかった。」

それからしばらくは主にリツコの方が、地球と日本のここ最近の事件について…小学生のリツコにも解る範囲の話だけ、だったけど…説明をして。

うとうとしはじめたら鋭が抱っこしてくれて、布団に入れてもらって。

…最後にみた大きな満月が、地球より大きいな～と思ったところまでで、リツコの記憶は途切れた…。

3-4. リツコ、寝坊する。

再び目が覚めると、どうやらもうすっかり朝も遅い、という時間帯の雰囲気だった。

大小色々いるらしい鳥の声が賑やかで、人の声や犬らしいものや馬？ の吠える声とかのざわめきも遠くから聴こえる。

「…んんん…… よっく寝た…？…あれ…？？ ここ、どこ…？？？」

あたりを見回して家でも学校の寮でもない部屋だと再確認して、それから、昨日なぜか異世界とやらに本当に来てしまってたんだって。…ということをぼんやり思い出し、

「…夢じゃなかった！」

…と、慌てて起き出した。…鋭の姿はすでにない。

服のまま寝てしまっていたので、急いでトイレと洗面を済ませて、ちょっと冷たかったけどついでに水浴びして髪も洗って、とにかく新しい服に着替える。

…そうだ。脱いだ服の洗濯は、どうしたらいいのかな…？

必要最低限の荷物しか持って来られなかったから、こまめに洗濯しないと、すぐに着替えがなくなる。

電気がないんだから、洗濯機だって無いよね…？

井戸水はたっぷりあったし天気も良かったので、水場の脇にあった大きな盥がたぶんそれ用だろうと考えて借りて、じゃぶじゃぶ手と石鹸で洗濯して。邪魔にならないかなー？ と思いながら、土間のすみの植え込みの端っこの枝を選んで紐をかけて干した。

昨日と同じように卓の上に用意されていた箱盆の朝食を勝手にたいらげる。

「いただきます！ ……………ごちそうさまでした！」

3分がががつ平らげて手を合わせて礼をしてからふうと目を上げると、旅館の中居さんのような動きやすそうな服を着た知らない女のひとが、物音を聴きつけてやってきたのか、にっこり笑って部屋の前に立っていた。

「あんによんまるにえん、えなら？」

「…あっ！ おはようございますっ！ …ごあん！ 勝手にいただきましたッ！」

おもわずもごもごと囁んじながら慌てて日本語で挨拶すると、にっこり笑って「えんえん。」と返事をしてくれた。

「まによ、えんにえんね？」

リツコが食べ終えた食器を手早くまとめて箱盆ごと持って『ついて来て下さいな?』という風に首をかしげるので、リツコは急いでリュックをひっかけ、慌ててついていった。気持ちのいい明るい長い廊下を何度か折れ曲がって、案内された先には鋭がいた。広くて天井も高い大きな部屋で、鋭と同じような青と水色系の優雅だけど動きやすそうな服と、長めに伸ばして後ろでまとめた髪型の同じような雰囲気...頭が良さそうで性格が穏やかそうな、でもちょっと頑固そうなどころもある...学者さんタイプ? みたいな大人たちがたくさん(ほとんどが普通の人間タイプと、毛皮や耳つきも何人か)いて、大きな布や皮製の地図だの表だのを広げて賑やかに、打ち合わせか何かの準備をしている感じ。

真ん中の大きな机の上には昨日リツコが渡した「お土産」のノギスと計算尺が置いてあって、みんなでその寸法を測ったり絵図に写したり、興味津々で観察したりしている。

「...リレキセース。まるにえん。...えーらんてーい。」

案内してくれた女のひとが戸口から声をかけると、すぐに鋭が降り向いた。

「あるっくあーい。...あ、リツコ起きた? おはよう。」

「おはようございますっ。寝過ごしてごめんなさいっ!」

「い〜よ〜?」

それから鋭は周りの人に声をかけ、自分の見ていた書類などは簡単に片づけて、なんだか昨日着ていたものよりずいぶん高級そうなの? かしこまった感じの? 上衣を手にとった。

「じゃ、行こうか。」

「どこへ?」

「皇女サマにご挨拶〜。」

「ええ!？」

「...あれ、ゆうべ言わなかったっけ? ここの皇女サマって前は地球に亡命して朝日ヶ森に居たんだよ。『霧の校庭・運動会行方不明伝説』って、今じゃ学園七不思議になってるって書いてあったけど。」

「え〜っ?...何十年か前の、障害物競走の途中で生徒がイキナリ消えたって謎の話?...あれ実話だったんだ...」

「そうそう。そんな時に巻き込まれてダレムアスに来た僕が、ここに居るからねえ。」

...つくづくあの学校はフシギと謎だらけだ...とリツコがあきれながら鋭と一緒に歩いて行くと玄関らしき場所に出て、その先の気持ちの良い小さな木立ちのなかの小径を歩いていくと、すぐに大きな道に出た。

「うわ...」

市場だった。いや...大きな町?...商店街?...と、見慣れないものだらけの景色に、リツコはきょろきょろしてしまう。

「...とりあえず質問と観光は後にしてー。皇女サマは怒らせると怖いからー。」

どこから観察したらいいかと立ち止まってしまったリツコの肩を押して鋭が苦笑する。

「それでなくてもキミ、きのう寝ちゃったからさ? 歓迎パーティーすっぽかしたんだ

よー？」

「...きゃーーーーーっ！ ごめんなさいっ!？」

リツコは恥ずかしくて悲鳴をあげた。

3-5. リツコ、右将軍にあう。

街道を右に曲がってまっすぐ歩いて行くとやがて活気のある市場から広い庭のお屋敷が立ち並ぶ区画に変わって、いきあたった四辻でまた右に曲がると、開放的な感じの大きな高い門があって、特に検問とか見張りとかは何もなくて、わいわい行き交う人たちと一緒にひょいとくぐると、入ってすぐに大きな男の人たちがなにか話しあいながら立っていて、そのうち一人が振り向きざまに、すごく嬉しそうな声の日本語で話しかけてきた。

「おう鋭！ 来たか！ そのコか？」

背が高く筋肉もりもりで肩幅が広くて日焼けしていて、ぼさりと無雑作に伸びっぱなしの感じのすこしクセのある髪はつやつやした真っ黒で、笑った歯は真っ白だ。

赤と黒の派手なデザインだけど動きやすそうな服に、大剣と短剣と投げ矢？ とか弓とかかなにかの武器をたくさん、いかにも扱い慣れている感じに、隙なく身に着けている。

「うん雄輝。この子だよ～、高原リツコ嬢。」

手のひらで紹介して気軽そうに喋ってるけど、まだ若い青年の鋭よりは十歳くらい年長に見える。とても偉そうなマントを羽織った、大人の男のひとだ。

「こんにちわっ！ タカハラですっ！ よろしくお願ひしますっ！」

近づいて来た相手はかなりのけぞって見上げながら、リツコは精一杯、元気に挨拶してみた。

「リツコ、これが『校庭行方不明事件』で消えた三人のうちのもう一人。翼雄輝。」

「おう、よろしくな。ところでリツコって何県のタカハラ家？」

リツコは質問されてる意味がわからなくて返事ができなかった。

それに、紹介された人の背中には、焦げ茶色のまだら紋様のある、大きな翼があった。

「.....羽.....！」

昨日リツコを運んでくれた『ほぼ鳥に見えるけど服を着て喋って脚の手？ で道具を操る人』たちとは違って、『ほぼ人間』な姿で、背中にだけ大きな翼があるタイプだ。

「...ん？ 珍しいか？《朝日ヶ森》なら今でも居るんじゃないか？」

「居るけど... すごく怖い人たちで...、近くで見たことなかったから...」

「あ～、天狗系のやつらか？ あいつらは気難しいからな～...」

うんうんと勝手に納得している。

「おれはオオノのタカバの谷のモトシュケの『ツバサ』一族の最後の一人のユウキ。

...って言って解るか？」

「ごめんなさい。わかんないです。うちは分家の分家のまた分家とかで、本家の一族ってずいぶん前に滅んじゃってて、誰も詳しい人が残ってないそうです。...お父さんなら、もうちょっとは知ってるかもだけど...」

「あ〜気にすんな。そんなもん、そんなもん。」

からからと笑って男の人はリツコの肩をぼんと叩いた。

地球には、古くからの伝説を語り伝えて来た、いくつかの「一族」に属する「遠い場所から来た人々」の子孫と、それとは別の「新しい土地で生まれた人々」という、区別がこっそりあるという。

ものすごく漠然とした話だけしか、リツコは知らない。

「マダロ・シャサ！」

広場の向うから呼ばれたのは、翼が生えてる地球人の、こっちの世界での名前らしい。

「...じゃな。... マーシャ怒ってるからな〜。せいぜい庇ってやれよ？」

「うへえ...」

リツコには謎の言葉を残されて、鋭が、ものっすごい嫌そうな声を出した...(リツコはびっくりした。)

3-6. リツコ、皇女サマに会う。

心なしか鋭は少し早足になって歩いて行く。リツコの身長だとすこし小走りにならなくちゃいけないくらいの歩調だ。

そこはとても大きな広場で、馬？ 車や人が曳くりヤカーのような荷車や、きのう乗せてもらった鳥の人が使うカゴに似たものなどがとこ狭しと並べられ、ひっきりなしに人や獣や植物の人？ たちが荷物を運び込んで来ては、移し替えたり、積み上げたりしている。

何かで同じような光景を観たことがあるなどリツコが思い出してみると、前にテレビでやっていたシルクロードとかの隊商の出発準備に似ていた。

...どうやら、大勢で旅に出る？ 仕度をしているらしかった。

その慌ただしく雑然とした前庭を抜けるともう一つの門があつてくぐるとまた広場があつて、こちらはまだ比較的すいている感じで、少し伸びすぎた芝生のような、昼寝したら気持ち良さそうな、ふかふかした草がびっしりと生えた植えこみが両脇に長く伸びている幅の広い道を抜けた正面に、宮殿？ らしいものがあつた。

リツコが知っている範囲でいうと一番似ているのは奈良とか日光とか鎌倉とかいわゆる古都にある八幡宮とかの寺社。鮮やかな紅朱と金や緑の曲線的な木彫り細工で華麗に丁寧に飾られた木造建築で、広大な敷地内に渡り廊下や欄干でつなげて点在していて、屋根がとても高いけれども全体的に平屋建て。せいぜい部分的に二階屋もあつたり火の見櫓みたいな塔がところどころにあるくらいで、全体的に平べったい。広場から続いている屋外の道の床は関帝廟みたいな石張りか玉砂利の部分も多くて、建物の中も地面と同じ高さの床は石。階段を上がると木の床。

鋭は案内も請わずにすたすたと敷地の奥の奥に進んで、そのまま最寄りの脇玄関をくぐって内廊下にまで入っていくので、リツコも遅れないようにながら後を追う。

驚いたことに、通りすがりの偉そうな役人らしい服の人たちが、鋭を見つけると皆すぐに頭を下げる。

「マウレィディア！」

「マウレィディア、リレク、エイセス！」

「マウレィディア！」

「アノネ、カイエ。」

鋭は軽くうなずくだけで短く返して、どんどん歩いて行く。

やがて着いた場所の開け放たれた大きな扉の前の廊下の、壁沿いに並んだたくさんの椅子の列に座って何かの順番待ちをしているらしい人たちの前は挨拶だけしなごらすたすと通り抜け、扉のすぐ脇にある先頭の椅子で待っていた人にだけ、

「...アウレクセス、マルニエン、エネ？」

と、頭を下げて片手でちょっと拝むようなしぐさで遠慮がちに声をかけると、

「マウレニエン、エネ、エネ！」

(どうぞお先に！)と言っているのだろう仕草で、相手の人は喜んで順番を譲った。

その大広間のなかで拝謁の最中だった人が、その声にふりむいて、慌てて自分の場所を譲ろうとする。

「...アウネ、ソノ！」

若い女性の高飛車な声が鋭く響いて、その人はちょっと困った顔をして、また前に向かいなおした。

(...構わない、続けて!...って、言った?)と、リツコは推測する。

どうやらそこが謁見の間で、真ん中の大きな椅子に偉そうに座っているのが、これから挨拶する「皇女サマ」とやら、らしかった。

色が白くて唇が真紅で、ものすごい美女だけど、かなり性格がキツそう。碧緑色の華麗な巻き毛を肩のまわりにふわっと広げて、瞳も同じ碧緑色だ。朱色と金色の豪華だけどすっきりと洗練された意匠の繊細な装束。

まだ若いめだけど、おとなの女の人だ。さっきの男の人...翼雄輝...と同じくらいか、ちょっとだけ下くらいの年齢に見える。つまり、まだ青年の鋭より五歳か十歳くらい上?と推測してから、(まあ地球人の感覚で、だけど...)と、七十歳は過ぎているはずの大叔母様と鋭が、六十年前の地球の小学校で同級生だった、という話を思い出して、うーんとうなった。

その、きつそうな性格の美女が、ちょっとかなり苛苛した感じで眉をしかめながら、目の前に座っている人の報告をそれまで最後までちゃんと聴いていたらしい感じで、いくつか短く指示を出して、またその返事を得てから、仕種と声とで偉そうに退出を命じる。

「...遅いわよ、あなた！」

次にいきなり日本語でビシッと怒鳴りつけられて、リツコは思わず首をすくめた。

「... は、はいッ! ...ごめんなさいッ！」

「昨夜は歓迎の宴を用意したのにすっぽかすし!今日は私もう出なくちゃいけないのにいつまでも待たせるし!...それになに?チビな上にタダビト組なの?...なんで清瀬律子が自分で来なかったのかしら！」

...これはもう...挨拶とか自己紹介とか、マトモにさせてもらえる状況ではない...?

リツコは震えあがり、あやうく涙目になりかけながら必死で言い訳をした。

「あのう...ゆうべと今朝はすいませんでした...あたし時差ボケで、寝ちゃって... それ

に大祖母様たちは今すごく忙しいんです。最近かなり大掛かりなテキハツがあったせいで、大勢タイホされちゃったんで…」

「…あら、そう…。」

美人皇女は、素早く眉をしかめた。

「鋭、その報告は後で聞くわ。今日とはにかく忙しいのよ。その御チビさんで大体揃ったし。明日もう出発するわよ！ 正午発！ あなたも準備急いで！」

「らじゃ。」

鋭はちょっとふざけた感じで地球式の挙手の礼をすると、あわあわしているリツコの肩を反対回りに押して、とっとと逃げ出そうとした…。

第4章 リツコ、仲良しができる。

第4章 リツコ、仲良しができる。

4-1. リツコ、案内される。

さっき順番を譲ってくれた先頭の人にだけ軽く挨拶して、とっとと退出しようとした時。

鋭は、急に気がついた風に「おっと！」と言いながら立ち止り、慌ててふり向いた。

「...マーシャ。今の...決定事項でいいんだよね？」

「え？ ああ...日本語で言っちゃったわね。」

「伝令まわすよ？」

「ええ。お願い。」

鋭は広間の内外とその前の大廊下に並んでいる人たち皆に聞こえるよう、すうっと息を整えて大声で呼ばわった。

ぴんと張った声だ。

「...アウレイメイ！ ミウンテア！...ソンナイ！」

列をなしていた人たちの間にざわ！ と波がはしる。

鋭は繰り返して言った。

「アウレイメイ！ ミウンテア！ ソンナイ！...ディウンディアーイ！」

「アワッ！ ディエンディアーイ！」

短く返事をして走り出していく、何かの制服を着て剣や槍を帯びている人たち。

並んでいた椅子の列からもほとんどが慌てて立ち上がって、がやがやと話しながら一斉に宮殿の外へ去って行く。

「...いま、何て言ったの？」おそるおそる鋭に聞いてみると、

「マーシャが言ったことだよ。出発は明日に決定！ 正午！...伝令ッ！」

それから今度はさすがにリツコの歩調を気遣う余裕は取り戻しつつも、鋭も足早に歩き始めた。「行こうか...怖かったでしょう？」

苦笑している。

「ううん。あたしこそごめんなさい。きのう寝ちゃったりしなければよかった。」

「いや〜、彼女は最近ずっとあの調子だから。きみが悪いわけじゃないんだよ。」

「そうなの？」

「きみとは全然関係ない理由で、ずっとものすご〜く機嫌が悪いんだ。八つ当たりされてるだけなのに、かばってあげられなくて、ごめんね？」

ほんとにお手あげで～。と言う風なジェスチャーをまじえて謝る。

「ううん。それならいいけど…」

宮殿の外に出ると先ほどの広場の荷駄や人のざわめきが、さらに騒然と加速していた。

「ミウンテア！ ソンナイ！ ディウンディ！」

「ミウンテア！」

「ミウンテア～！」

大声で伝達しながら駆けて行く多人数の声がどんどん遠ざかり、周囲に復唱され、また広がっていく。

「…ねえ、もしかして、鋭ってかなり偉い人なの？」

いっせいに動き出した人々や動物たちの騒ぎをきょろきょろ眺めながら気になっていたことを聞いてみる。

「…なんでそう思った？」

「だって若いのにみんなが膝を曲げてあいさつしてたし。順番もすぐに譲ってもらえたし。とってまエラそ～な、あのお姫さまのことも名前前で呼んで、ため口きいてたし。」

「うーん、そっか。いい観察力だね。」

鋭はまた苦笑した。

「まァ偉いってというか… 皇女サマの地球時代からの友人？…というか。今は側近とか幕僚って扱いか？…最近じゃ、なんかヨーリア学派の… あ、さっきのあの家にいた連中だけど、代表者？ ぼくなってるし…」

「…やっぱり、かなり偉いの？」

「…うーんまァ、さっき会った雄輝ほどの有名人ではないよ。まァぼくは、たんなる雑用係だねえ…」

「そうなんだ？」

「そう。それで、明日出発ってことはぼくも準備で忙しくなっちゃったんで、その前に、旅のあいだキミのめんどろを見てくれる人のところに連れてくからね。」

「そうなの？」

リツコは旅と聞いてもずっと鋭と一緒にだろうと思っていたので、びっくりして目を丸くした。

「うんそう。だって昨日はもうしょうがなかったからぼくの部屋に泊めたけど、旅のあいだずっと男のぼくと女のコのきみが同室ってわけにいかないでしょ？ ほんとは昨日からそっちに泊めてもらはずだったんだけど… あ、いたいた！」

広場のすみのほうに妙にたくさんの生き物で混みあっている一画があって、鋭がかまわずその雑多な群れの中に突っ込んでいくと、小鳥たちや猛禽たちや小さい動物や大型の四足獣や、それに人間の子どもや大人が一斉に、わっと散って通り道をあけてくれた。

4-2. リツコ、マシカにあう。

「…マシカ！」

「リレク！」

呼ばれて振り向いて鋭の名前？ を嬉しそうに呼びかえたのは、鋭と同じくらいの年齢に見える... 大人になったばかりな感じの、まだかなり若い、綺麗な女の人だった。

秋の紅葉と黄葉をまぜまぜにしたような華やかな色彩のくるくるした巻き毛を首の後ろでぎゅっと結んで、緑と茶色の動きやすそうな服に、歩きやすそうな柔らかい皮の長沓。瞳の色は皇女サマとよく似た碧だ。色が白くて額の広い、すっきりした美人などころも似ているけど、でもずっと優しくて親切そうな、すてきな笑顔だ。

手には草の束？ のような道具を持って、大きな黒馬の世話をしていたらしかった。

「動物たちの調子はどう？」

鋭はそのまま日本語で話しかけ続けた。

「モンダイないわ。あしたシュッパツですって？」

驚いたことにその人は、ちょっと発音が怪しかったけど、なめらかな日本語で答えた。

「そう。で、この子が例の子。頼める？」

「わかったわ。よろしくね、リツコ？ あたしは、マシカよ。」

「こんにちわ！ ...びっくりした。日本語が話せるんですね！」

「リレクやマーシャたちからナラッタのよ。」

「そうなんだー！」

リツコはほっとして笑った。さっきの怖い皇女サマと違ってだんぜん優しくさだし、こっちの人なのに、言葉が通じるなんて！

「マシカこれから時間ある？ リツコを市場に連れて行って、着替えとか旅に必要なものを一式買ってあげてほしいんだ。これ予算。足りるかな？ 諸侯会議にも出るからさ、ちょっと豪華っぽい、正式な服も必要なんだけど。」

「ええ。足りると思うわ。知り合いの店が安くしてくれるのよ」

マシカは渡された袋の中身をかろく確認して、白い歯でにこっと笑った。

「あと例のあの...、言葉の術も、頼める？」

「...あら？ 先にマーシャに会いに行ったんじゃないかった？」

「ものっすごい機嫌が悪くてさー。頼むどころじゃなかった。」

「あらあら...」

マシカも、よ〜くワカタ、という感じの、身内に特有の仕種で肩をすくめた。

「わかったわ。あたしの神力じゃ弱いけど。全然ないよりマシでしょ。」

「じゃ、ごめん、リツコ。また明日ね。もしぼくに用がある時はマシカにそう言ってくれば、すぐに連絡がつくから。」

「うんわかった！ ありがとう！」

リツコが慌てて手を振るうちにも、鋭はどんどん歩いて行ってしまった。

それを後ろから追いかけてきていた人たちがわっと取り囲んで、次々に話しかけたり、書類らしいものを渡したり、左印をもらったりしている。

...やっぱり、本当に偉い人で、ほんとうに忙しかったらしい...

リツコは、うっかり寝こけてしまったせいで二日間もあたしみたいな子どもの世話なんかさせて、悪いことしたなー？ と、ちょっと反省した。

「ちょっと待っててくれる？」

鋭を見送っていたリツコにそう言って、大きな立派な黒い馬の世話を最後まで仕上げたらしいマシカは、まわりの人間たちや動物たちに挨拶らしい言葉をかけてから、リツコをつれて広場のすみの水場に行って手と顔を洗い小布で簡単に拭いて、髪をほどいた。ふわりと広がった朽葉色の巻き毛は、とても華やかでよく目立つ。

「きれ〜い！」

リツコが思わず誉めると、マシカはにこっと笑った。

「そう？ ありがとう。リツコの髪もすてきよ？」

「ええ？ あたしのなんか焦げ茶色でクセ毛でへろへろで〜。全然ダメ」

「そうなの？ ダレムアスでは《大地の色》って言って、一番いい色だけど？」

「そうなの？」

「ええそうよ。ほら可愛い。あたしたち姉妹みたいね？」

マシカはそう言ってリツコの固く縛っていた癖毛もほどいて、ふわっとおそろいな感じに広げてしまった。

リツコは初対面の人にいきなり『姉妹みたい』とか親しくしてもらえたのが嬉しくて、「えへ〜」と照れた。

マシカはそんなリツコを見てにこっと笑って、それからちょっと後ろに下がった。

何をするのかな？ とリツコがキョトンとして見ていると、リツコのことを上から下までじっくり観察している感じで、それから深呼吸してもう一度にこりと笑い、また近づいてきたと思ったらリツコの両頬に両手を添えて、そっと額と額を合わせて、息を整えて、...歌うように、小さく叫んだ。

「ま〜りえった！ れっと、せっと、えッ！」...（ことばよ、通じよ！）

「え？」

「まうれいにあ、あむにや、あむねえむね？」...（わたしの言うこと解る？）

「えっ？ ...解る！ ??...あれ.....???！」

リツコは目を丸くした。

何がどうなったの...??

「マーシャは《神力》って訳してるけど、鋭は魔法って呼ぶわね。あたしは血の力は弱いから、マーシャがやるみたいに自分の言ってることを相手に解らせる術まではむりなの。効き目も弱いし、時間も短いと思うんだけど...とりあえず、それでやってみましょう？」

リツコはむしろ日本語で説明された内容のほうがまったく理解できなかったが、とりあえず「うん。」とうなずいた。

4-3. リツコ、市場へ行く。

ついて来ようとした小鳥たちや小動物たちには『ちょっとあっちへ行って！』とつけて追い払ったマシカは、とても楽しそうな顔でリツコと手をつないで、ずんずん市場の奥に分け入っていく。

リツコはとにかくもうきょろきょろしてしまっていて大変だ。質問したいことを全部聞いて

いたら一步も前に進めなくなるくらい、見るものすべて珍しい。

使いこまれて黒光りしている太い木彫りの柱の大きな天幕の店や、竹の柱に布の屋根を張っただけの簡単な屋台。二階建ての立派な木造の飲食店もあるし、屋根と柱だけあって壁がない建物の、安くて大盛りらしい賑やかな食堂もある。

色とりどりの布地屋、服屋、仕立て屋、小物屋、高そうな装飾品の店、細かい革細工の店。皿の店、壺の店、石や木材の店、野菜の店、果物の店、ちょっとだけぎょっとする眺めの、生肉の量り切り売り？ の店...

占い屋さんかしらと思う地べたに座った賢そうなお婆さんや、兎の人や羊の人たち相手におしゃれな毛刈りや毛染めを施している店。

ひたすらまわりじゅうを見回しながら歩いていたリツコは、少し遅れて、自分のほうも周囲の人たちから、びっくりした顔で眺められていることに気づいた。

「...チケット？」... (地球人?)

「チーケットィ？ アナン？」... (地球人か?)

「あ～やけた、ていか！」... (おっとびっくり！ 地球人じゃないか！)

市場を行き交う通りすがりの人々が、リツコのTシャツと短パン姿を見て目を丸くして声をあげる。

(.....え？ なんであたし、言ってる意味が解るの？ チケット... ってチケット？ 切符？ ... じゃないよね... ?? こっちの言葉だと《地球人》って意味になの... ??)

まったく解らないはずの言葉が、ちょっとだけ遅れてだけど、だいたいの意味が判る。

まるで頭の中で映画の字幕でも読んでみたい感じがした。

(??...これが、さっきマシカがかけてくれた《言葉のマホウ》とかいうやつ... ??)

目を丸くしたまま混乱しているリツコをしりめに、はぐれないように手だけはぎゅっとつないで、すたすたと前を歩いていたマシカが、ひょいと曲がって一軒の店に入った。

ので、続けて敷居をまたごうとしたリツコを睨んで、鋭い声をあげた男がいた。

「エベルディン、スレイガ！」... (出て行け、敵め！)

「えっ？ 敵？ なに??」

「... あんま、のうでいあ、あーろんでーい。」... (なにか御用で？ お客さん?)

隣にいた店員らしい人も、怪しい奴め、という嫌そうな顔で、リツコを見ている。

知らない人から突然『敵め！』と言われた事に心底びびって固まっていた。

「まるまっかあれ。」... (あたしの連れよ。)

どうやら鋭と同じくらい周りの人たちに顔が知られているらしいマシカがぴしりと言うと、周囲のざわめきが一瞬で収まった。

「ジョルディイリヤン、ダレッカ。リレキセース、オルディイイン。」... (諸侯会議に出るお客様。リレク様からお預かりしたの。)

出て行けと言った男は不機嫌そうに口をつぐみ、自分のほうがさっさと出て行った。

「あんに～や、マシカ！」... (いらっしゃい、《星の娘》！)

奥から店主らしい人が急いで出てきてにこにこ挨拶してくれて、あとはもう買い物が大変だった。

マシカがかけてくれた言葉の魔法？ とやらのおかげで、相手が言っていることは何語であれ、なんとなくリツコには意味が解るけど、リツコが喋ってる日本語は、相手には全

く通じてないらしい。

半分はマシカに通訳してもらいながら、マシカにもうまく翻訳できない時はとにかく身振り手振りで、好きな形だとか嫌いな色だとか、肌触りがどうか色々説明しまくって、それから厳選したものだけ試着してみて、さらにあーだこーだと、似合うとか似合わないとかみんなで品定めをして。

あれやこれやと出してきてくれる衣類や旅行用品がどんどん山になっていくのを見て、「ちょっと待ってマシカ！こんなにたくさん買っても背負いきれないよ？」

リツコが悲鳴をあげると、

「馬車で運ぶから大丈夫よ」とマシカは余裕で笑った。

一通りの品物がようやく決まってマシカが鋭から預かってきた財布の中身で支払いも済ませて、配達まで頼んで店を出た時には、リツコはもうかなり疲れてしまって、おなかもぺこぺこだった...

マシカが気を利かせて、道すがらの屋台で甘いものを食べさせてくれる。

色とりどりの豆を甘く煮たものの中に何かぷにょとした食感のものが入った、あんみつとぜんざいが混ざったような味の、見た目も可愛らしい女のコ御用達なスイーツだ。

「...おいしーい！」

叫んだリツコに、マシカは笑った。

4-4. リツコ、宿に戻る。

「元気でた？ じゃ、ちょっと遠いけど私のテントまで歩きましょう。」

「あ、ちょっと待って！ あたし今朝、洗濯物を干してきちゃったの！」

「センタクモノ？」

なぜかこれがマシカに通じなかった。リツコは身ぶり手ぶりで説明してみた。

「服を洗って～、干して～、こう...。昨日泊めてもらった部屋の中に、干して、置いてきちゃったの！」

「...ああ。洗った。干した。で、...乾いた？」

「そう。洗濯物。」

「センタクモノ。」

マシカはうんとうなずいた。

「リツコ、わたしのニホンゴまだまだみたいだわ。旅のあいだ、たくさん教えてね？」

「うん！ こっちの言葉も教えてね？」

じゃあセンタクモノを取りに一度戻ろうという話まで進んで、リツコは困った。

「どうしよう！ あたし帰りも鋭と一緒にだと思ってたから、道を覚えてない！」

「ヨーリア学派の宿坊でしょ？ わかるから大丈夫よ。」

「ほんと？ よかった～！」

しばらく歩いて、なるほど見覚えのある植え込みの門のちかくまで案内してくれると、マシカはその手前の薬草の店で買い物をしてくるから、その間にセンタクモノをとってきて、と言う。

うん解った！ と、ひとりで門を入れて、見覚えのある玄関まで行って、そこには誰もいなかったの、無断で勝手に上がるのもまずいかと思って、声をかけてみた。

「すいませ〜ん！ ... 誰かいませんか？」

「...もうどれいやなっ？ えんにやえん。」... (*****)

(???...あれ...! ???) リツコは困った。

さっきまでは、相手の話す声と一緒になんとなく判っていた「ことばの意味」が...

また、解らなくなってる...!

魔法？ をかけてくれた時にマシカが言った「時間も短いと思うんだけど」という言葉の意味のほう判ったー！... と思って焦りながらも、幸いにして最初に出てきたのが今朝リツコを案内してくれたあの女の人の人だったので、もう一度「センタクモノ！」という身振り手振りをして、「取りに行きたいので部屋に入ってもいいですか？」と許可を得るのは、そんなに難しくもなかった。

鋭の私室だったらしい今朝の部屋にもういちど案内してもらい、洗濯物がきれいに乾いていたのをこれ幸いと、急いで畳んでリュックに詰め直す。

「どうもすいません！ ありがとうございます！」

ぺこりと頭を下げてお礼を言って退出すると、

「まうれいであ〜。」

女の人はにこにこして、手を振って見送ってくれた。

それからまた教えられてた薬草店に戻って、誰かと談笑していたマシカと合流して歩きだしながら、もう言葉がわからなくなってしまったことを伝える。

「... う〜ん、半日モタナイのね...」

マシカはちょっと悔しそうな顔をした。

すぐにまた術をかけなおしてくれるかなと思ったけど、そういうわけでもないらしい。

「もしかして、実はすごく難しいとか、マシカがものすごく疲れるとか... する？」

「そんなことはないけど。だってもともとはあの三人と一緒に旅してた頃に、あたしだけ言葉が通じなくて不便だったから覚えようと思って、意味が解るようになって、自分で自分に毎日かけてた術なのよ。...でもあれ、かかっている間、アタマが疲れるでしょう？」

「... そう言われてみれば、そうかも...。」

頭というより、ものすごくおなかがすいたけど。と思いながらリツコはうなずいた。

「今日はもう眠るだけだから、また明日にしましょう？」

それから日本語で色んな話をしながら《仮皇都》の街の外に向かって歩いて、沈み始めた夕陽と夕焼けと一番星を眺めながら三十分くらいで、マシカと仲間たちが寝泊まりしているという旅天幕の臨時の村？ に着いた。

4 - 5. リツコ、天幕に泊まる。

マシカの仕事は《薬師》と言って、医者と獣医と薬剤師と看護師と産婆さんと保健婦さんと学校の先生と地域の戸籍係と生活委員とカウンセラー?... まで兼任しているような、

けっこう大変な職業らしい。

着いたのが日暮れの後だったし、リツコは言葉が通じなくなっていたし、みんな明日の出発に向けて忙しそうに飛び回っていたので、ちょうど通りすぎた人たちにだけ簡単に挨拶して、大天幕のすみで温かい夕飯を食べさせてもらって、さっきの店から早馬で配達されていた小山のような荷物を受け取って二人で手分けして抱えて、リツコたちはすぐにマシカの大幕にひっこんだ。

何枚かの革と布をじょうずに張り合わせて笹と木の枠で支えた一人用の天幕は、二人で入るとちょっと手狭になったけど、居心地よく乾いて清潔で暖かくて、きちんと整理整頓の行き届いた、いかにもマシカの部屋！ という感じがする、すてきな隠れ家だった。

「マシカは用意はしなくていいの？」

「たぶん明日出発になるだろうというのは昨日のうちに解っていたので、もう準備は済んでるの」

「そうなんだ」

「でも明日は早起きしなくちゃだから、今日はもう寝ましょう？」

寝間着に着替えて、くせ毛の髪を梳かしっことかして、くすくす笑いながら内緒話なんかして。それからマシカとリツコは本当の姉妹よりも仲良しになって、一つの寝床で寄り添って一緒に眠った。

ただし問題は、リツコのために追い出されてしまったマシカの沢山の同居動物... マシカが言うには「押しかけイソウロウ」...さんたちだった。

ぶうぶうきゃあきゃあびいびいと、それぞれの鳴き声で文句を言いながら脇の長椅子に移動させられた、栗鼠や仔猫や小型犬や小鳥やフクロウや翼の生えた小さい蛇や... その他いろいろ...が、朝になってリツコが目を覚ましてみると、二人の少女のあいだとまわりじゅうにぎっしり詰まって乗っかって、一緒に眠っていたのだった...

第5章 リツコ、旅に出る。

第5章 リツコ、旅に出る。

5-1. リツコ、早起きする。

翌朝、天幕のすぐ上で鳴く鳥たちの声がすごくて、リツコはびっくりして目が覚めた。すでに開けてあった天幕の戸布の向うに見える星空はまだ夜明け前で、外に出てみると東？の山並みの上の薄い金色の線から、反対側のまだ暗い空の色と最後の星の瞬きまで、雲ひとつない見事なグラデーションだ。

...う～ん、地球と同じに見えるんだけど...と、伸びとあくびと深呼吸を同時にしながらリツコは思った。

一番の違いは空気だ。

すごく何というか...すがすがしくて...さらりとして...深いけど透明な感じで...とにかく美味しい。

昨日そう言ったら鋭が、「この世界には公害も原発もないんだよ！」と笑ってた。

「...あら、起きた？」

広い空の下で美しい髪に櫛をかけてふんわりとまとめていたマシカがふりむいてにこりと笑った。「今日もお寝坊さんなのかと思ってたわ」

「うーん。だって昨日は早く寝たし。マシカがいてくれたから嫌な夢も視なかったし。」

「うん。よく寝てたわね。ミーボナンにほった踏まれてるのに全然起きなかったもの」寝ている間にベッドの上は動物だらけで、まだ寝こけているやつもたくさんいて、先に目を覚ました連中は今もマシカの髪にまわりついたりして、仕度の邪魔をしている。

リツコは苦笑して、自分も起きる仕度を始めた。

まわりの天幕の人たちも皆すでに起きだしているようで、あちこちで出発の準備を始める賑やかな物音や声がしている。

寝間着のまま教えられた川辺に降りて手と顔を洗い、その水場よりちょっと離れた下流に用意された木造のトイレ！（川の流れの上に付き出していて、床に穴が開けてあって、全自動？水洗式？だ...）で用をたす。

言葉が判らないまま、すれ違う薬師の人達にはとりあえず「おはようございます！」と挨拶しておく。

戻ってきて、はたと悩んだ。

「ねえ？ マシカ。今日って何を着たらいい？」

「あ、そうねえ...、どれにしましょうか...？」

昨日買ってきた装束類の小山と、自分が持ってきた少しの着替えを並べて、天気と気温を考えて、マシカの意見も聞いて、結局「地球式」の略礼装？ が良いだろうということになった。

白いTシャツに動きやすい七分丈の水色のガウチョパンツを合わせて、その上から、おしゃれな私立校の制服みたいな襟の形のギンガムチェックの夏ワンピースを羽織って。前ボタンは適当にはずして開けて、ちょっと「こなれた感じ」におとなっぽく、着崩してみる。靴はやっぱり履きなれたスニーカーのままにした。だって相当、歩く？ らしいから...
「...きゃー、リツコ可愛い〜♪」

そう褒めてくれながら、マシカのほうは以前から決めてあったらしい衣装にさっさと袖を通して

やっぱり昨日の仕事着？ と同じような、日本で言うと作務衣？ みたいな動きやすそうなデザインだけど、超新品で、手織りらしい深い緑色のつやつやした布地の模様がすごく手が込んでいて、民族調っぽい刺繍とか金色の星型飾りとか色々付いていて、軽くて薄い布の同色のスカーフみたいなマントもふわりと羽織ったら、とても上品で華やかだ。
「きゃー！ マシカすてき！ とっても綺麗！」

リツコが手放して誉めると、うふふんと得意そうに笑った。

「そうでしょう？ この布を織るのは苦労したのよ！...リツコ、髪型はお揃いにしましょうよ！」

可愛い髪飾りも貸してくれたりして普段の自分よりもずっといい感じに仕上がったのでリツコがすっかり満足して小さな手鏡に映して見ていたら、「こんなに薄くて小さな鏡！ こっちには無いわ！」とマシカがすごくびっくりしていた。

もうそれだけで盛り上がりながらの賑やかな身支度がやっと終わると、マシカは昨日の昼にやってくれたように、ちょっと気分を改めるしぐさをして息を整えてから、リツコの頬に手を添えてぴたりと額を当てて、唱えた。

「...ま〜りえった！ れっと、せっと、...えっか、...ろう！...ぐん！」

(あれ？ 昨日と少し違う...) とリツコが思う間もなく、

...(ことばよ、通じよ！ ...せめて日暮れまで！...もつように！)

...という意味が、頭のなかに字幕が映るような感じで、急に流れ込んできたのだった...

5-2. リツコ、紹介される。

ちょうどその頃に朝日が眩しく射しこんできた。からりと晴れた秋の初めの上天気だ。

『朝ごはん出来てるよー、早く食べちまっとくれ！』と、食堂の人から声がかかったので大急ぎで出かけて行った。

『おはよう！』とか『よく眠れた？』とかそれぞれの言葉で色々と声をかけてくれる大人の薬師の人たちに、リツコは日本語と手振り身振りで元気に挨拶を返しながら昨夜と同じ大天幕に行って、色々な野菜とか豆とかキノコ？ やハンペン？ のようなものがどっさり入った温かいスープと、穀物の粉をこねて焼いたクレープのような薄焼きに塩味のあ

んこや栗きんとん？のようなジャムをはさんだ主食を、おなか一杯食べさせてもらった。食器は各自で持参制で、ダレムアスに着いた時に鋭からもらった一式を忘れずに持っていった。地べたに敷いた絨毯の上に片アグラで座って、ちゃんと膝敷を使った。

それからリツコが二人分の食器を洗って戻って拭いて片づけてしているうちに、マシカは手早く整然と自分の天幕の中のをいくつかの大きな木箱と布袋に詰めて行き、リツコもがんばって出来ることは手伝ってみて、最後に一緒に天幕を畳むと、うんうんと担いで何往復かして、少し離れたところに停めてあった木製の荷馬車に運び入れた。

それからマシカが小型の馬のようなロバのような、ずんぐりして大人しい四足の動物を連れてきて荷馬車に繋ぐと、出発の準備は完了だった。

『ごめんなさい。先に行くわねー！』

マシカがそう声をかけると、まだ準備中らしい薬師の皆は口々に返事をして、手を振って見送ってくれた。

荷物満載の台車を牽いた小型馬の手綱を引いて、人間二人はその横をとことこ歩く。

「これは《白の街道》というのよ。日本の言い方だと《国道》なんですって。」

マシカが教えてくれる。

夕べはもう薄暗くなった中を星を見上げながら来たので気がつかなかったが、歩きやすいように白い大きな石畳で丈夫に舗装された、幅は四メートルほどのしっかりした道だ。気持ちの良い朝の景色を眺める余裕もなく慌ただしく人馬が行き交う街道沿いの、目につくものをあれこれ教えてもらいながら、昨日歩いてきた道に戻ってまたあの《仮皇宮》前の大門に着いた。

「あ、いたいた、鋭！ 雄輝！」

「マシカ、おはよう！」

「お！ 似合うぜそれ。綺麗だな！」

「ミア・モルラ・マシカ！ マウレイディア！ アノネエル、ソナ・カイネティケア？」

…(《星の娘》殿、おはようございます。そちらのかたが地球からの御客人ですか？)

「エウネア、ソレラアウグ。モレラディン・エラ。」

…(ええそうですモレラ様。先日は失礼しました。)

「リツコーニャ。モレラエヘネ。アノデソウスラエネ。オレラノ、ソディラ。」

…(リツコ殿、モレラと申します。こたびは無理を聞いて頂き感謝にたえません。)

門に入ってすぐの昨日と同じところに鋭と雄輝と、他にもたくさんの重臣ぼい人たちが集まっていた。

みんなきちんとしたおしゃれというか、礼服とか正装らしい仕度で、ぱりっと格好良く整えている。

「ミアマリツコ、マウレソイディア。オルレア・オルレ・ドラウグ。」

…(リツコ殿、お初にお目にかかる。それがしドラウグと申す者。)

「あじょれ・りつこうにゃ。あにのれの、そな。」

…(はじめまして、リツコ姫。わたくしはソナですわ。)

「あいどれーが！ だれむあすーな！」…(《大地世界》へ、ようこそ！)

「アイドレーガ！ アルラ！」…(ようこそ！ 歓迎しますぞ！)

初めて会う偉そうな大人の人たちもみんなマシカにだけでなくリツコにまで腰を下げて

きちんとした挨拶をしてくれるので、リツコも一生懸命「おはようございます！ 一昨日はごめんなさい！ 地球から来た高原リツコです！ よろしくお祈りします！」と日本語で頭を下げた。

「リツコ、おはよう。それ可愛いね」

「おー、地球式の服にしたんだ？」

鋭と雄輝がお世辞でなく本気で誉めてくれたので、リツコは照れて、えへへと笑った。

マシカがちょっとだけ心配そうに二人に聞く。

「どうかしら？ 一応こっちの服もちゃんと用意してるんだけど。『地球からの御客人が諸侯会議に参加する』ってことは、宣伝したほうが良いのよね？」

「うんそうなんだー。この服なら一目で地球人で判るね。さすが！ ぼくじゃ思いつかなかったよ。やっぱり女の人に任せてよかった。」

「...あら... 褒めても何も出ないわよ？」

マシカがすこし照れて頬を赤くしたので、リツコはちょっとあれっと思って眺めた。

それから少し打ち合わせがあって、せっかくだからと、リツコはなるべく目立つように、後方の荷馬車隊ではなく先頭に近い鋭の馬の鞍の前に乗せてもらうことになった。

「じゃ、私はマブイラに騎せてもらうことにするわ」

そう言ってマシカがどこかから連れてきたのは...なんと！ 見事に枝分かれした角を堂々と掲げた、ものすごく立派な... 銀灰色の雄鹿だった。

「.....マシカが.....鹿に乗る.....。」 ついつい小声で言ってしまうと、

「ね、やっぱりそこちょっと笑っちゃうよね？」と、鋭がこっぴどく相槌を打ってくれた。

牽いて来た荷馬車は雄輝たちの部下の人が列の後方の商人隊に預けに行ってくれた。

5-3. リツコ、式典に参加する。

それからどんどん広場に人が増えてきて、中央に列をなした着飾った旅装束の人たちと周囲に並んだ見送りらしい服装の人たちとで、ぎっしりと隙間もないくらいになった。(昨日の山のような荷馬車や荷駄隊は後方と脇に順序良くきちんと寄せられていた。)

『...刻限！』

『まもなく！』

『刻限！』

もうこれ以上は広場に人が入れない...という頃、ドンドンドン！ と威勢よく大鐘と太鼓が打ち鳴らされた。

居並んだ人たちが、ざっと威儀を正す。

『みな、御苦労！』

例のおっかない皇女サマが碧緑の髪を豊かになびかせ、みごとに華麗な金と朱色の正装で着飾って、昨日マシカが世話をしていたあの特別に大きくて立派な黒馬にまたがり、堂々と広場の中央を分けて進み出てきた。

『少し長い旅になりますが、皆すべて無事であちらへ着くように！ 留守の者たちは不安もあろうが、必ず和平を為して来るゆえ、安んじて待つように！』

それに対して、留守役の代表らしい身分の高そうな衣装の年輩の女性...さっきモレラ様と呼ばれていた人だ...が、門の脇から進み出て来て、深々とお辞儀した。

『道中、御無事で！』

みな、唱和する。

『道中、御無事で！』

『...出発！』

雄輝が、みごとな金鹿毛の馬にひらりと飛び乗り、皇女のすぐ後ろ右脇にぴたりと並べて号令を発した。

『出発！』

『...出発！』

伝令が次々と声を並べて叫び伝えていく。

「...行くよ？ 笑って！」

鋭は白銀色の優雅な馬に身軽に騎乗すると、鞍の前にリツコをらくらく引き上げて乗せてくれ、皇女殿下のすぐ後ろ、雄輝と並ぶその左側の位置に、するりと当たり前のよう

に並んだ。
(.....！ え——————ッ！！！！?)

つまり、リツコの位置するところは、一国の代表として和平会議とやらの旅に出る皇女サマの、すぐ左うしろ。という重要な場所だった。

そのまた後ろに、偉そうな重臣らしいお爺さんとか、ものすごく賢そうな顔立ちの年輩の女官たちとか、着飾った姫君たちの集団とか、武装した兵士の隊列とか商人旅団とか...何百人もいそうな大行列が、堂々と居並んで続く。

(..... 嘘っ！ 聞いてな——————い.....ッ！)

心の中で絶叫してみても後の祭り。リツコはとにかく（場違いすぎる！）と内心で絶叫しながらも、鋭たちに恥をかかせてはいけない！ と... 必死で愛想笑いを、してみた... 伝令や先導役らしい護衛の兵たちがまず門を出て、押し寄せてきていた見送りと見物の人たちに鋭く声をかけてもう一歩下がらせる。

続いて堂々とした歩みで皇女サマと雄輝と鋭とマシカの四人が門前に入る。

瞬間、ものすごい、歓喜の音が爆発した。

さらにゆるゆると前に進むと、ますます興奮が高まった。そして。

その歓声とはまた別のどよめきが、背後からわっと起こったので、リツコは思わず振り向いた。

...龍だ...！？

きのう見たふかふかの芝生状の長い草壇に金銀の巨大な龍が二匹、長々と横たえられてあるのはさっきから人波の向うに見えてはいたが。てっきりお祭りの縁起もの飾りだと思っていた...ら。

二頭が揃って音もなくふわりと宙に舞い上がり。

テレビで見た長崎のお祭りの龍のようにくるりくるりと旋回しながら、悠々と天高く昇っていく...！

『...我は西皇家よりの使者マフィラ。』

『おなじくミフィラ。』

『...出立を、見届けたり！』

『見届けたり！』

そう天から呼ばわって、ふわーっと一回転ひねりな感じで舞い、さらに高く昇った。

『西皇家皆様によしなに！』

皇女が高い声で返礼して見送る。

青い天空に舞う金銀の華麗な龍の美しさに、居並ぶ人々は、歓呼と絶叫と噂話で、もうハチの巣をぶちまけたような有り様だった。

5 - 4. リツコ、誇大広告される。

後から思い出してもつくづく、前から二番目なんて身の程知らずの大それたポジションに強制参加じゃなくてただの沿道の観客でいたかった、というのがリツコの感想だった。豊かな碧緑の巻き毛を風になびかせて朱紅に金糸の刺繍織のあでやかな衣装をまとい、その腰には同じ意匠で飾った壮麗な大剣を佩き、美しい無紋の黒毛の戦馬にまたがった、華麗なる《戦将皇女》殿下を先頭に。

右後ろに並ぶ金馬は真紅と漆黒の戦士装束の背中に鷹の両翼を堂々と掲げている雄輝。

左後ろに並ぶ白銀の馬には青と水白色の礼装をきちりと整えた絶世の美青年参謀の鋭。

二人のすぐ後ろにぴたりとつけて、堂々たる枝角をそびえ立たせた大鹿に騎る薬師装束の美女マシカ。

『...見ろよ！ あのかたがたが戦を終わらせてくれた四軍神だ！』

『なんてお美しいのかしら皇女様！』

『きゃーーーーーっ！ リレク（鋭）様、すてきっ！ お凛々しいッ！』

(...その鋭の鞍にちょこんと載ってるあたしみたいな小荷物なんか、この際この絵づらの中では絶対的に邪魔だ。...と、リツコは真剣に思った...)

『ちょっと何よ、あのチビ？』

『泥球界（地球）からのお客人らしいよ。何でもさる有力な部族の長の縁者とか』

『泥球界の？ 王族？ 皇族？』

『お使者様なんだから、皇族なんじゃないかい？』

(ええええっ！)と、沿道の声の内容まで聴こえてしまったリツコは内心で絶叫した。

「...鋭ッ？ なんかあの人たち、すごい大誤解してないッ？」思わず小声でささやく。

いくらちょっとだけオシャレめなワンピースを着てみたからって、実は通販のしかもタイムセールの特典で買った安物だ。『さる有力な部族の皇族』...ってなに〜？！

たしかに大祖母様は陰の実力者で朝日ヶ森の学長だけど、それって別に王家でもなんでもナイわよ！？

...むしろ今この国の言葉が喋れなくて良かったと、つくづく思った。

話が出来たら絶対に、必死になって噂を否定しにまわっていただろうから...

リツコの赤くなったり青くなったりする百面相を、ひとのわるい笑顔でにやりと無視して、行列が街から出るまでの間中、鋭はとにかく、

「笑って！ ほら笑って！...ほら手を振って！」しか、言ってくれなかった...

その鋭自身も率先して、まわりじゅうに手をふって愛想をふりまき、観るひとすべてをその超絶美青年な笑顔でうっとりさせていた…。

そんなこんなで街から出るだけでもしばらくかなりの時間がかかり。

その間、金銀二頭の龍たちは上空でゆったり旋回して「出立を見届けて」いるようで、街から行列が出るころ、挨拶のように尾を振って、西の空へとすうっと飛び去った。

「…ねえ鋭…。もう笑うのやめていい…？」

ようやく道沿いの見送りの人が少なくなってきて、やっとそう聞けたころには、リツコの顔の皮膚と筋肉は、ばりばりに強張っていた…。

5-5. リツコ、爆睡する。

「うんもういいよ。お疲れ様？ ちょっと水でも飲むかな？」

鋭は自分も「あ～疲れた！」とぼやきながら普段の雰囲気に戻って、馬上で揺られながらだけど竹筒の水をリツコに先に飲ませてくれて、自分も仰向けになってあっという間に一滴残らず飲み尽くしてしまった。

それからまたゆっくり移動し続けて《白の街道》沿いを朝に歩いて来た西の方角に戻ると、途中の河原でたくさんあった移動用の天幕はすべて畳み終えて待っていた薬師のおばさんたちが、一行のために元気の出る休憩用のお茶やお菓子を整えて待っていてくれた。

やっとリツコはひと息ついて、その後はマシカの大鹿と一緒に乗せてもらって進んだ。

薬師集団のうち、半分くらいが荷馬車隊に混ざって皇女の行列の最後尾に入る。

あとの半分くらいは列には入らず流れ解散するらしくて、手を振って見送ってくれた。

夕暮れ前にその日の宿営地らしい場所に着き、地元の人たちが出迎いの野外宴会の用意をしてくれていて、先頭が（…いちばん凄い勢いで皇女がまっさきに！…）焚火のまわりで飲み食いを始めてひと段落した頃に、ようやく列の最後尾の荷馬車隊ががらごとと追いついてきて大量の食糧や天幕をせっせと降ろし、さらに追加の大きな炎をいくつも起こして、出迎えてくれた地元の人たちへの返礼を兼ねた大人数分の晩餐の仕度を始める。

荷を降ろし終え、早目の夕餉をふるまわれた後は、そのまま手を振って別れて元の街へと戻る人たちも百人くらいいた。

「リツコ、今日もあたしと一緒に天幕だけど、いいわよね？」

やっぱり追いかけて来た小鳥や小動物たちに囲まれながらマシカにそう言われた頃、ちょうどリツコの「聞いた話が解る魔法」は解けてしまったのだった…。

マシカの小天幕をがんばって一緒に張って、寝床の仕度が整ったとたん、また着替えもせずに爆睡してしまったことしか、覚えていない…。

そんな風にして、この旅は始まった。

第6章 リツコ、旅をする。

第6章 リツコ、旅をする。

6-1. リツコ、看護助手を試みる。

そこからの旅の日々は最高だった！

夜は毎晩マシカと一緒に天幕で動物たちに囲まれてぐっすり眠って、朝は鳥たちや動物たちの騒ぐ声で賑やかに起こされて、マシカに《言葉の魔法》をかけてもらってから冷たい川や泉の水で女性陣みんなときゃあきゃあ一緒に水浴びして身支度を済ませ、大天幕で出来立ての温かいご飯を交代で食べて、えいやっと自分たちの天幕を畳んで荷物を荷馬車に乗せて、準備の出来た者から順にばらばら出発して、歩いたり馬の乗り方を練習させてもらったり、疲れたら荷馬車に便乗して昼寝しながら運んでもらったり。

お昼ご飯はそれぞれ勝手に適当に、停まって休憩したり荷馬車でのおんぴりと進みながらだったり、朝に配ってもらったお弁当と各自で用意してあるお菓子や副菜や果物なんかも食べて、午前と午後に二度ずつあるお茶休憩もだいたい同じ感じで、必要な時は街道沿いに一時間おきくらいの間隔で用意されている手水屋（トイレ）にかけこんで。

珍しい皇女行列を一目見ようと街道沿いで宴会しながら待っていた地元の人たちにお茶に呼ばれたり、とれたての果物をもらって返礼に都のお菓子をあげたり。

途中で街があれば市場や宿屋をのぞいてあれこれ買い込んだり、別腹と決め込んでご飯をもう一回食べたり…

遊んだり喋ったり歌ったり競争ごっこしたり色々しながら、とにかく西へ向かって何百人かの隊列が前になり後ろになりしつつ《白の街道》をのんびり進み続けて、行列がすっかりばらけきって前後がお互いに見えなくなった状態で陽が傾きはじめる頃にばらばらと宿営地にたどりつく。

街道沿いの警備を兼ねて常に半日分ほど先を進んでいる雄輝たち先行隊が、近在の町や村から手配されて来る係の人たちと一緒に早めの夕飯というか午後の遅いお茶？ の支度をして待っていてくれるので、この時だけは先行隊と一緒に卓を囲んで、皇女や重臣や警備や経理の人たちは食べながら打ち合わせや何かを済ませて。

いつもかなり遅れてたどり着く商人隊や姫君隊が、それより半日遅れで出発したはずの後衛隊の人たちにお尻をせかさされながら慌てて追いついてきて急いで天幕を張り、夕焼けが華やかに燃えあがる頃、ようやく今晚の集合と点呼が終わる。

待っていた先行隊は後衛隊との情報交換だけ済ませるとまた出発してしまうので、手を振って見送って。

それから残った面子は毎晩のように、『地元の人が用意してくれた歓迎夕飯への返礼』という名目で、豪華な野外晚餐会の仕度を始め... 昼の仕事を終えてから皇女たちを一目見ようと駆けつけてくる地元の人たちで、参加者は見る見る膨れ上がり...

日が暮れると同時に大きな篝火が焚かれて盛大な酒宴というか、中央に一段高い舞台が出るのでむしろ盆踊りのようなお祭り騒ぎが始まり...、飲んだり歌ったり笑ったり踊ったり、大人のひとたちは口説いたりフラレたり、よい仲になって二人で姿を消したり、その噂話をして盛り上がりたりで大賑わいになる。

リツコもいつも眠くなるまでは果汁とお菓子で興味津々でつきあって、《言葉の魔法》が切れる頃にマシカと一緒に天幕に引き上げて、あとは眠くなるまで二人でお喋りして、色々なことを教えたり習ったりしあった。

「あ、そうだ。ねえねえ！ マシカって、鋭のことが好きなの？」

大人たちが盛り上がっていた地元の有名な恋話についての詳しい話をマシカに教えてもらって、そのついでに勢いを借りてリツコは聞いてみた。

「...まさか！ 違うわよ!? あたしが一番好きな人は別にいるもの...っ！ なんでそう思ったの？」

「このあいだ、鋭に褒められた時に、ちょっと赤くなってたから...」

「やーねー。それだけ？ あのね、鋭って髪が短かった頃はそんなでもなかったんだけど、最近、典型的なヨーリア学派風の髪型になっちゃったでしょ？ それで... 笑ったりすると... ちょ〜っとだけ... 似てるのよね〜、.....雰囲気！」

「...そうなんだ〜w」

リツコはにやりと笑って、もっと詳しく聴きたかったが、

「こどもは早く寝なさい！」とか叫んだマシカに布団蒸しにされて、きゃあきゃあとふざけっこになって、そのまま眠ってしまった。

そんな毎日だった。

ただしマシカは旅団中の参加者全員の健康管理をする《薬師代表》という役職も兼ねていたので、日中も合間合間に行列のすべての人と動物の様子をチェックしに廻ったり、体調の悪い人がいれば薬草の調合をしたり付き添って看病していて、なかなか忙しかった。数百人規模の旅団中に二十人ぐらいいる薬師の集団は、日によっては本隊より先に行って地元の小さな村々の移動健診会みたいなことをして日暮れ後に追いついて来たりもしたし、時には沿道の住人から往診の依頼があったりして、夜中でも大鹿にまたがって急いで出かけて行ったりする。

リツコも始めのうちはそんなマシカについて一緒に行ったり簡単な作業なら手伝ったりしてみたのだが、どうやら薬師の才能はまったく無いようだった。

大体、血をみるのが苦手で、治療の手伝いをしようと思ってもどうしても傷口から目をそらしながらの作業になってしまうので、うまく出来るわけがない。

針と糸で大きな怪我を丁寧に縫い合わせたりするマシカは若いのに凄いなあとリツコは心底尊敬したが、たいがいの薬師は今のリツコくらいの年齢には一人立ちして一つの街や村を預かり、プロの薬師として働き始めるという。

ちょっとそれはリツコには無理そうな職業だった。

6-2. リツコ、古文書係になる。

そんなわけでむしろ邪魔になるだけだと自覚してからは往診について行くのはやめたので、時々リツコは夜更けに一人でとり残された。

そんな時は鋭が自分の天幕に呼んでくれて淋しくないように気を使ってくれたが、旅のあいだも多忙を極めている鋭の天幕に泊まると、しばしば真夜中に皇女サマ本人や重臣や近衛隊の人達などが訪ねて来て話し込んだりするので、『言葉の魔法』が切れた後で一言も理解できない面倒くさそうな話し合いの声だけをBGMに眠るはめになるのが、少々の難点だった。

こちらの世界では「マダロ・シャサ」（雄々しく輝ける者）と呼ばれている雄輝が旅団の警備の責任者なら、「リレクセス」（鋭利な短剣）とか「リレキエイセス」（頭の鋭い切れ者）と呼ばれることが多い鋭のほうは、行列全体の食糧や資材の調達と管理と支払いとか、現地の人たちの応援要請の手配とその返礼品の用意とか、諸々の雑用全ての総責任者らしくて、行路と旅程の管理表とつきあわせて天気予報まで自分たちで観測した挙句、必要とあらば皇女サマに「天気を良くする魔法」まで頼みに行ったりするのが、担当の範囲らしい。

さらにはヨーリア学派の長としては医術と薬学の心得もあるそうで、時にはマシカたち薬師集団と一緒に出張検診に行ったり、地元の急患や戦傷後遺症の人の治療もしていた。ほんとに忙しそうだった。

そんな日々をしばらく観察していたリツコは遊んでいる自分が申しわけなくなってきたので、何かできることがあれば手伝うと申し出てみた。

「ほんと？ じゃあ、やってみてほしいことがあるんだ。無理ならいいけど。」

まんざら嘘でもなさそうに喜んだ鋭に連れられて、ヨーリア学派の荷物を積んだ箱馬車隊のところへ連れて行かれた。

『オルレア・ソウ！ 異文書庫の鍵はどこにやったっけ？』

『私が管理してますが？』

『ちょっとこのコ使ってみてくれないかな？』

『リツコ殿を、ですか？』

呼ばれて鍵を持ってきてくれたのは、いつも鋭のそばで帳簿付けや出納の手伝いをしていて、よく似た服装とよく似た髪型の、ちょっとかなり美青年なところまで含めて神秘的な雰囲気がよく似ている、つまりたぶんマシカが言う「典型的なヨーリア学派風」の... まっすぐな黒長髪で白い肌に金色の瞳の、鋭より少し年上に見える青年だった。

二人して箱馬車の中の古い木箱を幾つか開けてまわる。沸き起こった埃にリツコは少し咳き込んだ。どうやら、しばらくかなり、長いあいだ?... 開けていなかった箱らしい。

「これ読める？ いや、読めなくてもいいんだけど、どれとどれが同じ文字で違う文字か、区別は判る？」

言いながら鋭が試しにと差し出してきたのは... たぶん英語？ の... ものすごく古そうな... 本だった。

「...地球の？」

驚いてリツコは尋ねる。

「うん。大昔の、ダレムアスと地球の行き来がもっと頻繁にあった頃の記録らしいんだけど。ボルドムとの戦乱で前の皇都の書庫と学者もみんな焼かれちゃったんで、誰にも読めなくなっちゃって... 今ね、全土のヨーリア学派で連絡しあって残った古文書をかき集めて、整理しなおしてるところなんだけど。この旅の間に少しでも分類しておこうと思ってたのに、ちょっとぼくそれどころじゃなくなっちゃってさ。」

「何をすればいいの？」

「とりあえず、文字の種類別に分けてほしいんだ。もし日本語があれば、古すぎて読めなくても、なんとなくこれは日本語かなって判るよね？ 英語とか英語じゃないとか、中国語っぽいとか、それとは違うとか... 判る範囲で、いいんだけど...」

言われてとりあえず何冊かの分厚い革表紙の本や布や竹の巻物や乾燥した木の葉や石盤などを、リツコは手にとってみた。

地球上の色々な国の文字の、絵づらだけなら... 亡くなったおばあちゃんの友達の家の絵本やビデオで... 見たことだけなら、ある。

「...これは有名なクサビ文字よね？ 歴史の教科書にも載ってるやつ。それからエジプトの絵文字。こっちはインカとかアステカとかの古い時代の絵文字。それとこれは... たぶん... 手書きのタイ語じゃないかな？ これはインド語？ ...これも似ているけど、ちょっと違う文字よね？ たぶん近い地域の言葉よ。ヒマラヤの山の中とかの... これは北欧神話の絵本で観たことある占いとか魔法に使う神様の文字。それからアラビア語。ロシア語。...それと、古い時代の中国語と... 日本語と... ラテン系の言葉と... ギリシャ文字！」

「やった！ さすが『適任者』ッ！」

鋭が快哉を叫んだのでリツコは嬉しくなった。

『読めるのですか？』

ソウが期待し過ぎていたので、ちょっと申しわけなく思った。

『訳すのは無理。でも国別に分類できるって。』

『それは素晴らしい。』

それから、リツコは毎日（じゃなくてもいいから）、馬車隊が宿営地に着いてから夜宴が始まるまでの夕方のまだ明るい時間、ソウから馬車の鍵を借りて古文書の埃をはたいて陰干して、国別に分類整理して新しい箱に収納しなおすのが、担当の仕事になった。

「あ、ついでにその国について、リツコが知ってることだけでいいから簡単にメモして、なにか説明のイラストもつけてくれる？」

リツコはもう嬉しくなってしまうくらい『はい解りました！』と、いつもソウが鋭に言っているのを真似して、ヨーリア学派の言葉で応えた。

戻って夕飯の時にマシカにそう言うと、目を丸くした。

『すごいわりツコ。あたしなんか薬師文字しか読めないのよ。』

「そうなの？」

『官僚文字や知水神（ヨーリア）文字は簡単なのしか解らないし、ニホンゴときたらヒラガナとカタカナの見分けもつかないわ！』

ちょっとリツコは得意な気分になった。

『でも心配。古い本の埃って、体に悪いのよ...？』

そう言って、薬師仲間が疫病除けに使うというマスク代わりの布を一枚くれた。
試しに着けてみたら地球の銀行強盗かイスラム教の女の人みたいになったので、リツコは鏡をのぞいて笑いこぼした。

6-3. リツコ、魔法にかかる。

それにつけても皇女サマはいつ見ても機嫌が悪かった。
せっかく超のつく美女なのに、眉間にシワを寄せて誰かれなく睨みつけ、ちょっとしたことで色白な肌が真っ赤になるくらい喚いたり怒鳴りつけたり。いつもイライラしていて「ヒステリー」としか言いようがない。

こんな性格では、いくら戦争に強くて敵に勝てても、平和になったら国民は誰もついて来ないんじゃないかしら。だから『後継者問題』とかでモメてるという噂なのかしら？とリツコは疑ってみたが、その割には鋭や雄輝やマシカも含めて、すべての部下たちからの信頼というか人望というやつは、ものすごく厚いらしい。

「今日もまた機嫌が悪いー！」

という嘆きと愚痴は毎日のようにあちこちで飛び交っていたし、道中の各地から出向いて来る歓迎係の役人たちや領主の面々に至っては、「噂に名高い『皇女サマの八つ当たり』とはコレかー！」などと、もはや一種のアトラクションとして楽しみにされていた...
楽しい旅の毎日でも、皇女サマの天幕の侍女や従者の人たちだけは、いつ怒られるかとびくびく戦々恐々として落ち着かない、そわそわした空気が漂っていた。のだが...

ある午後。

よく晴れた西の天空はるかに鳥や雲とは違う小さい細長い影がくっきりと視え始めた。

『.....龍だ！...フェルラダル様も居らっしゃる！』

誰かが叫んだ。

『皇女殿下にご報告を！』

『...聴こえたわ！』

すごい勢いで皇女サマがお茶休憩の簡易天幕からすっ飛んで出てきた。

あれあれ？ とリツコは見守った。

空のむこうの影のうちひとつは、自分ひとりで飛んでる？ らしい、でも翼はない人間の姿で、もう一つは、出発式の日に挨拶して西の空へ消えていった、あの伝令役の二頭の龍のうちの若い銀色のほうのように見える。

『...お兄様！...伯父様！』

びっくりしたことに《大地世界》の皇女殿下サマはいつも身に着けていた重そうな腰帯を放り捨てると、いきなりふわりっと空に浮かびあがった。

そのまま文字通り「飛ぶように」すっつとんでいって、浮かんだまま『お兄様』と『伯父様』を交互に抱きしめて嬉しそうに挨拶している。

『遅くなって済まなかった。出立式までには戻りたかったのだが。』

鋭とはりあうぐらい整った顔立ちの、鋭と同じような斜めわけのまっすぐな長髪だけど、かなりな年輩の落ちついた感じの男性が、そう言いながらふわりと降りてきた。

年齢が上だから、こちらが皇女サマの『伯父様』だろうとリツコは推測した。

『...フェルラダル様ッ！』

皇女と同じくらいすごい勢いでもう一人すっ飛んできたのは... マシカだ。

『...御無事で！』

皇女サマの伯父様に、飛びつくように抱きついて、伸び上がってキスしてほおずりして挨拶している。

あれあれ... とリツコはすぐに解った。マシカが言った『鋭とちょっと雰囲気似ている一番好きな人』って...、この人だ...！

『...マシカ...。...わたしも居るんだけどなー...』

白銀の龍にまたがって運んでもらってきたらしいもう一人の男の人が、なぜかそうぼやきながら龍の背中からすりと降りて来る。皇女サマとよく似た碧の巻き毛と碧の瞳で、一目で兄妹だと判る。体格は雄輝と鋭の中間くらいで、優しい雰囲気だ。

『...あら、ごめんなさいミヤセル様？ 御無事で何よりですわ？』

...ミヤセル様？... 皇女サマの『お兄様』ってことは、たしか名前はマリシアル皇子って言わなかったっけ...？

リツコは聞きかじりの話とつなぎ合わせながら、興味津々になりゆきを見守った。

「あ〜、...また話が賑やかになった...」

苦笑しながら、いつのまにきたのか鋭がリツコの隣に立っていた。

「...さて、吉と出るか、凶と出るか... 吉かな？」

銀龍は近くの人間にだけ挨拶すると、また天空を悠々と飛んで西へ戻って行った。それを手を振ってしばらく見送ってから急いで振り向くと、皇女さまは兄上と伯父上と急いで集まって来た年上の重臣たちと、額を突き合わせて何か真剣に話し合いを始めた。それを鋭は自分は関係ないとばかりに離れたところから見守って、やがて笑った。

「...安心して、リツコ。これでマーシャの機嫌は直ったみたいだから...」

話のとおり、その日の晩に雄輝たち先行隊と合流した時の皇女サマは...

これが本当に昨日までのあの、嫌な性格の意地悪女とほんとに同一人物?... とリツコが目を疑うくらい、にこにこして、上機嫌で、頬なんかピンク色で、愛想良くて、みんなに親切で、歌まで歌っちゃって（しかもすごく巧くて!）、食欲も旺盛だった。

側近の人たちがみんな嬉しそうににやにやにこにこして、後ろでこそこそと情報のやりとりをしていたが...

鋭はあまり気にしていなかった。食後のお茶まで飲み終えて歓談している皇女サマたち主賓席のところへ、おもむろにリツコを連れて訪ねた。

『お久しぶりです。御無事で何よりでした。フェルラダル様、マリシアル様。』

こちらが地球から来たリツコです。最近皆からマリーツ（地栗鼠ちゃん）という愛称でも呼ばれています。』

「...で、マーシャ？ 機嫌が直ったところで... いい加減、この子、みんなと喋れないと不便なんだけどな？ 諸侯会議で代表挨拶だってする、大事な国賓なんだし...？」

「.....わあかったわよ！ もうッ！」

皇女サマはなんとも可愛らしく（リツコは目を点にした）ぷくっとふくれてすねた。

「ちょっと待っててリツコ。今まで八つ当たりしてたことは謝るわ。それで...」

すらりと立ち上がってこちらへ来る。

リツコは思わずびびって逃げかけた。

その肩を遠慮なくがしっと捕まえて、

「だから、謝るわ。って言ってるでしょう?!」

ものっすごく高飛車に言い切ると、リツコの眼を真正面からしばらく見つめて、それからすうっと息を吸い、大地を両手で抱えあげるような独特の舞のようなしぐさをして...
謡うように唱えた。

『...マレッタ! れとけいえる、せるかろまろうでい、いええん!』

...(汝がことば、皆に通じよ!)

それから急に、それまではマシカが毎朝かけなおしてくれる《言葉の魔法》のおかげで相手の言葉の意味をリツコが「なぜか理解できる」ようになっていたのと同じに、リツコは普通に日本語で話しているのに、聞いた人は誰でもみんな「なぜか理解できる」ようになった。しかも半日で切れてしまうような時間限定の魔法ですらなくて、ずっとその状態は続いた。

「...ありがとう!」

どんなに便利にしてもらったのかを理解したリツコが後から改めてお礼に行ったら、

「だぁから、遅くなって悪かったわよッ!」...と、皇女サマはもう一度ふくれて、とつても偉そうに、拗ねた。

第7章 リツコ、取材する。

第7章 リツコ、取材する。

7-1. リツコ、神話を知る。

なにしろリツコは元々かなりのおしゃべりの質問魔で好奇心旺盛だ。今までは相手が言ってることを聞いて理解するだけで、自分から質問できるのはマシカと鋭だけだった（日本語が通じるもう二人のうち雄輝は先行隊にいて不在だったし、そのせいで？ なのか皇女サマはいつも機嫌が悪かった！）...が、今度からは、知りたいことについて、こちらから聞いて回れる！

もう大喜びで鉛筆とノートの手を小脇に抱えて、キャラバン中を前から後ろまで朝から晩まで、もちろんちゃんと他の手伝いもしながらだったが、すべての人を質問攻めにしてスケッチやメモをとってまわる姿が、旅の名物のひとつになった。

さて。

分秒刻みであちこちから色んな人に呼ばれている鋭よりは少し時間に余裕がありそうなソウの名簿整理の作業を手伝いながら、気になっていたことを聞いてみた。

「なぜ毎日次々に荷馬車隊の人が代わるの？ 同じ人たちにずっと泊りがけで付いて来てもらったら、仕事がらくになるんじゃない？」

なにしろ大人数のキャラバンの食糧や大天幕やその他色々を運ぶ荷馬車隊はそれだけで大小百台近いのに、ごく少数の馬番以外の荷積みや御者の仕事の人たちは毎日日替わりで地元の人に来て、朝に集合して点呼して名簿を作って担当の荷馬車を割り振って、一日仕事をすると、晩餐会の御馳走と美女たちの舞や歌をめいっぱい楽しんで二日酔いになるほど呑んで、翌朝には日雇いの給金代わりに小さな返礼品を受け取って、新しく集まって来た今日の地元の人たちと交代して、家に戻ってしまうのだ...

で、また最初から、点呼して名簿を作って荷馬車を割り振って...の作業を繰り返すソウたちの仕事量は、かなりの負担になっているはず。

『...ああ、御存知ありませんでしたか？ われわれ大地世界の住人のうち、生粋のダレムアト達は、自分の土地から遠く離れることを苦痛に感じるのですよ。女神の意志に反するという信仰で。』

「そうなんだ？」

『市井の庶民や農民たちだと、生まれた場所から歩いて日帰り...遠くてもせいぜい一泊かそこらで帰れる距離より遠くへは行かずに、一生を終える者がほとんどですね。それより遠くへ旅することを楽しめるのは、大地世界全土を「我が家」と呼ぶ皇家にゆかり

の皆様か、我々のように地球系か《ボルドム》の血が入っているヨソ者か、滅びた《エルシャムリア》の末裔の方々。あとは例外的に、知水神（ヨーリア）学派に属することに決めた人たち。』

ん？ とリツコは引かかった。

「あれ？ ソウさんってヨーリア学派の人じゃないの？」

『違いますよ？ 服の色が違うでしょう？』

「...ごめんなさい。そこまで見てなかったー！」

言われてみれば動きやすく優雅な形はよく似ているものの、鋭たちがいつも着ているのは深い青か紺か水色を中心にして差し色は白か銀鼠色を使ういわゆる「マリンカラー」で、ソウさん達のは黒か茶色をベースにして飾りに使うのは黄土色とか赤土色とか萌黄色とか、いわゆる「アースカラー」系だ。

『私どもは遠方への移動が苦にならない点を活かして皇家や王家や領主家にお仕えしている外役人です。些細な用件での使者として往来したり、交易隊の管理をしたり。』

「そうなんだ。」

『特に私などは地球系だけでなく《ボルドム》の穢れた血もひいておりますからね。他の仕事に就くことなど出来ないのです。リレクス様やヨーリア学派の方々のような高いお志とは、無縁の者ですよ。』

自嘲するように低くソウはつぶやいた。

リツコは目を点にして返事に困った。...穢れた血？...マグルのこと？...ボルドムの穢れた血？...って言った？...今の翻訳？...あってるのかな...？

何度かまばたきをして、考えてみる。

...自分が生まれ育った世界に、ご先祖様の国が、一方的に攻め込んで人を殺しまくったりしてたら、どんな気分で暮らさなくちゃいけないのかな...？

いくらなんでも好奇心だけであれこれ質問しまくってはいけない問題だということだけは、リツコにも判断がついた。

「...えーとそれで...《エルシャムリア》って、昨日、宴会の時に芝居してたやつ？」

『そうです。今はもう滅びた《天宮界》ですよ。』

「神話じゃなくて、実話なんだー。」

『？』

「...じゃ、遠くまで行ける人たちに、旅のあいだずっと付いて来て、って頼めば？」

『そんなに人数が居ないのですよ。すでに外役人としてどこかの家に勤めている者以外は、皆、独立した商人や遊牧民ですからね。これほどの大人数に長期間の仕事をまとめて頼めるとしたら、長旅には向かない冬の積雪期ぐらいでしょう。』

「そうなんだー。」

それからリツコは《エルシャムリア》とこの世界の神話について、昨日の宴会芝居だけでは解らなかったことを色々質問して教えてもらった。

世界は初め四つあって、姉・兄・妹・弟の神様がそれぞれ治めていたが、何やら壮絶な姉兄げんか？ が起きて、姉は殺されちゃって《天宮界》も滅びて、兄はその罪で捕まって偉い神様に《ボルドム》世界の奥の牢屋に閉じ込められてて、姉の死を嘆き悲しみながら争いごとの後遺症で死んじゃったらしい妹の神様が遺した世界が、この《ダレムアス》。

その姉妹ゲンカをみてグレて家出しちゃった？ らしい弟の神様が遺した世界が《地球》。おなじ遺された世界同士、昔はもっと仲良しで、地球の時間で数万年くらい前までは、ところどころに残った通路で思い出したように行き来があったらしい。今でも地球世界の各地に翼のある人（天使とか天狗とか）や毛むくじらの雪男とか狼男の伝説があったりするのその名残。リツコがいた朝日ヶ森とかも、たぶん、その流れを汲んでる。でも何かでいつの間にか通路がずれ始めて、通りにくくなって、行き来が途絶えて…

お互い、忘れかけていた。らしい。

そのズレの原因が《ボルドム》世界からの攻撃？ のせいで。地球に繋がっていたはずの通路の遺跡から、あるとき突然、《ボルドム》の鬼人たちが大量に《ダレムアス》に攻め込んできた。

それで当時の《大地世界》の首都だった《白都》というところが奇襲攻撃を受けて滅びて。今のあの皇女サマの両親もその時に戦死しちゃって。それで占領軍の追手から逃れて皇女サマは地球に亡命して。しばらく朝日ヶ森で暮らして、たまたま知り合った雄輝と鋭と一緒に（鋭の言い分では「まきこまれて」）戻って来て…

長い長い戦争を戦い抜いて、ようやく鬼人たちを元いた世界に追い返して、封印して…
…で？

この旅の一行がいま何のために西へ向かっていて、どういう理由でリツコはここに呼ばれて来たのか？

そこまで聞く前に、ソウは忙しくなってしまった…。

7-2. リツコ、野球を教える。

途中から合流したり大きな街道の分岐点で手を振って別れて行ったりで増えたり減ったりしながら常時何百人もの規模で動き続けている旅の一行の内訳はといえば《西方諸国》とくに《西皇家》を相手に北西太湖で開催されるという諸侯会議に《白王家》代表として出席する戦勝皇女とその兄と伯父上と、鋭やマシカやソウなどの側近や幕僚や重臣たち。それを手伝うため付いて来た侍女や従者や料理人や職人や、食料や資材の調達係の商人たちと、護衛のために参加している雄輝たち武将の一隊。そして荷馬車隊の馬番までが「ずっと一緒に」行ける人たちで、荷運び人足や御者たち百人くらいが地元密着型の応援部隊で「日雇い」。

それとは別に、見るからにとても家柄の良さそうな、超のつく豪華な服装で着飾って旅をしている謎の美女軍団のお姫様たちと、そのまた美形ぞろいの侍女たち従者たち専属の近衛兵たちでこれまた合計が二百人くらいいる。

このお姫様たちは何故こんな場違いな野宿の長旅に参加しているのか？ リツコは前から不思議でしかたがなかったので、言葉が通じるようになると早速お茶に呼ばれて行って質問してみた。するとお姫様たちは一様に笑って、『さて、何故でしょうね？』と答えをはぐらかす。

夜ごとの宴会でみごとな歌や踊りを披露してくれるし、それを目当てに詰めかける地元の人たちが大層多かったのも、最初は諸侯会議に「華を添える」ためのプロの芸人さん

たちかとも思ったけれど、聞いてみたらお姫様たちはみんな皇女様たちのイトコとかハトコとか... つまりほぼ全員が「皇族ゆかりの」やんごとなき深窓の御令嬢たちだった。それに、旅の間ずっと着飾るばかりで何の仕事もしていないのかと思ったら、そうでもない。

鋭やソウたちが地元の歓迎係や荷運びの人たちにせっせと配りまくっている「返礼品」...かわいらしい小さい装飾品かと思ったら、「お守り」で...「皇族ゆかりのやんごとなき血筋の」お姫様たちが、旅のあいまにせっせと手作りして「神力」を込めている、御利益のある品物だった...

そんなお姫様たちは移動中も箱馬車の中で忙しく手と口を動かし続けていたので滅多に外に出られず、たまに見晴らしの良い場所などで降りて遊び始めると後衛隊から安全確保のために本隊から離れないでくれとせつつかれるしで、ろくに息抜きもできない。

お姫さまたちのなかでも一番身分の高いらしいソノ姫...『マ・ミア・ミ・ソノワ・エリエリ!』(世界で一番たっとい姫様!)と侍女たちが恭しく呼ぶ、戦勝皇女と兄皇子よりも唯一年上の、《皇家長姉》(皇太女)という立場らしいイトコ姫...に、

『わたくしたち退屈しておりますの。なにか地球の遊びを教えてくださいませんか?』と、キャラバン唯一の子どもであるリツコは頼まれてしまった。

うーんと、リツコは困った。

トランプやウノやオセロは持って来なかったし、実はほかの人に教えられるほどルールに詳しくないし、よく似た感じの手札遊びはこっちの世界にもちゃんとあって、わざわざ「地球の遊び」として教えてみても、あんまりアリガタミがなさそう。

地球というか日本の地元でいつも自分がやっていた遊びというと、こういう女の人むけのお手玉とか綾とりとかオトナシイのは苦手で、もっぱら泥だらけになって泥警とか、缶蹴りとか、屋外の遊びばかりで...

「あ、そうだ。」

思いついて、ちょっと聞いてみた。

「この世界に、野球とかサッカーとかの球技って...ある?」

『キュウギ? 玉の、技の、遊び。ですか...?』

発音と漠然とした意味しか通じなかったらしい。つまりこっちには存在してない言葉。そういえば通りすがりの街とかでも子どもがボールを持っているところを見たことがない。...あれだけ色んな踊りが巧いんだから、運動神経は良さそう...とリツコは思って、

「道具を用意するから明日まで待ってー!」

と言ったら、お姫様たちはすごく嬉しそうに、期待に満ちた目になった...

リツコはちょうどその日の午後に通りにかかった街の市場で、前に鋭から「なんでも好きに買っていいよ!」と渡されていたお小遣いを使って、分厚い皮の端切れをたくさんと、羊毛のもしゃもしゃした固まりを一山買って来た。

お姫様たちが細工物を作るのを見ていたのでやりかたを真似して、まず型紙を書いて、皮を切って、穴を開けて、綴じ合わせて、綿をぎゅうぎゅうと、しっかり詰めて...

夜更かしして何時間もかけてようやく出来上がった不格好なしろものを見て、マシカがちょっと絶句した。

「リツコ、その... 鍋つかみのおぼけみみたいな手袋と、毛玉のおぼけみみたいな丸いも

の...何？」

すごーく、遠慮がちに、質問してくる。

「グローブとミット！...とボール！」

バットの代わりにちょうどいいものもちゃんと見つけて買ってあった。料理の時に練粉を伸ばすのに使う、地球のやつと見た目も使い道もそっくりの...大きな麵棒だ。

翌日さっそく、

「鋭ー！ 時間あったら野球やろうよー！」

「ええ？」

「お姫様たちと！ 人数少ないから三角ベースでー！」

と、声をかけて場所を確保していたら、なんだなんだと、お昼休みで馬車を停めていた人たちが、わらわらと寄って来た。

7-3. リツコ、勝負する。

驚いたことに、鋭は野球がヘタだった。運動神経はいいのに！

「うーん。地球に居た小学生の頃は、本ばかり読んでた科学小僧だったからねえ...」

みごとに三振からぶりをかました後、苦笑して仕事が忙しいと言って逃げてしまった。

代わりにリツコが打ちかたを実演して見せようとしたが、今度は打てる球を投げられるピッチャーがない...

「...誰か、投げてみたい人ー？」

衛兵の誰かなら立候補するかと思って訊いてみたら、また驚いたことに、ミソノワ姫が名乗りをあげた。

『その丸い毛玉を投げて、その革製のマトの凹みに当てればいいんですの？』

慣れない人が投げる場合はキャッチャーが危ないので、代わりに地面に突き刺した棒の上にはめこんだミットは、マトじゃない...と説明する暇もなく、風変わりなモーションで、ひらひら服のお姫様は一発でみごとに「玉を的に当てて」いた...

「えっうそ！ すごーい！」

『わたくし剣や馬はからきしですけど、当てものなら少しは得意ですの』

「なによ、なに面白そうなことやってるの？」

「リツコ、交ぜて交ぜてー！」

なぜか皇女様とマシカもやってきた。

地球で育った皇女様は野球のルールくらいは見知っていたので、リツコが投げた。

.....ぼふーーーーーん！

変な音だったけど、みごとにバット代わりの麵棒の真ん中にヒットして...

手作りのへろへろボールは一発で縫い目が裂けて羊毛をまき散らしながら、ほぼホームランな飛距離をかつとんだ挙げ句、街道脇の小川の流れに、ぼちゃんと沈んで消えた...

「...” あ〜！...」

リツコは、ちょっとかなり、ぐれた。

『それでは、当てもの競争にいたしましょう！』

ミソノワ姫がリツコの頭を撫でて慰めてくれながら、景品にとっておきの一番美味しいおやつを賭けると言った。

それを聞きつけた女性群が大勢と甘いものが好きな男性陣も集まって来て、われもわれもと、河原の石を拾ってきてはキャッチャーミットに投げた。

ミットもあつという間にぼろぼろになってしまったので、代わりのものを用意して。

当てものは得意だと自慢したミソノワ姫はしかし飛距離がなくて、こちらのルールに従ってだんだん遠くしていくうちに残念ながら敗退した。

情け容赦なくピシピシと実戦の大剣で鍛えた剛腕を披露する皇女サマは、距離は飛ぶけど意外にノーコンだった。

マシカは「弓なら負けないんだけど！」と悔しそうに云いながら中盤ぐらいで消えた。

少しずつマトを遠くへずらして行って、腕に覚えのある人が順々に投げて行って...

近衛兵で狩人出身という男の人と、リツコが決勝戦になった。

僅差の接戦で、リツコが勝った。

だてに小学生リーグ最年少の県大会優勝投手じゃないもん！ と勝ち誇って、優勝賞品の「いちばんおいしいお菓子」に、がぶりと遠慮なく喰いついた...

おとなたちは楽しそうに笑って、そんなリツコを優しく見ていた。

7. リツコ、聞き書きする。

《仮皇都》を出てからずっと広大な平野となだらかな丘陵地が続いて、畑と森と牧場が交互に広がる穏やかな土地を進んできたが、小高い峰が幾つか連なる《屏風山系》からは少々難所で、中腹をうねうねと折り返しながら峠越えする《白の街道》の道幅も少し狭くなっていて、数日かけてゆっくり越えるしかないらしい。

その山間から右手はるかに見える《北平原》という地域は先の《ポルドム》軍との最終決戦の場だったそうで、遠目にも大地が変にえぐれたりして赤剥けて、数年たってもまだ植物が生えてこない、おかしい状態だと判る。

皇女マーライシャ以下、雄輝や鋭やマシカたちみんな、その合戦に参加した武人たちは「追悼と慰霊のため」と本体から離れ、馬を早駆けさせてそこまで往復してくるという。走る馬にはまだ乗れないリツコは残念ながら留守番組に振り分けられて、その間はミソノワ姫が預かってくれることになった。

山道は重い荷を曳く馬たちにはきつい勾配なので、姫君たちも丈夫な沓と動きやすい服に着替えて、車列から降りて歩いて登った。

この山間地には住人が少ないので、両脇の街道口に常駐している荷運び関係の仕事の人たちが、三泊四日？ くらいの間、ずっと馬車と一緒に移動してついてきてくれるそうだ。毎日大量の「返礼品」作りに忙殺されていた姫君たちは三日も解放されることを喜んでいて、巫女舞の修練で鍛えた脚力を発揮して、文句も言わずにせっせと歩いて登った。

リツコも、これは良い機会だと喜んで姫君たちに話をねだった。

「あのね、そもそもどうして皇女サマは、あんなにものすごく機嫌が悪かったのに、いっぺんで治っちゃったの??」

『...それは少しばかり長い話になりますけれど...』

あいまにたくさんの脱線や雑談や、そのときの話題にまつわる神話を謡った有名な歌や遊びや、食事やお茶休憩で中断しながらも、姫様たちは律義に、山越えの間中を使って、だいたいの話を説明してくれた。

『そもそもこの《大地世界》ダレムアスが《初めにありし四界》のうちの一つであり、《妹女神》と呼ばれるマライアヌ様の創始した界だというのは、もう聞いていますか？女神マライアヌ様が愚かな戦乱に倦んでお隠れあそばした後、その御子、女神と人王との間に生まれた《半神女》マリステア様が界の統治を引き継がれました。そのマリステア様は半神であられたゆえ、ただ人に比べればたいそう長い寿命でいらっしやっただので、その生涯に何人もの夫や恋人や情人を持ち、何十人ものお子を産んで増やされました。

マリステア様が亡くなられた後もしばらくの間は、そのたくさんの姉妹兄弟たちの子々孫々は、それぞれの血族ごとに分かれて暮らしながらも、ほぼ穏やかな間柄を保っていたそうですが...

やがてこの世界の中心《始原平野》マドリアウィが手狭になると、争いを好まなかった人々は新たな土地を求め、野をかこむ山のあちこちの谷筋から抜けて《大地の背骨山脈》の山間から裾野へ、ふもとから四方八方へと、どんどんと散らばり広がり続け、仲の悪い部族同士などはすっかり疎遠になって物心ともに離れ、ばらばらに別れていきました。もう今ではマドリアウィ野に戻る神の道さえ失われてしまった時代。お互いの言葉すら遠く異なってしまっ、誰ももう世界全体のありようが把握できなくなった時代に...

それでは何かおかしいと、旅に出て世界と人々を繋ぎ直した、勇敢な姫がありました。姫はこの《大地世界》をくまなくめぐって領主や国主を説得して回り、今この私たちが歩いている《白の街道》のもとを作り、宿場と貨幣の制度を整え、またそれまでは冷遇されていた地球やボルドムからの移民を取り立てて外役人という仕事に就かせました。その功績をもって、生まれは《血の薄き姫》と蔑視されていた《尊称なきミトル様》は人々から《女神の遠き孫》という美称を授けられ、今はなき《白の都》ルア・マルラインを新皇都と定めて、《大地世界》の再統一を宣言しました。

ところが、既にあった《聖皇家》モルナスの、女神の血を最も濃く受け継ぐと誇る方々が、移民の子孫や血の薄き者らによる世界の統治には、異を唱えられたのです。

当時のモルナス皇が、その後継の長子を夫とするようミトル様に要請しました。

濃き血筋の古株に、白き若枝を接ぎ木として利用するおつもりだったのですわ。

ミトル姫はそれを退けられ、旅の仲間であった平民の出のアステト・アルラを男皇と決めました。わたくしやマーライシャ姫がこの御二方の子孫にあたります。

モルナス皇はこの縁組から生まれる《女神の血の薄い》皇家を快く思わず、一時は戦乱になるかと危ぶまれました。

戦は回避され、《濃き血の力》を誇るモルナス皇家はそれを誇示するために、血の薄き者らには棲みづらい《西の荒野》の向うに都を移しましたが、それ以来...

何十代の長きに渡って、《西皇家》は《白皇家》の後継者に、婚姻によって二つの皇家を統一するべきだと、説得と求婚を、し続けてきたのですわ...。』

一体いつ当代の皇女サマの話にたどりつくのか、必死で聞き書きのメモをとりながら、

リツコは不安になった。

『そしてやはり百年近くも昔のこととなりましたが、わたくしもマーライシャ姫も、今のリツコよりもっともっと幼く無力であった頃。世界に異変が相次ぎ、間もなくボルドムの悪鬼らが界壁を破って攻め込んでくることが判りました。

当時の男皇を務めていたのがマーライシャ姫の父君ですが、その皇妹であるわたくしの母が《西皇家》への使者を務め、西の三皇子が率いる援軍が遣わされました。そしてその長子クアロス様が、両家縁組の話を通したのですわ。

マーライシャ姫はまだ本当に幼かった。恋も婚姻もなんのことやら解らぬうちに、はるかに年上の、すでに成人していらしたクアロス様に言いくるめられて、求婚に承諾をしてしまったのだそうです。

幼いとは言え、皇家直系の巫女姫が神力をこめ祝詞を唱えて誓約したのであれば、正式な約定。大人になってから考えなおしたからといって、断ることは難しくなります。

...ところがマーライシャは...、そのう...』

「あ、やっぱり、雄輝のことが好きなの？」

『...やはり、リツコ目から見ても、はっきりそうと解りますか...。』

少々困ったように嘆息してミソノワ姫は言いよどんだ。

『そのこと自体はあまり問題にはならぬのです。正式な政治上の男皇はクアロス様と定めた上で先に後継の子を産んで、それとはまた別に、マダロ・シャサ殿は武人としても誉れ高いかた。堂々と女皇の情人と誇示して愛すれば、姫の名誉にこそなれ、誰も咎めることなどありません。こちらの世界では特に問題になることではないのですが。そう言って、まわりの者みなで説得を試みたのですが、』

「そうなんだ...」

リツコはちょっとびっくりして聞いていた。

『ただ... マーライシャ姫はその後、《ボルドム》の追っ手を逃れて地球で育ちました。

今リツコが驚いたように、その考え方はできぬと。望まぬ子は産めぬと』

「...そりゃそーだよね...？」

『あのように荒れて荒れて...』

従姉姫は深いため息をついた。

『いっそ、マダロ・シャサ殿と相愛の仲でさえあれば、地球で言う「駆け落ち」でもなんでも、させてやりたいところでしたが。』

「.....あれ、やっぱり、... 皇女サマの片思い...??」

おそろおそろ質問すると、ミソノワ姫は深くうなずいた。

『このことばかりは他人にはどうにもなりません、ただ』

「ただ？」

『西皇家が婚姻の日限を迫ってきたのですよ。戦も終わったことゆえ、昔の約定を疾く果たせと。』

「え～★」

それはひどい。リツコは初めて、皇女サマのあの荒れっぷりを理解して同情した。

『それゆえ伯父上と兄上が大層ご心配なさって。本当に、幼き頃のマーライシャ姫が神力をこめて《婚約の誓言》を唱えてしまっていたのかどうか...』

そこのところを、探りに行かれていたのですわ。』

「...それって...」

『ええ。幼いころのマーライシャ姫が理詰めで婚約を迫られて、その説得には首肯したとしても、その場で誓言まで唱えたと言うのはクアロス皇子のハツタリに過ぎない可能性が大きいと。』

その他に、マーライシャ姫が生死不明であった時期に、すでに正式に近く娶っておられた妃女もその子女も複数おられると。』

...ちょっとリツコはあっけにとられた。

...そんなんで、よく、あの皇女サマを、騙して結婚させようとか、思うなあ...！

『それで、婚約無効と断ることが出来ると判明したので、機嫌がすっかり直ってくれたというわけですわ。』

そんな噂話をされているとは知りもせず、山越えの後半、皇女サマたち別動隊の一行は、無事に予定通りに、本隊に合流しなおしたのだった。

第8章 リツコ、囚われてはいないお姫様にあう。

第8章 リツコ、囚われてはいないお姫様にあう。

8-1. リツコ、訪問する。

侵略者《ボルドム》軍を元の世界へ追い返す決戦がおこなわれたという合戦場の跡地へ、戦没者の追悼と慰霊の式を行うと言って出かけた皇女サマたちの別働隊が、山越えを終えた本隊と、反対側の山裾近くで無事に合流した後。

それまで使われていなかった、ずっと何かの予備用なのかと思っていた、特別大きくて立派な馬車に、お客が増えているらしいことに、リツコはすぐに気づいた。

いくら行列の中で一番偉い皇女サマとは言っても侍女や従者の数が少し多すぎじゃないかと思っていたうちの半分くらいが、その箱馬車の世話や護衛にまわされている。

ところが、そんな大事なお客様なら当然、夜宴の時にでも皆に紹介されて歓迎されると思っていたのに... 何日たっても、その馬車の中から出て来ない。

鋭と皇女サマだけは毎日様子を見に寄っているが、その他の人は、姫君や重臣たちまで含めて、むしろその存在自体も公然の内緒というか「いないふり」「気がつかないふり」をして、避けているような... おかしな雰囲気だったので。

リツコはまず、こちらの世界の自分の行動の管理責任者ということになっているらしい鋭に、お伺いを立ててみた。

「ねえ鋭？ あの馬車の中の人には、話しかけてはダメなの？」

「うーん。悪いってことはないよ？ 彼女も退屈しているだろうし... ただ。」

「なに？」

「ボルドムのね。敵国のお姫様なんで... 見た目がちょっと。こっちの人たちには怖いらしくって。」

「...見た目ー？ だってこっちの人って普通に、毛皮だったり四つ足だったり羽が生えてたり...」

「まあ、ぼくら地球人からすると、区別が判らないんだけどねー？」

苦笑してうんうんとうなずきながら、

「きみのいう《モフモフ系》の人たちは見た目が爬虫類の人って本能的に苦手みたいで。ソウもあの金色の眼のせいで、なんとなく避けられてるでしょ？ それに、家族や友だちをボルドムに殺されてる人も多いしさ？ やっぱり仲良きは、しにくいみたいで。」

「...あ、そうか...」

リツコは自分が鈍かったことを反省する。

それでも鋭が、

「挨拶したければ行ってもかまわないけど、もし怖くても、悲鳴をあげたりはしないであげてくれる？」と言うので「うんわかった！」と返事して、早速、昼ごはんが終わった頃を見計らって、ゆっくり動き始めた目あての馬車に、正面から訪問してみた。

「こんにちわー！」

先日まで皇女サマ付きだった顔見知りの侍女の人たちに取次を頼むと、

【...だれじゃ...?】

それまで聞いたことのないシュウとかグウとかガ行の音が多い言葉で、馬車の中から、女のひとらしい少しかすれた低い声がきこえた。

「リツコっていいますー！あのね、退屈じゃないかと思って、遊びに来たんですけどー！」

【...おや？あの地球人の子どもか？我の話し相手に?】

声の感じはむしろ嬉しそうだった。

【...マーライシャにでも言いつけられたか？我が怖くないのであれば、上がっておいで。】

リツコはむろん大喜びで超豪華な大型の箱馬車に上がり込んだ。

どのくらい豪勢かというと、皇女サマ用のやつより高そうに見える外見で、見れば内装も見事で、細かい細工の繊細な飾りで、綺麗に整えてある。

敵のお姫さまはリツコが馬車の扉を開けたとたん、それまでは脱いでいたらしい大きな黒っぽい布を頭の上からするりとかぶって全身を隠してしまった。

「...えーと...」

リツコは面食らって固まった。何かの宗教の衣装のような気もする。

「...お顔を見ちゃったら、なにかまずいのかしら...?」

ちょっとだけ遠慮しながら聞いてみる。

「...あたし、《ボルドム》の人って、まだ見たことがなくて～...」

【...大地世界人と同じで、《焰洞界》の者の姿も、千差万別なれど。】

するりと布がはずされた。

【怖くなければ見るが良い。】

真珠光沢の七色に光る華麗な鱗に覆われた貌の、縦長に切れた大きな金色の瞳の、なんというか...巨大なトカゲな感じのする外見の、だいたいは人型?で、美しい黒いたてがみ付きのお姫様だ。白虹色の肌に金青色のきらきらした爪が長くて鋭くて、何て言うか...ネイルアート?のような複雑な紋様が描いてある。

怖いかな?と聞かれればその眼に睨まれたり爪で脅されたりすればかなり恐いかもだったが、こちらの世界には横長に切れた山羊目の人だっているし、地球にだってもっととんでもない真っ赤に尖った恐い爪をしている人は多い。

「...キラキラして、きれいなウロコね!」

すなおにリツコは褒めた。お姫様は嬉しそうだった。

それから侍女の人たちがお茶菓子を持ってきてくれたので、ゆったりと進む居心地良い大きな馬車の中で、色々とおしゃべりをした。

「じゃあ敵国のお姫様でも、捕虜とか人質とかじゃないのね?」

【我はみずから来た。あちらに捕らわれていたマーライシャを助け出して、こちらへ送り

還すついでにな。我は我が《焔洞界》ボルドガスドムの後継公主であるが、あの界の今の有り様は好かぬのじゃ】

「どういうこと？」

【我は弱い者虐めを好かぬ。楽しみのためと小者をいたぶり殺すがごとき愚行をなす帝は厭じゃ】

「ふん…。あたしも、弱い者いじめは嫌い。」

【気が合いそうじゃの】

「そうだね！」

敵国ボルドムからの亡命姫さまは、リツコが気に入ったようだった。

【我が名は《焔洞界》ボルドアレイ・ガースダルム帝国の後継長公主、ディ・デュイ・リジューディー・ディーディーリヤという】

改めて正式に名乗ってくれたのはよいが、

「…でい… でじゅ… りじゅー・でいー…」

リツコは絶句した。何度か練習してみたけれども、どうしても、滑らかに発音するのは無理だった。

【…我のことは愛称の《ダーモレア》（黒姫）で呼ぶが良い。】

そう苦笑して言ってくれて、別れ際には美味しいお菓子をおみやげに持たせてくれた。

それから旅の間よく一緒にお昼ごはんを食べておしゃべりをする仲になった。

8-2. リツコ、事情を聴く。

「じゃあ今までは、その合戦の跡地のそばに居たの？」

【大地世界の余の者には、投降して来た捕虜らの一団であると説明されておるらしいの。いささか不名誉なことではあるが。侵略軍である我らボルドムの者がよく思われぬという事情は解る。したが我々として大地世界の国々が諍いあうと同じく。一枚岩ではない。】

「どういうこと？」

【我が小叔父であるボルドムの現帝は歴代の中でもとりわけ暗愚にして暴虐。嫌われておつての。気に入らぬと言うては小者をいたぶり殺してゆくがゆえに界の補修が立ち行かなくなり、このままでは遠からず、ボルドムは界ごと滅びる。】

「ええ？」

【それを苦言した者も殺されて、界が壊れるなら隣の《大地世界》を攻め取って移住すればよいと。それ故こたびの攻略戦とあいなった訳だが。…愚行を苦々しく思う者も多くな。世継ぎの姫である我のもとに、密かに参集しておつた。】

「そうなんだ…」

【したが現帝に感づかれての。神の血の濃き姪である我に、己が卵を産まさしめて、その仔を新たな世継ぎとなし、我のことは処分してしまおうと。】

「ええっ」

【我は次の排卵の刻が来るまでの命、虜囚の身であった。その獄へたまたまマーライシャも放り込まれて来ての。…つれづれに話をしておつたら、何やら境遇が似ておると、意

気投合し。…現帝への造反をなすならば力を貸すと、同じ虜囚の身でありながら放言しおるのが面白うてな。つい、我が配下がわれを救出しに来た折に、同道させてついでにこちらへ戻ってしまった。】

「それで？」

【最終決戦の際、ボルドム帝軍の後背より奇襲をかけ猛攻によりダレムアスを勝利に導いたは、我が配下の者らよ。惜しくも現帝めは討ち漏らしたが、戦傷癒えず病の床にあると聞く。我はいましばらく身を隠し、数百年のうちにはボルドムの新帝となる。

したがあの界にはもはや人数は棲めぬ。戦ではなく講和を請うた上で、こちらの世界に我が民らの移住の許可を求めるつもりじゃ。】

そのために皇女に頼んで、諸侯会議に参加しに連れて行ってもらうのだと言う。

「…ちゃんと、自分の役割が、解ってるんだ…」

状況に振り回されてばかりで、いまだに何のために自分がここに居るのか判っていないリツコがそう愚痴をこぼすと、黒姫は面白そうな顔になった。

【…知らぬのか？ あのマーライシャはたいした大物ぞ？ 伝説のミトラ姫とやらが大地世界を再統一したが如く、今ある大地界と焔洞界と泥球界とを、いにしえのように親しく往来しあう一つの世界となすが夢だそうよ。】

「…え〜っ??」

【そがために地球世界とは密に連絡をとりあいたいと、その使者役を務める者が欲しいというのが、そなたの召喚されし理由であろうよ。】

8-3. リツコ、まきこまれる。

そんな風に旅は終りに近づき、もうあと数日で、会議開催地の北西太湖のほとりに着くはずだった。

ところが、なにか様子がおかしいと、沿道の街の様子や森の隙間から垣間見える広大な湖面と岸辺の街並みを眺めて、誰もがなんだか落ち着かなくなった。

港町に着いた。困惑した顔の太守が出迎えた。

会議に参集しているはずの諸侯らの姿はどこにもなく、街はなにやら荒れている。

三日前に突然の酷い嵐があり都邑の半分は一時水没したという。そしてその直後になぜか手回しよく災厄見舞いの品々と共に、宿営地の仕度が間に合わなくば議場を《西皇都》に変更せよと、諸侯らを案内する使者と船と大軍とが、遣わされて来たという。

『それゆえ先に来ておられた皆様はすでに昨日までのうちに西へ向けて移動を開始されました。』

『…聞いてないわ!』

皇女サマが激昂した。

『それ故、いまこのわたしめが、こうしてお迎えに参った次第で。』

湖畔の船まで案内された一行に慇懃無礼な挨拶のまねごとだけして出迎えながら、新たに現われた男が云った。

『マデイラ皇子！？』

皇女サマが...ものすごく嫌そうに...叫んだ。

「...げ...。」

鋭と雄輝がハモリ、マシカも顔をしかめた。

『わが長兄クアロス皇子が誓婚者であられるマルア・ライシャ戦勝皇女殿下には、御機嫌うるわしく。』

『うるわしくないわよ！』

『あいかわらず、そちらの色魔將軍殿からは、ふられておられるそうで。』

がん！ と無言のまま拳で情け容赦なくマデイラ皇子とやらを殴り飛ばした皇女サマを、リツコは呆然と見ていた。

(...平手じゃなくて、グゥなんだ～！)

『.....ここは任せた！ リツコ通訳に來い！』

『雄輝！？』

『嫌な予感がする！ 公主の様子を見てくる！』

『あたしも行くわッ！』

リツコがまだ啞然としているうちに、ぼん！ と雄輝の鞍の前に乗せられて、あっという間に大型馬は本疾走にうつった。すぐ後ろから大鹿マブイラにまたがったマシカが追って来る。

「どうということ！？」

「黙ってな。舌噛むぜ！」

全力疾走で駆けに駆け、長くただらと延びた車列の後方、まだ森の中の難所の手前にいた、ボルドム公主の箱馬車隊のそばまで着いた。

『...ちい！ やっぱりッ！』

雄輝が舌打ちして唸った。

『マシカ！ リツコ頼む！』

いきなり人形のようにポン！ と投げ上げられてリツコは焦ったが、マシカが難なく受け止めて、大鹿の後ろに乗せかえてくれた。

『...きさまらぁ...ッ！』

今まさに公主の馬車を襲おうと森の中からわらわらと走り出してきた武装した歩兵たちに向かって、雄輝が騎乗のまま突っ込んでいく。すぐ後から側近の部下たちと、逆走していく雄輝の姿を見て異変を感じて追ってきた商隊護衛兵の一団が続く。

「マシカ、どうということなの？！」

『公主を暗殺しようとしてるんだわ！』

「ええ！？」

鋭く剣がぶつかり合う音が響く。

『マ・ゴリゴ！ 何のつもりだ！』

激しく斬りあいながら雄輝が怒鳴る。

『色魔將！ キサマも一緒とは都合が良い！ まとめて始末してくれるわ、汚物め！』

敵騎士は憎しみのこもった声で負けじと怒鳴り返した。

『わが主の許婚者を面妖な術で誑かした卑劣漢が！ やはりキサマら地球人はボルドムと

結託して大地世界を蹂躪するつもりであろう！』

激しく打ち込んでくる相手の剣を、まだまだ余裕でかわしながら応戦している雄輝は、むしろ一方的に決めつけられたせりふのほうに、おもいきりげんなりとして返した。

『...ち～が～う～って。おれは文字通り背中の羽根も自由に伸ばせないような地球に戻る気はもうないの！ こっちに帰化して骨を埋めるつもりなんだよ！

...でもマーシャを嫁にもらう気はないけどな！』

『雄輝いまそれ言ってもこいつらには通じない！』

いつの間にか参戦していた鋭がやはり真剣で切り結びながら茶々を入れている。

『...あいつは！ おれにとっちゃ！ 妹なんだよ！...あくまでっ！

それに俺は！ 胸がでかくて！ 気立てのいい女が！ 好きなの！ 美人より！』

懲りずに勝手なことを言いながらぼったぼったと左右の歩兵を薙ぎ払う。

数で勝る敵は懲りずに次々と斬りかかり、金属音が鳴り響き、日暮れ近い薄暗い森の中の細い街道で、敵味方ともに入り乱れての激戦が始まった。

背中にリツコを乗せたマシカと、後から駆けつけた先行隊の兵たちが、公主の箱馬車を囲んで護る。

『...マッレ・エッタ！ ポグン！ エ！ カ！』...(撥ね飛ばせ！)

どうやら向こうの皇族関係者らしい将の呪文が響く。

激しい衝撃音がして切り結んでいる何人かが馬ごと吹っ飛んだ。

...見たかんじ...味方のほうが...苦戦を強いられている...？

リツコは生まれて初めて間近で見る本物の戦闘に震えながら、マシカの背中にかばわれていることに焦った。

《四軍神》の一人に数えられているマシカは油断なく剣を構えていて、たぶん積極的に戦列に加われば、もっと力になるはず...

リツコが、背中に乗って邪魔していなければ...

足手まといになっていることにリツコは落ち込んだ。

「あたしを公主の馬車の中に入れて！ そうしたらマシカも戦えるでしょ！」

【...良い案だが、少し無駄じゃな。】

そう言って、公主自身が箱馬車の扉を中から開いた。

【仔細が判らぬが、我も闘おう。】

箱馬車の外側に、装飾品のように高々と取り付けられていた見事な細工の槍剣の鞘からざらりと抜き身をひき払う。

【誰ぞ！ 我が敵手を務めよ！ 我が狙いであるなれば、直截に我を攻めるが良いぞ！】

リツコは目を丸くする。

箱馬車や天幕の中ではいつもずっと膝を抱えるようにうずくまっていたけれども...

外に出て獣脚と背すじをすべて伸ばすと、公主はととてもとても、長身なのだった...

馬に乗った大地世界人と、対等に、渡りあえるほどに...

『まあびっくり。』

リツコと同じく、知らなかったらしいマシカが呟いた。

8-4. リツコ、投げる。

乱戦。

敵の動きを観察すると明らかに「殺すつもり」で襲われているのはボルドム公主と地球人の二人だけで、同じ大地世界人には怪我を負わせる程度で済むよう加減している。

しかしそれは雄輝たちも同じで、殺す気で攻撃されてもなお相手を殺しかえす気はないらしい。手加減しながら、敵のほうが人数が多い分、こちらが不利だ。

しかも...

「...雄輝！ 危ない！」

敵の一人が手近の樹に登り、短矢に何かを塗りつけた上で、雄輝に向け弓を構えた。

雄輝は敵隊長マゴリゴと数人の加勢を相手に激しく斬りあっていて、リツコの声には気がつかない。

動きが激しいので弓兵は狙いをつけるのに苦労をしているらしい。

マシカは今は大鹿の上から弓で敵を射ている、その高さからでは間にある枝が邪魔で、狙撃兵を狙えない。

リツコは必死であたりを見渡し、一旦地面に飛び降りて、目当ての石を握ると、すぐにその向こうの樹上に身軽に駆けあがった。

大枝にまたがった不安定なポーズだったけれども、なんとか一瞬だけ上体を固定して、短いフォームで...

投げた！

『ぐわッ！』

頬に石の直撃を受けた射手が叫びながら、毒矢を落とした。

『...キサマぁッ！』

こうなれば子どもでも戦闘員と見なして、敵の一人が下から短剣を投げつけてきた。

『...リツコ！』

血を流しながら真っ逆さまに墜ちるリツコを見て、マシカと鋭が悲鳴を上げる。

そこまでの騒ぎが、実際にはほんの数分のことだった。

『...慮外者どもッ！ 剣を引けッ！』

皇女サマの厳しい怒声が響いた。

『マ・ゴリゴ！ あるじが許婚者の賓客と白皇総將軍を相手と知っての狼藉ッ？ ならばこの私を先に斃してからにきなさいッ！』

『...リツコ！ ...リツコ！ ...大変！』

...マシカの悲鳴を聴きながら、リツコは、気を失った...

第9章 リツコ、役に立つ。

第9章 リツコ、役に立つ。

9-1. リツコ、夢をみる。

リツコは夢を見ていた。また、あの夢だ。

お母さんとお父さんが、捕まりかけている。

お姉ちゃんが泣いている。腕をガッチリ掴まれて逃げられない。

「逃げて！」

リツコが叫ぶと、お母さんとお父さんが首をふった。

「エツコを置いては行けない…。おまえは逃げなさい！」

「逃げて！」

…あの時、リツコは何も出来なかった。何も…

うなされているリツコの額の汗を拭いてくれているのは、マシカだ。

ぼんやりと目を覚ますたびに、それは鋭だったり、ミソノワ姫たちだったりした。

リツコが投げた石は当たった。みごとに命中した。

雄輝を狙っていた奴はギャッと悲鳴をあげて毒矢を取り落とした。

それは、覚えている…

「逃げて！」

夢の中で、リツコは投球動作に入った。

もちろん、あの時は敵の数が多すぎた。ボールもグローブも、持ってはいなかった。

でも、もし…

狙いすまして、呼吸を整えて、放つ。放つ。放つ！

ギャッと悲鳴を上げて、緑の制服のやつらが次々と倒れる。次々と…そう、全員だ。

「逃げて！」と、また叫ぶ。

「ありがとう、リツコ！」

お母さんもお父さんもお姉ちゃんも、一斉に走って逃げていく。

一目散に、逃げ出す…

逃げて、逃げて、無事で…

「おぼさんのところへ行くんだ！」お父さんが叫ぶ。

「お願いがあるのよ！」目をきらきらさせて、大叔母様がいう。

「すごいわリツコ！」マシカが褒めてくれる。

「さすが！ 適任者！」 鋭が快哉を叫ぶ。

「...リツコ！...リツコ！」

うなされている。

夢をみている。

そうだった... 雄輝を狙っていた敵を倒した瞬間。

「キサマぁッ！」

別の奴から、短剣を投げられて... 左胸に、真っ直ぐ刺さりそうになったのを、危うく避けたら、首の脇が切れて、血が出て、驚いて倒れて、滑って、落ちて...

墜ちる途中で木の枝に後頭部を打った。それから真っ逆さまに、地面に落ちた...

「リツコ！」

首筋の深い切り傷による出血多量と全身の打撲で、リツコは何日も、熱を出して眠っていたらしい。

はっと目が覚めると、枕元で心配そうにのぞき込んでいたのは... ずっと交代でついてくれたマシカでも鋭でも姫様たちでも、薬師の人たちでもなくて...

驚いたことに皇女サマ、その人だった。

「.....っ あぁ良かった！ 起きたわね！」

「...あたし... 死にかけた...??」

かすれた声で、ぼんやりきいてみる。

「...危ないところだったわね、かなり。もう大丈夫よ。鋭たち交代で、ずっと付き添ってたんで、もういい加減に寝かせたわよ！」

半分涙目でにやりと笑いながら、皇女サマが答える。

「悪かったわね？ 目が覚めたら私で！」

ううん。とリツコもにやりと笑った。案外、この性格、可愛いかも...？

「...雄輝は？」

「無事だったわ。あなたのおかげよ。猛毒でね。矢に塗ってあったの。いくら雄輝でも、あれが当たってたら、私でもマシカでも、治療をする暇もなく死んでるとこだったわ。」

「そうなんだ。」

リツコは安堵した。

「あたし、役に立った？」

「ええ！ とても！」

ずっと苦手に思っていた皇女サマが、ぎゅぎゅぎゅっとリツコの手を握ってくれた。

「彼を救ってくれてありがとう！」

「.....えへ〜。」

照れて笑うと、リツコは、再び眠った...

9-2. リツコ、龍にのる。

それからまた何日か眠ったり起きたりして、熱が下がって傷の腫れもひきはじめたら、とたんに食欲がもりもり湧いてきたので、とにかくががつがつ食べた。

「...よかった〜！」

マシカがどんどんお代わりをよそってくれながら、それにしてもすごい勢いねと、ほっとした声で涙を拭きながらけらけら笑った。

鋭も雄輝も何度も様子を見にきてくれた。

ようやく起き出して、少しずつ歩きまわれるようになったころ。

何だかんだでずいぶん行列に遅れてしまっていた。

「足ののろい連中は先に行かせたわよ！」

皇女サマがにやりと笑って言う。

「要するに白皇家の血をひく姫が誰か一人でも西皇家の婿をとればいいわけなんだから！

私が着く前に皆でまとめて西の三皇子を攻略しておいてくれると良いんだけど！」

「……あ、あの人たちって、そーゆう目的で～……??」

「そうよー、玉の輿狙いよ！」

皇女が意味もなく堂々と宣言するので、リツコは納得した。

なるほど。それで、家柄のいい美女ばかりあんなにたくさん、同行してたのか…。

「だって白皇家の血縁の適齢期の男の人って兄様以外はみんな白都で死んじやったのよ？

嫌がってる私と無理に結婚するより、西の皇子を射止めた姫が、皇位を継ぐことにしたらいいのよ！」

…皇女サマをめぐる謎の『後継者問題』って…

…つまり『ムコと皇位の押し付け合い』争いだったのか…。

リツコはなんだか疲れて、もう一回眠った。

姫君たちと荷駄隊と商人旅団と外役人たちも先に行かせて、最後まで待機していたのは皇女と雄輝の一番の側近の武人たち数十名ばかりで、その人たちもリツコが命をとりとめたと確認できるとすぐに徒歩での砂漠越えに出発した。

リツコの体力では、まだ歩いたり駱駝に乗ったりの砂漠の旅は無理なので…

行程をはしょって、残った一行はみんな空を飛ぶことにしたという。

そう聞いて、またあの鳥の人の籠で運んでもらうのかと思っていたら、なんと！

先日のあの金の籠が背中に載せてくれた！

鋭と一緒に乗ってくれて、リツコの後ろからしっかり背中をささえていてくれる。

《飛仙族》と呼ばれる《エルシャムリア》の末裔だそうなフェルラダル様にしっかりと手をつないでもらったマシカはとても嬉しそうに宙に浮いて飛んでいく。それを悔しそうな横目で見ながら兄皇子マリシアル様は妹皇女と手をつないで飛び立った。

銀の籠の背中には、雄輝と副官の人たちがまとめて乗せてもらった。

その後ろから、公主リジュイディーリヤが美しい漆黒の鱗翅を広げる。

「きゃーーーーー！ 最高ッ！」

はるか眼下の広大な砂漠の美しい砂紋と点在する岩山とオアシスの煌めきと、どこまでも平らに続いて視界の果てまで霞んで見える（地平線が…丸くない！）《大地世界》全体を眺め渡して叫んでいるうちに、わずか半日ほどで、半月前に出た本隊に追いついた…。

「…今度は、寝なかったね？」と、鋭にからかわれながら…。

9-3. リツコ、会議にでる。

砂漠のほとりの大きな隊商都市の郊外で先行して待機していたみんなと合流し、衣装と体調を整えて、そこからは順調に数日の駱駝行で、《西皇家》の都についた。

出発してきた《仮の白都》の雑多な民族が賑やかに行き交っていた開放的な雰囲気とは何もかも違って、長い時代を経た西の皇都は重厚で、荘厳で、格式ばっていて、威圧感のある石造りの建物が多かった。

皇宮に上がる前に庶民の市場に寄って買い物と観光がしたい。と、迎えに来た使者たちに仰せつけられた皇女サマの『わがまま』は、『とんでもございません!』の一言でがんとして却下に付された。

まあとにかく会議開催の期日にぎりぎりですり込んだ形なので、さすがの破天荒な皇女サマも物見遊山は帰りの楽しみにとっておくことにして、白皇家の代表者たちは西皇家の本宮に、まずは到着の挨拶をしに行った。その儀式にはマシカや鋭やリツコたちのような『平民と余所者』は参加が許されなかった。

その代わり白皇家の一行との旅のあいだは居心地が悪そうだったボルドム公は改めて《公主殿下》と恭しく呼ばれて、白の皇女と同格に厚遇された。

何故かと聞いたら「ボルドム世界の創造主たる男神グアヒィギルの血を濃く引く一族の聖なる世継ぎの姫だと判明したから。」だそうです。

そのほか、各方面から《大地世界》諸勢力の代表者たちが続々と集まって...

いよいよ、ほぼ百年ぶりとなる《諸侯会議》が開催された。

リツコは初日と最終日に『地球から来た地球人の代表』(代理)ということで一言ずつ挨拶をするのが役割だった。また一生懸命マシカと相談して、今度は初日はユカタを着て出た。可愛いと好評だった。

大叔母様から出発前に渡されていた挨拶状を、心を込めて、声に出して呼んだ。

それは会議の開催を祝し地球からも友好を祈って挨拶を送りますという簡潔な内容で、朝日ヶ森というのは国とか民族ではなく、こちらの世界のヨーリア学派と同じように世の中のため色々な働きをする有力な学者の集団だ。ということにしておいた。

それから会議は地域ごとや問題別とか産業別とか、つまり「流域別の渡河税法についての検討会」とか「統一交易貨幣再発行開始における各国通貨との両替手数料率の統一可否にかかわる意見交換会」などなど。難しそうなものから馬鹿々々しく聴こえる内容のものまで沢山の分科会に分かれて、あちこちで紛糾したり白熱したり和合したり盛り上がったたり場外乱闘したり、満場一致で拍手喝采のあと早々と大宴会になったり、色々していた。

皇女サマや鋭たちは手分けしてありとあらゆる会合に顔を出して挨拶したり意見を交換したりしなければならぬので、寝る暇もないほど忙しそうだった。

リツコやマシカやおつきの人々の大半は、終りの日までは暇になった。

市場に繰り出して買い物と食べ歩きと物見遊山に明け暮れた。

9-4. リツコ、自分で話す。

西の第一皇子と白皇女マーライシャの何十年も前の婚約の誓言がどうのこうのという件は、うやむやのうちに無かった話にされつつあるらしい。ミソノワ姫たちは会議の合間

にせっせと西の皇子たちを追いかけ回して誘惑していた。遠くから眺める限りでは西の皇族はイケメン揃いだったので、うまく恋人が見つかるといいなとリツコは思った。

黒姫公主リジュイディーリヤは堂々と交渉して、一緒に亡命して来た部下たちとともに《大地世界》の片すみで争わず暮らせるように、荒野のはずれの一角に、移住用の領土を譲ってもらえそうな感じになっていた。

会議はあちこちで継続していたが、積み残した分科会はそのまま延長戦へと日程と会場の調整が続いて、ひとまずは当初の予定通り、次の満月の夜までで、全体会議は終了の運びとなった。

うんと考えて、リツコは、最後の挨拶は自分の言葉で言わせてもらった。

(どちらにしても大叔母様から預かってきた手紙は一通しかなかったの。)

今度は出発の時に来たのと同じ私立の制服風の夏ワンピースのボタンもきちんととめて、ちゃんとした「正装」に見えるように気をつけて、靴もサンダルに変えて出席してみた。「あたしは、まだ子どもですが、これから地球に帰って、今回の旅で見聞きしたことを、大人の皆に伝えます。昔々の《四界時代》の始めが平和で豊かであったように、これからの《三界時代》が、またみんなの行き来の盛んな、お互いに戦争をしない、平和で豊かな時代になったらいいなと思います。そのために、あたしにできることを探して、がんばりたいと思います。」

…あまりにも短すぎたかしら、と一瞬不安になったけれども、大人たちは満場の拍手で応援してくれた。

終章 リツコ、地球に帰る。

終章 リツコ、地球に帰る。

1. リツコ、呼ばれる。

全体会議の無事終了を祝ってこれから徹夜で宴会だというその晩、リツコは慌ただしく呼ばれて西の皇宮内に設けられていた皇女サマの部屋へ案内された。

鋭もマシカも皇子様たちも公主女、今夜は忙しいはずなのに、なぜか、みんないた。

「...なあに？」

「リツコあなた案外有能だから。このままこちらに居てもいいのよ？」

いきなり不機嫌丸出しの声で皇女サマがぼそっとのたまう。

「へ？」

目を点にすると、鋭が言い出しにくそうに苦笑しながら補足した。

「地球の西側に出られる通路がもしあったら、朝日ヶ森に戻すよりもそちらに亡命させてほしいって、清瀬律子さんから頼まれてた話は、前にしたよね？」

「あ、うん。...聞いた。」

「西皇領のヨーリア学派とも連絡とってたんだけど。君が整理してくれたおかげで異界文字の解読をできる人がすぐに見つかってね。それによると。どうやら確実に通れる通路が、今夜だけ、開く。」

「今夜!？」

「...急だから... みんなびっくりしててさ。」

「うん。」

リツコもびっくりして、うなづく。

「それを逃すとしばらく地球の西側に出られる通路は確定できてない。へたすると数年先とかになるかもしれない。」

「そうなんだ...」

「それで、今夜、地球に帰るか、でなければ、数年先くらいまで、こっちに居てくれるかな?...って」

「..... そうなんだ.....？」

「きみこっちでけっこう楽しそうにやってたし。」

「もっとずっと居てくれたら、あたしは嬉しい。けど...」

マシカが真っ赤な目になって言い激む。

「言わないのは卑怯でしょ！」

また唐突に皇女サマが、ぶすくれた声で継ぎ足す。

「...実は、リツコのお父さんとお母さんと、連絡が、取れたよ。」

「ほんとッ!?!」

声が、うわずった。

「うん。...今夜、行くなら、...迎えに来てくれるって...、」

鋭がメガネをはずして拳で乱暴に涙をこするのを、リツコはびっくりして見ていた。

マシカも泣き出してしまった。

リツコも泣き出した。でも、言った。

「うん。...急だけど... あたし、帰るよ!」

もう一回、声に出して、自分に確認してみた。

「地球人だから... 地球に帰る。」

...うん。

「あたしね。ずっと...自分のこと...天才でも魔法使いでもないし...一番肝腎な時になんの役にも立てないやつで、残念だな!...って、ずっと思ってた。

...でもね、こっち来て、ほんとの天才の鋭とか、魔法が使える王女様のマーシャとか、見たけど...べつに天才じゃなくてもね。凡才でも、マホウも使えなくても...あたし、結構、...役に立つよね...?」

「ええ。かなりとても、役に立ってくれたわよ!」

皇女サマが悔しそうに涙をにじませながら言う。

「だから...こっちの世界は、これから、もう、平和になるから...」

マシカが声をあげて泣き出してしまった。

「あたしの世界は...戦争とか、独裁とか、これからが、いちばん大変なんだから...。

自分の世界に帰って、あたしにがんばれることを、探して、やってみる!」

「...そうだね。」

雄輝がちょっとそっぽを向き、鋭がうん。とうなずいた。

2. リツコ、帰り仕度する。

慌ただしく、来た時のリュックとバスケットに荷物を詰めて、来た時の服に着替える。

背負って抱えて歩けるもの以上は運べないという話だったので、こっちでマシカと買ったばかりの服や小物や甘いもののは大半は、残念だけど諦めるしかなかった。

「リツコ...! あたし本当に妹みたいだなーって、...思ってたのに...!」

マシカはもう泣いて泣いて大変で、手伝いは期待できない。

やっぱりぐすぐす鼻を鳴らしながらでも、鋭はさくさくと荷造りを手伝ってくれた。

とにかく書き貯めた記録ノートは全部と、足りなくなって買い足したこっち式の巻き布や葉綴じもぜんぶリュックにむりやり押し込む。

入りきらなくなった二十四色の色鉛筆とペンケースはまるごと鋭に、「薄くて小さい」と驚かれていたアニメキャラ柄の手鏡と、ぼろぼろになったけど日本語の辞書はまだ使えらると思うからマシカに、記念にもらってもらった。

「なによ! わたしには?!」

皇女サマが子どもみたいに拗ねたので、やっぱりちょっと笑ってしまいがちながら考えて、籐のバスケットに入れてた中身をぜんぶ出して適当な布で風呂敷包みにして持つてくことにして、「これ気に入ってたんだけど、あげる。」と言ったら「じゃあ大事にするわ。」と素直に受け取るので、やっぱりちょっとその性格には笑った。

挨拶を出来るかぎりの人たちには慌ただしく挨拶をして回って、会議の打ち上げ宴会であちこち賑やかな皇宮のすみから地元のヨーリア学派の人たちの案内でそっと抜け出す。皇女サマと公主様は宴会から長くは抜けられない立場なので、門の中で最後のお別れをした。二人とも眼が赤くなっていた。

篝火のともる夜の道を歩き、寺院のような場所から地下の伏流水の井戸に入る。

小さい祠があって、それを動かすと短い洞窟があった。

『入って。』

ヨーリア学派の人が言う。

『リツコ！...リツコ行かないでッ！』

マシカがうしろからしがみつく。

『マシカ...！ごめんね！ごめんねえッ！』

リツコも涙で前が見えなくなる。

『...あまり時間がない。すぐに通路が塞がってしまう。』

「リツコ、」

鋭がそっと肩を押す。

「...鋭。また...いつか...どこかで、会えるかな...？」

「...手紙を書くよ。小さいものなら、定期的にやりとりできる通路は確保してあるから」

「うん...」

動けない。やっぱり...行きたくない！

帰りたくない！

リツコは思った。

「あたし！...やっぱり...ッ！」

すると洞窟の向うから、真夜中なのに、太陽の光？らしいものが射しこんできた。

「...リツコ！...リツコ？居るの?!」

「リツコ!？」

リツコは叫んだ。

「...お母さんッ?...お父さんッ！」

...マシカが、抱き着いていた腕を、はげしく嗚咽しながら、放した...

「ごめん！マシカ！あたし、行くね！」

『...リツコのお母さん！リツコとっても良いコでした！ありがとう！

...大事にしてあげてね!』

マシカが洞窟の奥に向かって叫ぶ。

「...リツコ!?...そこに居るのよねッ?!」

「いま行くよッ！」

「リツコ！」

リツコはがんばって一歩踏み出し、それから目をつぶって駆けだした。

後ろを振り返る暇もなく、あっと思う間もなく、ステン！と、
何もないのに転んで...
慌てて目を開けると、明るい場所に、お母さんとお父さんが、立っていた...
「リツコ！...元気で...ッ！」
最後に、喉に絡んだような、鋭の半泣きの声が聴こえて...
それで終わりかと思ったら、
「...待ってッ！リツコごめん！《言葉の術》！解くの忘れたわ！」
息せききって追いかけてきたらしい皇女サマのそんな、またしばらく笑えそうなセリフ
がかすかに、...うんと遠くから、聴こえて...
それっきり。
その後、リツコが、《大地世界》を訪れる機会は、二度と、なかった...

3 リツコ、その後。

お母さんがぎゅっとしがみついてきた。
お父さんが泣いていて、
お姉ちゃんが泣きじゃくっていた。
そこは知らない場所で、でも地球の建物だった。
リツコも泣いてしまって、しばらく何も言えなかった。

それからリツコは独裁国家となって戦争を始めてしまった日本帝国へは戻れず、家族と
一緒に外国に亡命して暮らすことになったが。
なぜか？言葉が通じないはずのリツコが日本語で喋ると、言葉が通じないはずの相手の
人の頭の中に、その言葉の意味が字幕のように、ぽかりと浮かんでしまう...

それは地球世界では「ありえないこと」で、不思議な力はテレパシーと誤解され、その
後まもなく始まった《超能力者大迫害時代》のせいで地球にさえ居られなくなって宇宙
へ移住するハメになったりしたが...

それはまた、別のお話です。

f i n.

(第3稿)

(第3稿)

(第3稿)

(表紙)

リッコ冒険記

...夏休み・異世界旅行...

霧樹里守

(きりぎ・りす)

(あらすじ) (2018年9月16日)

『リッコ冒険記』...夏休み・異世界旅行...

霧樹里守(きりぎ・りす)

(あらすじ)

高原リッコは家族の事情で、私立学園の寮に住んでる。

その学長から「夏休みの手伝い」を頼まれた。

なんと、「異世界への親善大使」!

ええ?!... っと思ったけど大人たちや先輩たちはみんな忙しくて行けないらしい。

「行って、みんなと仲良くして、まわりをよく観察して、レポートを書いてきてくれば、それだけでいいのよ。

行ってくれたら他の夏休みの宿題は、ぜんぶ免除してあげる!」

大好きな学長がそう言ってくれたので、喜んで引き受けた。

「姉弟世界」と呼ばれる大地世界《ダレムアス》では、漫画かアニメの王子様?...かと思
うような超美形! の、優しいお兄さんに世話してもらっちゃうしい♡

食べ物は美味しいし、お祭りは楽しいし....、

...あいにくながら残念な性格の皇女サマには、意地悪されたけど....。

もうひとつの異世界《ボルドム》との戦争終結のための講和準備会議? とか、

同じ大地世界のなかでも、民族紛争とか、皇位継承争い? とか...

そういう深刻な問題には、ショックを受けたけど....。

たっぷりのレポートを抱えて、友達と涙でお別れして、

リッコは夏休みの終わりとともに、元気に帰国しました。

序章 朝日ヶ森学園

『リッコ冒険記』…夏休み・異世界旅行…

霧樹里守（きりぎ・りす）

序章 朝日ヶ森 学園

序章 1（おもて）

朝日ヶ森学園。

知ってるかな？

「天才児が集まる」ので秘かに有名。

超のつく贅沢な校舎と独特の自由奔放なカリキュラムの秀逸さ、そして学費の高さでも知られていて、我が子を名門私立に進学させたい親たちにとっては、憧れの学園だ。

基本は全寮制だけど、都心から遠距離通勤・通学してくる生徒や先生もいる。

緑の豊かな地方の新幹線の停車駅から、自動車なら迂回ルートで二十分くらい。

歩くなら、県立公園のなかの遊歩道をまっすぐ抜けてくるほうが速い。

自転車？…まァ、モトクロスを乗りこなせる人なら、抜けられる道だと思うよ…？

学園の敷地は広くて、一見すると壁とか塀とか柵とかの仕切るようなものは何もない。

でもセキュリティは万全で、目立たないところに監視カメラ網がばっちり。

不審者は入り込めないけど、内部の見学とかは許可制の予約ツアーに参加すれば入れる。

校舎や講堂や寮の建物は、一見シンプルだけどしっかりお金のかかった造りで、見た目は繊細で温和な感じだけど、どんな災害にもまけない頑丈な耐震骨格なんだって。

もちろん、屋外と屋内の両方に冷水と温水の競技用プールがあるし、体育館とか柔道場とか剣道場とか弓道場とか、もちろんスケートリンクもテニスコートも、全天候対応型のやつが、それも学年別とかで、複数個所にある。

さすがにサッカーコートとラグビー場とスキー場は屋外だけ。らしいけど。

図書館ときたら外部の大人が泊りがけで調べものしにくるほど、質量ともに充実した蔵書数を誇る。

広大な敷地はゆるやかな起伏があって、種々沢山の緑が豊か。

天気の良い日は生徒たちがあちこちの芝生や木の下で、ゆったり寝ころがったりグループ課題を片づけていたりする。

もちろん複数個所にある学内食堂も合計すれば二十四時間営業で、メニューはもちろん好きに選べる上に、無添加とか有機栽培とかのこだわり素材を使って健康に配慮した栄養管理がされていて、しかも一流シェフによる監修で、国際級のホテルのレストランなみに充実したラインナップで美味しいらしい。

時間割は自学自習に重きを置いていて選択科目が多くて自由。

生徒のうちで都心から新幹線で週1のスクーリング等にくる通信制の生徒たちには芸能関係の子役とかアイドルの卵とかが多い。学内ではおもに「タレ組」と俗称されている。

それから特徴的なのは全寮制の一番奥の建物にいる「天才組」と呼ばれる、生まれつき知能指数が平均よりもはるかに高い、ちょっとかなり変人で専門バカな連中。

そして生徒のなかで数が多いのは、やはり親が金持ちとか有名人とかのセレブで、コネと金を可能なかぎり使いまくってお受験資格をとって我が子をここに「押し込んだ！」という家の子たち。なんだけど...

それ、本当はちょっとだけ、気の毒な話なんだ。

なんでかって...？

ここはあくまでも、関係者からは「おもて」と呼ばれている場所（学苑）で...

本当の朝日ヶ森「学園」は、「うら」とか「真」とか呼ばれていて、別の場所にあるから。なんだ...

序章 2（うら）

さて。

「うら」とか「真」とか呼ばれている、「ほんとうの」朝日ヶ森について...

説明するのは、難しい。

場所は秘密で、首都圏からは「裏日本」なんて蔑称されている地域の、辺鄙な山の奥にある。

こちらも敷地は広大だけど、目立たないように全域が頑丈なレンガの壁できっちり囲われていて、特殊な警護部隊が昼夜をわかつたず厳重な監視をしている。

さらに点在して見えるまばらな建物群は主に地下通路で緊密につながっていて、むしろ地上部分よりも地下部分のほうが質量ともに広大な本体だ、とも噂されているが、実是在学生でも現職の職員でも、全貌をきちんと把握している存在は、ほとんど居ないらしい。

ほとんど「秘密基地」という感じの場所だ。

こちらに在学する生徒の種類も、おもに三つに分かれる。

ひとつは国内外の要人、つまり政治・経済的なVIPの子どもたちで、なんらかの事情で家族とは一緒にいられない者...生まれつき病弱とか、テロや誘拐の対象にされる心配があるとか、相続争いによる暗殺の危険を避けるためとか、はたまた、隠し子で正妻には内緒でないとまずい存在とか...そんな感じの。

だからちょっとひねた性格のやつらが多い。

ふたつめのグループは、もっと特殊で...

「ふつうの人間じゃない」能力や外見を持って生まれた、「特別な家柄」の、跡継ぎとか先祖返りとか...

角や牙があったり、鱗や翼があったり、魔術や呪術が使えたり、過去や未来や、人の心が読めたり、操れちゃったり。

本人たちはそれでも「神でも悪魔でもないから、いちおう人間なんだけどー」と主張する人が多いが、今の世の中ではうっかり一般社会を出歩くことができない。

それで、「一族だけしかいない隠れ里に閉じこもってばかりでは世間にうとくなるし、幼なじみと親戚以外は友だちも恋人も探せない人生なんて!」...という理由で「社会体験」と称して「朝日ヶ森学苑に遊学」しに来て、広い構内で文字通り「翼（はね）を伸ばして」学園生活を楽しんでいたり...する。

生徒の内の三つめのグループについては...長くなるので、また後で説明しよう。

まあそんなふうに、観た感じからして不思議な...秘密の、「地球内・治外法権」とも呼ばれる...

「朝日ヶ森・学園」。

このお話は、そんな場所から始まる。

第1章 リツコ、異世界へ行く。 (2018年9月16日)

第1章 リツコ、異世界へ行く。

1-1. リツコ、召喚される。

朝日ヶ森学園の生徒たちのうち三つめのグループ通称「ただびと組」に属する普通人のリツコは平凡な子どもで、セレブの子でも天才児でもなく、美少女戦士でも子役アイドルでもないかわりに、妖怪変化の類でもなかった。(こう書いたら「失礼ね!」と、妖怪変化な学友たちから怒られた。)

しいて言うなら特技は木登り。

親から教わって育ったのでキャンプとか大好きで、野外炊飯とか年齢のわりに得意。虫とか蛇とか平気で、まァ女子からは引かれるけど、いざって時のサバイバルには向いてる。

見た目は十人並。顔はのっぺりしてハナはちんまりして、日焼けして真っ黒で、鼻のまわりとかソバカスだらけ。へろへろのくるくるの天パの髪がコンプレックスで、黒目がキョロっとでかくて、歯並びだけは自慢で真っ白で、まァ時々「笑うと可愛い」くらいは褒めてもらえる。

ご飯はよく食べるけど、それ以上に暴れてる。から、まだそんなに太ってはいない... たぶん。

前いた学校では野球部のピッチャーでいいセンいったた。

投げたら当たる。これはけっこう、長所?

まァそんな程度のリツコが「うら」朝日ヶ森にいるのには...

事情があった。

そんな事情のひとつ、「大叔母様」からの呼び出しがあったので、とある七月の昼下がりに学長室までとことこ歩いて行った。

全寮制の学園はすでに夏休みに入っていて、家のある生徒たちの大半は帰省か家族旅行に行ってしまった。

今を盛りと鳴きすだくセミ時雨のほかはしんと静かな構内の、広大な芝生の起伏と緑陰の濃い木立ちの数々と、英国庭園風のベンチをしつらえた花壇や植え込み迷路やらの中

を、小汗をかきながら十数分ほど、えんえん歩いて歩いて、ようやく重厚なレンガ造りの事務室棟に辿りつくと、勝手知ったる建物内には無言のまま入って、こんこんと学長室のドアを叩いた。

「はい。どうぞ！」

若々しい声の大叔母様の返事を聞いてからドアを開け、一応「失礼します」と頭を下げる。

大叔母様というのは都合上の呼称で、本当は、祖母のイトコだ。

「なんですかー？」

「お願いがあるのよ！」

元気な声でいきなり言われて、リツコは面食らった。

「欠員が出ちゃってね！ 代わりに行ける人が他にいないの。バイトと思って引き受けてくれないかな？ お礼として、夏休みの宿題ぜんぶ免除するから！」

…この「大叔母様」の名前は清瀬律子という。リツコと同じ「りつこ」だ。

やはり美女でも妖怪でも天才でもない「ただびと組」のはずだが、ここの卒業生で、なぜか学園長まで務めてる。

リツコの母はこの気さくな美人叔母（ほんとうは母の母の従妹だ）が大好きで、たまたま彼女が事故で行方不明になって死んだかと思われていた頃にリツコを身籠ったので、思わず名前をもらって付けてしまった。という話…（そしてその後で本人がけろっと生還したので、親族一同は呼び名に困った。）

…まあその話はいいけど。

「…朝日ヶ森『学園』の生徒の、欠員の代理って… それ、『ただびと』のあたしでも務まる用事？」

そっちのほうが当面の大問題だ。

「だいじょうぶよ！ なんて言うか…そう！ 親善大使！ みたいな役目なの。行って、しばらく滞在して、まわりの皆さんと仲良くして… 最後の会議で、コレを私の代理で音読してくれればいいの！」

渡された手書きの便せんにざっと目を通して、それから声に出して読んでみた。

「…”みなさん、おまねきありがとうございます。今日のこの会議の”…」

ちょっと長いけど… べつに、読めないほど難しい漢字とかは、無いよね…？

「…行っても、いいけど… どこ…??」

「異世界よ！」

大叔母さんの無邪気な一言に、リツコは「はぁ？」と口を開け、目を点にした…。

1 - 2. リツコ、旅支度をする。

「…あ、あらっ？ ウケなかったかしらっ？ イマドキの『ただびと』…いえ、ふっ、『普

通世界』で育った子どもには、こういう言い方のほうがウケ...いえ、判りやすいかな〜と、...思ったんだけど...っ!？」

いつも穏やかでニコニコしている大叔母様が、真っ赤になってわたわた取り繕うという珍しい光景を、リツコは口をあげたままあんぐり眺めた。

「...べつに危ないこととかは無いと思うのよ？ 戦争は終わったっていうし、和平会議なんだし、おばさまの初恋の人とか、向うに行ってるしっ」

「はぁ？」

「だからねっ!...だから、私と同じ名前の血のつながったあなたが、向うであの人に会ってきてくれたら... 本当に、わたし、嬉しいのよ...っ!」

...とりあえず、何も解らないけど、断れないらしい。ということだけはリツコにも判った。

「.....わかった。とにかく、行ってくるから.....」

「ほんとっ？」

としがいもなく頼なんか染めちゃった大叔母様（たしか七十歳は過ぎているはずだ...）が、慌てて咳払いなんかしながら色々と説明してくれた。

「...持って行ってほしいものはもう購買に頼んで取り寄せてもらってあるから、部屋に戻る前に受け取って行ってね。それから、旅仕度に必要なものは何でも『おばさまの支払いで。』って言って、好きなだけ買ってきていいから。」

そう言いながら渡された「絶対に！ 持っていくもの」リスト。

・計算尺 1つ（購買にもう頼んであります。）

・ノギス 1つ //

・大学ノートかリングノート（リツコの好きなほうで）

10冊くらい（持てて書けるだけなるべくたくさん）

・鉛筆（ボールペンやシャーペンじゃなくて）1ダース（1箱）か、もっと。なるべくたくさん。

・色鉛筆（カラーペンじゃなくて）1セットかもっと。

・消しゴム（多めに）

・鉛筆削り（忘れないで！）

「...この計算なんとかと、ノギスってなに？」

「それは向こうからのお土産のリクエストなの。着いたら渡してあげてね。」

「...わかった。...ねえねえ。色鉛筆って、二十四色のやつ買ってもいい？」

思わず目をきらっと光らせながら聞くと、

「四十八色のもいいわよ！」

大叔母様が笑って言い切ってくれたので、リツコは大いに気をよくした。

（自分のおこづかいだけじゃ買えないやつだー！）

それからこまごまと書いてくれた行先への道順の説明をよく読んで、解らないところは質問して、細かい打ち合わせもして。

その後でひとりで購買に寄って、言われたものと、リュックとか下着とか、要りそうなものを選んで買って。

それから夜遅くまでうんと考えて、必要最低限の着替えと小物だけをしっかり厳選してリュックに詰めて、翌朝、列車内で食べるお弁当と飲み物を、予約しておいた食堂で受け取って、お気に入りの藤のバスケットに詰めて...

用意した荷物を大叔母様にチェックしてもらってOKをもらって挨拶してから、駅まで向かう朝一番の路線バスに、リツコはひとりで飛び乗った。

1 - 3. リツコ、一人旅する。

最寄駅から普通切符を買って鈍行に乗って、乗り換え駅から特急に乗り換えて、検札に来た車掌さんに目的地までの特急券を頼んだら、

「小学生が一人で？」と、やっぱり不審がられたから、教えられた通りに、

「ママのお墓参りに行くんだけど、パパは夏休みが取れなかったのー！」

と無邪気なふりしてにこにこ返事して。

「降りる駅に着いたらおばあちゃんが迎えに来てくれるから。」と言ったら車掌さんは安心して向こうへ行ってしまった。

それから慣れない長距離列車に揺られていたら半袖ではクーラーが寒くて、鼻水垂らしてぐずぐず言いながら、ちょっとだけ窓枠に肘をついてもたれて、うとうと眠って。

乗り降りする他の乗客たちのざわめきに、はたと目が覚めると、もうすぐ、降りる駅で...

慌てて起きて、乗り換えて、また乗り換えて、乗り継いで...

日暮れ前によくたどり着いた二面戸町駅のホームの待合室でくると三回転半して振り向いて、後ろの正面の七つと三番目にあった教えられたとおりの秘密のドアを特別なやりかたでひねって、くるっと開けると。

「高原リツコ様ですね？ 多元旅行社の送迎サービスの者です〜！」

... どう見ても二足歩行の巨大なカエルの人？ がいて、曲がりくねった不思議な山道を、おかしな形のタイヤのない車で案内されて...

教えられた森の中のこぶこぶした不思議な形の大樹に、よじよじと必死で登って。

「今ですよ！」

「大地の端っこから、太陽の端っこが、完全に沈んで消える瞬間」... ちょうどに！

教えられた通りの樹上の空洞から、えいっと、勇気を出して...

目を閉じて、しっかり荷物を抱えて、真っ暗な穴のなかに...

飛び降りて、どすんと...

... いえ、ふわっと...

なにか柔らかいものの上に、落ちて...

目を開けたら、そこは、異世界？

だった...

第2章 リツコ、異世界で目覚める。 (2018年9月16日)

第2章 リツコ、異世界で目覚める。

2-1. リツコ、仔猫につかまる。

ちょっとの間だけ、気絶していた？ らしい。

はじめ何も視えなかった。とにかく眩しかった。

(...太陽...? あれ? だって「陽が沈む瞬間に!」って... あたし、飛びこんだよね...?)

変だなと思いながら、とりあえず薄目だけ開けて、明るすぎて何も視えなかったので、右手を上げて顔の上を遮ってみた。

同時に、右側の手で、からだとまわりを探ってみる。

...怪我はない。まわりは...もふもふ? もこもそ?... している...???

しばらくしてようやく、自分が何か柔らかくて長丸いもの? の山の中に、かなり高い上のほうから落ちて来た勢いそのまま、あおむけに埋もれこんでいる...? ということが判った。

その何かふかもこしたものが、上から落ちて来たリツコを受け止めた衝撃で弾け跳んだらしい綿埃?

...らしきものが、ほぼ真上からまっすぐに降り注いでくる金色の陽光の中を、ぶわぶわと舞い飛んでいる。

触ってみた感じでは、リュックも潰れていないし、顔の上に挙げた右手でしっかり持ってたバスケットも、壊れたりはない。

とにかく眩し過ぎたので、薄目だけ開けながら、もっそもっと動いて、なんとか姿勢をかえて腹這い向きになり、それから手探り膝さぐりで、1mほどのふかもこの斜面をかなりずり落ちながらも、のそのそとよじ昇る。

ちょうどその頃から、まわりのあちこちから、声が聞こえ始めた。

「...ま〜るめる! まるった! えら。えららう。まるる〜ん...???

「えるった！ らう！」

「あらえ！」

「まるえ？ えら。あらう。...あろ、...あっかせっか！」

「か～いせ！ えのっかあるっか、らうらうらう。あごん！」

「あうのいあ！」

...そんな感じの、まるまるした声の、可愛い響きのコトバで...

もちろん、ひとつことも、解らない...！

(.....ほんつとに、異世界?...来ちゃった～???)

そう思いながら、もこもこの白い山の上からようやく顔を出すと。

「...えらっ！ あまっ！ あまママ、あまま、あそっ？」

可愛い仕種で、どうやら「だいじょうぶ～？」と心配してくれているらしい声が、かかった。

(...か、.....かわいい...っ♡♡♡)

語尾と目じりが思わずハート型になってしまうような小さな生き物たちが、そこらじゅうにいた。

全体的に、白くてもこふわ。サイズはかなり小さそうだ。一番大きいコでも、リツコの膝までぐらい？

うさぎのような、モヘアのような、ふわふわ毛並みの、けどどちらかという横長のまるい顔立ちの、大きな吊りあがりぎみの黒くて丸い眼の...見た目は、むしろ、猫...？

エプロンドレスのような...巻きスカートのような...きんたろさんのような...形はそれぞれ違うけど、可愛いパッチワーク模様の、色とりどりの服を着た...

二足歩行の...、白い、仔猫...??

「...あいじゃ！ うにゃう？」

心配してくれているらしい、表情豊かな大きな瞳が、とてもとても、愛らしい。

(これ、意味、たぶん、「だいじょうぶ？ けがはない？」って感じかな...?)

リツコはあんまりな可愛いらしさに嬉しくなってしまうてへろっと笑いながら、とりあえず手を振ってみた。

「ごめん！ コトバわかんない！ ケガはないよ～。だいじょうぶ！」

それからちょっと心配になって、体の下のもふもふを手にとってよく見てみた。

白猫？ たちとよく似た色だから、生きてる仲間を下敷きにでもしたのかと思って。

(...違うみたい。...これは...毛玉?...繭...???)

なにかカイコのような形のそれよりは大ききめ、毛玉...毛糸玉？ のようなものが、いか

にも「落ちて来るもの受けとめ用クッション」という形に、高さ数メートルくらいの勢いでもりもりと盛り上げられている。

その小山を取り囲む（...風から護っているのかな...？）というふうに張り巡らされた、屋根はない、テントのような...天井を大きく開けたティピのような...布とも皮ともつかない半透明の材料の、幕屋のなかの...

前は大きく開いていて、見晴らしが、すごく良いことにリツコはやがて気がついた。

おそらくとても高い山のなかの斜面を覆っている、大きな深い大樹の森の、さらにひときわ巨大にそびえたっている...

後にしてきた世界でよじ登って飛びこんだ、大きな洞のあった老木とは、同じくらいの大きさだけれど、それとはまた別の種類の...

若々しく枝を張り広げたまごとな大樹の、巨大な幹に開いた大きな洞の、その下だった...

2 - 2. リツコ、白ウサギに挨拶する。

古びて節くれだってぼこぼこ溝やウネができて、ところどころに緑の苔まで生えた大樹の根元、眩しい陽光が燦燦とさしこむあたり。

巨木の幹にできた大きな空洞（うろ）から「何かが落ちてきたら」受けとめられるように...と、高さ三~四メートルほどに積み上げられていた「もこもこ」の山の斜面をずるずると滑り降りてみて、そこでリツコはしばらく困り果てていた。

膝丈ほどの二足歩行の「しゃべる猫型にんげん？」...としか思えない、白くてふわふわの小さい生き物の群れに、わらわらと取り囲まれて...

「まうまうまう！」

「あうれ？」

「あっかのおっか？」

「おねうおねう！」

「まうまうまうまうー！」

などなど...ちっとも解らない言葉で、おそらくたぶん質問責めに？されたあげく、とりあえず適当に日本語で受け答えをしている間に、やおらよじよじとリツコの脚や腕に登り始めて、頭の上に座っちゃったりする、おちびさんまでいる...

(.....えーとお。これは～.....☆)

ふかふか可愛い生きものにまわりつかれること自体は楽しいので、思わずもふもふと撫でてみたり、へろへろと笑いながらも、ちょっとかなり困り果てていると、すこし離れたところから、すこしだけ低めの声が響いた。

「...えっけれねん！ あうら！ かなりっこさる！」

とたんに、リツコを取り囲んでいたチビ猫さんたちが慌てて動き始めた。

「あけ—————ね！」

なんとなくリツコにも意味が分かった。

『あんたたち何やってるの、だめでしょ！ 離れなさい！』

『ごめんなさい！』

...くらいの会話じゃないかな？ たぶん...

ちびさん達がどいてくれた隙に慌てて立ち上がると、やってきた人？ たちの姿がようやく見えた。

(...あれ...?)

膝丈ほどのちびさん達は、どうやらとにかく「子どもの」猫(?) だったらしい。

やってきたのはたぶん大人？ で、膝丈のおちびさん達よりはだいぶ大きい。とはいえ、地球の日本の小学校高学年としては標準サイズのリツコと、同じくらいの身長しかない。子どもたちが横丸な顔で耳も短くて地球の猫に似て見えるのに比べると、やってきた何人かの大人？ 猫たちはおそらく、育つにつれて顔も手足も縦長になり...耳が長くなって立ち上がり...やがて垂れて...地球でいう「垂れ耳うさぎ」が巻きスカートのようなエプロンドレスのような服を着て、荷物を手で持って、立って歩いてやって来た。...としか、リツコには思えないのだった。

(...えーと！)

リツコはとりあえず「皆さんと仲良くしてね。」と大叔母様に言われて来た、自分の「親善大使」という役割を思い出して...、とにかくピシッと「気をつけ！」の姿勢をしてみた。

それから、すうっと息を吸ってから、元気よく、

「こんにちは！ はじめまして、高原リツコっています。よろしくお願ひします！」

きちんとした大人たちがきちんとした時にきちんとやるみたいに、きちんと前に手をそろえてきちんと頭を下げ、きちんとした挨拶を試してみた。

おとなウサギ？ たちは、ちょっとキョトンとした後、やおらそれぞれの長い耳をゆっくりと頭上に掲げてぱたぱたと順序良く揃えて左右にうちふり、片手で巻きスカート？ の脇をちょっとつまんで外側に開くようにしながら、反対側の手の平もリツコに見えるようにすっと開いて、膝をちょっとかがめて、

「まうまうまう！」と声をそろえた。

(まうまうまう?) とリツコは慌てて考える。

(さっきから何度もちびちゃんたちから聞いてたコトバだな～、アイサツだったのか！)

了解したので慌ててまねっこをして両手を耳のかわりに頭の両脇にたてて左右にふって
みて、スカートは履いてないので仕種だけ真似して、膝をびよこんとかがめて、
「まうまうまう？」と、首をかしげながら挨拶を試みた。
おとな兎たちはリツコの発音の悪さにウケたらしくて笑いながら、元気に声をそろえて
「まうまう！」と返事してくれた...
ので、リツコは嬉しくて、えへへと笑った。

2 - 3. リツコ、王子様にであう。

「...えっけれねん、あうりっこさるれうある？」

「あっかいおす、おっかいねん？」

...再び意味が解らない...

えへえへと頭をかく仕草でごまかしながら困り笑いをしていると、おとな兎たちのうしろから、新たな声が響いた。

「...ごめんごめん！ 遅れた！ やっぱりちょっと時間の計算に誤差があったね！」

(.....日本語だぁ～...!!!!)

こんな短時間で『ことばの壁』に疲れて早くもホームシックになりかけていたリツコは、自分がものすごいほっとしていることに気がついて、むしろ驚いた。

「ミキーレ！」

「ミキーレ！ あうのあさるのみえ、えれ？」

おとな兎たちはふりむいて歓迎しているらしい声で、何かを説明したりしている。

『あうれりぁおうのおうあ、えら。』

少しだけ違う発音で、だけどごくごく流ちょうなウサギ語？ で受け答えをしながら斜面を登ってきて、リツコの視界に現われたのは...、ものっすごい...美青年！ だった...

(.....うそっ？ 少女漫画かアニメかなんかっ?)

リツコと同じくらいの背丈の大人？ 兎たちの背後から、ひょいと胸半分ほど上に出るすらりとした細身で、薄茶色のさらりとしたまっすぐな髪が肩にかかるくらい長くて、薄いメガネをかけている瞳も澄んだ明るい茶色で、すっきり整った美貌の優しそうな笑顔で、ものすごく賢そうな白い額がきれいに広くて、なんだか雰囲気全体がきらきらしていて、...吸い込まれるように見惚れてしまう...、美形だ！

動きやすそうな細めの袴のようなものを履いて、ちょっと三国志風かなって形の上衣の上から長めの薄い外衣を羽織っていて、全体に青と水色で統一された、さりげないけどセンスのいい服を着ている。

リツコはこんなに綺麗な青年を見たことがなかったので呆然と見惚れる。

ぽかんと口を開けて上を向いて固まっているリツコにちょっと困った笑顔で、

「...リツコだよ？ 遅れてすみません。迎えの者です。」

「...はいっ！ 高原リツコですっ！ 高天原から天を抜いたタカハラ！ リツコはぜんぶカタカナっ！」

見惚れていたのが間抜けで決まりが悪くて、リツコは思わず大声で自己紹介をしてしまった。

(...あ、恥ずかし〜！) 赤面して一人で百面相をする。

「...どうぞよろしく？ ぼくは、清峰鋭（きよみね・えい）といいます。」

「.....嘘っ？」

ウサギたちからは「ミキーレ！」と呼ばれていた青年の自己紹介に、リツコは思いっきり大声で返してしまった。

「え？」

「...だって！ それ大叔母さんの同級生の人！ 七十歳は過ぎてる筈でしょうっ？」

「...あ〜、聞いてないかな？ 向うとこっち、時間の流れも、トシのとりかたも違うんだよ」

「聞いてないっ！」

断言したら、美青年なお兄さんは、困ったような笑顔で、にっこり笑った。

「...じゃあ、解らないことは何でも聞いてくれていいから、とりあえず、移動しようか？」

なんだか有無を言わさない迫力のある超美形な笑顔に気圧されて、リツコは、ハイと頷いた...

2-4. リツコ、異世界の村へ行く

「この世界は《ダレムアス》と呼ばれていてね。意味は《大地の世界》。いま僕らがいるのは世界の真ん中の《大地の背骨》山脈の端っこで、あの大河を渡ったところにあるのが、これから行く《仮皇宮》」

見晴らしのいい山腹の草原の道を並んで歩きながらリツコが質問するより速く美青年が教えてくれる。

空は地球と同じような気持ちの良い澄みきった青で、流れる白い雲と乾いた風がとても気持ち良くて、リツコがよく知っている地球の日本の森とは少し違う大森林には綺麗な

色のたくさんの小鳥や蝶や羽虫たちがせっせと飛び交っている。

「...きれ〜い！」

リツコは思わず深呼吸した。

「地球と似て見えると思うけど、空と太陽と星だけが共通項って言われてて、けっこう違う点があってね。まず電気製品とか電子機器とかが一切使えないんだけど...、聞いているかな？」

「あ、それは聞いてた。...あ、ほんとだー！」

言われて思い出してリュックから個人端末をとり出してみたが、『圏外』どころか画面が真っ暗なままで、スイッチを押してもうんともすんとも言わない。

「金属加工の技術はあるんで、水力発電なんかも造って見たんだけど、全く反応しなくてね。まず何しろ魔法なんて非科学的なものが存在してるくらいで、物理法則が根本から違ってるんだ」

「...そうなの？ 見て目は似てるのにねー。」

(...ブツリホウソク...って、電気とか重力？ とか、星の動きの仕組みとか、そういう話よね...?)

リツコは頭のなかでこっそりおさらいをしながら、慌てて相槌を打った。

「それから生き物がさうとう違ってる。...まあ、見れば判ると思うけど...」

わきゃわきゃと賑やかに足元に絡みついてくる子猫？ なこどもたちと、垂れ耳ウサギなおとなの女性たちと、その中間で立ち耳ウサギみみたいな、リツコと同年代かちょっと上くらいの少女たち？ と一緒に山腹の平地に開けた村まで降りて行くと、そこにいた平たい垂れ耳の犬？ そっくりな顔のひと？ たちは、どうやら、おとな兎な女性たちと同族のおとなの男性？ の特徴らしかった。

子ども時代には横長の丸い顔に短くがった三角耳で、色はオフホワイトとかアイボ

リーとかの「だいたい白系」のもふもふ毛並みなのが、ちょっと育ってくると耳と顔と胴体が長細くなってきて、色は薄くなるのと濃くなるのに分かれて、毛の長さも短くなるのと、長くなって巻くのに分かれて。それがもっと育つと、短い真っ白い毛の垂れ耳うさぎ似のおとなの女の人？ と、長めの濃い色の巻き毛の垂れ耳の犬に似たおとなの男の人？ に、なる。という種族であるらしかった。

その他に、なんとなく鹿似のひと？ とか、どう見ても丸ごと四足の喋る犬？ みたいな人？ とか、立って歩く熊っぽい人とか、歩く観葉植物人？ とか樹木な人？ とか...が、村の中心らしい街道を行き交っている。

それから地球人と言っても通る『普通の人間』に見える人たちや、目や耳の形や色彩がちょっとだけ違うけどほぼ地球人と同じな人たちや、角や牙や尾っぽがあるけどだいたい人間に近い形、という人なんかも、本当に色々と、たくさんいるようだった。

街道沿いにおおざっぱな等間隔で並んでいる家並は丁寧な細工の木造で、まるで白雪姫の小人の家みたいな可愛らしいサイズ。なので体格的に、うさぎいぬ人の家には入れない大きさのひと？ たちは、村のまんなかの広場や、わざわざ大きめに造ってあるらしい休憩所風のあずま屋とかに座って、買った物を吟味したり交換したり、お茶やお酒を飲んだり、食事をとったりしていた。

2-5. リツコ、観察する。

そんな人？ たちが、降りてきたリツコたち一行に気づいた。

「ミキーレ！」

「リール！」

「イーキレ！」

「リレク！」

地球の日本人の清峰鋭と名乗ったはずの美青年に、親し気に何種類もの名前を？ 呼び掛けて、わっと群がってくる。

「まうまうまう！」

「ぐわーごっば、うわう〜」

「アマルカッシュュッ！ パキヤワシュ」

「ギャギャギャガノキュギユイギギ！」

「ゴワーガ！ ヴォ〜ノマ”ーレ！」

なんだかとても多種類の、それぞれ違う言語に聴こえる…。

それにまた平然とそれぞれの言葉できちんと返事をしているらしい地球人を見て、リツコはまた困り笑いを浮かべて、ちょっとかなり後ずさってしまった…。

「…えーと…、清峰さん？」

「鋭でいいよ？ リツコって呼んでいい？」

「いいですけど…」

「ですじゃなくていいよー？」

にっこり笑う顔にまた思わず見惚れてしまいながら、

「いい、けど？」と、リツコは言い直した。

「…この世界って、言葉が何種類くらいあるの？ で、鋭は何ヶ国語が喋れるの…？」

美青年がちょっと驚いた顔をして、ふわりと嬉しそうに笑った。

「…今のを聴いただけで、ちがう言葉が何種類もあるって判った？」

「うーんとね。」

リツコは説明を試みる。

「もちろん意味は全然わかんないんだけどー。昔ね、おばあちゃんがまだ生きてた頃、近

所におばあちゃんの友達で、翻訳の仕事の人がいたの。で、おばあちゃんと一緒に遊びに行くと、大人たちが喋ってる間に、子ども向けの色々な言葉のビデオとか観せてくれたの。だから、地球にも、色々な国の色々な言葉があって、色々な挨拶とか習慣とか考え方があって、ってことだけは、解るの。」

「それは、貴重な体験だったね。」

きれいに笑って美青年が言う。

「だけど、この世界の言葉が全部で何種類あるかって、多分誰も数えたみたことないんじゃないかなー？」

なにしろ《朝日ヶ森》では『天才組』にいたこの僕でも、まだ習得してない言葉のほうが多いし？ 本人たちは同じ言葉話してるつもりでも、お互いに凄く訛ってて、全然通じない。なんてこともよくあるし…。

みんな言葉が通じないのに慣れてて、あんまり気にしないで何とかしてるから、リッコもとりあえず日本語で喋ってていいよー？」

「...うん解った。」

(ていうか、それしか出来ないしー。) と思てリッコは苦笑した。

2-6. リッコ、歓迎される。

どうやら目的地に着いたらしくて、村で一番大きそうな家の前庭の大きな木の下で地面とほぼ同じ高さに張られた、地球で言うウッドデッキのような平たい木の床の上に、鋭はリッコを案内しながらすすすと靴のまま上がっていった。

「靴は履いたままでいいからね？ こうやって、片膝を立てて片アグラで座るのが、こちの世界での正式。...これきみの食器。各自で持って歩くのが習慣だから、なくさないようにして。で、立てたほうの膝のうえにこう乗っけて左手で支えて、右に置いた盆から箸か匙を選んですくって食べるのが、こちら式。」

「へ～え。お箸なんだ...」

リツコが渡された小さなお椀とお盆とその蓋と、中に入る式のお箸と匙の木製のセットを眺めまわしている間に、鋭は代表者っぽい貫禄のあるうさぎな人と短く会話して。

「ごめん。実はぼくの計算ミスできみが予定より二時間ほど早く着いちゃったもんだから、お昼ごはんの仕度がまだ出来てなかったって。それでお茶とお菓子の略式の歓迎会になっちゃうんだけど、ごめんね？」

「お昼ごはん？」

リツコはちょっとびっくりして言った。

「あたしあっちで太陽が沈む瞬間に飛びこんだのに？」

「...うーん...。時差がやっぱり昔の記録とずれてるなあ...まあ遅くなるよりは早く来てくれてよかったよ？」

鋭の言ってる意味はリツコには解らなかったが、さっきの人たちや初めての人たちが色々わらわらと同じ木の床の上に集まってきて、何やらそれぞれの言葉でリツコにあらためて歓迎の挨拶をきちんとしてくれる雰囲気だったので、とにかく日本語で一生懸命、「こんにちは！」とか「よろしくお願ひします！」とか、挨拶をしまくった。

それからリツコは、こんなに色々な種族のたくさんの外見の人？ たちが一堂に集まってきているのだから、てっきりこれがその『講和会議』なんだと思って、挨拶が途切れたすきに、こっそり聞いた。

「ねえ、鋭。大叔母様からの手紙は、どのタイミングで読んだらいいの？」

「えっ?... ああ、違う違う。その会議は、もっと先の、ずっと西へ行った後の話だよ？ 今日のこれは、はるばる来てくれたきみに挨拶がしたいって、地元の人たち主宰の、たんなる歓迎会」

「...あ、そうなんだ...。」

気負っていたリツコは、勘違いがちょっと恥ずかしくなって赤面した。

それから乾杯の音頭みたいな全員一緒の挨拶？ があって、その後、木の床の真ん中に敷かれた綺麗な敷布の上に、冷たい果汁や温かい香草のお茶や飾り切りの果物や、木の実を潰して焼いたお好み焼きみたいな見た目のお菓子だか軽食だか...等々が、色々と次々に出てきた。

もちろんリツコは勧められるままに全種類きれいにたいらげて、「ごちそうさま！」と日本語で挨拶をした。

たれみみ兎の女の人たちが、にこにこしながら給仕をしてくれた。

2-7. リツコ、誉められる。

「ごめん。質問たくさんあるとは思うけど、ぼく先に色々打ち合わせしなくちゃなんだ。ちょっと待っててくれる？」

「うんわかった。」

そう返事して、食べ終わった後、かなりゆっくりにお茶を飲んでても、まだ隣の鋭は反対側を向いて、入れ替わり立ち代わりやってくる大勢の人たちと、次々に「打ち合わせ」とやらを続けている。

のを見て、リツコはやおらリュックの中から大学ノートとペンケースと、古い小さな日本語の辞書を取り出して開いた。

まずは一頁一行目に日付と時間を書こうと思ったけど、携帯が使えないので調べられない。

ので、『訪問1日目。昼？ ご飯のあと。』と書いて。ざっと報告の文章は箇条書きのメモだけ書いて。

それから「四十八色！」入りの色鉛筆の缶をわくわくしながら広げて、子猫とおとな兎とおとな犬を家族風に並べて、簡単なスケッチというか落書きを、丁寧に手早く描いて。

「...ねえねえ、このひとたちは、なんていう名前？」

ちょっとだけ暇ができたらしいタイミングをねらって鋭に聞く。

「...本人たちはマウレイレイって名乗ってる。《賢く礼儀正しい一族》みたいな意味かな。まわりからはもっぱら《兎犬猫族》とか..... リツコ、イラスト巧いね？」

「あ、ほんと？」

えへらっと笑う。

「うん。簡単な線なのに、特徴をよく捉えてる。」

「わーい褒められたー ♪ ♪」

素直に喜ぶリツコのへしゃっとした笑顔に、美青年もつられて笑った。

「...適任者が行くわよ！ って、清瀬のほうの律子さんが手紙に書いてきた意味が分かったよ。」

「なんてー？」

「前に来たオトナの人は、電波が通じなくてもデジカメとパソコンで記録は撮って持って帰れるだろ。...って思ってたらしくて...記録用の機械が全滅で、報道マンとやらのアイデンティティーが崩壊してた。」

「... うーん...」

リツコは苦笑する。

アイデンティティーって言葉の意味はよく解らないけど、オトナって...たしかに、ときどき、「アタマが硬くて使えない」時があるよね...

2-8. リツコ、空を飛ぶ。

「ところでリツコ、きみは馬には乗れる？」

ひと段落したらしい鋭が唐突にそう聞いてきた。

「...ウマ?...動物園とか観光地とかの、10分1000円とかの体験乗馬くらいしか乗ったことない...」

「じゃあやっぱり、運んでもらったほうがいいねー。」

「はい？」

リツコがきょとんとしている間に、鋭はまた他の人たちとそれぞれのネイティブ言語で会話して、何かの伝言を追加すると、しばらくしてその返事が返ってきたらしく。

「...そろそろ、行くよ？」とリツコに声をかけて、どうやら「ごちそうさま」に相当するらしいお礼のコトバを言って、席を立った。

リツコも慌てて同じコトバを真似して挨拶してみて、忘れ物がないように気をつけながら手早く荷物をまとめて後を追う。

「ねえ！ 今日ってここに泊まるんじゃないの？」

「うん。地球に帰る時は別の道を通るから、もうここへは戻って来ないよ？」

「えー！ もっと猫ちゃんたち、モフリたかったー！」

「……………もふ？ …なに？」

鋭は「モフる」という日本語を知らなかった！ 鋭が地球にいた頃にはまだ無かった言葉らしい。

それから、ちょっともじもじしながらトイレの場所と使い方を、鋭に通訳してもらって女のひとに聞いてもらって。

集まっていたみんながぞろぞろ見送りについて来てくれるなか、来た方向とは逆の、もう一段下の崖の上の広場につくと、そこに待っていたのは…
翼の生えた…鳥？ …鳥人間？…の、人たちで…

なんだか見た目が怖い上に、…刀？ 剣かな？…で、武装？ していて…

…なにか、運動会の球入れのカゴのような、でかい籠が置いてあって…

「リツコ、高所恐怖症じゃないよね？」

にっこり笑った超絶美青年に指示されて、リツコは恐る恐る、その籠に乗って…

ことばを喋る大型猛禽類たちが4人？ がかりでそのロープを脚手で掴んで舞い上がり…

(…………… きゃ—————っ！)

見送ってくれる人たちに挨拶をする余裕もあらばこそ。

必死で絶叫を呑みこむリツコだけを乗せて、カゴはどんどん空高くに上がって行き…

ようやく揺れが収まってきてから、恐る恐る見下ろしてみると…

清峰鋭は随行の騎馬の一団とともに、はるか下の草原を駆けているのが…

遠目に見えた…

(嘘つきーっ！「道中、何でも聞いて？」って言ってたくせにーっ)

心中で絶叫すること数時間。

強い風にも怖い顔の猛禽類たちにもだんだん慣れてきて...

広い広い《大地世界》を上から見下ろして...いや、背後に広がる《背骨山脈》とやらの山頂は、それよりまだまだはるかに上に霞んでそびえたっていて...

眼下は草原と森、丘陵と谷、畑地と街と村と荒野と...

少し風が寒いけど、この世界は平和で。平和で。平和で...

気がつくと、地球の日本の日没とともに異世界行の穴に飛びこんだ後、午前の異世界に着いてからさらに半日以上も、まだ起きていた、小学校四年生のリツコは...

深く深く...寝入ってしまって...いたのだった...。

第3章 リツコ、皇女様にあう。

第3章 リツコ、皇女様にあう。

3-1. リツコ、悪夢をみる。

リツコは、うなされていた。いつもの夢だ。

懐かしい家。山のふもとの、ちょっと不便な、だけど緑が豊かな山の斜面にある...温かい木の壁の家。

いつものように日曜日の午前の終わり頃には家の裏の土手を登って、上の家庭菜園から昼ごはんを使う香味野菜を採ってくるのが、リツコの当番だった。その日はお母さんのリクエストで、小ネギとラディッシュとレタスを1株採った。

ちょっと重たくなった収穫カゴを抱えて、崖道を降りようとする...

へんぴな集落へと向かってくる行き止まりの一本道を、見慣れない車の集団が凄い速さでやってくる...

.....見慣れない車.....

...だけど、あの色は...!

リツコは急斜面をころげるように横切って走りながら、叫んだ。

「お母さんッ! 大変ッ! 逃げて!」

「...リツコ? どうしたの?」

お母さんとお父さんがのんびりした顔で台所の窓から顔を出す。

「……お姉ちゃんっ！ 緑衣隊よ、逃げてッ！」

リツコは家の下のほうの斜面で洗濯物を干していた5歳上の姉に叫んだ。

…もう遅い。

妖しくてらてらと光る変な緑色の特別な自動車の群れは、家の前の小道にががっと乗り入れて急停車するとぼたんぼたんと言を立ててドアを開け、中からばらばらと降り立って来た妖しくてらてらと光る変な緑色の制服の男たちが、びっくりして動けないままシートを握りしめて立っていた姉を、数人がかりで乱暴に捕まえた。

「……………きゃあッ!？」

「エツコ！」

「何をするッ!？」

お母さんとお父さんが叫ぶ。

「高原ワタルとシズカだな？」

男たちのリーダーらしいヤツがすごい嫌な声で怒鳴った。

「反政府罪で逮捕する。逃げたら…」

「きゃああッ！」

頭に銃をつきつけられて、お姉ちゃんが絶叫した。

「エツコ! ……やめて! やめてッ！」

「わかった! 頼むからやめてくれ! 娘は関係ないッ！」

「ふん。反逆者の娘は、しょせん反逆者の娘だ。」

「お父さん! 逃げてッ！」

なおも崖の上から叫んだリツコをめがけて、男達のうちの何人かが、ばらばらと走り始

めた。

「リツコ！ 逃げなさい！」

「お父さん！ 逃げてよッ！」

「エツコを置いて逃げられない。おまえは逃げなさい！ おぼさんの所へ行くんだ！」

「リツコ！ 逃げて！ あたしは平気！」

「逃げなさい、リツコ！ ...きゃあ！」

リツコに叫んだお母さんが乱暴に殴られた。

「やめろ！ 抵抗してないだろう！」

お父さんが怒鳴った。

リツコは、何も出来なかった... 絶望した。

そして崖を駆けあがって来る大人の男達の脚の速さを悟った...

...急がないと、逃げ遅れる！

「.....おぼさんの所で待ってる！」

叫んで、あとはもうふりむかずに、一目散に、山の中に逃げ込んだ。

勝手知ったる裏庭も同然の山だ。大人には通れない深い崖の下の小川の上に張り出した細い木の枝をすすると渡り、ターザン顔負けの軽業で幹から幹へ飛んで、とりあえず「秘密基地」に逃げ込んだ。

隠しておいたお菓子と缶ジュースで一息ついて半日くらい、様子を見ていたのだけど...

妖しい制服の男たちが山狩りを始めたらしいので、そこからも陽が沈む前にこっそり逃げて、今までずっと「子どもだけで入っちゃいけません！」と言われていた、奥の奥の

神山のふもとへ逃げ込んだ。

そこから、月明りだけを頼りに、山伝いに、歩いて、歩いて...

...おなかが空いて、でも見つかるから、街へは降りられなくて...

何日も、山の中で眠って、歩いて...歩いて... おなかがすいて... 寒くて...

...いつもの夢だ。怖い夢。

もう、起こってしまったこと。

そして...

リツコは、何もできなかった...

家族を... 救えなかった...

「逃げてよ！ お母さんッ！ 逃げてえ..... ッッ！」

3-2. リツコ、起こしてもらおう。

「..... リツコ！ リツコ！ ...起きて！... 夢だよ、... 起きて！」

「..... お母さんッ!？」

リツコは飛び起きて、声をかけてくれた人に、必死でしがみついた。

「... あぁ良かった... 無事だったのねっ！」

「... リツコ..... 大丈夫だよ... 」

優しく抱きしめて背中をぽんぽんとしてくれた人に、ぎゅぎゅぎゅ〜... っと、抱きつきかえしてみたら...

..... ん??

..... 違う... ?

リツコはまだ半分寝ぼけたまま、目をぱちくりさせた。

..... 細いし... なんか、硬い? し...

...これ、お母さんじゃないし...お父さんでもないし... お姉ちゃんでも、大叔母様でもないし...

「.....あ！？ 鋭？.....ごめんねっ？...あ、あたし...寝ぼけて...っ」

ようやく目が覚めて頭がはっきりして... びっくりして飛びすさったら、

「ううん〜？」と、美青年は優しく笑ってくれた。

...やっぱり美形すぎて、思わず目をハートにして見惚れる...

鋭はまた困った顔で苦笑して、

「...それにしても、度胸がいいねーえ？ 気がついたら天荷籠のなかで爆睡してたって。

鳥人のみんな、呆れてたよ？」

うなされて寝ぼけたことはとりあえず無視してくれて、にやにやとからかってくる。

「...え？ええ？」

リツコは慌ててあたりを見回した。

...知らない部屋だ。

「.....ここ.....?? どこ...？」

「うん。日が暮れるちょっと前くらいに仮皇都に着いたんだけど。いくらゆすっても起きないからさ。失礼ながら運んじやった。」

「.....うわーっ?? ごめんね??」

「ううん〜？ 軽かったし。」

「え〜？ 軽くないよ〜?? あたしけっこう重いよ〜??」

リツコはぱたぱたと意味もなく暴れ、顔とか髪とかに慌てて手をやって赤面した。

...こんな美形のお兄さんの前で、小さなコドモみたいに寝こけて寝ぼけるなんて... いや〜ん...っ

「...だってさっ！ だって向う側の地球の木の穴から、えいって出発したのは夕陽が沈んだ後だったのにっ！ こっち着いたらまだお昼前で！ お昼ご飯、二回も食べて、しかもたくさん食べたでしょっ？」

飛んでる間、あたしは暇だったしいっ！」

とりあえず必死で言い訳なんかしてみる。

「...うん。きみが環境適応能力のとっても高い、度胸のいい大物の卵だってことは、よく解ったよ？」

意味はなんかよく解らなかったが、からかわれている口調だということだけは判る。

「いや〜んっ！」

「...知らないところでさ。一人で目が覚めたら、いやでしょ？ お腹もすいてるだろうと思って。」

ふいとまじめな顔に戻って優しい声で言うと、リツコが寝かされていたベッド？ を脇から覗き込んでいた鋭は、ひょいと立って向うへ歩いて行き、部屋の中央に置いてあった食卓と椅子らしい家具のほうへ戻った。

机の上には色々...本らしいもの？ とか大きな紙？ の図面とか？ 地図のようなもの？ なんかが色々と広げている。

部屋のようにすは何というか...和モダン？ 木と紙と竹？...と、布や皮やなにかで出来て...落ちついた優しい色調だ。

明かりは障子紙を貼った小型の竹の灯籠？ のようなのが何か所かに置いてあって、開け放した窓からは月明り？ も射してる。

風はないけど暑くはないし、半袖一枚でも寒くもない。

...秋の初め？ ...かな？ とリツコは思った。

「ごはん用意しておいたから、食べられそうだったら食べて？...あ、手と顔が洗いたかったらそっちね。トイレもそっちの奥。」

「...ありがとっ！」

リツコは清潔で気持ちのいい木の床に敷かれた草編みらしい模様入りのゴザのようなものの上をばたばたと裸足まま駆けて行って、教えられた場所でトイレと洗手と洗顔を急いで済ませてから、またばたばたと走って戻った。

「あのね！ それでね！ 大叔母様からおみやげ？...預かってたのに、渡すの忘れてたー！」

タオルを出した時に思い出したので、購買部で受け取ったままの包みを二つ、急いで鋭に渡した。

「あ、持って来てくれてたんだ！ ありがとう！」

「...これでいい、の？...ていうか、それ、なに？」

「ノギスと計算尺って言ってね... こっちの世界には無い道具なんで、あったら便利だろうな〜って思ってたんだ... これなら関数電卓とかと違って電気要らないから... うん。やっぱり使えそうだね！」

「...ふうん...？」

よく分らないけど、すごく嬉しそうにして早速使っているの、リクエスト通りの正しい手土産だったらしい。

「これ食べていいの？ ...いただきます！」

置いてあった箱形の木製のお盆?... 日本語だと「箱膳」ていうのに似てるかな?... の蓋をとると、ふわりと優しい香りが立った。

「...わぁ、美味しい！」

「そお？ 良かった。」

何種類かの野菜と山菜？ と、何かの柔らかい肉と、小海老？ みたいなのを、香草と一緒に蒸して、ふんわりと優しい味の餡でくると和えたらしい、簡単だけどすごく美味しいおかずが山盛りと、濡れせんべいと焼き味噌おにぎりの中間のような、しっかりしっとりした噛みごたえの、何かの穀物の粉を練ったのかな?... 平たくして焼いた、主食らしいもの。

箸休め？ 的なちょっと摘まめるコリコリした歯ごたえの何か。浅漬けみたいな感じにしてある新鮮な生野菜の色とりどりの盛り合わせ。それからデザートに、食べやすいように綺麗に切ってくれてあった、汁けたっぷりの... 甘酸っぱい... 香りのいい果物！

もう夢中になって猛然とがっついてる間に、七輪とか卓上コンロ的なもの？ の炭火の上でしゅんしゅん沸いていた鉄瓶からいねいにお湯を注いで、鋭が温かいお茶を淹れてくれていた。

3-3. リツコ、情報交換する。

「.....ふ〜う。おなかいっぱい！... ごちそうさま！」

「おなか落ち着いたら、もう一度眠るといいよ。まだ朝まで時間があるから。」

「.....もしかしなくても、あたしのために起きててくれたの？」

リツコはちょっとぎょっとして、もうしわけないと思いつつ聞いてみた。

「まあやることも色々あったし。『夜中に寝ぼけますからよろしく』って、清瀬の律子さんからの手紙にも書いてあったし。」

「...ええ?!」

(…はずかし〜っ!) …と、身もだえしてみせると、鋭はまたふふっと笑った。
「まァフツウ組のひとが朝日ヶ森に保護されてるからには、何か事情があるとは思ってたけど」
「…鋭は、地球のジジョウについては、どれぐらい知ってるの？」
リツコは思い切って聞いてみた。なにしろ知らないことだらけだ。
「う〜ん。清瀬さんからは何も聞いてないの？」
「そんな暇なかったもん。鋭のこと『初恋の人なの〜!』とかってノロケ始めちゃったし。」
「ええ？ それ初耳！」
「え、うそ？ しまった！」

リツコは慌てて口をふさいだ。遅いけど…
「…言っちゃったこと、内緒ね…？」

横目で様子をうかがうと、
「う〜ん、まァ時効だし…？ なにしろぼくはこんな見た目のまんまだけど、地球の時間だとあれからもう五十？…六十年くらいかな？ 経っちゃってるし…。」

でも清瀬さんとはほんと喋ったこともあまり無かったんだよ？ 数十年ぶりにやっと地球側と連絡がとれて、手紙の返事に当代の朝日ヶ森の学園長が清瀬律子サンって署名してあっても、最初は同じ人だと思わなかったくらいで。」
「そうなんだ？」
「うん。…そもそもなんで彼女が朝日ヶ森にいるのさー？」
「え？ 同級生だったんじゃないの？」
「その前にいた全く普通の地元の小学校でだよ。今のキミと同じ4年生の時にね。清瀬サンは転校生だったし。そのころ口がきけなくて挨拶も筆談だったし」
「あ、それは聞いたことある。一族みんな死んじゃった時に、心因性ナントカってショックで子どもの頃しばらく喋れなかったんだって。」

「そうだったんだ…」

『一族』という単語が出た時点で何かしら納得してくれたらしく、鋭は話題を切り換えた。
「それで僕は、IQ高かったんで普通の学校から《センター》に誘拐されて。」
「ええ？」
「軍のために効率的に人を殺す武器を開発しろー！ とかいう勉強をさせられてさ？ 居心地悪かったんで逃げ出して、山ン中で行き斃れかけてたらマーシャに拾われて、朝日ヶ森に保護されて… そしたら何故か清瀬さんも朝日ヶ森に保護されて… まァ色々あって僕は天才組だし彼女はフツウ組だし、あんまり喋る機会もなくてさ？ 結局その直後に僕はマーシャの… あ、明日つれてくけど、こっちの世界の皇女サマのことだけだ。…ご

たごたに巻き込まれて、こっち側に飛ばされちゃったから、以来まったく数十年間？ お互い音信不通。」

「...そうなんだー？」

リツコはちょっと目を丸くして混乱した。話の全体像がよく解らないけど、そんなに長く時間がたって、大叔母様は『初恋の人！』...が、忘れられなかったのかー...

(...もしかして、それで独身?) と思ったが、それはいま鋭にいう話でもないと考えなおした。

「...あたしはほんとにフツウなのー。お父さんとお母さんがハンセイフってカツドウやって目えつけられちゃって。緑衣隊が逮捕に来たから『逃げて！』って言ったけど遅くて。あたしだけ走って逃げて山の中でサバイバルしてたら大叔母様に頼まれたっていう朝日ヶ森の魔法組のひとが保護しに来てくれて。で、家族もみんな無事に救出されてたけど、あたしより先に亡命しちゃってたんだ。で、次の亡命ルートが確保できるまで、朝日ヶ森で待ってなさいって。」

「...そこまではほぼ僕と同じ状況らしいけど...。...それを『普通』って言っているのかなあ...。」

鋭が苦笑して遠い目をする。

「それでか。『こっちとそっちの行き来を兼ねて、地球の別の場所に出られないか』って、清瀬さんからの質問」

「え？」

「聞いてない？ リツコこっちに来たあと、また朝日ヶ森に戻すか、このままこっちに居るか、もし可能なら、地球上の別の場所に戻してくれてもOKって。」

「そうなんだ...」

「日本から外に出れば、まだわりと移動の自由はあるって？ お母さんたちと合流させやすいからって。」

でもキミの今回の二時間ずれた件もあるし、こっちとあっちの昔の通路は、ほんとにほとんど埋もれたり忘れられたりしてたから、まだ調査が足りてなくてね。情報が、かなり不確実なんだ...。うっかり抜けたら下に受け止めるクッションがなくて地面に激突とか、時代がもっとズレて浦島太郎になっちゃったりとか、したら嫌でしょ？ 絶対安全って確認できる扉が用意できるかどうか、もうちょっと待っててね。」

「...うん。わかった。」

それからしばらくは主にリツコの方が、地球と日本の最近の事件について...小学生のリツコにも解る範囲内でだったけど...色々と説明をして。うとうとはじめたら鋭が抱っこしてくれて、布団に入れてもらって。

...最後にみた大きな満月が、地球より大きいな~と思ったところまでで、リツコの記憶

は途切れた…。

3 - 4. リツコ、寝坊する。

再び目が覚めると、どうやらもうすっかり朝も遅い、という時間帯の雰囲気だった。

大小色々いるらしい鳥の声が賑やかで、人の声や犬や馬？ の吠える声とかの街のざわめきらしい音も遠くから聴こえる。

「…んんん…… よっく寝た…？…あれ…？？ こどこ…？？」

あたりを見渡して知らない部屋だということを再確認して、それから、昨日なぜかやはり異世界とやらに本当に来てしまったんだった。…ということをぼんやり思い出し、
「…夢じゃなかった！」

…と、正気にかえって、慌てて起き出した。…鋭の姿はすでにない。

着ていたのは持参した寝間着で、鋭に寝床に入れてもらう直前に目が覚めて、何とかがんばって自分で着替えたのは覚えている。…大急ぎで、昼用の動きやすい服に着替える。

…そうだ。脱いだ服の洗濯は、どうしたらいいのかな…？

必要最低限の荷物しかリュックに入れて来なかったから、こまめに洗濯しないと、着替えがなくなる。

昨日おしえてもらった場所でトイレと洗面と、ちょっと冷たかったけど水浴びして髪も洗って、井戸水はたっぷりあったし天気も良かったので、ついでだから置いてあった大きな盥でじゃぶじゃぶ手洗濯もして、…邪魔にならないかなー？ と思いながら、土間のすみっこの植え込みの枝に紐をかけて勝手に干した。

昨日と同じように卓の上に用意されていた箱盆のなかの冷めても美味しい朝食らしいものを勝手にたいらげる。

「いただきます！ ………ごちそうさまでした！」

3分でがつつがつ平らげて目を上げると、旅館の中居さんのような動きやすそうな服を着た知らない女のひとが、物音を聴きつけてやってきたのか、にっこり笑って部屋の前に立っていた。

「あんによんまるにえんえなら？」

「…あっ！ おはようございますっ！…ごあん！ 勝手にいただきましたッ！」

おもわずもごもごと囁んじやいながら慌てて日本語で挨拶すると、にっこり笑って「えんえん。」と返事してくれた。

「まによ、にえんね？」

リツコが食べ終えた食器を手早くまとめて箱盆ごと持って、「ついて来て？」という風に

首をかしげるので、リツコは急いでリュックをひっかけて、あわててついていった。

案内された先には鋭がいた。

広くて天井も高い大きな部屋で、鋭と同じような青と水色系のシンプルで動きやすそうな服と長めに伸ばした髪型の、同じような雰囲気のもの...つまり、頭が良さそうで性格が穏やかそうな...学者さん？ みたいな...大人たち（ほとんどが「普通の」人間に見えるタイプと、毛皮や耳つきタイプも何人か）が沢山いて、大きな布か皮製の地図だの一覧表？ だのを広げて、慌ただしくも賑やかに楽しげに、何かの打ち合わせをしている感じ。

真ん中の机の上には昨日リツコが渡した「お土産」のノギスと計算尺が置いてあって、みんなでその寸法を測ったり絵図に書き写したり、興味津々で観察したり？ している。

「...リレキセス。まるにえん。えーらんてーい。」

案内してくれた女のひとが部屋の戸口から声をかけると、鋭が降り向いた。

「あるっくあーい。...あ、リツコ起きた？ おはよう。」

「おはようございますっ。寝過ごしてごめんなさいっ！」

「い〜よ〜？」

それから鋭は周りの人に声をかけ、自分の見ていた書類などは簡単に片づけて、なんだか昨日着ていたのよりもずいぶん高級そうなの？ かしこまった感じの？ 上衣を手にとった。

「じゃ、行こうか。」

「どこへ？」

「皇女サマにご挨拶〜。」

「ええ！？」

「あれ、ゆうべ言わなかったっけ？ ここの皇女サマって前は地球に亡命して朝日ヶ森に居たんだよ。」

『霧の校庭・運動会行方不明伝説』って、今じゃ学園七不思議になってるって聞いたけど。」

「え〜っ?...何十年か前の、障害物走の途中で生徒がイキナリ消えた謎?...あれ実話だったんだ...」

「そうそう。そんな時に巻き込まれてダレムアスに来た僕が、ここに居るからねえ。」

...つくづくあの学校はフシギと謎だらけだ...とリツコがあきれながら鋭と一緒に歩いて行くと玄関らしき場所に出て、その先の気持ちの良い小さな木立ちのなかの小径を歩いていくと、すぐに大きな道に出た。

「うわ...」

市場だった。いや...大きな町？ 商店街？ と、見慣れないものだらけの景色に、きょろきょろしてしまう。

「...とりあえず質問と観光は後にしてー。皇女サマは怒らせると怖いからー」

どこから観察？ したらいいのかと、呆然と立ち止まってしまったリツコの肩を押して鋭が苦笑する。

「それだけでなくキミきのう寝ちゃったからさ？ 歓迎パーティーすっぽかしたんだよー」
「...きゃーーーっ！ ごめんなさいっ!？」
リツコは恥ずかしくて悲鳴をあげた。

3 - 5. リツコ、将軍にあう。

街道を右に曲がってまっすぐ歩いて行くとやがて活気のある商店街から広い庭のお屋敷が立ち並ぶ高級そうな区画に変わって、つきあたった広場でまた右に曲がると、開放的な感じの大きな高い門があって、特に検問とか見張りとかは何もなくて、行き交う人たちと一緒にひょいと無雑作にくぐると、入ってすぐのところに大きな男の人たちが立っていて、そのうち一人が振り向きざまに嬉しそうな声をかけてきた。

「おう鋭！ 来たか！ そのコか？」

背が高くて日焼けしていて、ばさりと無雑作に伸びた感じの髪は真っ黒で、笑った歯は真っ白だ。

赤と黒の派手だけど動きやすそうな服に、大きな剣と短剣とか投げ矢とか、武器を身に着けてる。

「うん雄輝。この子だよ～、高原リツコ嬢。」

気軽そうに喋ってるけど、まだ若い鋭より五歳か十歳くらい年長の、偉そうな大人の男の人だ。

「こんにちわっ！ タカハラですっ！ よろしくお願ひしますっ！」

あっという間に近づいて来た人をのけぞって見上げながら、リツコは精一杯、元気に挨拶してみた。

「リツコ、これが『校庭行方不明事件』で消えた三人のうちのもう一人。翼雄輝（つばさ・ゆうき）。」

「おう、よろしくな。ところでリツコって何県のタカハラ家？」

リツコは質問されてることの意味がよくわからなくてすぐには返事ができなかった。

それに、紹介された人の背中に大きな翼があった。

「.....羽.....！」

昨日みた「ほぼ鳥だけど喋る人」とは違って、ほぼ人間な姿で背中にだけ大きな翼があるタイプだ。

「ん？ 珍しいか？ 朝日ヶ森なら今でも居るんじゃないか？」

「居るけど... すごく怖くて、近くで見たことなかったから...」

「あ～、天狗系のやつらか？ あいつらは気難しいからな～...」

...そういう問題だっけ...？ リツコはちょっと内心で首をかしげた。

「おれは善野の鷹羽の谷の元主家の『ツバサ』一族の最後の一人のユウキ。...って言って解るか？」

「ごめんなさい。わかんないです。うちは分家の分家のそのまた末とかで、本家の一族ってずいぶん前に滅んじゃってて、誰も詳しい人が残ってないそうです。...お父さんなら、ちょっとは知ってるかもだけど...」

「あ～気にすんな、そんなもんそんなもん。」

からからと笑って男の人はリツコの肩をぽんと叩いた。

地球には、古くからの伝説を語り伝えて来たそれぞれの「一族」に属する「遠い場所から来た人々」の子孫と、それとは別の「新しい土地で生まれた人々」の子孫という、区別がこっそりあるという。

漠然とした話だけしか、リツコは知らない。

「マダロ・シャサ！」

広場の向うのほうから大声で呼ばれたのは、翼が生えてる元・地球人の、こっちの世界での名らしい。

「...じゃな。マーシャ怒ってるからな～。せいぜい庇ってやれよ？」

「うへえ...」

リツコには謎の言葉を残されて、鋭が、ものっすごい嫌そうな声を出した...(リツコはびっくりした。)

3-6. リツコ、皇女サマに会う。

心なしか少し足早になって歩いて行く。リツコは追いかけるのがちょっと大変なくらいの歩調だ。

そこはかなり大きな広場で、馬？ 車や人が曳く荷車らしきものや、きのう乗せてもらっ

たような鳥の人が運ぶカゴと似たものなどが大量に並べられ、ひっきりなしに人や獣や植物人？ たちが荷物を運び込んできては、移し替えたり、積み上げたりしている。

何か同じような光景を観たことがあるなどリッコが思い出してみると、前にテレビで見たシルクロードとかのキャラバンの出発の準備に似ていた。

どうやら大勢で旅に出る？ 仕度をしているらしかった。

その慌ただしく雑然とした前庭を抜けるともう一つの門があって、両脇を植えこみで飾られた幅の広い道の、少し伸びすぎた芝生のような、昼寝したら気持ち良さそうな草がびっしりと生えた花壇？ の脇を抜けた正面に、宮殿？ らしいものがあった。

リッコの知っている範囲でいうと一番似ているのが奈良とか日光とかにある八幡様とかの寺社。鮮やかな朱と紅と金と緑の曲線的な木彫り細工で飾られた、広壮で華麗だけど一階建ての、木造建築だ。

鋭は案内も請わずにすたすたと宮殿の奥の奥に進んで、そのまま表玄関をくぐって廊下にまで入っていくので、リッコも遅れないようにがんばって後を追う。

驚いたことに、通りすがりの高級役人らしい服装の人たちが、鋭を見つけるとみなすぐに頭を下げる。

「マウレイディア！」

「マウレイディア、リレク、エイセス！」

「マウレイディア。」

「アノネ、カイエ。」

鋭は軽くうなずくだけで短く返して、どんどん歩いて行く。

「...アウレクセス、マルニエン、エネ？」

広間の入り口の前の椅子の列に、何かの順番待ちらしく並んで腰かけている人たちの先頭に、頭を下げて手刀で拝むようなしぐさをしながら声をかけると、

「マウレニエン、エネ、エネ！」

(どうぞお先に！) と言っているのだろう手のひらの仕草で、相手の人は喜んで順番を譲った。

広間で拝謁の最中だった人が、その声にふりむいて、慌てて自分のいる場所を譲ろうとする。

「アウネ、ソノ！」

若い女性の声が鋭く響いて、その人はちょっと困った顔をして、また前に向かいなおした。

(...構わない、続けて！...って、言った？)

リッコは推測する。

どうやらそこが謁見の間...正面に座っているのが、これから挨拶する「皇女サマ」らしかった。

色が白くて唇が真紅で、ものすごい美女だけどころかなり性格がキツそうな顔立ち。碧緑色の華麗な巻き毛を肩のまわりにふわっと広げて、瞳も同じ碧緑色だ。朱色と金色の豪華だけどすっきりと繊細な装束。

まだ若いめだけど、おとなの女の人だ。さっきの男の人...翼雄輝...と同じくらいの年齢に見える。

つまり、鋭よりは五歳か十歳くらい、年上？

(...まあ地球人の時間の感覚で、だけど...) と、リツコは七十歳は過ぎているはずの大叔母様と鋭が、六十年ほど前の地球の小学校で同級生だった、という話を思い出しながら、頭のなかで付け加えた。

その、きつそうな性格の美女が、ちょっとかなり苛苛した感じで眉をしかめながら、目の前に座っている人の報告を最後まで聴き、いくつか指示を出してその返事を得てから、仕種と声とで高飛車に退出を命じる。

「...遅いわよ、あなた！」

次にいきなり日本語でビシッと怒鳴られて、リツコは思わず首をすくめた。

「...は、はいッ！ ...ごめんなさいッ！」

「昨夜は歓迎の宴を用意したのにすっぱかすし！ 今日私もう出なくちゃいけないのにいつまでも待たせるし！...それになに？ チビな上にタダビト組なの？...なんで清瀬律子が自分で来なかったのかしら！」

...これはもう挨拶とか自己紹介とか、マトモにさせてもらえる状況ではない...

リツコは震えあがり、涙目になりかけながら必死で言い訳をした。

「あのう...ゆうべと今朝はすいませんでした...あたし時差ボケで、寝ちゃって... それに大叔母様たちは今すごく忙しいんです。最近かなり大掛かりなテキハツがあって、大勢タイホされちゃったんで...」

「...あら、そう...。」

美人皇女は、素早く眉をしかめた。

「鋭、その報告は後で聞くわ。今はとにかく忙しいのよ。その御チビさんで大体揃ったし。明日もう出発するわよ！ 正午発！ あなたも準備急いで！」

「らじゃ。」

鋭はちょっとふざけた感じで地球式の拳手の礼をすると、あわあわしているリツコの肩をさっきと反対側に押して、とっとと逃げ出そうとした...

第4章 リツコ、仲良しができる。

第4章 リツコ、仲良しができる。

4-1. リツコ、マシカとあう。

さっき順番を譲ってくれた先頭の人にだけ軽く頭を下げて、とっとと退出しようとした時、鋭は、急に気がついた風に「おっと！」と言いながら立ち止り、慌ててふり向いた。

「...マーシャ。今の。...決定事項でいいんだよね？」

「え？ ああ。...日本語で言っちゃったわね。」

「伝令まわすよ？」

「ええ。お願い。」

鋭は広間とその前の大廊下に居並んでいる人たち皆に聴こえるよう、すうっと息を整えて大声で呼ばわった。

ぴんと張った声だ。

「...アウレイメイ！ ミウンテア！ ソンナイ！」

列をなしていた人たちの間にざわ！ と波がはしる。

鋭は繰り返して言った。

「アウレイメイ！ ミウンテア！ ソンナイ！ ...ディウンディアーイ！」

「アワッ！ ディエンディアーイ！」

短く返事をして走り出していく、制服を着て剣や槍を帯びている人たち。

並んでいた列から慌てて離れて、がやがやと話しながら宮殿の外へ急ぎ足で去って行く人たちも大勢。

「...いま、何て言ったの？」

おそるおそる鋭に聞いてみると、

「マーシャが言ったことだよ。出発は明日！ 正午！...伝令ッ！」

それから今度はリツコの歩調を気遣う余裕は見せながらも、鋭も足早に歩き始めた。

「行こうか。...怖かったですよ？」

苦笑している。

「ううん。あたしこそごめんなさい。きのう寝ちゃったりしなければよかった。」

「いや〜、彼女は最近ずっとあの調子だから。きみが悪いわけじゃないんだよ。」

「そうなの？」

「きみとは全然関係ない理由で、ずっとものすごく機嫌が悪いんだ。八つ当たりされてるだけなのに、かばってあげられなくて、ごめんね？」ほんとにお手上げで～。と言う風なジェスチャーをまじえて謝る。

「ううん。それならいいけど...」

宮殿の外に出ると先ほどの広場の荷駄や人のざわめきが、さらに騒然となって加速していた。

「ミウンテア！ ソンナイ！ ディウンディ！」

「ミウンテア！」

「ミウンテア～！」

大声で伝達しながら駆けて行く多人数の声がどんどん遠ざかり、周囲に復唱され、また広がっていく。

「...ねえ、もしかして、鋭ってかなり偉い人なの？」

いっせいに動きだした人々や動物たちの騒ぎをきょろきょろ眺めながら気になっていたことを聞いてみる。

「...なんでそう思った？」

「だって若いのに宮殿のみんなが膝を曲げてあいさつしてたし。順番もすぐに譲ってもらえたし。とってまエラそ～な、あのお姫さまのことも名前と呼んで、ため口きいてたし。」

「うーん、そっか。いい観察力だね。」

鋭はまた苦笑した。

「まァ偉いっていうか... 皇女サマの地球時代からの友人?... というか。今は側近とか幕僚って扱いかな?... 最近じゃ、なんかヨーリア学派の... あ、さっきのあの家の連中だけど、代表ぼくなってるし...」

「...やっぱり、かなり偉いの？」

「...うーんまァ、さっき会った雄輝ほどの有名人ではないよ。まァぼくは、たんなる雑用係だねえ...」

「そうなんだ？」

「そう。それで、明日出発ってことはぼくも準備の指揮をしなくちゃで忙しくなっちゃったんで、その前に、旅のあいだキミの世話をしてくれる人のとこに連れてくからね。」

「そうなの？」

リツコは旅と聞いてもずっと鋭と一緒にだろうと安心していたので、びっくりして目を丸くした。

「うんそう。だって昨日はもうしょうがなかったからぼくのところに泊めたけど、旅のあいだずっと男のぼくの部屋に女のコのきみが同室ってわけにはいかないでしょ？ ほんとは昨日からそっちに泊めてもらうはずだったんだけど... あ、いたいた！」

広場のすみのほうに妙にたくさんの生き物で混みあっている一画があって、鋭がかまわずその雑多な群れの中に突っ込んでいくと、小鳥たちや猛禽たちや小さい動物や大型の四足獣や、それに人間の子どもや大人が、一斉にわっと散って通り道をあけてくれた。

「...マシカ！」

「リレク！」

呼ばれて振り向いて鋭の名前？ を嬉しそうに呼びかえたのは、鋭と同じくらいの年齢に見える... 大人に近いけど、まだ少女の終わり頃な感じというか... かなり若い、女の人だった。

秋の紅葉を黄葉をまぜたような華やかな色彩の巻き毛を首の後ろで革の紐でぎゅっと結んで、緑と茶色の動きやすそうな服に、歩きやすそうな柔らかい皮の長靴。

瞳の色は皇女サマとよく似た碧だ。色が白くて額の広い、すっきりした美人なところも、ちょっと似ているけど、でもずっとずっと、優しくてフレンドリーな笑顔だ。

手には草の束？ のような道具を持って、大きな黒馬の世話をしているらしかった。

「動物たちの調子はどう？」

鋭はそのまま日本語で話しかけ続けた。

「モンダイないわ。あしたシュッパツですって？」

驚いたことにその人は、ちょっと発音が怪しかったけれども、なめらかな日本語で答えた。

「そう。で、この子が例の子。頼める？」

「わかったわ。よろしくね、リツコ？ あたしは、マシカよ。」

「こんにちわ！ びっくりした。日本語が話せるんですね！」

「リレクやマーシャたちからナラッタのよ。」

「そうなんだー！」

リツコはほっとして笑った。さっきの怖い皇女サマと違ってだんぜん優しそうだし、こっちの人らしいのに、言葉が通じるなんて！

「マシカこれから時間ある？ リツコを市場に連れて行って、着替えとか旅に必要なものを一式買ってあげてほしいんだ。これ予算。足りるかな？ 諸侯会議にも出るからさ、ちょっと豪華っぽい正式な服も必要なんだけど。」

「ええ。足りると思うわ。知り合いの店が安くしてくれるのよ」

マシカは渡された袋の中身をかろく確認して、白い歯でにこっと笑った。

「あと例のあの...、言葉の術も、頼める？」

「...あら？ 先にマーシャに会いに行ったんじゃない？」

「ものっすすごい機嫌が悪くてさー。頼むどころじゃなかった。」

「あらあら...」

マシカも、よ〜くワカッタ、という感じの、身内に特有の仕種で肩をすくめた。

「わかったわ。あたしの神力じゃ弱いけど。全然ないよりマシでしょ。」

「じゃ、ごめん、リツコ。また明日ね。もしぼくに用がある時はマシカにそう言ってくれば、すぐに連絡がつくから。」

「うんわかった！ ありがとう！」

リツコが慌てて手を振るうちにも、鋭はどんどん歩いて行ってしまった。
それを後ろから追いかけてきていた人たちがわっと取り囲んで、次々に話しかけたり、書類らしいものを渡したり、左印をもらったりしている。
...やっぱり、本当は偉い人で、ほんとうに忙しかったらしい...。
リツコは、寝こけてしまったせいで結局二日間もあたしみたいな子どもの世話なんかさせて、悪いことしたなー？ と、ちょっと反省した。

4-2. リツコ、市場へ行く。

「ちょっと待っててくれる？」
鋭を見送ったあとリツコにそう言って、大きな立派な黒い馬の世話を最後まで仕上げたマシカは、まわりの人間たちや動物たちに挨拶らしい言葉をかけてから、広場のすみの水場に行って手と顔を洗い、手布で簡単に拭いてから、髪をほどいた。
ふわりと広がった朽葉色の巻き毛は、とても華やかでよく目立つ。
「きれ〜い！」
リツコが思わず誉めると、マシカはにこっと笑った。
「そう？ ありがとう。リツコの髪もすてきよ？」
「ええ？ あたしのなんか焦げ茶色でクセ毛でへろへろで〜。全然ダメ」
「そうなの？ ダレムアスでは《大地の色》って言って、一番いい色だけど？」
「そうなの？」
「ええそうよ。ほら可愛い。あたしたち姉妹みたいね？」
マシカはそう言ってリツコの固く縛っていた癖毛もほどいて、ふわっとおそろいな感じに広げてしまった。
リツコは初対面なのにいきなり「姉妹みたい」とか親しくしてもらえたのが嬉しくて、

「えへ〜」と照れた。
マシカはそんなリツコを見てにこっと笑って、それからちょっと下がった。

何をするのかな？ とリツコがキョトンとして見ていると、リツコのことを上から下までじっくり観察している感じで、それからもう一度にこりと笑い、また近づいてきたと思ったらリツコの両頬に両手を添えて、そっつと顔を合わせて、氣息を整えて、...歌うように、小さく叫んだ。
「ま〜りえった！ れっと、せっと、えっ！」...（ことばよ、通じよ！）
「え？」
「まうれいにあ、あむにや、あむねえむね？」...（わたしの言うこと解る？）
「えっ？ ...解る！ ...あれ... ???！」
リツコは目を丸くした。

何がどうなったの...??

「マーシャは神力ってヤクしてるけど、鋭はマホウって呼ぶわね。あたしは血の力は弱いから、マーシャみたいに自分の言ってることを相手に解らせる術まではむりなの。効き目も弱いし、時間も短いと思うんだけど... とりあえず、それでやってみましょう？」

リツコは意味がまったく解らなかったが、とりあえず「うん。」とうなずいた。

マシカは追いかけて来ようとした小鳥たちや小動物たちにはちょっとあっちへ行っただけで言いつけてまとめて追い払い、とても楽しそうな顔でリツコと手をつないで、ずんずん市場の奥に分け入っていく。

リツコはとにかくもうきょろきょろしてしまっていて大変だ。質問したいことを全部聞いていたら一歩も前に進めなくなるくらい、見るものがすべて珍しい。

長年使いこまれて黒光りしている木彫りの柱の大きな立派な天幕の店や、柱に布の屋根を張っただけの簡単な屋台。二階建ての大きな木造の飲食店に、屋根と柱だけで壁がないつくりの大皿に大盛のお惣菜を盛り上げて売ってる食堂。

色とりどりの布地屋、服屋、装飾品の店、革細工の店。野菜の店、果物の店、ちょっとだけぎょっとする眺めの、生肉の量り売り？ の店...

占い屋さんかしらと思うかんじの地べたに座った偉そうなお婆さんや、兎の人や羊の人たちを相手におしゃれな毛刈りや毛染めを施している店。

...ひたすらまわりじゅうを見回しながら歩いていたリツコは、少し遅れて、自分のほうも周囲の人たちから、びっくりした目で眺められていることに気づいた。

「...チケット？」... (地球人?)

「チーイケットィ？ アナン？」... (地球人か?)

「あ～やけたていか！」... (おっとびっくり！見てごらん！)

市場を行き交う通りすがりの人々が、リツコのTシャツと短パン姿を見て目を丸くして声をあげる。

(.....え？ なんてあたし、言ってる意味が解るの？ チケット...ってチケツト？ 英語？ 切符？

...じゃないよね...???? こっちの言葉だと《地球人》って意味になるの...????)

まったく解らないはずの言葉が、ちょっとだけ遅れてだけど、だいたいの意味がするっ

と判る。

まるで頭の中で映画の字幕でも読んでみたい感じがした。

(???????...これが、さっきマシカがかけてくれた、《言葉のマホウ》とかいうやつ効果...??)

目を丸くして混乱しているリツコをしりめに、はぐれないように手だけはぎゅっとつないで、すたすたと前を歩いていたマシカが、ひょいと曲がって一軒の店に入ろうとした。

ので、続けて敷居をまたごうとしたリツコを睨んで、正面から鋭い声をあげた男がいた。

「エベルディン、スレイガ！」...(出て行け、敵め！)

「...あんま、のうでいあ、あーろんでーい。」...(なにか御用で？ お客さん)

その隣にいた店員らしいもふもふの人も、誰だこの怪しい奴め、という顔で、リツコを見ている。

リツコは知らない人から突然（敵め！）と言われたらしい事に心底びびって固まっていた。

「まるまっかあれ。」...(あたしの連れよ。)

どうやら鋭と同じくらい周りの人たちに顔が知られているらしいマシカがぴしりと言うと、周囲のざわめきが収まった。

「ジョルディイリヤン、ダレッカ。リレキセース、オルディイイン。」...(諸侯会議に出るお客様。リレク様からお預かりしたの。)

出て行けと言った男の人が、困った顔で不機嫌そうに口をつぐんだ。

「あんに～や、マシカ！」...(いらっしゃい、《星の娘》！)

奥から転がるように店主らしい人が出てきてにこにこ挨拶してくれて、あとはもう買い物が大変だった。

あれやこれやと出してくる衣類や旅行用品？ の山を見て、

「ちょっと待ってマシカ！ こんなにたくさん買っても背負いきれないよ？」

リツコが悲鳴をあげると、

「馬車で運ぶから大丈夫よ」とマシカは余裕で笑った。

マシカがかけてくれた言葉の魔法？ とやらのおかげで、相手が言っていることは何語であろうとなんとなくリツコには意味が解るけど、リツコが喋ってる日本語は、相手には全く通じてないらしい。

半分はマシカに通訳してもらいながら、マシカにもうまく翻訳できない時ほどにかく身振り手振りで、好きな形や嫌いな色や、肌触りがどうかを色々説明しまくって、それから厳選したものだけを試着してみてさらにあーだこーだと、似合うとか似合わないとかみんな品定めをして、最後にマシカが押しの手で、まともな商品の強気の値切り交渉？ までしてくれて...

一通りの品物を決めて支払いも済ませて、配達まで頼んで店を出た時には、リツコはもうかなり頭が疲れてしまって、喉も枯れて、おなかもぺこぺこだった...

「あらあら... だいじょうぶ？」

マシカが気を利かせて、道すがらの屋台で甘いものを食べさせてくれる。色とりどりの豆を甘く煮たものの中に何かぶにっとした食感のものが入った、あんみつとぜんざいが混ざったような味の可愛らしいスイーツだ。

「...おいしーい！」

叫んだリツコに、マシカは笑った。

「元気でした？ じゃ、ちょっと遠いけど私のテントまで歩きましょう。」

「あ、ちょっと待って！ あたし今朝、洗濯物を干してきちゃったの！」

「センタクモノ？」

なぜかこれがマシカに通じなかった。リツコはがんばって身ぶり手ぶりで説明してみた。「服を洗って～、干して～、こう...。昨日泊めてもらった部屋の中に、干して、置いてきちゃったの！」

「...ああ。洗った。干した。で、...乾いた？」

「そう。洗濯物。」

「センタクモノ。」

マシカはうんとうなずいた。

「リツコ、わたしのニホンゴまだまだみたいだわ。旅のあいだ、たくさん教えてね？」

「うん！ こっちの言葉も教えてね？」

リツコとマシカはすっかり意気投合して、大の仲良しになった。

4 - 3. リツコ、天幕に泊まる。

じゃあセンタクモノを取りに一旦戻ろうという話まで進んで、リツコは困った。

「どうしよう！ あたし帰りも鋭と一緒にだと思ってたから、道を覚えてない！」

「ヨーリア学派の宿坊でしょ？ わかるから大丈夫よ」

「ほんと？ よかった～！」

しばらく歩いて、なるほど見覚えのある植え込みの門のちかくまで案内してくれると、マシカはその手前の薬草の店で買い物をしてくるから、その間にセンタクモノをとってきて、と言う。

うん解った！ と、ひとりで門を入れて、見覚えのある玄関まで行って、勝手に上がるのもまずいかと思って、とりあえず声をかけてみた。

「すみませ～ん！ ... 誰かいませんか？」

「... もうどれいやなっ、えんにやえん。」... (*****)

(??? ... あれ... ! ???) と、リツコは困った。

さっきまでは、相手の話す声と一緒になんとなく判っていた「ことばの意味」が...

また、解らなくなってる！

魔法？ をかけてくれた時にマシカが言っていた「時間も短いと思うんだけど」の意味のほう判ったー！

... と思って焦りながらも、幸いにして最初に出てきたのが今朝リツコを案内してくれたあの女の人だったので、もう一度「センタクモノ！」という身振り手振りをして、「取りに行きたいので部屋に入ってもいいですかー？」という説明の許可を得るのは、そんなに難しいことでもなかった。

どうやら鋭の私室だったらしい今朝の部屋にもういちど入らせてもらって、洗濯物がきれいに乾いていたのをこれ幸いと、急いで畳んでリュックに詰め直す。

「どうもすみません！ ありがとうございます！」

ぺこりと頭を下げてお礼を言って退出すると、

「まうれいであ～。」

女の人にはにこにこして、手を振って見送ってくれた。

それからまた教えられた店の前に戻って、誰かと談笑していたマシカと合流して歩きだしながら、もう言葉がわからなくなったということを伝える。

「... う～ん、半日モタナイのね...」

マシカはちょっと悔しそうな顔をした。

すぐにまた術をかけなおしてくれるかなと思ったけど、そういうわけでもないらしい。

「もしかして、実はすごく難しいとか、マシカがものすごく疲れるとか... する？」

「そんなことはないけど。だってもともとあの三人といっしょに旅してた時に、あたしだけ言葉が通じなくて不便だったから覚えようと思って、意味が解るようになれって、自分で自分に毎日かけてた術なのよ。... でもあれ、かかっている間、アタマがとても疲れ

るでしょう？」

「...そう言われてみれば、そうかも...。」

頭というより、むしろものすごくおなかがすいたけど。と思いながらリツコはうなずいた。

「今日はもう眠るだけだから、また明日にしましょう？」

それから日本語で色んな話をしながら平坦な道を《仮皇都》とやらの街の外れに向かって歩いて、沈み始めた夕陽と夕焼けと一番星を眺めながら三十分くらいで、マシカと仲間たちが寝泊まりしている旅天幕の群れの臨時の村？に着いた。

マシカの仕事は《薬師》と言って、医者と獣医と薬剤師と看護師と産婆さんと保健婦さんと学校の先生と地域の戸籍係?...まで兼任しているような、けっこう大変な職業の集団らしい。

着いたのが日暮れの後だったし、みんな明日の出発に向けて忙しそうに飛び回っていたので、ちょうど通りすぎた人たちにだけ簡単に挨拶して、大天幕で温かい夕飯だけ食べさせてもらって、リツコたちはすぐにマシカの小さい天幕にひっこんだ。

何枚かの革と布を張り合わせて笹と木の枠で支えた一人用の天幕は、二人で入るとちょっと手狭になったけど、居心地よく乾いて清潔で暖かくて、きちんと整理整頓の行き届いた、いかにもマシカの部屋！という感じがする、すてきな隠れ家だった。

「マシカは用意はしなくていいの？」

「たぶん明日出発になるだろうというのは昨日のうちに解っていたので、もう準備は済んでいるの」

「そうなんだ」

「でも明日は早起きしなくちゃだから、今日はもう寝ましょう？」

「うん！」

寝間着に着替えて、くせ毛の髪の毛の梳かしっことかして、くすくす笑いながら内緒の話なんかして。

それからマシカとリツコは本当の姉妹よりも仲良しになって、一つの寝床で寄り添って一緒に眠った。

ただし問題は、リツコのために追い出されてしまったマシカの沢山の同居動物...マシカが言うには「押しかけイソウロウの」...動物さんたちだった。

ぶうぶうきやあきやあびいびいと、それぞれの鳴き声で文句を言いながら脇の長椅子に移動させられた栗鼠や仔猫や小型犬や小鳥やフクロウや翼の生えた小さいへビかトカゲみたいな謎の生物や...その他いろいろ...が、けっきょく朝になってリツコが目覚ま

してみると、二人の少女のあいだとまわりじゅうに動物たちがみんなぎっしり詰まって乗っかって、一緒に眠っていたのだった…。

4 - 4. リツコ、早起きする。

翌朝、天幕のすぐ上で鳴き交わす鳥たちの声がすごくて、リツコはびっくりして目が覚めた。

すでに開け放ってあった天幕の戸布の向うに見える空はまだ夜明け前で、外に出てみると東？ の山並みの上の薄い金色の線から、反対側のまだ暗い空の色と最後の星の瞬きまで、雲ひとつない見事なグラデーションだ。

…う～ん、地球と同じに見えるんだけど…と、伸びとあくびと深呼吸をしながらリツコは思った。

一番の違いは空気だ。

すごく何というか…すがすがしくて…さらりとして…深いけど透明な感じで…とにかく美味しい。

そういえば昨日それを言ったら鋭が「この世界には公害も原発もないんだよ！」と笑ってた。

「…あら、起きた？」

広い空の下で美しい髪に櫛をかけてふんわりとまとめていたマシカがふりむいてにこりと笑った。

「今日もお寝坊さんなのかと思ってたわ」

「うーん。だって昨日は早く寝たし。マシカがいてくれたから嫌な夢も視なかったし。」

「うん。よく寝てたわね。ミーボナンにほった踏まれてるのに全然起きなかったもの」

リツコは苦笑して、自分も起きる仕度を始めた。

寝ている間にベッドの上は動物だらけで、まだ寝こけているやつもたくさんいて、先に目を覚ました連中は今もマシカの髪にまとわりついたりして、仕度の邪魔をしている。まわりの天幕の薬師たちもみな起きだしているようで、あちこちで出発の準備を始める賑やかな物音や声がしていた。

寝間着のまま教えられた川辺に降りて手と顔を洗い、その水場より下流に用意された木造のトイレ！（川の流れの上に付き出していて、床に穴が開けてあって、全自動？ 水洗式？ だ…）で用をたす。

言葉が判らないまま、すれ違う薬師の人たちにはとりあえず大声で「おはようございます！」と挨拶しておく。

戻ってきて、はたと悩んだ。

「ねえ？ マシカ。今日って何を着たらいい？」

「あ、そうねえ...、どれにしましょうか...？」

昨日買ってきた装束類の小山と、自分が持ってきた少しの着替えを並べて、天気と気温を考えて、マシカの意見も聞いて、結局「地球式」の略礼装？ が良いだろうということになった。

白いTシャツに動きやすい七分丈の水色のガウチョパンツを合わせて、その上から、おしゃれな私立校の制服みたいな感じのギンガムチェックの夏ワンピースを羽織って。前ボタンは適当にはずして開けて、ちょっと「こなれた感じ」におとなっぽく、着崩してみる。靴はやっぱり履きなれたスニーカーのままにした。だって相当、歩く？ らしいから...

「...きゃー、リツコ可愛い〜♪」

そう褒めてくれながら、マシカのほうは以前から決めてあったらしい衣装にさっさと袖を通して

やっぱり昨日の仕事着？ と同じような、日本で言うと作務衣？ みたいな動きやすそうなデザインだけど、超新品で、手織りらしい深い緑色のつやつやした布地の模様がすごく手が込んでいて高級な感じで、民族調っぽい刺繍とか金色の球飾りとか色々付いていて、軽くて薄い布の同色のスカーフのようなマントもふわりと羽織ったら、とても上品で、清楚で華やかだ。

「きゃー！ マシカすてき！ とっても綺麗！」

リツコが手放しで誉めると、うふんと得意そうに笑った。

「そうでしょう？ この布を織るのは苦労したのよ！...リツコ、髪型はお揃いにしましょうよ！」

可愛い髪飾りも貸してくれて、リツコが持って行った手鏡で映して満足して見ていたら、「こんな薄い小さな鏡！ こっちには無いわ！」とマシカがすごくびっくりして、もうそれだけですごく盛り上がりながらの身支度がやっと終わると、マシカは昨日の昼にやってくれたように、ちょっと気分を改めるしぐさをして息を整えてから、リツコの頬に手を添えてぴったりと額を当てて、唱えた。

「...ま〜りえった！ れっと、せっと、...えっか、...ろう！...ぐん！」

(あれ？ 昨日と少し違う...)とリツコが思う間もなく、...(ことばよ、通じよ！...せめて日暮れまで！ もつように！)

...という意味が、頭のなかに字幕が映るような感じで、急に流れ込んできたのだった...

第5章 リツコ、旅に出る。

第5章 リツコ、旅に出る。

5-1. リツコ、紹介される。

ちょうどその頃に朝日が眩しくさしこんできた。からりと晴れた秋の初めの上天気だ。『朝ごはん出来てるよー、早く食べちまっとくれ!』と、食堂? の係の人から声がかかったので大急ぎで出かけて行った。

『おはよう!』とか『よく眠れた?』とかそれぞれの言葉で色々声をかけてくれるマシカよりもはるかに年上のおとなの薬師の人たちに、リツコは日本語と手振り身振りで元気に挨拶を返しながら昨夜と同じ大天幕に行って、色々な野菜とか豆とかキノコ? やハンペン? のようなものがどっさり入った温かいスープと、穀物の粉をこねて焼いたクレープのような味のない薄焼きに塩味のアんこか栗きんとん? のような濃厚なジャムをはさんだ主食を好きなだけ、おなか一杯食べさせてもらった。

食器は各自で持参制で、ダレムアスに着いた時に鋭からもらった一式を忘れずに持っていった。

それからリツコがまた教えられた上流側の水場に行って二人分の食器を洗って戻って拭いて片づけているうちに、マシカは手早く整然と自分の天幕の中のを幾つかの大きな木箱と布袋の中に詰めて行き、リツコもがんばって出来ることは手伝ってみて、最後に一緒に天幕を畳むと、うんうんと担いで何往復かして、少し離れたところに停めてあった木製の荷馬車に運び入れた。

それからマシカが小型の馬のようなロバのような、ずんぐりして大人しい四足の動物を連れてきて荷馬車に繋ぐと、出発の準備は完了だった。

『...ごめんなさい。先に行くわねー!』

マシカが声をかけるとまだ準備中らしい薬師の皆は口々に返事をして、手を振って見送ってくれた。

荷物満載の台車を牽いた小型馬の手綱を引いて、人間二人はその横をとことこ二本の足で歩く。

「これは《白の街道》というのよ。日本の言い方だと《国道》ってことになるんですけど。」マシカが教えてくれる。

夕べはもう薄暗くなった中を星を見上げながら歩いて来たので気がつかなかったが、歩

きやすいように白い石畳できちんと舗装された、幅は4メートルほどのしっかりした道だ。

気持ちの良い朝の景色もしりめに慌ただしく人馬が行き交う街道沿いの、目にはいるものをあれこれ教えてもらいながら、昨日歩いてきた順に逆に戻ると街の中を通過、またあの《仮皇宮》前の大きな門に着いた。

「あ、いたいた、鋭！ 雄輝！」

「マシカ、おはよう！」

「お！ 似合うぜそれ。綺麗だな！」

「ミア・マシカ！ マウレイディア！ アノネエル、ソナ・カイネティケ？」…(《星の娘》殿、おはようございます。そちらのかたが地球からの御客人ですか？)

「エウネア、ソレラアウグ。モレラディン・エラ。」…(ええそうですモレラ様。先日は失礼しました。)

門に入ってすぐの昨日と同じところに鋭と雄輝と、他にもたくさんの重臣ばい人たちが集まっていた。

みんなきちんとしたおしゃれというか礼服とか正装らしい仕度で、ぱりっと格好良く整えている。

「ミア・リツコ、マウレソイディア。オルレア・オルレ・ドラウグ。」…(リツコ殿、お初にお目にかかる。それがしドラウグと申す者。)

「あじょれ・りつこうにゃ。あにのれの、そな。」…(はじめまして、リツコ姫。わたくしはソナですわ。)

「あいどれーが！ だれむあすーな！」…(《大地世界》へ、ようこそ！)

「アイドレーガ！ アル！」…(歓迎しますぞ！)

初めて会う偉そうな大人の人たちもみんなマシカにだけでなくリツコにまで腰を下げてきちんとした挨拶をしてくれるので、リツコも一生懸命「おはようございます！ 一昨日はごめんなさい！ 地球から来た高原リツコです！ よろしくお願ひします！」と日本語で言って頭を下げた。

「リツコ、おはよう。それ可愛いね」

「おー、地球式の服にしたんだ？」

鋭と雄輝がお世辞でもなく本気で誉めてくれたので、リツコは照れて、えへへと笑った。

マシカがちょっとだけ心配そうに二人に聞く。

「どうかしら？ 一応こっちの服もちゃんと用意したんだけど、『地球からの御客人が諸侯会議に参加する』ってことは、みんなに宣伝したほうが良いのよね？」

「うんそうなんだ。この服だと一目で地球人で判るね。さすが！ ぼくじゃ思いつかなかったよ。やっぱり女の人に任せてよかった。」

「あら... 褒めても何も出ないわよ？」

鋭に褒められてマシカがすこし照れて頬を赤くしたので、リツコはちょっとあれっと思っただけで眺めた。

それから少し打ち合わせがあって、せっかくだからと、リツコはなるべく目立つように、後方の荷馬車隊ではなくて先頭に近い鋭の馬の鞍の前に乗せてもらうことになった。

牽いて来た荷馬車は雄輝たちの部下の人が列の後方の商人隊に預けに行ってくれた。

「じゃ、私はマブイラに騎せてもらうことにするわ」

そう言ってマシカがどこから連れてきたのは... なんと！

見事に枝分かれした角を堂々と掲げた、ものすごく立派な... 銀灰色の雄鹿だった。

「..... マシカが... 鹿に乗る.....」 ついつい小声で言ってしまうと、

「... ね、やっぱりちょっとそこで笑っちゃうよね？」 と、鋭がこそっと相槌を打ってくれた。

5 - 2. リツコ、式典に参加する。

それからどんどん広場に人が増えてきて、中央に列をなした着飾った旅装束の人たちと、周囲に並んだ見送りらしい服装の人たちとで、ぎっしりと隙間もないくらいになっていった。

(昨日の山のような荷馬車隊や荷駄や荷車は、後方と脇に順序良くきちんと寄せられていた。)

『... 刻限！』

『まもなく！』

『刻限！』

もうこれ以上は広場に人が入れない... という頃、ドンドンと威勢よく大鐘と太鼓が打ち鳴らされた。

居並んだ人たちが、ざっと威儀を正す。

『みな、御苦労！』

例のおっかない皇女サマが碧緑の髪を豊かになびかせ、みごとに華麗な金と朱色の正装で着飾って、昨日マシカが世話をしていたあの特別に大きくて立派な黒馬にまたがり、堂々と広場の中央を分けて進み出てきた。

『少し長い旅になりますが、みな無事であちらへ着くように！ 留守の者たち、不安もあろうが、必ず和平を為して来る。安んじて待つように！』

『...道中、御無事で！』

留守役の代表らしい身分の高そうな衣装の年輩の女性が門の脇から進み出て来て、深々とお辞儀した。

みな、唱和する。

『道中、御無事で！』

『...出発！』

雄輝が、みごとな金鹿毛の馬にひらりと飛び乗り、皇女のすぐ後ろ右脇にぴたりと並べて号令を発した。

『出発！』

『...出発！』

伝令が次々と声を並べて叫び伝えていく。

「...行くよ？ 笑って！」

鋭は白銀色の優雅な一角馬に身軽に騎乗すると鞍の前にリツコを引き上げて乗せてくれ、皇女殿下のすぐ後ろ、雄輝と並ぶ左側の位置に、するりと当たり前のように並んだ。

(.....えーーーーーッ！！！！)

つまり、リツコの位置するところは、一国の代表として和平会議の旅に出る皇女サマの、すぐうしろ。という順番だった。

そのまた後ろに、偉そうな重臣のお爺さんとか、ものすごく賢そうな顔立ちの年輩の女官たちとか、着飾った姫君たちの集団とか、武装した兵士の隊列とか...何百人もいそうな大行列が、堂々と並んで続く。

(.....嘘っ！ 聞いてなーーーーーい.....ッ！)

心の中で絶叫してみても後の祭り。リツコはとにかく、(場違いすぎる！)と内心で絶叫しながらも、鋭たちに恥をかかせてはいけない！ と思って...

必死で愛想笑いを、してみた...

伝令や先導役らしい護衛の兵たちがまず門を出て、押し寄せてきていた見送りと見物の

人たちをもう一步下がらせる。

続いて堂々とした歩みで皇女サマと雄輝と鋭とマシカの四人が門前に入る。

ものすごい、歓喜の歓声が爆発した。

さらにゆるゆると前に進むと、ますます興奮が高まった。

そして。

その歓声とはまた別のどよめきが、背後からわっと起こったので、リッコは思わず振り向いた。

…龍だ…！

きのう見たふかふかの芝生状の長い草花壇に金銀の巨大な龍が二匹、長々と横たえられて置いてあるのは人波の向うに垣間見えてはいたが。てっきりお祭りの縁起もの飾りだと思っていた…ら。

二頭が揃って音もなくふわりと宙に舞い上がり。

テレビで見た長崎のお祭りの龍のようにくるりくるりと旋回しながら悠々と天高く昇っていく…！

『…我は西皇家よりの使者マフィラ。』

『おなじくミフィラ。』

『…出立を、見届けたり！』

そう大音声で空から呼ばわって、ふわーっつと、さらに高く昇った。

『西皇家皆様によしなに！』

皇女が返礼して見送る。

青い天空に舞う金銀の華麗な龍の美しさに、居並ぶ人々は、歓呼と絶叫と噂話で、もうぶんぶん唸るハチの巣をぶちまけたような有り様だった。

5 - 3. リツコ、誇大広告される。

後から思いかえしてもつくづく、前から二番目なんて身の程知らずの大それたポジションに強制参加じゃなくて、ただの沿道の観客でいたかった...というのが、リツコの素直な感想だった。

豊かな碧緑の巻き毛を風になびかせて紅朱に金糸の刺繍織のあでやかな衣装をまとい、その腰には同じ意匠で飾った華麗な大剣を佩き、美しい無紋の黒毛の大戦馬にまたがった、華麗なる美人皇女殿下をその先頭に。

右後ろに並ぶ金色馬にまたがるのは真紅と漆黒の戦士装束の背中に鷹の両翼を堂々と掲げている雄輝。

左後ろに並ぶのが白銀の一角馬にまたがり青と水色の礼装をきちりと整えた、絶世の美貌の青年の鋭。

二人のすぐ後ろにびたりとつけて、堂々たる枝角をそびえ立たせた大鹿に騎る薬師装束の美女マシカ。

(...鋭の鞍にちょこんと載ってるあたしみたいな小荷物なんかこの際この絵づらの中では絶対に邪魔だ。...とリツコは真剣に思った...)

『...見ろよ！ あのかたがたが戦を終わらせてくれた四軍神だ！』

『なんてお美しいのかしら皇女様！』

『きゃーーーっ！ リレク（鋭）様すてきっ！ お凛々しいッ！』

『ちょっと何よ、あのチビ？』

『泥球界（地球）からのお客人らしいよ。何でもさる有力な部族の長の縁者とか』

『泥球界の？ 王族なの？』

『お使者様なんだから、そうじゃないかい？』

(ええええっ！) と、聴こえてしまったリツコは内心で絶叫した。

いくらちょっとだけオシャレめなワンピースを着てみたからって、実は通販のしかもタイムセールの特典で買った安物だ。『さる有力な部族の王族』...ってなに〜？！

たしかに大祖母様は朝日ヶ森の学長だけど、それって別に王家でもなんでもナイわよ！??

...むしろ今この国の言葉が喋れなくて良かった。と、つくづく思った。

話が出来たら絶対に、必死になって噂を否定しにまわってしまったら...から...

「...鋭ッ？ なんかあの人たち、すごい大誤解してないッ？」

思わず小声で叫んでしまったリツコの赤くなったり青くなったりの百面相を、ひとのわるい笑顔でにやりと無視して、行列が街から出るまでの間中、鋭はとにかく、「笑って！ほら笑って！ほら手を振って！」としか、言ってくれなかった…。

その鋭自身も率先して、まわりじゅうに手をふり愛想をふりまき、観るひとすべてをその超絶美形な笑顔でうっとりさせさせていた…。

そんなこんなで街から出るだけでもしばらくかなりの時間がかかり。

その間、二頭の龍たちは、上空でゆったりと浮いて旋回しながら「出立の騒ぎを見届けて」いるようで、街から行列が出るころに、ゆっくりと挨拶のように尾を振って、西の空へとすうっと飛び去って行った。

「…ねえ鋭…。もう笑うのやめていい…？」

ようやく道沿いの見送りの人が少なくなってきて、やっとそう聞けたころには、むりやり笑い続けていたリツコの顔は、ばりばりに強張っていた…。

「うんもういいよ。お疲れ様？ ちょっと水でも飲むかな？」

鋭は自分も「あ～疲れた！」とかぼやきながら、普段の雰囲気に戻って、馬上で揺られながらだけど竹筒の水をリツコに先に飲ませてくれて、自分も仰向けになって飲み尽くしてしまった。

それからまたゆっくりと移動して《白の街道》沿いを朝に歩いて来た西の方に戻ると、途中の河原で移動村の天幕はすっかり畳み終えて待っていた薬師のおばさんたちが一行のために休憩用のお茶やお菓子を整えて待っていてくれた。

やっとリツコはひと息ついて、その後はマシカの大鹿と一緒に乗せてもらって進んだ。

薬師の一行のうち、半分くらいが荷馬車隊を率いて皇女の行列の最後尾に入る。あとの半分くらいは、列には入らずそのまま流れ解散するらしくて、手を振って見送ってくれた。

5 - 4. リツコ、爆睡する。

休憩をはさみながらゆっくり進んで夕暮れ前にその日の野営地らしい場所に着き、地元の人たちが出迎えの野外宴会の用意をしてくれていて、一行が（いちばん凄い勢いで皇女がまっさきに！）焚火のまわりで飲み食いを始めた頃に、ようやく列の最後尾の荷馬車隊がごろごろと追いついてきて、大量の食糧や天幕をせっせと降ろし、さらに追加の大きな火を起こして、出迎えてくれた地元の人たちへの返礼を兼ねた大人数分の食事の仕度を始める。

荷を降ろし終え、その早目の晚餐をふるまわれた後は、そのまま手を振って別れて元の街へと戻る人たちも百人くらいいた。

「リツコ、今日もあたしと一緒に天幕だけど、いいわよね？」

あいかわらず、やっぱり追いかけて来た小鳥や小動物たちの群れに囲まれながらマシカにそう言われた頃、ちょうどリツコの「聞いた話が解る魔法」は解けてしまったのだった…。

マシカの小天幕と一緒に張って、寝床の仕度が整ったとたんに、着替えもせずに爆睡してしまったことしか、覚えていない…。

そんな風にして、この旅は始まった。

第6章 リツコ、旅をする。

第6章 リツコ、旅をする。

6-1. リツコ、看護助手を試みる。

そこからの旅の日々は最高だった！

夜は毎晩マシカと一緒に天幕で動物たちに囲まれてぐっすり眠って、朝は鳥たちや動物たちの騒ぐ声で賑やかに起こされて、マシカに《言葉の魔法》をかけてもらってから冷たい川や泉の水で女性陣みんなときゃあきゃあ一緒に水浴びして身支度を済ませ、大天幕で出来立ての温かいご飯を交代で食べて、えいやっと自分たちの天幕を畳んで荷物を荷馬車に乗せて、準備の出来た者から順にばらばら出発して、歩いたり馬の乗り方を練習させてもらったり、疲れたら荷馬車に便乗して昼寝しながら運んでもらったり。

お昼ご飯はそれぞれ勝手に適当に、停まって休憩したり荷馬車でのおんびり進みながらだったり、朝に配ってもらったお弁当プラス各自で用意してあるお菓子や副菜や果物なんかも食べて、午前と午後のお茶休憩もだいたい同しような感じで、必要があれば街道沿いに一時間おきくらいの間隔で用意されている手水屋（トイレ）にかけこんで。

珍しい皇女行列を一目見ようと街道沿いの空き地に集まって宴会しながら待っていたりする人たちにお茶に呼ばれたり、とれたての果物をもらってお返しに都のお菓子をあげたり。

途中に街があれば市場や宿屋をのぞいてあれこれ買い込んだり...

遊んだり喋ったり歌ったり競争ごっこをしたり色々しながら、とにかく西へ向かって何百人かの隊列が前になり後ろになりしつつ《白の街道》をのおんびり進み続けて、陽が傾きはじめる頃には行列がすっかりばらけきって前後がお互いに見えなくなってしまった状態で、ばらばらと宿営地にたどりつく。

街道沿いの警備を兼ねて常に半日分ほど前を進んでいる雄輝たちの先行隊が、近在の町や村から手配されて来る係の人たちと一緒に早めの夕飯というか午後の遅いお茶？の支度をして待っていてくれるので、この時だけは先行隊と一緒に卓を囲んで、皇女や重臣や警備や經理の人たちは中央の卓のまわりで食べながら打ち合わせや何かを済ませて。

いつもかなり遅れて来る商人隊や姫君隊が、それより半日遅れで出発したはずの後衛隊の人たちにお尻をせかさながら夕焼けが最も華やかに燃える頃合いに慌てて迫り着いてきて急いで天幕を張り、ようやく今晚の集合と点呼が終わる。

待っていた先行隊は後衛隊との情報交換だけ済ませると暗くなりきる前にまた出発してしまうので、みんなで手を振って見送って。

それから残った面子は毎晩のように、『地元の人が用意してくれた歓迎夕飯への返礼』という名目で豪華な晩餐会の仕度を始め... 昼の仕事を終えてから皇女たちを一目見ようと駆けつけてくる地元の人たちで、参加者は見る見る膨れ上がり...

日が暮れると同時に大きな篝火が焚かれて豪勢な酒宴というか、むしろ中央に一段高い舞台が出るので盆踊りのようなお祭り騒ぎが始まり...、飲んだり歌ったり笑ったり踊ったり、大人のひとたちは口説いたりフラレたり、恋仲になって二人で姿を消したり?... その噂話をして盛り上がったりの大賑わいになる。

リツコも眠くなるまでは果汁とお菓子で興味津々でつきあって、《言葉の魔法》が切れる頃にマシカと一緒に天幕に引き上げて、あとは眠くなるまで二人でお喋りして、色々なことを教えたり習ったりしあった。

「あ、そうだ。ねえねえ！ マシカって、鋭のことが好きなの？」

大人たちが盛り上がっていた恋バナについての噂をマシカに教えてもらって、そのどさくさにまぎれてリツコは聞いてみた。

「...まさか！ 違うわよ。あたしが一番好きな人は別にいるもの... なんでそう思ったの？」

「このあいだ、鋭に褒められた時に、ちょっと赤くなってたから…」

「やーねー。それだけ？ あのね、鋭って髪が短かった頃はそんなでもなかったんだけど、最近、典型的なヨーリア学派風の髪型になっちゃったでしょ？ それで… 笑ったりすると… ちょ〜っとだけ… 似てるのよね〜、…雰囲気！」

「…そうなんだ〜w」

リツコはにやりと笑って、もっと詳しく聴きたかったが、

「こどもは早く寝なさい！」とかマシカに言われて、きゃあきゃあとふざけっこになって、そのまま眠ってしまった。

そんな毎日だった。

ただしマシカは旅団中の参加者全員の健康管理をする《薬師代表》という役職も兼ねていたので、日中も合間合間に行列のすべての人と動物の様子をチェックしに廻ったり、体調の悪い人がいれば薬草の調合をしたりしていて、なかなか忙しかった。

数百人規模の旅団中に二十人ぐらいいる薬師の集団は、日によっては本隊よりも先に行き、地元の村々の移動健診会みたいなことをして日暮れ後の遅い時間に追いついて来たりもしたし、時には沿道の住人から往診の依頼があったりして、夜中でも大鹿にまたがって急いで出かけて行ったりする。

リツコも始めのうちはそんなマシカについて一緒に行ったり簡単な作業なら手伝ったりもしてみたのだが、どうやら薬師の才能はまったく無いようだった。

大体、血をみるのがけっこう苦手で、治療の手伝いをしようと思っても、どうしても傷口から目をそらしながらの作業になってしまうので、うまく出来るわけがない。

針と糸で大きな怪我を丁寧に縫い合わせたりまでするマシカは若いのに凄いなあとリツコは心底尊敬したが、たいがいの薬師は今のリツコくらいの年齢には助手から一人立ちして一つの街や村を預かり、プロの薬師として働き始めるものだという。

ちょっとそれはリツコには無理そうな職業だった。

6-2. リツコ、司書になる。

そんなわけでむしろ邪魔になるだけだと自覚してからは往診について行くのはやめたので、時々リツコは夜更けに一人でとり残された。そんな時は鋭が自分の天幕に呼んでくれて淋しくないように気を使ってくれたが、旅のあいだも多忙を極めている鋭の天幕に泊まると、しばしば真夜中に皇女サマ本人や重臣や近衛隊の人達などが訪ねて来るので、『言葉の魔法』が切れた後で一言も理解できない面倒くさそうな話し合いの気難しい声だけをBGMに眠るはめになったりするのが、少々難点だった。

こちらの世界では「マダロ・シャサ」（雄々しく輝ける者）と呼ばれている雄輝が旅団の警備の責任者なら、「リレクセス」（鋭利な短剣）とか「リレキエイセス」（鋭い切れ者）と呼ばれていることが多い鋭のほうは、行列全体の食糧や資材の調達と管理と支払いとか、現地の人たちの応援要請の手配とその返礼品の用意とか、諸々の雑用全ての総責任者らしくて、行路と旅程の管理表とつきあわせて天気予報？ まで自分で観測した挙句、必要とあらば皇女サマに「天気を良くする魔法」まで頼みに行ったりするのが、担当の範囲らしい。

さらにはヨーリア学派の長としては医術と薬学の心得もあるそうで、しばしばマシカたち薬師集団と一緒に出張検診に行ったり、地元の街の急病人や怪我人の治療もしていた。ほんとに忙しそうだった。

リツコは移動の間ただ遊んでいる自分が申しわけなくなったので何か手伝えることがあればやってみるけどと申し出してみた。

「ほんと？ じゃあ、やってみてほしいことがあるんだ。無理ならいいけど。」

まんざら嘘でもなさそうに喜んだ鋭に連れられて、「ヨーリア学派」と呼ばれている学者さん風の集団の大荷物を積んだ箱馬車隊のところへ案内された。

『オルレア・ソウ！ 異文書庫の鍵はどこにやったっけ？』

『私が管理してますが？』

『ちょっとこのコ使ってみてくれないかな？』

『リツコ殿を、ですか？』

呼ばれて鍵を持ってきてくれたのは、いつも鋭のそばで帳簿付けや出納の手伝いをして
いる、よく似た服装とよく似た髪型の、ちょっとかなり美青年なところまで含めて雰囲気
がよく似ている、つまりたぶんマシカが言う「典型的なヨーリア学派風」の...まっす
ぐな黒長髪で白い肌に金色の瞳の、鋭より少し年上に見える青年だった。

二人して箱馬車の中の古い木箱を幾つか開けてまわる。沸き起こった埃にリツコは少し
咳き込んだ。どうやら、しばらくかなり、長いあいだ?...開けていなかった箱らしい。

「これ読める？ いや、読めなくてもいいんだけど、どれとどれが同じ文字で違う文字か、
判る？」

言いながら鋭が試しにと差し出してきたのは... たぶん英語？ の...ものすごく古そう
な... 本だった。

「地球の？」

驚いてリツコは尋ねる。

「うん。大昔のダレムアスと地球の行き来があった頃の記録らしいんだけど。ボルドム
との戦乱で前の皇都の書庫と研究者もみんな焼かれちゃったんで、誰にも読めなくなっ
ちゃって...今ね、全土のヨーリア学派で連絡しあって、残った古文書をかき集めて整
理しなおしてるところなんだけど。この旅の間に少しでも分類しておこうと思ってたの
に、ちょっとそれどころじゃなくなっちゃってさ。」

「何をすればいいの？」

「とりあえず、文字の種類別に本を分けてほしいんだ。もし日本語があれば、古すぎて読
めなくても、なんとなく日本語って判るよね？ 英語とか英語じゃないとか、中国語っぽ
いとか違うとか...判る範囲で、いいんだけど...」

言われてとりあえず何冊かの革拍子の本や布や竹の巻物や石板などを、リツコは手にとってみた。

地球上の色々な国の文字の、絵づらだけなら...

亡くなったおばあちゃんの友達が見せてくれた絵本やビデオで... 目にしたことなら、ある。

「...これは有名なクサビ文字よね？ 教科書にも載ってるやつ。それからエジプトの絵文字。それとこれは...たぶん... 手書きのタイ語じゃないかな...。これはインド語?... これも似ているけど、ちょっと違う文字よね?...たぶん、近い場所の言葉よ。ヒマラヤの山の中とかの... これは北欧神話の絵本で観たことある、占いとか魔法とかに使う古い時代の神様の文字。それからアラビア語。...たぶんインカとかアステカとかの南アメリカの絵文字。...それと、古い時代の中国語と... 日本語と... ラテン系の言葉と... ギリシャ文字！」

「やった！ さすが『適任者』ッ！」

鋭が快哉を叫んだのでリツコは嬉しくなった。

『読めるのですか？』ソウが期待し過ぎていたので、ちょっと申しわけなく思った。

『訳すのは無理。でも国別に分類できるって。』

『それは素晴らしい。』

それから、リツコは毎日（じゃなくてもいいから）、馬車隊が宿営地に着いてから夜宴が始まるまでの時間、ソウから鍵を借りて古文書のホコリをはたいて陰干しして、国別に分類して整理して収納しなおすのが、担当の仕事になった。

「あ、ついでにその国について、リツコが知ってることだけでいいから、簡単にメモして、なにか説明のイラストもつけてくれる？」

リツコはもう嬉しくなってしまうって思いっきり『はい解りました！』と、いつもソウが

鋭に言っているのを真似して、ヨーリア学派の言葉で応えた。

戻って夕飯の時にマシカにそう言うと、目を丸くした。

『すごいワリツコ。あたしなんか薬師文字しか読めないのよ。』

「そうなの？」

『官僚文字や知水神（ヨーリア）文字は簡単なのしか解らないし、ニホンゴときたらヒラガナとカタカナの区別もつかないわ！』

ちょっとリツコは得意な気分になった。

『でも心配。古い本の埃って、すごく体に悪いのよ...？』

そう言って、薬師仲間が疫病除けに使う頬かぶり布を一枚くれた。

試しに着けてみたら地球の銀行強盗かイスラム教の女の人みたいになったので、リツコは鏡をのぞいて笑った。

6-3. リツコ、話せるやつになる。

それにつけても皇女サマはいつ見ても機嫌が悪かった。

せっかく超のつく美女なのに、眉間にシワを寄せて誰かれなく睨みつけ、ちょっとしたことで色白な肌が真っ赤になるくらい喚いたり怒鳴りつけたり。いつもイライラしていて、「ヒステリー」としか言いようがない。

こんな性格では、いくら戦争に強くて敵に勝っても、平和になったら国民は誰もついて来ないんじゃないかしら。だから後継者問題とかでモメてるのかしら？ とリツコは疑ってみたが、その割には鋭や雄輝やマシカも含めて、すべての部下たちからの信頼とか人望というやつは、ものすごく厚いらしい。

「今日もまた機嫌が悪いー！」という嘆きと愚痴は毎日のようにあちこちで飛び交っていたが。

(道中の各地から出向いて来る歓迎係や領主の面々などは、「噂に名高い皇女サマの八

つ当たりとはコレカー！」などと、もはや一種のアトラクションとして楽しみにされていた...)

楽しい旅の毎日でも、皇女サマの天幕まわりの侍女や従者の人たちだけは、いつもなんだか戦々恐々として落ち着かない、そわそわした空気が漂っていた。のだが...

ある午後。

よく晴れた西の空はるかに鳥や雲とは違う小さい細長い影がくっきりと視え始めた。

『.....龍だ！...フェルラダル様も居らっしゃる！』

誰かが叫んだ。

『皇女殿下にご報告を！』

『...聴こえたわ！』

すごい勢いで皇女サマがお茶休憩の簡易天幕からすっ飛んで出てきた。

あれあれ？ とリツコは見守った。

空のむこうの影のうちひとつは、自分ひとりで飛んでる？ らしい人間の姿で、もう一つは、出発式の日に挨拶して西の空へ消えていった、あの伝令役の二頭の龍のうちの若い銀色のほうのように思える。

『...お兄様！ 伯父様！』

びっくりしたことに《大地世界》の皇女殿下サマはいつも身に着けていた重そうな腰帯を放り捨てると、いきなりふわりっと空に浮かびあがった。

そのまま文字通り「飛ぶように」すっとんでいって、空の真ん中で『お兄様』と『伯父様』を交互に抱きしめて嬉しそうに挨拶している。

『遅くなって済まなかった。出立式までには戻りたかったのだが。』

鋭とはりあうぐらいのものすごい美形の、鋭と同じような斜めわけのまっすぐな長髪だけど、かなりな年輩の落ちついた感じの男性が、そう言いながらふわりと地面に降りてきた。

年齢が上だから、こちらが皇女サマの『伯父様』だろうとリツコは推測した。

『...フェルラダル様ッ！』

皇女と同じぐらいのすごい勢いでもう一人すっ飛んできたのは... マシカだ。

『...御無事で！』

皇女サマの伯父様に、飛びつくように抱きついて、伸び上がってキスしてほおずり挨拶している。

あれあれ... とリツコはすぐに解った。マシカが言った『鋭とちょっと似ている雰囲気が一番好きな人』...って、この人だ...！

『...マシカ...。...わたしも居るんだけどなー...』

白龍にまたがって運んでもらってきていたもう一人の男の人が、なぜかそうぼやきなが

ら龍の背中から降りて来る。

『...あら、ごめんなさいミヤセル様？ 御無事で何よりですわ？』

...ミヤセル様？

...皇女サマの『お兄様』ってことは、たしか名前は、マリシアル皇子って言わなかったっけ...？

リツコは聞きかじりの話とつなぎ合わせながら、興味津々に目を点にしてなりゆきを見守った。

「あ〜、...また話が賑やかになった...」

苦笑しながら、いつのまに来たのか鋭がリツコの隣に立っていた。

「...さて、吉と出るか、凶と出るか... 吉かな？」

銀龍は近くの人間にだけ簡単に挨拶すると、また天空を悠々と飛んで西のほうへ戻って行った。それを手を振ってしばらく見送ってから、皇女サマは同じ碧の巻き毛と碧の瞳で双子のようにそっくりな雰囲気だけど体格だけ一回り大きい兄上や、あまり似ていない外見の茶色い髪に茶色い長髪の落ち着いた物腰の伯父上や、集まって来た重臣たちと額を突き合わせて話しはじめた。

それを鋭は自分は関係ないとばかりに離れたところから見守って、やがて笑った。

「...安心して、リツコ。これでマーシャの機嫌は直ったみたいだから...」

話のとおり、その日の晩に雄輝たち先行隊と合流した時の皇女サマは...

これが本当に昨日までのあの、嫌な性格のいぢわる女とほんとに同一人物?...とリツコが目を疑うくらい、にこにこして、上機嫌で、頬なんかピンク色で、みんなに親切で、歌まで歌っちゃって（しかもすごく巧くて!）、食欲も、ものすごく旺盛だった...。側近の人たちがみんな嬉しそうににやにやして、後ろでこそこそと情報のやりとりをしていたが...

鋭はあまり気にしていなかった。食後のお茶まで飲み終わった皇女サマたち主賓席のところへ、おもむろにリツコを連れて訪ねた。

『お久しぶりです。御無事で何よりでした。フェルラダル様、マリシアル様。』

こちらが地球から来たリツコです。最近は一ツ（地栗鼠ちゃん）という愛称で呼ばれています。』

「...で、マーシャ？ 機嫌が直ったところで... いい加減、この子、みんなと喋れないと不便なんだけどな？ 諸侯会議で代表挨拶だっけする、大事な貴賓なんだし...？」

「.....わあかったわよ！ もうッ！」

皇女サマはなんとも可愛らしく（リツコは目を点にした）ぷくっとふくれてすねた。

「ちょっと待っててリツコ。今まで八つ当たりしてたことは謝るわ。それで...」

すらりと立ち上がってこちらへ来る。

リツコは思わずびびって逃げかけた。

その肩を遠慮なくがしっと捕まえて、

「だから、謝るわ。って言ってるでしょう？」

ものっすごく高飛車に言い切ると、リツコの眼を真正面からしばらく見つめて、それからすうっと息を吸い、大地を両手で抱えあげるような独特の舞のようなしぐさをして... 謡うように唱えた。

『...マレッタ！ れとけいえる、せるかろまろうでい、いええん！』... (汝がことば、皆に通じよ！)

それから急に、それまではマシカが毎日かけなおしてくれる《言葉の魔法》のおかげで相手が言ってる言葉の意味をリツコが「なぜか理解できる」ようになっていたのと同じように、リツコはごくふつうに日本語で喋っている言葉を、聞いたダレムアスの人が誰でもみんな「なぜか理解できる」ようになった。しかも半日とかで切れてしまうような時間限定の効力ですらなく、ずっとその魔法は続いた。

「...ありがとう！」

どんなに便利にしてもらったのかを理解したリツコが次の日に改めてお礼を言いに行ったら、

「だあから、遅くなって悪かったわよッ！」...と、皇女サマはもう一度ふくれて、とっても偉そうに、拗ねた。

6-4. リツコ、取材する。

なにしろリツコは元々かなりのおしゃべりの質問魔で、好奇心旺盛だ。今まではダレムアスの人が勝手に言ってることをただ一方的に聞いてるだけで、こちらから質問できるのはマシカと鋭だけだった（日本語が通じるもう二人のうち雄輝は先行隊にいて不在だったし、そのせいで？ なのか、皇女サマはいつも不機嫌で怖かった！）...が、今度からは、自分が知りたいことについて、こちらから聞いて回れる！

もう大喜びで鉛筆とノートを小脇に抱えて、キャラバン中を前から後ろまで朝から晩まで、もちろんちゃんと他の手伝いもしながらだったが、すべての人を質問攻めにしてはスケッチやメモをとってまわる姿が、旅の名物のひとつになった。

さて。

まず分秒刻みであちこちから色んな人に呼ばれている鋭よりは少し時間に余裕がありそうなソウの名簿整理の作業を手伝いながら、気になっていたことを聞いてみた。

「なぜ毎日次々に荷馬車隊の人が代わるの？ ずっと同じ人に泊りがけで付いて来てもらったら、仕事がらくになるんじゃない？」

なにしろ大人数のキャラバンの食糧や大天幕やその他色々を運ぶ荷馬車隊はそれだけで大小百台近いのに、ごく少人数の馬番以外の荷積みや御者の人たちは毎日日替わりで地元の人がやって来て、朝に集合して点呼して名簿を作って担当する荷馬車を割り振って、一日仕事をすると、晩餐会の御馳走と美女たちの舞や歌をめいっぱい楽しんで、二日酔いになるほど呑んで、翌朝には日雇いの給金代わりのささやかな返礼品を受け取って、集まって来た今日の地元の人たちと交代して、家に戻ってしまうのだ…。

で、また最初から、点呼して名簿を作って荷馬車を割り振って…の作業を繰り返すソウたちの仕事量は、かなりの負担になっているはず。

『ああ、御存知ありませんでしたか？ われわれ大地世界の住人のうち、生粋のダレムアト達は、自分の土地から遠く離れることを苦痛に感じるのですよ。女神の意志に反するという信仰で。』

「そうなんだ？」

『市井の庶民や農民たちだと、生まれた場所から歩いて日帰り…遠くてもせいぜい一泊か二日で帰れる距離より遠くへは行かずに、一生を終える者がほとんどですね。それより遠くへ旅することが出来るのは、大地世界全土を「我が家」と呼ぶ皇家にゆかりの皆様か、我々のように多かれ少なかれ地球系か《ボルドム》の血が入っているヨソ者か、《エルシャムリア》の子孫の方々です。あとは例外的に、好奇心にかられて知水神（ヨーリア）学派に属することに決めた出家者の人々。』

ん？ とリツコは引っかけた。

「あれ？ ソウさんてヨーリア学派の人じゃないの？」

『違いますよ？ 服の色が違うでしょう？』

「…ごめんなさい。そこまで見てなかったー！」

言われてみれば動きやすく優雅な形こそよく似ているものの、鋭たちがいつも着ているのは深い青か紺か水色を中心に差し色は白か灰色のいわゆる「マリンカラー」で、ソウさん達は黒か焦げ茶色をメインにして、差し色は黄土色とか赤土色とか、いわゆる「アー

スカラー」系だ。

『私どもは遠くへの移動が苦にならない点を活かして皇家や王家や領主家にお仕えしている外役人です。些細な用件での使者に立ったり、交易隊の管理をしたり。』

「そうなんだ。」

『特に私などは地球系だけでなく《ボルドム》の穢れた血もひいておりますからね。ヨーリア学派の方々のような篤いお志とは、無縁の者ですよ。』自嘲するように低くソウはつぶやいた。

「……………」

リツコは目を点にして言葉に困った。ケガレタチ？ ボルドムの穢れた血？…って…今の翻訳？…あってるのかな…？？

何度かまばたきをして、よく考えてみる。

…自分が生まれ育った国に、ご先祖様の国が、一方的に攻め込んで来たら、どんな気分になるのかな…？

「…えーとそれで… エルシャムリア…って、昨日の夜、宴会の時にお芝居してたやつ？」

『そうです。今はもう滅びた天宮界ですよ。』

「神話じゃなくて、実話なんだー。」

『？』

「じゃ、遠くまで行ける人たちに、ずっと付いて来て、って頼めば？」

『そんなに人数が居ないのですよ。外役人として勤めている者以外は、皆、独立した商人や遊牧民ですからね。これほどの大人数に長期間の仕事をまとめて頼めるとしたら、長

旅には向かない冬の積雪中ぐらいでしょう。』

「そうなんだー。」

それからリツコはこの世界の神話について、昨日の宴会芝居だけでは解らなかったことを色々質問して教えてもらった。

世界は初め四つあって、姉・兄・妹・弟の神様がそれぞれ治めていたが、何やら壮絶な姉兄げんか？ が起きて、姉は殺されて死んじゃって天宮界も滅びて、兄はその罪で捕まって偉い神様にボルドム世界の奥の牢屋に閉じ込められて、姉の死を嘆き悲しみながら争いごとの後遺症で死んじゃった？ らしい妹の神様が遺した世界が、このダレムアス。その兄姉ゲンカをみていてグレて家出しちゃった？ らしい弟の神様が遺した世界が...地球。

おなじ遺された世界同士、昔はもっと仲良しで、地球の時間で数万年くらい前までは、ところどころに残った通路で思い出したように行き来があったらしい。今でも地球世界の各地に翼のある人や毛むくじらの雪男や狼男？ とかの伝説があったりするのがある。リツコがいた朝日ヶ森学苑とかも、たぶん、その流れ。

でも何かで通路がずれ始めて、通りにくくなって、行き来が途絶えて... お互い、忘れかけていた。らしい。

そのズレの原因がボルドム世界からの攻撃？ のせいで。地球に繋がっていたはずの通路の遺跡から、あるとき突然、ボルドムの鬼人たちが大量にダレムアス世界に攻め込んできた。らしい。

それで当時のダレムアスの首都だった《白都》というところが攻撃されて滅びて。今のあの皇女サマの両親も戦死しちゃって。それでボルドムの追手から逃れて皇女サマは地球に亡命して。しばらく朝日ヶ森で暮らして、たまたまそこで知り合った雄輝と鋭と一緒に（鋭の言い分では「まきこまれて」）ダレムアスに戻って来て...

長い長い戦争を戦い抜いて、ようやくボルドムの鬼人たちを、元いた世界に追い返して、封印して...

で？

この旅の一行が何のために西へ向かっていて、なんでリツコはここに呼ばれて来たのか？

そこまで聞く前に、ソウは忙しくなってしまった…。

6-5. リツコ、野球を教える。

途中から合流したり大きな街道の分岐点で手を振って別れて行ったりで増えたり減ったりしながら常時何百人もの規模で動き続けている旅の一行の内訳はといえば、《西方諸国》とくに《西皇家》を相手に太湖のほとりで開催されるという諸侯会議に《白王家》代表として出席する戦勝皇女とその兄と伯父上と、鋭やマシカやソウなどの側近や幕僚や重臣たち。

旅を手伝うために参加している侍女や従者や料理人や職人や、食料や資材の調達係の商人たちと、旅の仲間を護衛するために参加している雄輝たち武将が率いる一隊。そして荷馬車隊の馬番までが「ずっと一緒に」行ける人たちで、荷運び人たち百人くらいが地元密着型の応援部隊の「日雇い」。

それとは別に、見るからにとっても家柄の良さそうな、超のつく豪華な服装で着飾って旅をしている謎の美女軍団のお姫様たちと、そのまた美形ぞろいの侍女たちと侍従たちと専属の護衛の兵士たちとでこれまた合計が二百人くらいいる。

このお姫様たちは何故こんな場違いな野宿の長旅に参加しているのか？ リツコは前から不思議でしかたがなかったので、話せるようになるとさっそくお茶に呼ばれて行って質問してみた。するとお姫様たちは一様に笑って、『さて、何故でしょうね？』と答えをはぐらかす。

夜ごとの宴会でみごとな歌や踊りを披露してくれるし、それを目当てに詰めかける地元の人たちが大層多かったのも、最初は諸侯会議に華を添えるためのプロの芸人さんたちなのかとも思ったけれども、聞いてみたらお姫様たちはみんな皇女様のイトコとかハトコとか…

つまりほぼ全員が「皇族ゆかりの」やんごとなき深窓の御令嬢たちだった。

それに、旅の間ずっと着飾るばかりで何の仕事もしていないのかと思ったら、そうでもない。

鋭やソウたちが地元の歓迎係や荷運びの人たちにせっせと配りまくっている「返礼品」...かわいらしい小さい装飾品かと思ったら、「お守り」で...「皇族ゆかりのやんごとなき血筋の」お姫様たちが、旅のあいまにせっせと手作りして「神力」を込めている、御利益のある品物だった...

そんなお姫様たちは移動の間も忙しく手と口を動かし続けていたので滅多に馬車から出られず、たまに降りて遊び始めると後衛隊から安全確保のために本隊から離れないでくれとせつつかれるので、ろくに息抜きもできない。

お姫さまたちのなかでも一番身分の高いらしいソノ姫...『マミア・ソノワ・エリエリ!』(世界で一番たっとい姫様!)と侍女たちが恭しく呼ぶ、戦勝皇女と兄皇子よりも唯一年上の従姉姫...に、

キャラバン唯一の子どもであるリツコは、

『わたくしたち退屈しておりますの。なにか地球の楽しい遊びを教えてくださいませんか?』と、折り入って、頼まれてしまった。

うーんと、リツコは困った。

トランプやウノやオセロは持って来なかったし、実はほかの人に教えられるほどルールに詳しくないし、そういう手札遊びはこっちの世界にもちゃんとあって、わざわざ「地球の遊び」として教えてみてもあんまりアリガタミがなさそう。

地球でいつも自分がやっていた遊びというと、こういう女の人むけのお手玉とか綾とりとかお上品なのは苦手で、もっぱら泥だらけになって泥警とか、缶蹴りとか...

「あ、そうだ。」ちょっと聞いてみた。「この世界に、野球とかの球技って...ある？」

『キュウギ？』

音だけしか聴こえなくて意味が判らなかつたらしい。つまり...こっちには存在していない言葉。

あれだけ踊りが巧いんだから、きっと運動神経は良さそう...と思って、

「道具を用意するから明日まで待って！」と言ったら、お姫様たちはすごく嬉しそうに期待に満ちた目になった。

リツコはちょうど通りかかった市場で、「なんでも好きに買っていいよ！」と鋭から渡されていたお小遣いを使って、分厚い皮の端切れをたくさんと、羊の毛のもしゃもしゃした固まりを一山買って来た。

お姫様たちが作るのを見ていたので真似して、型紙を造って、皮を切って、穴を開けて、綴じ合わせて、綿をしっかりと詰めて...

休み休み三日ほどかけて出来上がった不格好なしろものを見てマシカがちょっと絶句した。

「リツコ、その...鍋つかみ？のおばけみたいな手袋と、毛玉のおばけみたいな丸いの...何？」

「グローブとミット！...とボール！」

バットにちょうどいいものも見つけて買ってあった。料理の時に練粉を伸ばすのに使う、地球のやつと見た目も使い道もそっくりの...麵棒だ。

「鋭ー！時間あったら野球やろうよー！」

「ええ？」

「お姫様たちと！ 人数少ないから三角ベースでー！」

なんだなんだと、お昼休みで馬車を停めていた人たちが、わらわらと寄って来た。

6-6. リツコ、勝負する。

驚いたことに、鋭は野球がヘタだった。運動神経はいいのに！

「うーん。地球に居た小学生の頃は、本ばかり読んでる科学小僧だったからねえ…」

みごとに三振からぶりをかました後、苦笑して仕事が忙しいと言って逃げてしまった。

代わりにリツコが打って見せようとしたが、今度は打てる球を投げられるピッチャーがいない…。

「…誰か投げてみたい人ー？」

衛兵の誰かなら立候補するかと思って訊いてみたら、今度はソノ姫が名乗りをあげた。

『その丸い球を投げて、その革の的に当てればいいんですの？』

キャッチャーミットはマトじゃない…と説明する暇もなく、ちょっと風変わりなモーションで、ひらひら服のお姫様はみごとに「球を的に当てて」いた…。

「えっうそ！ すごーい！」

『わたくし剣や馬はからきしですけど、当てものなら少しは得意ですの』

「なによ、なに面白そうなことやってるの？」

「リツコ、交ぜて交ぜてー！」

なぜか皇女様とマシカもやってきた。

地球で育った皇女様は野球のルールくらいは大体知っていたので、リツコが投げた。

.....ぽーーーーーん！

変な音だったけど、みごとにバット代わりの麵棒の真ん中にヒットして...

三日がかりの労作のへろへろボールは、街道脇の小川の流れに、ぽちゃんと消えた...

「...あ〜！」リツコはちょっとぐれた。

『それでは、当てもの競争にいたしましょう！』

ソノ姫がリツコの頭を撫でて慰めてくれながら、景品に一番美味しいおやつを賭けると言った。

女性群がわれもわれもと、河原の石を拾ってきてキャッチャーミットに投げた。

ミットもあつという間にぼろぼろになってしまったので...的もまた適当なものを用意して。

情け容赦なくビシビシと実戦場の大剣で鍛えた剛腕を披露する皇女サマは、距離は飛ぶけど意外にノーコンだった。

マシカは「弓なら負けないんだけど！」と悔しそうに云いながら中盤ぐらいで敗退した。

少しずつマトを遠くへずらして行って、腕に覚えのある人が順々に投げて行って...

近衛兵で狩人出身という男の人と、リツコが決勝戦になった。

リツコが勝った。

だてに小学生リーグで、県大会優勝まで行ったピッチャーだったわけではないもーん！

と、勝ち誇って、優勝賞品の「いちばんおいしいお菓子」に、がぶりと喰いついた…。

おとなたちはそんなリッコを楽しそうに、優しく笑って、見ていた。

6-7. リッコ、聞き書きする。

仮皇宮の都を出てからずっと広大な平野となだらかな丘陵地が続いて、畑と森と牧場が交互に広がる穏やかな土地を進んできたが、小高い峰が幾つか連なる《屏風山系》からは少々難所で、中腹をうねうねと折り返しながら峠越えする《白の街道》の道幅も少し狭くなっていて、数日かけてゆっくり越えるしかないらしい。

その山間から右手はるかに見える《北平原》という場所は、先のボルドム軍との最終決戦の場だったそうで、遠目にもいまだに大地が変にえぐれたりして赤剥けて、数年たっても植物がまだ生えてこない、おかしい状態だと判る。

皇女マーライシャ以下、雄輝や鋭やマシカたちもみんな、その合戦に参加した武人たちは「追悼と慰霊のために」と本体から離れ、馬を早駆けさせてそこまで往復してくるといふ。

走る馬にはまだ乗れないリッコは残念ながら留守番組に振り分けられて、その間はミノワ姫が預かってくれることになった。

山道は重い荷を曳く馬たちにとってはきつい勾配なので、姫君たちもみんな丈夫な杓と動きやすい服に着替えて、車列から降りて歩いて登った。

この山間地には住人が少ないので、両脇の街道口に常駐している荷運び関係の仕事の人たちが、三泊四日？ くらいの間、ずっと馬車と一緒に移動してついてきてくれるそうだ。

毎日大量の「返礼品」作りに忙殺されていた姫君たちは三日間も！ 解放されることをむしろ喜んでいて、巫女舞の修練で鍛えた脚力を発揮して、文句も言わずにせっせと歩いて登った。

リツコも、これは良い機会だと喜んでミノワ姫に話をねだった。

「あのね、そもそもどうして皇女サマは、あんなにものすごく機嫌が悪かったのに、いっぺんで治っちゃったの??」

なにしろ、この世界に来てからもうずいぶん経ったというのに、いまだに自分が何故この世界に呼ばれて来たのか、何をすればいいのか、状況がまるで判っていないのだ...

『...それは少しばかり長い話になりますけれど...』

あいまあいまにたくさんの雑談や脱線やその神話にまつわる有名な歌や遊びや、食事やお茶休憩で中断しながらも、姫様は律義に、山越えの間中かけて、だいたいの話を説明してくれた。

『そもそもこの《大地世界》ダレムアスが《初めにありし四界》のうちの一つ、《妹女神》と呼ばれるマライアヌ様の創始した界というのは、もう聞いていますか？ 女神マライアヌ様が戦に倦んでお隠れ遊ばした後、そのお子、女神と人王との間に生まれた《半神女》マリステア様が世界の統治を引き継ぎされました。

そのマリステア様は半神であられたゆえ、ただ人に比べればとても長い寿命でいらっしやっただけで、その生涯の間に何人もの夫や恋人や情人を持ち、たくさんの子どもを産んで増やされました。マリステア様が亡くなられた後も、しばらくの間は、そのたくさんのお姉妹兄弟たちの子々孫々は、それぞれの血族ごとに分かれて暮らしながらも、ほぼ穏やかな間柄を保っていたそうですが...

やがてこの世界の始めの中心であった《始原平野》マドリアウィが手狭になると、争いを好まなかった始原の人々は外輪の山のあちこちの谷筋から抜けて、《大地の背骨山脈》の山間から裾野へ、ふもとから四方八方へと、どんどんと勝手に増え広がり続け、気の合わない部族同士はすっかり疎遠になって、物心ともに離れ、ばらばらに散っていきました。

もう今ではマドリアウィ野に戻る道さえ失われてしまった時代。お互いの言葉すらも遠く異なってしまって、誰ももう、世界全体のありようが把握できなくなった時代に...

それでは何かおかしいと、旅に出て世界と人々を繋ぎ直した、勇敢な姫がありました。

姫はこの《大地世界》をくまなく四度めぐって領主や国主を説得して回り、今この私たちが歩いている《白の街道》のもといを作り、宿場と貨幣の制度を整え、またそれまでは冷遇されていた地球やボルドムからの移民の子らを取り立て、外役人という大事な仕事に就かせました。

その功績をもって、生まれは《血の薄き姫》と蔑視されていた《尊称なきミトル様》は人々から《女神の遠き孫》という美称を授けられ、今はなき《白の都》ルア・マルラインを皇都と定めて、《大地世界》の再統一を宣言しました。

ところが、既にあった《聖皇家》モルナスの、女神マライアヌ様の血をより濃く受け継ぐ方々が、移民族の子孫や血の薄き者らによる《大地世界》の統治には、異を唱えられたのです。

当時のモルナス皇が、その後継の長子を夫とするようミトル姫に要請しました。

それによって濃き血筋の古木の株に、若枝を接ぎ木となすおつもりだったのですわ。

ミトル姫はそれを退けられ、旅の仲間であったアステト・アルラを男皇と決めました。

わたくしやマーライシャ姫が、この御二方の子孫にあたります。

モルナス皇はこの縁組から生まれる《女神の血の薄い》皇家を快く思わず、一時は戦乱になるかと危ぶまれました。

なんとか戦は回避され、《濃き血の力》を誇るモルナス皇家は、血の薄き者らには棲みづらい《西の荒野》に居を移しましたが、それ以来...

何十代の長きに渡って、《西皇家》は《白皇家》の後継者に、婚姻によって二つの皇家を統一するべきだと、説得と求婚を、し続けてきたのですわ...。』

... 一体いつ「当代の」皇女サマの話にたどりつくのかと、必死で聞き書きのメモをとりながら、リツコは少々不安になったいた。

『そしてやはり数十年も昔のこととなりましたが、わたくしもマーライシャ姫も、今のリツコよりももっとも幼く無力であった頃。この世界に異変が相次ぎ、間もなくボルドムの悪鬼らが界壁を破って攻め込んでくることが判りました。

当時の男皇がマーライシャ姫の父君ですが、その皇妹であるわたくしの母が西皇家への使者を務め、西からは三皇子率いる援軍が遣わされました。そしてその長子クアロス様が、両家縁組の話を蒸し返したのですわ。

マーライシャ姫はまだ本当に幼かった。恋も婚姻もなんのことやら解らぬうちに、はるかに年上の、すでに成人していらしたクアロス様に言いくるめられ、求婚に承諾してしまったのだそうです。

幼いとは言え、皇家直系の神力ある姫が言葉で約定してしまったのであれば、正式な婚約。大人になってから考えなおしたからといって、断ることは難しくなります。

ところがマーライシャは... そのう...』

「...あ、やっぱり、雄輝のことが好きなの？」

『...やはり、リツコの目から見ても、はっきりそうと解りますか...。』

少々困ったように、ミソノワ姫は言いよどんだ。

『そのこと自体はあまり問題にはならぬのです。正式な政治上の男皇はクアロス様と定めた上で後継の子を産んで、それとは別にマダロ・シャサ殿は武人として誉れ高いかた。堂々と女皇の情人と誇示して愛すれば、姫の名誉にこそなれ、誰も咎めることなどありません。こちらの世界では特に問題になることではないのですが。そう言って、まわりの者みなで説得を試みたのですが、』

「そうなんだ...」

リツコはちょっとびっくりして聞いていた。

『ただ... マーライシャ姫はその後、ポルドムの追っ手を逃れて地球で育ちました。今リツコが驚いたように、その考え方はできぬと。望まぬ子は産めぬと』

「...そりゃそーだよね〜...?」

『あのように荒れて荒れて...』従姉姫は深いため息をついた。

『いっそ、マダロ・シャサ殿と相愛の仲であれば、地球で言う駆け落ちでもなんでも、させてやりたいところでしたが。』

「...あれ、やっぱり、皇女サマの片想い...??」

おそろおそろリツコが質問すると、ミソノワ姫は深くうなずいた。

『このことばかりは他人にはどうにもなりません、ただ』

「ただ?」

『西皇家が婚姻の日限を迫ってきたのですよ。戦も終わったことゆえ、昔の約定を疾く果たせと。』

「え〜★」

それはひどい。リツコは初めて、皇女サマのあの荒れっぷりを理解して同情した。

『それゆえ伯父上と兄上がご心配なさって。本当に、幼き頃のマーライシャ姫が神力をこめた《婚約の誓言》を口にしてしまっていたのかどうか... 探りに行かれていたのですわ。』

「それって...」

『ええ。クアロス様のハツタリに過ぎない可能性が大きいと。その他に、マーライシャ

姫が生死不明であった時期に、すでに正式に近く娶っておられる妃女も子息もおられると。』

ちょっとリツコはあっけにとられた。…そんなんで、よく、あの皇女サマを、騙して結婚させようとか、思うなあ…！

『それで、婚約無効と断ることが出来ると判明したので、機嫌がすっかり直ってくれたというわけですね。』

そんな噂話をこっそりされているとは知らず、山越えの後半、皇女サマたち別動隊の一行は、無事に予定通りに、本隊に合流しなおしたのだった。

第7章 リツコ、囚われてはいないお姫様にあう。

第7章 リツコ、囚われてはいないお姫様にあう。

7-1. リツコ、訪問する。

侵略者ボルドムの主力軍を元の世界へ追い返すための最終決戦がおこなわれたという合戦場の跡地へ、戦没者の追悼と慰霊の式を行うと言って出かけた皇女サマたちの別働隊が、山越えを終えた本隊と反対側の山裾近くで無事に再合流した後。

それまで使われていなかった、ずっと何かの予備用なのかと思っていた、特別大きくて立派な馬車に、お客が増えているらしいことに、リツコはすぐに気がついた。

いくら行列の中で一番偉い皇女サマとは言っても従者や侍女の数が少し多すぎじゃないかと思っていたうちの半分くらいが、その箱馬車の世話や護衛の係にまわされている。

ところが、そんな大事なお客様なら当然、夜の宴の時にでもみなに紹介されて、歓迎されるべきだと思うのに... 何日たっても、その馬車の中から出てきたところを見たことがない。

鋭とマシカと皇女サマだけは毎日何度か様子を見に寄っている感じだが、その他の人は、姫君や重臣たちまでも含めて、むしろその存在自体も公然の内緒というか、「いないふり」「気がつかないふり」をして、避けているような... おかしな雰囲気だったので。

リツコはまず、こちらの世界での自分の行動の管理責任者、ということになっているらしい鋭に、お伺いを立ててみた。

「...ねえ鋭？ あの馬車の中の人には、話しかけてはダメなの？」

「うーん。悪いってことはないよ？ 彼女も退屈しているだろうし... ただ。」

「なに？」

「ボルドムのね。敵国のお姫様なんで...見た目がちょっと。こっちの人たちには怖いらしくって。」

「...見た目ー？ だってこっちの人って普通に、毛皮だったり四つ足だったり羽が生えてたり...」

「まあ、ぼくら地球人からすると、区別が判らないんだけどねー？」

苦笑してうんうんとうなずきながら、

「きみのいう《モフモフ系》の人たちは、見た目が爬虫類の人って本能的に苦手みたいで。ソウもあの金色の眼のせいで、なんとなく避けられてたりするでしょ？ それに、家族をボルドムに殺されてる人とかも多いしさ？ やっぱり仲良きは、しにくいみたいで。」

「...あ、そうか...」リツコは自分が鈍かったことを反省する。

それでも鋭が、「挨拶したければ行ってもかまわないけど、もし怖くても、悲鳴をあげたりはしないであげてくれる？」と言うので「うんわかった！」と元気に返事して、リツコは早速、昼ごはんが終わった頃にゆっくり動き始めた目あての馬車に、正面から訪問してみた。

「...こんにちわー！」

先日まで皇女サマ付きだった顔見知りの侍女の人たちに取次を頼むと、

【...だれか？】

それまで聞いたことのないシュウとかグウとかガ行の音が多い言葉で、馬車の中から、女のひとらしい低い声がきこえた。

「リツコっていいますー！ あのね、退屈じゃないかと思って、遊びに来たんですけど！」

【...おや？ あの地球人の子どもか？ 我の話し相手に？】

声の感じはむしろ嬉しそうだった。

【...マーライシャにでも言いつけられたか？ 我が怖くないのであれば、上がっておいで。】

リツコはむろん大喜びで超豪華な大型の箱馬車に上がり込む。

どのくらい豪華かというと皇女サマ用のやつより手が込んでいるぐらいの丁寧な細工の外見で、見れば内装も見事で、ものすご〜く値段が高そうだ。

お姫さまはリツコが馬車の扉を開けたとたんに、それまでは脱いでいたらしい大きな黒っぽい布を頭の上からするりとかぶって全身を隠してしまった。

「...えーと...」

リツコは面食らって固まった。何かの宗教の衣装のような気もする。

「...お顔を見ちゃったら、なにかまずいのかしら...？」

ちょっとだけ遠慮しながら聞いてみる。

「...あたし、《ボルドム》の人って、まだ見たことがなくて～...」

【...大地世界人と同じで、《焰洞界》の者の姿も、千差万別なれど。】

するりと布がはずされた。

【怖くなければ見るが良い。】

真珠光沢の七色に光る華麗な鱗に覆われた貌の、縦長に切れた大きな金緑の瞳の、なんというか...巨大なトカゲな感じのする...外見の、だいたいは人型？で、美しい黒いたてがみ付きのお姫様だ。白虹色の肌に金青色のきらきらした爪が長くて鋭くて、何て言うか...ネイルアート？のような複雑な紋様が入れてある。

怖いかな？と聞かれればその眼に睨まれたり爪で脅されたりすればかなり恐いかもだったが、こちらの世界には横長に切れた山羊目の人だっているし、地球にだって、もっととんでもない真っ赤かに尖った爪をしている人は多い。

「...キラキラして、きれいなウロコね...！」

すなおに思ったとおりにリツコは褒めた。お姫様は嬉しそうだった。

それから侍女の人たちがお茶とお菓子を持ってきてくれたので、ゆったりと進んで行く居心地の良い大きな馬車の中で、色々とおしゃべりをした。

「じゃあ敵国のお姫様でも、捕虜とか人質として捕まってるわけじゃないのね？」

【我はみずから来た。あちらに捕らわれていたマーライシャを助け出して、こちらへ送り還すついでに、な。我は我が《焰洞界》の後継の公主であるが、あの界の今の有り様は好かぬのじゃ】

「どういうこと？」

【我は弱い者いじめを好かぬ。娯しみのためだけに小者をいたぶり殺すがごとき愚劣な行為は厭じゃ】

「ふーん...。あたしも、弱い者いじめは嫌い。」

【気が合いそうじゃの】

「そうだね！」

敵国ボルドムからの亡命姫さまは、すっかりリツコが気に入ってしまったようだった。

【我が名は《焔洞界》ボルドアレイ・ガースダルムが長公主、ディ・デュイ・リジュー
ディー・ディーディーリヤという】

「...でい... でじゅ... りじゅー・でい... 」

リツコは絶句した。何度か練習してみたけれども、どうしても、滑らかに発音するのは無理だった。

【...私のことは愛称の《ダーモレア》（黒姫）で呼ぶが良い。】

そう苦笑して言ってくれて、別れ際には特別あつらえの美味しいお菓子をおみやげに持たせてくれた。

それから旅の間、しょっちゅう一緒にお昼ごはんを食べておしゃべりをする親友の間柄になった。

7-2. リツコ、事情を聴く。

「じゃあ今までは、その合戦の跡地のそばに居たの？」

【大地世界の余の者には、投降して来た捕虜らの一団であると説明されておるらしいの。いささか不名誉なことではあるが。侵略軍である我らボルドムの者がよく思われぬという事情は解る。したが我々として大地世界の国々が諍いあうと同じく。一枚岩ではない。】

「どういうこと？」

【我が叔父であるボルドムの今上帝は歴代の中でもとりわけ暗愚にして暴虐。嫌われておっての。気に入らぬ小者をことごとくいたぶり殺してゆくがために界の補修が立ち行かなくなり、このままでは遠からず、ボルドムは界ごと滅びる。】

「ええ？」

【それを苦言した者も殺されて、界が壊れるならば隣の《大地世界》を攻め取って移住すればよいと。それ故こたびの攻略戦とあいなった訳だが。...愚行を苦々しく思う者も多

くてな。世継ぎの姫である我のもとに、密かに参集しておった。】

「そうなんだ...」

【したが今上に感づかれての。神の血の濃き姪である我に己が卵を産まさしめてその仔を新たな世継ぎとなし、我のことは処刑してしまおうと。】

「ええっ」

【我は次の排卵の刻が来るまでの命、虜囚の身であった。その獄へたまたま、マーライシャも放り込まれて来ての...つれづれに話をしておったら、何やら境遇が似ておると、意気投合し...今上への造反をなすのであれば力を貸すと、同じ捕虜の身で放言しおるので面白うてな。つい、我が配下がわれを救出しに来た際に、同道させてこちらに戻ってしまった。】

「それで？」

【最終決戦の際、ボルドム帝軍の後背より奇襲をかけダレムアスを勝利に導いたは、我が配下の者らよ。惜しくも今上めは討ち漏らしたが、戦傷癒えず病の床にあると聞く。我はいましばらく身を隠し、数百年のうちにはボルドムの新帝となる。したがあの界にはもはや大人数は棲めぬ。戦ではなく講和を請うた上で、こちらの世界に我が民らの移住の許可を求めるつもりじゃ。】

そのために皇女に頼んで、諸侯会議に参加しに連れて行ってもらおうのだと言う。

「...ちゃんと、自分の役割が、解ってるんだ...」

状況に振り回されてばかりで、いまだに何のために自分がここに居るのが判っていないリツコがそう愚痴をこぼすと、黒姫は面白そうな顔になった。

【知らぬのか？ あのマーライシャはたいした大物ぞ？ 伝説のミトラ姫とやらが大地世界を再統一したが如く、今ある大地世界とボルドムと地球とを、いにしえのように統一した世界とするが夢だそうな。】

「...え〜っ??」

【そがために地球世界とは密に連絡をとりあいたいというのが、そなたの召喚されし理由
であろうよ。】

第8章 リツコ、戦う。

第8章 リツコ、戦う。

8-1. リツコ、まきこまれる。

そんな風に旅は終りに近づき、もうあと数日で、会議開催地の北西太湖のほとりに着くはずだった。

ところが、なにか様子がおかしいと、沿道の街や森の隙間から垣間見える広大な湖面と岸辺の街並みを眺めて、誰もがなんだか落ち着かない様子になった。

港町に着いた。困惑した顔の太守が出迎えた。会議に参集しているはずの諸侯らの姿はどこにもなく、街はなにやら荒れている。三日ほど前に突然の酷い嵐があり都邑の半分は一時水没したという。そして、その直後にはなぜか手回しよく災厄見舞いの品々と共に、宿営地の仕度が間に合わなから議場を《西皇都》に変更せよと、諸侯らを案内する使者と船と軍が、大挙して遣わされて来たという…。

『それゆえ先に来ておられた皆様は、すでに昨日までに西へ向けて移動を開始されました。』

『…聞いてないわ!』皇女サマが激昂した。

『それ故、いまこのわたしめが、こうしてお迎えに参った次第で。』

困惑している都邑の太守に岸壁まで案内された一行に慇懃無礼な礼をして出迎えながら、男が云った。

『…マデイラ皇子!?!』

皇女サマが...ものすごく嫌そうに...叫んだ。

「...げ...。」鋭と雄輝がハモリ、マシカも顔をしかめた。

『わが長兄クアロス皇子が婚約者であられるマルアライシャ戦勝皇女殿下には、御機嫌うるわしく。』

『うるわしくないわよ！』

『あいかわらず、そちらの色魔將軍殿からは、ふられておられるそうで。』

がん！ と無言のまま拳で情け容赦なくマデイラ皇子とやらを殴り飛ばした皇女サマを、リツコは呆然と見ていた。

『.....ここは任せた！ ...リツコ来い！』

『雄輝！？』

『嫌な予感がする！ 公主の様子を見てくる！』

『あたしも行くわッ！』

リツコがまだただ唖然としているうちに、ぽん！ と雄輝の鞍の前に乗せられて、あっという間に大型馬は本疾走にうつった。すぐ後ろから、大鹿マブイラにまたがって弓を携えたマシカが追ってくる。

「どういうこと！？」

「黙ってな。舌噛むぜ！」

全力疾走で駆けに駆けて、だらだらと長い車列の後方、まだ森の中の難所の手前にいた、公主の馬車隊のそばまで着いた。

『...ちい！ やっぱりッ！』

雄輝が舌打ちして唸った。

『マシカ！ リツコ頼む！』

いきなり人形のようにポン！ と投げ上げられてリツコは焦ったが、マシカが難なく受け止めて、大鹿の後ろに乗せかえてくれた。

『…きさまらぁ…ッ！』

今まさに公主の馬車を襲おうと森の中からわらわらと走り出してきた武装した連中に向かって、雄輝が騎乗のまま突っ込んでいく。すぐ後から追ってきた側近の部下たちと、猛然と逆走していく雄輝の姿を見て異変を感じた衛兵の一団も続く。

「マシカ、どういうことなの？！」

『公主を暗殺しようとしてるんだわ！』

「ええ！？」

鋭く剣がぶつかり合う音が響く。

『マ・ゴリゴ！ 何のつもりだ！』 激しく斬りあいながら雄輝が怒鳴る。

『色魔将！ キサマも一緒とは都合が良い！ 汚らわしい地球人め！』

相手かたの騎士も憎しみのこもった声で負けじと怒鳴り返した。

『わがあるじの許婚者をたぶらかした卑劣漢！ やはりキサマら地球人ども、ボルドムと結託して大地を蹂躪するつもりであろう！』

激しく打ち込んでくる相手の剣を、まだまだ余裕でかわしながら応戦している雄輝は、一方的に決めつけられたせりふのほうには、おもいきりげんなりとした声で返した。

『…ち～が～う～って。おれは文字通り背中のハネも自由に伸ばせない地球に戻るつもりはもうないの！ こっちに帰化して骨をうずめるつもりなんだよ！…でもマーシャを嫁にもらう気はないけどな！』

『雄輝いまそれ言ってもこいつらには通じない！』

いつの間にか参戦していた鋭がやはり真剣で切り結びながら、そんな茶々を入れている。

『…あいつは！ おれにとっちゃ！ 妹なんだよ！…あくまでっ！』

知ったことかという感じで敵は次々と白刃を抜いて斬りかかり、金属音が鳴り響き、日暮れ近い薄暗い森の中の細い街道で、敵味方ともに入り乱れての乱戦が始まった。

背中にリツコを乗せたマシカと駆けつけた近衛兵の何人かが公女の馬車を囲んで護衛につく。

『…マッレ・エッタ！ ボグン！ エ！ カ！』…(撥ね飛ばせ！)

どうやら向こうの皇族関係者らしい人の何かの呪文が響く。

激しい衝撃音がして何人かが馬ごと吹っ飛んだ。

…見たかんじ…味方のほうが…苦戦を強いられている…？

リツコは生まれて初めて観る本物の戦闘に震えながら、マシカの背中にかばわれていることに焦った。

《四軍神》の一人に数えられているマシカは油断なく剣を構えていて、たぶん積極的に戦列に加われば、もっと力になれるはず…。リツコが、背中に乗ってなければ…。

足手まといになっていることに気づいて、リツコは落ち込んだ。

「…あたしを公女の馬車に入れて！ そうしたらマシカも戦えるでしょう？」

【…良い案だが、少し無駄じゃな。】

そう言って、公女自身が中から箱馬車の扉を開いた。

【仔細が判らぬが、我も闘おう。】

箱馬車の外側に、まるで装飾品のように高々と取り付けられていた見事な細工の槍剣の鞘から抜き身をひき払う。

【…誰ぞ！ 我の敵手を務めよ！ 我が狙いであるならば、我を直接攻めるが良いぞ！】

そんな場合じゃない、と思いながらもリツコは目を丸くする。

箱馬車や天幕の中ではいつもずっと膝を抱えるようにうずくまっていたけれども…

外に出て獣脚と背すじを伸ばすと、公女はとても長身なのだった…

そう。馬に乗った大地世界人と、対等に、渡りあえるほどに…

『まぁびっくり。』

リツコと同じく、知らなかったらしいマシカが呟いた。

8-2. リツコ、投げる。

乱戦。

敵の動きを観察すると、明らかに「殺すつもり」で襲われているのはボルドム公主と地球人マダロ・シャサの二人だけで、同じ大地世界人には怪我を負わせる程度で済むように手加減している。

とはいえ敵のほうが人数が多いらしい分、味方が不利だった。

しかも…

「…雄輝！ 危ない！」

敵の一人が手近の樹に登り、短矢に何かを塗りつけた上で、雄輝に向かって弓を構えた。

雄輝は敵隊長マゴリゴと数人の加勢を相手に激しく斬りあっていて、リツコの声には気がつかない。

マシカは今は大鹿の上から弓で敵を射ている、そこからでは枝が邪魔で、狙撃兵を狙えない。

リツコは必死であたりを見渡し、一旦地面に飛び降りて、目当ての石を握ると、すぐにその向こうの樹上に身軽に駆けあがった。

大枝にまたがった不安定なポーズだったけれども、なんとか一瞬だけ上体を固定して、短いフォームで...

投げる！

『ぐわッ！』

頬に石つぶての直撃を受けた射手が叫びながら、毒矢を落とした。

『...キサマァッ！』

子どもでもこうなればりっぱな戦闘員と見なして、敵の一人が下から短剣を投げつけてきた。

『...リツコ！』

血を流しながら真っ逆さまに墜ちるリツコを見て、マシカと鋭が悲鳴を上げる。

そこまで、実際にはほんの数分だった。

『...慮外者どもッ！ 剣を引けッ！』

皇女サマの厳しい怒声が響いた。

『マ・ゴリゴ！ あるじの許婚者が賓客と白皇総將軍を相手と知っての狼藉ッ？ ならばこの私を先に斃してからにきなさいッ！』

『...リツコ！ リツコ！ ...大変！』

...マシカの悲鳴を聴きながら、リツコは、気を失った...

第9章 リツコ、地球に帰る。

第9章 リツコ、地球に帰る。

9-1. リツコ、夢をみる。

リツコは夢を見ていた。また、あの夢だ。

お母さんとお父さんが、捕まりかけている。

お姉ちゃんが泣いている。腕をガッチリ掴まれていて逃げられない。

「逃げて！」

リツコが叫ぶと、お母さんとお父さんが首をふった。

「エツコを置いては行けない…。おまえは逃げなさい！」

「逃げて！」

…あの時、リツコは何も出来なかった。何も…

うなされているリツコの額の汗を拭いてくれているのは、マシカだ。

ぼんやりと目を覚ますたびに、それは鋭だったり、ミソノワ姫たちだったりした。

リツコの球は当たった。みごとに命中した。

雄輝を狙っていた奴はギャッと悲鳴をあげて毒矢と弓を取り落とした。

それは、覚えている…

「逃げて！」

…夢の中で、リツコは投球動作に入った。

もちろん、あの時は敵の数が多すぎた。ポールもグローブも、持ってはいなかった。

でも、もし…

狙いすまして、呼吸を整えて、放つ。

ギャッと悲鳴を上げて、緑の制服のやつらが次々と倒れる。

「逃げて！」と、また叫ぶ。

お父さんとお母さんとお姉ちゃんがてんでに走って逃げ出していく。

「ありがとう、リツコ！」

一目散に、逃げ出す…

逃げて、逃げて、無事で…

「お婆さんのところへ行くんだ！」

「お願いがあるのよ！」

目をきらきらさせて、大叔母様がいう。

「すごいワリツコ！」マシカが褒めてくれる。

「さすが！ 適任者！」鋭が快哉を叫ぶ。

「...リツコ！ ...リツコ！」

うなされている。夢をみている。

そうだった... 雄輝を狙っていた敵を倒した瞬間。

「キサマァッ！」

別の奴から、短剣を投げられて... 左胸に、真っ直ぐ刺さりそうになったのを危うく避けて、首の脇が切れて、血が出て、バランスを崩して...

墜ちる途中で木の枝に後頭部を打った。それから真っ逆さまに、地面に落ちた...

「リツコ！」

頸部の深い切り傷による出血多量と全身の打撲で、リツコは何日も、熱を出して眠っていたらしい。

はっと目が覚めると、枕元で心配そうにのぞき込んでいたのは...

ずっと交代でついていてくれたマシカでも鋭でも姫様たちでも、薬師の人たちでもなくて...

驚いたことに、皇女サマ、その人だった。

「..... あぁ良かった！ 起きたわね！」

「...あたし... 死にかけてた...??」

かすれた声で、ぼんやりきいてみる。

「危ないところだったわね、かなり。もう大丈夫よ。鋭たち交代で、ずっと付き添ってたんで、もういい加減に寝かせたわよ！」

半分涙目でにやりと笑いながら、皇女サマが答える。

「悪かったわね？ 目が覚めたら私で！」

ううん。とリツコもにやりと笑った。案外、この性格、可愛いかも、しれない...？

「雄輝は？」

「無事だったわ。あなたのおかげよ。猛毒でね。矢に塗ってあったの。いくら雄輝でも、あれが当たってたら、私でもマシカでも、治療をする暇もなく死んでるところだったわ。」

「そうなんだ。」リツコは安堵した。

「あたし、役に立った...？」

「ええ！ とても！」

ずっと苦手に思っていた皇女サマが、ぎゅぎゅぎゅっとリツコの手を握ってくれた。

「救ってくれてありがとう！」

「..... えへ〜。」

照れて笑うと、リツコは、再び眠った...

9 - 2. リツコ、龍にのる。

それからまた何日か、眠ったり起きたりして、熱が下がって傷の腫れもひきはじめたら、とたんに食欲がもりもり湧いてきたので、とにかくががつ食べた。

「... よかった〜！」

マシカがどんどんお代わりをよそってくれながら、それにしてもすごい勢いねと、ほっとした声で涙を流しながらけらけら笑った。鋭も雄輝も何度も、様子を見にきてくれた。ようやく起き出して、少しずつ歩きまわれるようになったころ。

何だかんだでずいぶん行列は遅れてしまっていた。

「足ののろい連中は先に行かせたわよ！」

皇女サマがにやりと笑って言う。

「要するに白皇家の血をひく姫が誰か西皇家の婿をとればいいわけなんだから！ 私が着く前に皆でちゃっかり西の三皇子を攻略しておいてくれるといいんだけど！」

「..... あ、あの人たち、そーいう目的で.....？」

「そうよー、お見合いめあてよ！」

リツコは納得した。

...なるほど。それで、家柄のいい美女ばかりあんなにたくさん、同行してたのか...

「だって白皇家の血縁の男の人たちって、兄様以外はほとんどみんな、あの戦争で死んじゃったのよ...？ 嫌がってる私と無理に結婚するより、西の皇子を射止めた姫が、皇位を継ぐことにしたらいいのよ！」

... 皇女サマをめぐる謎の『後継者問題』って...つまり、『後継者の押し付け合い』争いだったのか...

最後まで待機していたのは皇女と雄輝の一番の側近数十名ばかりで、その人たちもリツコが死なずに済んだことが確認できるとすぐに徒歩での砂漠越えに出発した。

リツコの体力では、まだ歩いたり駱駝に乗っての旅は無理なので...

行程をはしょって、残った一行はみんなで空を飛ぶことにしたという。

またあの鳥人の籠で運んでもらうのかと思っていたら、なんと！ 先日みたあの金の龍が背中に載せてくれた！ 鋭と一緒に乗ってくれて、リツコの後ろからしっかり背中をささえていてくれる。

飛仙族と呼ばれるフェルラダル様に手をつないでもらってマシカは嬉しそうに宙に浮いて飛んでいく。

それを悔しそうな横目で見ながら、兄皇子マリシアル様は妹皇女サマと手をつないで飛んでいた。

銀の龍の背中には、雄輝と副官の護衛の人たちが何人か、まとめて乗せてもらった。

その後ろから、公女リジュイディーリヤと小鬼も、それぞれの羽を広げる。

「きゃーーーーー！ 最高ッ！」

はるか眼下の広大な砂漠の美しい砂紋様と、点在する岩山の影とオアシスの煌めきと、どこまでも平らに広大に続いて視界の果てまで霞んで見える（地平線が丸くない！）《大地世界》全体を眺め渡して叫んでいるうちに、わずか半日ほどで、半月前に出発した本隊に追いついた…。

「…今度は、寝なかったね？」と、鋭にからかわれながら…。

9-3. リツコ、会議にでる。

砂漠のほとりの大きな隊商都市の外で先行していたみんなと合流し、衣装と体調を整えて、そこからは順調に数日の駱駝行で、《西皇家》の都についた。

あとにしてきた《仮の白都》の雑多な民族が賑やかに行き交っていた開放的な雰囲気とは何もかも違って、長い時代を経た西皇都は重厚で、荘厳で、格式ばっていて、のしかかってくるような威圧感のある石造りの巨大な建物が多かった。

皇宮に上がる前に庶民の市場に寄って見物と観光がしたい。と、迎えに来た使者の人たちに仰せつけられた皇女サマの『わがまま』は、『とんでもございません！』の一言で、がんとして却下に付された。

まあとにかく会議開催の期日にはぎりぎり間に合った形なので、さすがの破天荒な皇女も物見遊山は帰りの楽しみにとっておくことにして、白皇家の代表者たちは西皇家の本殿に、まずは到着の挨拶をしに行った。その儀式にはマシカや鋭やリツコたちのような『平民と余所者』は参加が許されなかった。

代わりに白皇家との旅のあいだは居心地が悪そうだったボルドム公女は《公主殿下》と

呼ばれて皇女と同格に厚遇された。なんでって、「ボルドム世界の創造主たる男神グアヒギルの血を濃く引く聖なる一族」の世継ぎの姫だから。だそうだ。

そのほか、各方面から《大地世界》諸勢力の代表者たちが続々と集まって...

いよいよ、数十年ぶりとなる《諸侯会議》が開催された。

リツコは初日と最終日に、『地球から来た地球人の代表』（代理）ということで一言ずつ挨拶をするのが役割だった。

また一生懸命マシカと相談して、今度は初日はユカタを着て出た。可愛いと好評だった。大叔母様から出発前に渡されていたあの手書きの挨拶状を、心を込めて、声に出して呼んだ。

それは会議の開催を祝し地球からも友好を祈って挨拶を送りますという簡潔な内容で、朝日ヶ森というのは国とか民族ではなく、こちらの世界のヨーリア学派と同じように世の中のために色々な働きをする有力な学者の集団だ。ということにしておいた。

それから会議は地域ごとや問題別とか産業別とか、つまり河川別の渡河税法についてとか、「統一交易貨幣の再発行開始における両替手数料率の統一可否の意見云々」とかとか、難しそうなものからばかばかしそうな内容のものまでたくさんの分科会に分かれて、あちこちで紛糾したり白熱したり和合したり盛り上がりだったり、満場一致で拍手喝采のあと大宴会になったり大乱闘になったり、それぞれ色々していた。

皇女様や鋭たちは手分けしてありとあらゆる会合に顔を出して挨拶したり意見を交換したりしなければならぬので、寝る暇も食べる暇ないほど忙しそうだった。

リツコとマシカとおつきの人々の大半は、終りの日までは暇になった。

市場に繰り出して買い物と食べ歩きに明け暮れた。

9-4. リツコ、自分の言葉で話す。

ミソノワ姫たちは会議のあいまにせっせと西の皇子たちを攻略していた。遠くから眺める限りでは西の皇族はイケメン揃いだったので、うまく恋人がみつければいいなとリツコは思った。マーライシャとの婚約がどうのこうのという件はうやむやのうちに無かった話にされつつあるらしい。

公主リジュイディーリヤは堂々と交渉して、一緒に亡命して来た部下たちとともに《大地世界》で争わずに暮らせるように、荒野のはずれの一角に、移住用の領土を譲ってもらえそうな感じになっていた。

会議はあちこちで紛糾していたが、積み残した分科会はそのまま延長戦になるという日程と会場の調整が続いて、ひとまずは当初の予定通り、次の満月の夜までで、全体会議は最終日となった。

うんと考えて、リツコは、最後の挨拶は自分の言葉で言わせてもらった。(どちらにしても大叔母様から預かってきた手紙は最初の一通しかなかったの。)

今度のは出発式の時に来たのと同じ私立の制服風の夏ワンピースのボタンもきちんと全部とめて、ちゃんとした「正装」風に見えるように気をつけて、靴もサンダルに変えて出席してみた。

「あたしは、まだ子どもですが、これから地球に帰って、今回の旅で見聞きしたことを、大人の皆に伝えます。昔々の《四界時代》の始めが平和で豊かであったように、これからの《三界時代》がまた行き来の盛んな、お互いに戦争をしない、平和で豊かな時代になったらいいなと思います。そのために、あたしにできることを探して、がんばりたいと思います。」

…あまりにも短すぎたかしら、と一瞬不安になったけれども、大人たちは満場の拍手で応援してくれた。

9-5. リツコ、よばれる。

それから会議の無事終了を祝って徹夜で宴会だというその晩、リツコは慌ただしく呼ばれて、西の皇宮内に用意されていた皇女サマの部屋へ案内された。

鋭もマシカも皇子様たちも公女も、今夜はとても忙しいはずなのに、なぜか、みんないた。

「…なあに？」

「リツコあなた案外有能だから。このままこちらに居てもいいのよ？」

いきなり不機嫌丸出しの声で皇女サマがぼそっとのたまう。

「へ？」目を点にすると、鋭が言い出しにくそうに苦笑しながら補足した。

「地球の欧米側に出られる通路があったら朝日ヶ森に戻すよりもそちらに亡命させてほしいって、清瀬律子さんから頼まれてた話は、前にしたよね？」

「あ、うん。…聞いた。」

「西のヨーリア学派とも連絡とってたんだけど。君が整理してくれた古文書の解説をできる人がいてね。それによると。どうやら確実に通れる西側への通路が、今夜だけ、

開く。」

「今夜!？」

「...急だから... みんなびっくりしててさ。」

「うん。」リツコもびっくりして、うなづく。

「それを逃すとしばらく地球に帰れる通路は確定できてない。へたすると数年先とかになるかもしれない。」

「そうなんだ...」

「それで、今夜、地球に帰るか、でなければ、数年先くらいまで、こっちに居てくれるかな?...って」

「.....そうなんだ.....?」

「きみこっちでけっこう楽しそうにやってたし。」

「もうしばらく居てくれたら、あたしは嬉しい。けど...」マシカが真っ赤な目になって言い淀む。

「言わないのは卑怯でしょ!」

また唐突に皇女サマがぶすくれた声でつぎ足す。

「...実は、リツコのお父さんとお母さんと、連絡が、取れたよ。」

「ほんとッ!？」声が、うわずった。

「うん。今夜、行くなら、迎えに来てくれるって...」

鋭の眼から涙が溢れるのを、リツコは二重にびっくりして見ていた。

マシカも泣き出してしまった。

リツコも泣き出した。でも、言った。

「うん。...急だけど... あたし、帰るよ!」

もう一回、声を出して、自分に確認してみた。「地球人だから... 地球に帰る。」

「あたしね。ずっと...自分のこと... 天才でも魔法使いでもないし... 役に立たなくて、残念だな! って思った。」

...でもね、こっち来て、ほんとの天才の鋭とか、魔法が使える王女様のマーシャとか、見たけど...

...べつに天才じゃなくてもね。凡才でも、マホウも使えなくても...

...あたし、結構、...役に立つよね?!」

「ええ。かなりとても、役に立ってくれたわよ!」

皇女サマが悔しそうに涙をにじませながら言う。

「だから... こっちの世界は、これからもう、平和になるから...」

マシカが声をあげて鳴き出してしまった。両手に顔をうずめる。

「あたしの世界は... これからが大変なんだから...」

自分の世界に帰って、がんばれることを、やってみる！」

「そうだね。」

雄輝がちょっとそっぽを向き、鋭がうん。とうなずいた。

9-6. リツコ、地球にかえる。

慌ただしく、来たときのリュックとバスケットに荷物を詰めて、来た時の服に着替える。

背負って抱えて歩けるもの以上は運べないという話だったので、こっちでマシカと買ったばかりの服や小物や甘いものの大半は、残念だけど諦めるしかなかった。

「リツコ...！ あたし本当に妹みたいだなーって、...思ってたのに...！」

マシカはもう泣いて泣いて大変で、手伝いは期待できない。

やっぱりぐすぐす鼻を鳴らしながらも、鋭はさくさくと荷造りを手伝ってくれた。

とにかく書き貯めた記録のノートは全部と、ついには足りなくなって分けてもらったこっち風の巻き布や葉綴じもぜんぶリュックにむりやり押し込む。

二十四色の色鉛筆は鋭に、ぼろぼろになったけど日本語の辞書はまだ使えると思うからマシカに、記念にもらってもらった。

「なによ！ わたしには？！」と皇女サマが子どもみたいに拗ねたので、ちょっと考えて、籐のバスケットに入れてた中身をぜんぶ出して適当な布で風呂敷包みにして持つてくことにして、「これ気に入ってたんだけど、あげる。」と言ったら「じゃあ大事にするわ。」と素直に受け取るので、やっぱりちょっとその性格には笑った。

挨拶を出来るかぎりの人たちには慌ただしく挨拶をして回って、会議の打ち上げ宴会であちこち賑やかな城のすみから、地元のヨーリア学派の人たちの案内で、そっと抜け出す。

皇女サマと公女様は宴会から長くは抜けられない立場なので、門の中で最後のお別れをした。二人とも眼が赤くなっていた。

短い夜の道を歩き、寺院のような場所から地下の泉水井戸に入る。

小さい祠があって、それをどけると短い洞窟があった。

『入って。』ヨーリア学派の人が言う。

『リツコ！...リツコ行かないでッ！』マシカがうしろからしがみつく。

『マシカ...！ ごめんねえッ！』リツコも涙で前が見えなくなる。

『...あまり時間がない。すぐに通路が塞がってしまう。』

「リツコ、」

「鋭、また...いつか、どこかで、会えるかな...？」

「手紙を書くよ。小さいものなら、定期的に送れる通路は確保してあるから」

「うん...」

動けない。やっぱり...行きたくない！ 帰りたくない！

リツコは思った。「あたし！ ...やっぱり...ッ！」

すると洞窟の向うから、真夜中なのに、太陽の光？ らしいものが射しこんできた。

「...リツコ！ ...リツコ？ 居るの?!」

「リツコ!？」

「...お母さんッ？ ...お父さんッ！」

...マシカが、抱き着いていた腕を、嗚咽しながら、放した...

「ごめん！ みんな！ あたし、行くね！」

『...リツコのお母さん！ リツコとっても良いコでした！ ありがとう！ 大事にしてあげてね!』

マシカが洞窟の奥に向かって叫ぶ。

「...リツコ!?...そこに居るのよねッ?!」

リツコはがんばって一歩踏み出し、それから目をつぶって駆けだした。

後ろを振り返る暇もなく、あっと思う間もなく、ステン！ と、何もないのに転んで...

慌てて目を開けると、明るい場所に、お母さんとお父さんが、立っていた...

「リツコ!...元気で...ッ！」

最後に、喉に絡んだような、鋭の半泣きの声が聴こえて...

「待ってッ！ リツコごめん！ 《言葉の術》！ 解くの忘れたわ！」

息せききって追いかけてきたらしい皇女サマのそんなまた笑えるセリフがかすかに遠くから聴こえて...

それっきり。

9-7. リツコ、家族と合流する。

お母さんがぎゅっとしがみついてきて、お父さんが泣いていて、お姉ちゃんが泣きじゃくっていた。

そこは知らない場所で、でも地球の建物だった。

リツコも泣いてしまって、しばらく何も言えなかった。

それからリツコは独裁国家となって戦争を始めてしまった日本へは戻れず、家族と一緒に外国に亡命して暮らすことになったが。

なぜか？ 言葉が通じないはずのリツコが日本語で喋ると、言葉が通じないはずの相手の人のあたまのなかに、その意味が字幕のように、浮かんでしまう…。

それは地球世界ではありえないことで、リツコはテレパシーを使う超能力者と誤解され、その後の《大迫害時代》には、地球にさえ居られなくなって宇宙へ移住するハメになったりしたが…

それはまた、別のお話です。

f i n.

(第 2 稿)

(第 2 稿)

(第 2 稿)

(あらすじ) (2018年9月8日)

『リッコ冒険記』☆夏休み・異世界旅行☆

霧樹里守(きりぎ・りす)

(あらすじ)

高原リッコは家族の事情で、私立学園の寮に住んでる。

その学長から「夏休みの手伝い」を頼まれた。

なんと、「異世界への親善大使」!

ええ?!... と思ったけど大人たちや先輩たちはみんな忙しくて行けないらしい。

「行って、みんなと仲良くして、まわりをよく観察して、レポートを書いてきてくれば、それだけでいいの。

行ってくれたら他の宿題はぜんぶ免除してあげる!」

大好きな学長がそう言ってくれたので、喜んで引き受けた。

「姉弟世界」と呼ばれる大地世界《ダレムアス》では、漫画かアニメの王子様? かと思うような超美形! の、優しいお兄さんに世話してもらっちゃうしい♪
食べ物は美味しいし、お祭りは楽しいし...、
... あいにくながら残念な性格の皇女サマには、意地悪されたけど...

もうひとつの異世界《ボルドム》との戦争終結のための講和準備会議? とか、
同じ大地世界のなかでも、民族紛争とか、皇位継承争い? とか...
そういう深刻な問題には、ショックを受けたけど...

たっぷりのレポートを抱えて、友達と涙でお別れして、
リッコは夏休みの終わりとともに、元気に帰国しました。

1 - 0 - 0. 朝日ヶ森「学苑」(おもて)

第1章 リッコ、異世界へ行く。

1 - 0. まずは、朝日ヶ森学園。

1 - 0 - 0. 朝日ヶ森「学苑」(おもて)

朝日ヶ森学園。

知ってるかな？

「天才児が集まる」ので秘かに有名。

超のつく贅沢な校舎と自由奔放なカリキュラムで知られていて、子どもを私立に進学させたい親たちにとっては、憧れの学園だ。

基本は全寮制だけど、都心から新幹線で通勤・通学してくる生徒や先生もいる。

緑の豊かな地方都市の新幹線の停車駅から、自動車なら迂回して20分くらい。

歩くなら、ほぼ直線コースの県立公園の遊歩道を抜けてくるのが速い。

自転車?...まァ、モトクロスを乗りこなせる人なら、抜けられる道だと思うよ...?

学園の敷地は広くて、一見すると壁とか塀とか柵とかは何もない。

でもセキュリティは万全で、目立たないところに監視カメラ網がばっちり。

不審者は立ち入れないけど、内部の見学とかは許可制の予約ツアーに参加すれば入れる。

校舎や講堂や寮の建物は、一見シンプルだけどしっかりお金のかかった造りで、見た目は柔和な感じだけど、どんな災害にもまけない頑丈な骨格なんだって。

もちろん、屋外と屋内の両方に水泳プールがあるし、体育館とか柔道場とか剣道場とか弓道場とか、もちろんスケートリンクもスキー場もテニスコートも、全天候対応型のやつが、それも学年別とかで、複数個所にある。

さすがにサッカーコートとラグビー場は、屋外だけらしいけど。

図書館ときたら外部の大人がまる一日かけて調べものしに訪ねてくるほど蔵書数が多い。

広大な敷地はゆるやかな起伏があって、種々沢山の緑が豊か。

天気の良い日は生徒たちがあちこちの芝生や木の下で、寝ころがったり自由課題を片づけていたりする。

時間割は自習が多くて自由で、給食もメニューを自由に選べて美味しいらしい。
都心から新幹線で週1のスクーリングに通ってくる通信制の生徒たちには芸能関係の子
役とかが多い。
全寮制の一番奥の建物に住みついているのは、三歳から二十五歳までの、「天才」と呼ば
れる、生まれつき知能指数の高い、ちょっと変人が多い。
それから一番多いのはやはり親が金持ちとか有名人とかで、コネと金をふんだんに使っ
て我が子をここにがんばって押し込んだ！ という家の子たちらしいけど。
それ本当はちょっとだけ、気の毒な話なんだ。
なんでかって...？

ここはあくまでも、関係者からは「おもて」と呼ばれている場所（学苑）で...
本当の朝日ヶ森「学園」は「うら」とか「真」とか呼ばれていて、別の場所にあるから。
なんだ...

これ、知ってたかい...？

1 - 0 - 1. 朝日ヶ森 (うら) (2018年9月8日)

1 - 0 - 1. 朝日ヶ森「学園」(うら)

さて。

「うら」とか「真」とか呼ばれている、「ほんとうの」朝日ヶ森について...

説明するのは、難しい。

場所は秘密で、首都からは「裏日本」と蔑視されている、辺鄙な山中にある。

こちらも敷地は広大だけど、頑丈なレンガの壁にまわりをきっちり囲われて、特殊な警備隊が昼夜わかたず嚴重な監視をしている。

生徒の種類はおもに三つに分かれる。

ひとつは国内外の要人、つまりVIPの子どもで、家族と一緒にいられないような、何か特殊な事情のある者...病弱とか、テロや誘拐の危険とか、相続争いとか、隠し子で正妻には内緒とか...そんな感じの。

だからちょっとひねた性格のやつらが多い。

ふたつめのグループは、もっと特殊で...

「ふつうの」人間じゃない力や外見を持って生まれた、「特別な家柄」の、跡継ぎとか先祖返りとか...

とにかく、そんなのだ。

角や牙があったり、鱗や翼があったり、魔術や呪術が使えたり、過去や未来や、人の心が読めたり...

本人たちは「神でも悪魔でもないから、いちおう、人間なんだけどー」と主張する場合が多いが、今の世の中ではうっかり一般社会を出歩くことができない。

それで、「一族だけの隠れ里にこもってばかりでは世間にうとくなるし、幼なじみと親戚以外は友達も恋人も探せないし!」という理由で「社会体験」と称して「遊学」しに来て、文字通り「羽を伸ばして」学園生活を楽しんでいたたり...する。

みっつめのグループについては...長くなるので、また後で説明しよう。

そんなふうには、観た感じからして不思議な...秘密の、「地球内・治外法権」とも呼ばれる...

「朝日ヶ森・学園」。

このお話は、そんな場所から始まる。

1 - 1 - 0. リツコ、呼ばれる。 (2018年9月8日)

1 - 1. リツコ、親善大使になる

1 - 1 - 0. リツコ、呼ばれる

朝日ヶ森「学園」の三つめのグループ通称「ただびと組」に属する普通人のリツコは平凡な子どもで、セレブの子でも天才児でもなく、美少女戦士でも子役アイドルでもないかわりに、妖怪変化の類でもなかった。

(こう書いたら「失礼ね!」と、妖怪変化な見た目の学友から怒られた。)

しいて言うなら特技は木登り。

親から教わったのでキャンプとか大好きで、野外炊飯とか年齢のわりに得意。

虫とか蛇とか平気で、まァ女子からは引かれるけど、いざって時のサバイバルには向いてる。

見た目は凡庸。顔はのっぺりしてハナはちんまりして、日焼けして真っ黒で、鼻のまわりとかソバカスだらけ。へろへろのくるくるの天パの髪がコンプレックスで、黒目がキョロっとでかくて、歯並びだけは自慢で真っ白で、まァ時々「笑うと可愛い」くらいは褒めてもらえる。

ご飯はよく食べるけど、それ以上に暴れてる。から、そんなに太ってはいない... たぶん。前いた学校では野球部のピッチャーでいいセンだった。

投げたら当たる。これはけっこう、長所?

まァそんな程度のリツコが「うら」朝日ヶ森にいるのには...

事情があった。

そんな事情のひとつ、「大叔母様」からの呼び出しがあったので、とある7月の昼下がり
に学長室までとことこ歩いて行った。

全寮制の学園はすでに夏休みに入っていて、家のある生徒たちの大半は帰省か家族旅行に行ってる。

セミ時雨のほかはしんと静かな構内の、広大な芝生と緑陰の濃い木立ちの数々と、英国庭園風のベンチや花壇や植え込み迷路や...の中を、小汗をかきながら十数分ほど、えんえん歩いて歩いて、ようやく重厚なレンガ造りの事務室棟に辿りつくと、勝手知ったる建物内には無言のまま入って、こんこんと学長室のドアを叩いた。

「はい。どうぞ！」

若々しい声の大叔母様の返事を聞いてからドアを開け、一応「失礼します」と頭を下げる。

大叔母様というのは都合上の呼称で、本当は祖母のイトコだ。

「なんですかー？」

「お願いがあるのよ！」

元気な声でいきなり言われて、リツコは面食らった。

「欠員が出ちゃってね！ 代わりに行ける人が他にいないの。バイトと思って引き受けてくれないかな？ お礼として、夏休みの宿題ぜんぶ免除するから！」

...この「大叔母様」の名前は清瀬律子という。リツコと同じ「りつこ」だ。

やはり美女でも妖怪でも天才でもない「ただびと」のはずだがこの卒業生で、なぜか学園長まで務めてる。

リツコの母はこの気さくな美人叔母（ほんとうは母の母の従妹だ）が大好きで、たまたま彼女が事故で行方不明になって死んだかと思われていた頃にリツコを身籠ったので、思わず名前をもらって付けてしまった。という話...（そしてその後で本人が生還したので、親族一同は呼び名に困った。）

...まあそれはいいけど。

「...朝日ヶ森『学園』の生徒の欠員の代理って... それ、『ただびと』のあたしでも務まる用事？」

そっちのほうが当面の大問題だ。

「だいじょうぶよ！ なんて言うか...そう！ 親善大使！ みたいな役目なの。行って、滞在して、皆さんと仲良くして... 最後の会議で、コレを私の代理で音読してくればいいの！」

渡された手書きの便せんにざっと目を通して、それから声に出して読んでみた。

「みなさん、おまねきありがとうございます。今日のこの会議の...」

ちょっと長いけど... べつに、難しい漢字とかは、無いよね...？

「...行っても、いいけど... どこ...??」

「異世界よ！」

大叔母さんの無邪気な一言に、リツコは「はぁ？」と口を開け、目を点にした...

1 - 1 - 1. リツコ、出かける (2018年9月8日)

1 - 1 - 1. リツコ、出かける

「...あ、あらっ？ ウケなかったかしらっ？ イマドキの『ただびと』...いえ、ふっ『普通世界』の子どもには、こういう言い方のほうがウケ.....いえ、判りやすいかな〜と、...思ったんだけど...っ！???」

いつも穏やかでニコニコしている大叔母様が、真っ赤になってわたわた取り繕うという珍しい光景を、リツコは口をあげたままあんぐり眺めた。

「...べつに危ないこととかは無いと思うのよ？ 戦争は終わったっていうし、和平会議だし、おばさまの初恋の人とか、向うに行ってるしっ」

「はぁ？」

「だからねっ！...だから、私と同じ名前の親戚のあなたが、向うであの人に逢ってきてくれたら、本当に、わたし、嬉しいのよ...っ！」

とりあえず、何も解らないけど、断れないらしい、ということだけはリツコにも判った。

「.....わかった。とにかく、行ってくるから.....。」

「ほんとっ？」

としがいもなく頬なんか染めちゃった大叔母様（たしか七十歳は過ぎているはずだ...）が、慌てて咳払いなんかしながら色々説明してくれた。

「...持って行ってほしいものは購買に揃えてもらってあるから、戻る時に受け取って行ってね。それから、旅仕度に必要なものは何でも『おばさまの支払いで。』って言って買ってくれていいから。」

渡された「持っていくもの」リスト。

・計算尺 1つ

・ノギス 1つ

・大学ノートかリングノート（リツコの好きなほうで）10冊くらい（持てて書けるだけたくさん）

・鉛筆（ボールペンじゃなくて）1ダース（1箱）か、もっと。

・色鉛筆（カラーペンじゃなくて）1セットかもっと。

・鉛筆削り（忘れないで！）

「この計算なんとかとノギスってなに？」

「それは向こうからのお土産のリクエストなの。着いたら渡してあげてね。」

「...わかった。...ねえねえ。色鉛筆って、24色のやつ買ってもいい？」

目をきらっと光らせながら聞くと、

「48色でもいいわよ！」

大叔母様がかかるく言い切ってくれたので、リツコは大いに気をよくした。

自分のおこづかいじゃ買えないやつだー！

それからこまごまと書いてくれた行先への道順の資料にしっかり目を通して、打ち合わせして。

その後ひとりで購買に寄ってリュックとか下着とか要りそうなものを買って。

うんと考えて、最低限の着替えと小物だけをしっかり厳選して詰めて、お気に入りの藤のバスケットには列車内で食べるお弁当と飲み物を詰めて...

翌日、リツコは学園前から無人の路線バスに飛び乗った。

最寄駅から鈍行に乗って、乗り換え駅から特急に乗って、検札に来た車掌さんに

「小学生が一人で？」と不審がられたら、教えられた通りに、

「ママのお墓参りに行くんだけど、パパは夏休みが取れなかったのー！」

降りる駅に着いたらおばあちゃんが迎えに来てくれるから。と無邪気なふりしてにこにこ返事して。

慣れない長距離列車に揺られていたら半袖ではクーラーが寒くて、鼻水垂らしてぐずぐず言いながら、ちょっとだけ肘枕で窓にもたれて眠って。

乗り降りする他の乗客たちのざわめきにはたと目が覚めると、もうすぐ、降りる駅で...

乗り換えて、また乗り換えて、乗り継いで...

日暮れ前によくたどり着いた二面戸町駅のホームの待合室でぐるりと振り向いて、七つと三番目の教えられていた秘密のドアを特別なやりかたで、くるっと開けると。

「高原リツコ様ですね？ 多次元旅行社の送迎サービスの者です〜！」

どう見ても二足歩行の巨大なカエルの人？ がいて、曲がりくねった不思議な山道をおかしな車で案内されて...

教えられた森の中のこぶこぶの大樹によじよじと必死で登って。

「大地の端っこから太陽の端っこが完全に沈んで消える瞬間」ちょうどに！

教えられた通りの樹上の空洞から、えいっと、勇気を出して...

目を閉じて、しっかり荷物を抱えて、飛び降りて、どすんと...

...いえ、ふわっと...

なにか柔らかいものの上に、落ちて...

目を開けたら、そこは、異世界？

だった...

2-0-1. リツコ、異世界に着く。 (2018年9月9日)

第2章 リツコ、王子サマに会う

2-0-1. リツコ、異世界に着く。

はじめ何も視えなかった。とにかく眩しかった。

(...太陽...? あれ? だって「陽が沈む瞬間に!」って...あたし飛びこんだよね...?)
変だなと思いながら、とりあえず薄目だけ開けて、明るすぎて何も視えなかったので、右手を上げて顔の上を遮ってみた。

同時に、右側の手で、からだとまわりを探ってみる。

...怪我はない。まわりは...もふもふ? もこもそ?...している...???

しばらくしてようやく、自分が何か柔らかくて長丸いもの? の山の中に、上から落ちて来た勢いのまま、あおむけに埋もれこんでいる...? ということが判った。

触ってみた感じでは、リュックも潰れていないし、顔の上に挙げた右手でしっかり持ってたバスケットも、壊れたりはしていない。

とにかく眩し過ぎたので、薄目だけ開けながら、もっそもっと動いて、なんとか姿勢をかえて腹這い向きになり、手探り膝さぐりで、1mほどのそのふかもこの斜面をのそのそよじ昇る。

その何かふかもこしたものが、上から落ちて来たリツコを受け止めた衝撃で弾け跳んだらしい綿埃?

...らしきものが、ほぼ真上からまっすぐに降り注いでくる金色の陽光の中をぶわぶわと舞い踊っている。

ちょうどその頃から、まわりのあちこちから、声が聞こえ始めた。

「...ま〜るめる! まるった! えら。えららう。まるる〜ん...???

「えるった! らう!」

「あらえ！」

「まるえ？ えら。あらう。...あろ、...あっかせっか！」

「か〜いせ！ えのっかあるっか、らうらうらう。あごん！」

「あうのいあ！」

...そんな感じの、まるまるした声の、可愛い響きのコトバで... もちろん、ひとつことも、解らない...！

(.....ほんつとに、異世界？ 来ちゃった〜???)

...そう思いながら、もこもこの白い山の上からようやく顔を出すと。

「えらっ！ あまっあまママあま、あそっ？」

可愛い仕種で、どうやら「だいじょうぶ〜？」と心配してくれているらしい声が、かかった。

(...か、.....かわいい...っ♡♡♡)

語尾と目じりが思わずハート型になってしまうような小さな生き物たちが、そこらじゅうにいた。

全体的に、白くてもこふわ。サイズはかなり小さそうだ。一番大きいコでも、リツコの膝までぐらい？

うさぎのような、モヘアのような、ふわふわ毛並みの、だけどどちらかという横にまるい顔立ちの、大きな吊りあがりぎみの丸い眼の... 見た目は、むしろ、猫...？ エプロンドレスのような... 巻きスカートのような... きんたろさんのような... 可愛いパッチワーク模様の色とりどりの服を着た... 二足歩行の...、白い、仔猫...？？

「あいにゃ！ うにゃう？」

心配してくれているらしい、大きな表情豊かな黒や茶色の瞳が、とても愛くるしい。

(...これ、意味、たぶん、「だいじょうぶ？ けがはない？」って感じかな...?)

リツコはあんまりな可愛いらしさに嬉しくなってしまうてへろっと笑いながら、とりあえず手を振ってみた。

「ごめん！ コトバわかんない！ ケガはないよ〜。だいじょうぶ！」

それからちょっと心配になって体の下のもふもふを手にとってよく見てみた。

白猫？ たちとよく似た色だから、仲間を下敷きにでもしたのかと思って。

(...違うみたい...これは...毛玉?...繭...???)

なにかカイコのような大きさの、毛玉...毛糸玉？ のようなものが、いかにも「落ちて来くるもの受けとめ用クッション」という形に高さ数メートルくらいの勢いでもりもりと盛り上げられている。

その小山を取り囲む...風から護っているのかな...？ というふうに張り巡らされた、屋根はないテントのような...天井を大きく開けたティピのような...布とも皮ともつかない

い幕屋のなかの...

前は大きく開いていて、見晴らしが、すごく良いことにリツコはやがて気がついた。

そこは、おそらくとても高い山のなかの斜面を覆っている、大きな深い大樹の森の、さらにひときわ巨大にそびえたっている... 後にしてきた世界でよじ登って飛びこんだ大きな洞のあった老木とは同じくらいの大きさだけれど、また別の...

若々しく枝を張り広げたまごとな大樹の、巨大な幹に開いた大きな洞の、その下だった...

2-0-2. リツコ、挨拶する。

2-0-2. リツコ、挨拶する。

古びて節くれだってぼこぼこ溝やウネができてところどころに緑の苔まで生えた大樹の根元、眩しい陽光が燦燦とさしこむあたり。

巨木の幹にできた大きな空洞（うろ）から「何かが落ちてきたら」受けとめられるように...と、高さ三~四メートルほどに積み上げられていた「もこもこ」の山の斜面をずらずると滑り降りてみて、そこでリツコはしばらく困り果てていた。

膝丈ほどの二足歩行の「喋る猫」...としか思えない、白くてふわふわの小さい生き物の群れにわらわらと取り囲まれて、

「まうまうまう！」

「あうれ？」

「あっかのおっか？」

「おねうおねう！」

「まうまうまうまうー！」

などなど...ちっとも解らない言葉で、おそらくたぶん質問責めに？されたあげく、とりあえず適当に日本語で受け答えをしている間に、やおらよじよじとリツコの脚や腕に登り始めて、頭の上に座っちゃったりする、おちびさんまでいる...

(.....えーとお。これは~.....☆)

ふかふか可愛い生きものにまわりつかれて思わずもふもふと撫でてみたり、へろへろと笑いながらも困り果てていると、すこし離れたところから、すこしだけ低めの声が響いた。

「...えっけれねん！あうら！かなりっこさる！」

とたんに、リツコを取り囲んでいたチビ猫さんたちが慌てて動き始めた。

「あけーなーね！」

なんとなくリツコにも意味が分かった。

『あんたたち何やってるの、だめでしょ！離れなさい！』

『ごめんなさーい！』

...くらいの会話じゃないかな？ たぶん...

ちびさん達がどいてくれた隙に慌てて立ち上がると、やってきた人？たちの姿がようやく見えた。

(...あれ...?)

膝丈ほどのちびさん達は、どうやらとにかく「子どもの」猫(?)だったらしい。

やってきたのは大人？ で...そして。

横丸な顔で耳も短くてどう見ても地球の猫に似ている子どもたちに比べると、やってきた大人？ たちは、おそらく、育つにつれて顔も手足も縦長になり...耳が長く立ち上がり...やがては垂れて...地球でいう「垂れ耳うさぎ」が服を着て、荷物を手で持って立って歩いてやって来た。...としか、リツコには思えないのだった。

膝丈のおちびさん達よりはだいぶ大きいとはいえ、地球の日本の小学校高学年としては標準サイズのリツコと同じくらいの身長しかない。

(...えーと！)

リツコはとりあえず「皆さんと仲良くしてね。」と大叔母様に言われて来た、自分の「親善大使」という役割を思い出して...、とにかくピシッと「気をつけ！」の姿勢を試してみた。

それから、

「こんにちは！ はじめまして、高原リツコでございます。よろしくお願ひします！」

きちんとした大人たちがきちんとした時にきちんとやるみたいに、きちんと前に手をそろえてきちんと頭を下げ、きちんとした挨拶を試みる。

おとなウサギ？ たちは、ちょっとキョトンとした後、やおらそれぞれの長い耳をゆっくりと頭上に掲げてぱたぱたと順序良く揃えて左右にうちふり、片手で巻きスカート？ の脇をちょっとつまみながら反対側の手の平をリツコに見えるように開いて、膝をちょっとかがめて、

「まうまうまう！」と声をそろえた。

(まうまうまう？) とリツコは慌てて考える。

(さっきから何度もちびちゃんたちから聞いてたコトバだな～、挨拶だったのか！)

了解したので慌ててまねっこをして両手を耳のかわりに頭の両脇にたてて左右にふってみて、スカートは履いてないので仕種だけ真似して、膝をぴよこんとかがめて、

「まうまうまう？」と、首をかしげながら挨拶を試みた。

おとな兎たちはリツコの発音の悪さにウケたらしくて笑いながら、元気に声をそろえて「まうまう！」と返事してくれた...

ので、リツコは嬉しくて、えへへと笑った。

「...えっけれねん、あうりっこさるれうある？」

「あっかいおす、おっかいねん？」

...再び意味が解らない...

えへへと頭をかく仕草で困り笑いをしていると、おとな兎たちのうしろから、新たな声が響いた。

「...ごめんごめん！ 遅れた！ やっぱりちょっと時間の計算に誤差があったね！」

(.....日本語だぁ～...！！！！)

こんな短時間で「ことばの壁」に疲れて早くもホームシックになりかけていたリツコは、

自分がものすごいほっとしていることに気がついて、むしろ驚いた...

2 - 1 - 1. リツコ、清峰鋭にあう。

2 - 1 - 1. リツコ、清峰鋭にあう。

「ミキーレ！」

「ミキーレ！ あうのあさるのみえ、えれ？」

『あうれりあおうのおうあ、えら。』

少しだけ違う発音で、だけどごくごく流ちょうなウサギ語？ で受け答えをしながら現われたのは、ものっすごい美青年！ だった。

リツコと同じほどの背丈のおとな兔たちの背後から、ひょひょいと胸半分ほど上に出るすらりとした細身で、薄茶色のさらりとしたまっすぐな髪は肩にかかるくらい長くて、すっきりと優しそうな色白の笑顔で、ものすごく賢そうな額がきれいに広くて、薄いメガネをかけている瞳も澄んだ明るい茶色で、きらきらして、...吸い込まれるように見惚れてしまう、美形だ...！

(.....うそっ？ 少女漫画かアニメかなんかっ？)

リツコはこんなに綺麗な外見の青年を間近で見たことがなかったので呆然とする。

ぼかんと上を向いて口を開けて見惚れているリツコにちょっと困った笑顔で、

「...リツコさんだよね？ 遅れてすみません。迎えの者です。」

「はいっ！ 高原リツコですっ！ 高天原から天を抜いたタカハラ！ リツコはぜんぶカタカナっ！」

見惚れていたのが決まり悪くて、リツコは思わず大声のフルサイズで自己紹介をしてしまった。

(...あ、恥ずかし〜！) 赤面して一人百面相をする。

「...どうぞよろしく？ ぼくは、清峰鋭といいます。」

「.....嘘っ?!」

ウサギたちからは「ミキーレ！」と呼びかけられていた青年の自己紹介に、リツコは思いつきり大声で返してしまった。

「え？」

「...だって！ それ大祖母さんの同級生の人の名前！ 七十歳は過ぎてる筈でしょうっ？」

「...あ〜、聞いてないかな？ 向うとこっち、時間の流れもトシのとりかたも違うんだよ」

「聞いてないっ！」

...美青年なお兄さんは、困ったような笑顔で、にっこり笑った。

「じゃあ、解らないことは後で話すから、道中、何でも聞いて？」

(...つまり、今はその場合じゃない。ってことよね...?)

まわりできゃらきゃらと「ミキーレ！」と青年に呼び掛けて何か騒いでいるお婆さん？

兎たちの群れを眺めていちおう考えたリツコは、とりあえず、ハイと頷いた...

2-1-2. リツコ、異世界の村へ行く (2018年9月9日)

2-1-2. リツコ、異世界の村へ行く

「この世界はこの世界の共通語で《ダレムアス》と呼ばれていてね。意味は《大地の世界》かな？」

「そうなんだ」

「いま僕らが歩いているのが《大地の背骨》と呼ばれている中央山脈の端っこで、目の前の大平原が、この世界では一番人口密度が高い《白都平原》。あそこに流れている大河が…」

山腹のくねくねした小道を並んで歩きながら、視界に入る主だった地形の名前を教えてください。

空は地球と同じように気持ちの良い澄みきった青色で、流れる白い雲と乾いた風がとても気持ち良くて、リツコがよく知っている地球の日本の樹林帯とは少し様子の違う大森林には、綺麗な色のたくさんの小鳥や蝶たちがせっせと飛び交っている。

わきゃわきゃと賑やかに足元に絡みついてくる子猫？ なこどもたちと垂れ耳ウサギなおとなの女性たちと、その中間で真っ白い毛並みの立ち耳ウサギみたいな、どうやらリツコと同年代くらいの少女たち？ と、地球の人間の基準で超絶美形な長髪青年と一緒に、足早に歩いて山腹のちょっとした平地に開けた豊かそうな村まで降りて行くと、そこにいた平たい垂れ耳のキャバリア犬にそっくりな顔のひと？ たちは、ちょっとびっくりしたけど、どうやらおとな兎な女性たちと同族の男性？ の特徴らしかった。

その他に、なんとなく鹿似のひと？ とか、うさぎ+いぬ似人たちと言葉で喋ってるけどどう見ても丸ごと四足のセントバーナード犬みたいな人？ とか、熊っぽい人とか、鳥な人とか...が、住人ではなくて通りすがりの行商人？ みたいな感じで、山中の街道を歩き交っている。

まるっきり人間。という人たちや、ちょっと違うけどほぼ地球人と同じ。という人たちも、もちろんたくさんいた。

並んでいる家々は木造で、まるでアニメに出て来る白雪姫の小人の家みたいな、可愛らしいサイズ。

なので、体格的に、うさぎ+いぬ人の村の家には入れないサイズのひと？ たちは、村のまんなかの広場や、わざわざ大きめに造ってあるらしい休憩所風の小屋とかに座って、買った物を吟味したり休憩したり食事をとったりしていた。

なんだか、ガリバー旅行記？ みたいだ。

山腹を横に伸びてくねくねと続いている街道沿いの平和な村は交易でにぎわっていて豊かそうで、商人たちの間で飛び交っている言葉も、なんとなくだけど、何種類も違う言葉が混じって使われているように聞こえる。

「ミキーレ！」

「リール！」

「イーキレ！」

「リレク！」

…地球の日本人の清峰鋭と名乗ったはずの美青年に、親し気に呼び掛ける人たちの呼称？ からして、とにかく色々、何種類もあった…。

「…えーと…、清峰さん？」

「鋭でいいよ？ リツコって呼んでいい？」

「いいですけど…」

「ですじゃなくていいよー？」

にっこり笑う顔にまた思わず見惚れてしまいながら、

「いい、けど？」と、リツコは言い直した。

「この世界って、言葉は何種類くらいあるの？」

「ごめん。質問たくさんあるとは思うけど、ぼく先に色々打ち合わせしなくちゃなんだ。ちょっと待っててくれる？」

「わかった...」

村について、案内された一番大きな家の庭先の木の下の居心地のいい場所で、きれいに張られた木製のテラスのような地面と同じ高さの床の上の敷布の上に出してくれた、果汁や香草のお茶や飾り切りの果物や、木の実を潰して焼いたお好み焼きみたいな見た目のお菓子だか軽食だか...色々をすべてたிராげた後、まだ隣の反対側の大円卓でわあわあ騒いでいる鋭の「打ち合わせ」とやらが終わってないのを見て、リツコはやおらリュックの中から1冊目の大学ノートを取り出した。

まずは日付と時間を書こうと思ったけど、リュックから出してみた携帯機器類はあらかじめ教えられていた通り、圏外表示どころか画面が真っ暗なままで、いくらスイッチを押してもうんともすんとも、電源すら入らない。

「...ほんとだ...」

「あ、それは聞いてた？ こっち電気を使うものは全部ダメなんだ。金属は手に入るんで、水力発電とかも造って見たんだけど、そもそも物理法則が根本から違うらしくて。」
鋭がリツコの動作と声が気になったらしくて、一瞬だけ振り返って相手をしてくれる。

(...ブツリハウソク...って、電気とか重力とか惑星の仕組みとかとか...のことよね?)

急いで頭のなかでおさらいした律子は、

「空とか木とか、見た目はおんなじなのにねー。」と言ってみた。

「空と太陽と風だけが共通項、って言われてる。」

「ふーん...」

それきりまた鋭がいろいろ動物な人たちとの長い会話に戻ってしまったので、日付と時間を尋ねるのはあきらめて。

「訪問1日目。昼？ ご飯のあと。」とだけ書いて。

大叔母様から持てるだけ大量に持って行けと言われた体験報告記入用の大学ノートの一冊目に、やはりダース入りの箱ごと買ってきた鉛筆の1本目をがりがり削って、ざっと報告の文章はメモだけ書いて、それからやおら「48色！」入りの色鉛筆の缶を広げて、子猫とおとな兎とおとな犬？ の簡単なスケッチというか落書きを、家族風に並べて、丁寧に手早く描いて。

「ねえねえ、このひとたちは、なんていう名前？」

またちょっと暇ができたらしいすきに隣の鋭に聞く。

「...本人たちはマウレイレイって名乗ってる。《賢く礼儀正しい一族》みたいな意味かな。まわりからはもっぱら《兎犬猫族》とか...

.....リツコ、イラスト巧いね？」

「あ、ほんと？」

えへらっと笑う。

「うん。簡単な線なのに、特徴をよく捉えてる。」

「わーい褒められたー♪♪」

素直に喜ぶリツコの笑顔に、美青年もつられて笑った。

「...適任者が行くわよ！ って清瀬のほうの律子さんが手紙に書いてきた意味が分かったよ。」

「なんでー？」

「前に来たオトナの方は、電波が通じなくてもデジカメとパソコンで記録は撮って帰れるだろ。...って思ってたらしくて...記録機械全滅で、報道マンとやらのアイデンティティーが崩壊してた。」

「うーん...」

リツコは苦笑する。

アイデンティティーって言葉の意味はよく解らないけど、オトナって...ときどき、「使えない」よね...

2-1-3. リツコ、空を飛ぶ。 (2018年9月9日)

2-1-3) または4). リツコ、空を飛ぶ。

「ところでリツコ、きみは馬には乗れる？」

「ウマ?... 動物園とかの10分1000円の体験乗馬くらいしか乗ったことない...」

「じゃあやっぱり、運んでもらったほうがいいねー。」

「はい？」

リツコがきょとんとしている間に、鋭はうさぎ人たちとネイティブ言語で会話して、何かの指示をひとつ追加すると、しばらくしてその返事が返ってきたらしく。

「そろそろ、行くよ？」とリツコに声をかけて、どうやら「ごちそうさま」に相当するらしいお礼のコトバを言って、席を立った。

リツコも慌てて同じコトバで挨拶してみて、荷物をまとめて後を追う。

「うん。もうここ戻って来ないよ？」

「えー！ もっと子猫ちゃんたち、モフリたかったー！！！」

(トイレ行っとけ！)

そこに待っていたのは...

背中に翼の生えた...鳥人間?...の一族の人たちで...

や、...槍刀? 剣かな?...で、武装? していて...

なにか運動会の球入れのカゴのようなでかい蔦網の籠を持って...

「リツコ、高所恐怖症じゃないよね？」

にっこり笑った清峰鋭に指示されて、リツコは恐る恐る、その籠に乗って...

翼人間たちが4人かかりでロープを持って舞い上がり...

(..... きゃーーーーーっ！)

必死で声を呑みこむリツコだけを乗せて、カゴはどんどん空高くに上がって行き...

恐る恐る見下ろしてみると...

清峰鋭は騎馬の一団とともに下の方の草原を駆けているのが...

遠目に見えた...

(嘘つきーっ！「道中、何でも聞いて？」って言ってたくせにーっ)

心中で絶叫すること数時間。

(空から見た景色は?)

夕陽が赤く燃え上がる頃、空飛ぶ籠は、ようやく地面に着いた…。

3-0-0. リツコ、悪夢をみる (2018年9月10日)
(加筆)

第3章 リツコ、皇女様に会う。

3-0-0. リツコ、悪夢をみる

リツコは、うなされていた。いつもの夢だ。

懐かしい家。山のふもとの、ちょっと不便な、だけど緑が豊かな斜面にある...温かい木の壁の家。

いつものように日曜日の午前の終わり頃には家の裏の土手を登って、上の家庭菜園から昼ごはんを使う香味野菜を採ってくるのが、リツコの当番だった。その日はお母さんのリクエストで、小ネギとラディッシュとレタスを1株採った。

ちょっと重たくなった収穫カゴを抱えて、崖道を降りようとする...

へんぴな集落へと向かってくる行き止まりの一本道を、見慣れない車の集団が凄い速さでやってくる...

.....見慣れない車.....

...だけど、あの色は!

リツコは急斜面をころげるように横切ってつっぱしりながら、叫んだ。

「お母さんッ! 大変ッ! 逃げて!」

「...リツコ? どうしたの?」

お母さんとお父さんがのんびり台所の窓から顔を出す。

「……お姉ちゃんっ！ 緑衣隊よ、逃げてッ！」

リツコは家の下の斜面で洗濯物を干していた5歳上の姉に叫んだ。

もう遅い。

妖しくてらてらと光る変な緑色の特別な自動車の群れは、その姉の前で急停車するとぼたんぼたん音を立ててドアを開け、中からばらばらと降り立って来た妖しくてらてらと光る変な緑色の変な制服を来て変な仮面をつけた屈強な男たちが、びっくりして動けないままシートを握りしめて立っていた姉を、数人がかりで乱暴に捕まえた。

「……………きゃあッ!？」

「エツコ！」

「何をするッ!？」

お母さんとお父さんが叫ぶ。

「高原ワタルとシズカだな？」

男たちのリーダーらしいヤツがすごい嫌な声で怒鳴った。

「反政府反逆陰謀罪で逮捕する。逃げたら…」

「きゃあッ！」

頭に銃をつきつけられて、お姉ちゃんが絶叫した。

「エツコ！ やめて！ やめてッ！」

「わかった！ 頼むからやめてくれ！ 娘は関係ないッ！」

「ふん。反逆者の娘は、しょせん反逆者の娘だ。」

「お父さん！ 逃げてッ！」

なおも崖の上から叫んだリツコをめがけて、男達のうちの何人かが、ばらばらと走り始めた。

「リツコ！ 逃げなさい！」

「お父さん！ 逃げてよッ！」

「エツコを置いては逃げられない。おまえは逃げなさい！ お婆さんの所へ行くんだ！」

「リツコ！ 逃げて！ あたしは平気！」

「逃げなさい、リツコ！...きゃあ！」

「やめろ！ 抵抗してないだろう！」

リツコに叫んだお母さんが乱暴に殴られた。

お父さんが怒鳴った。

リツコは、崖を駆けあがって来る大人の男達の脚の速さを悟った...急がないと、逃げ遅れる！

「.....お婆さんの所で待ってる！」

叫んで、あとはもう一目散に、山の中に逃げ込んだ。

勝手知ったる裏庭も同然の山だ。大人には通れない崖の上の小川に張り出した細い木の枝を渡り、ターザン顔負けの軽業で幹から幹へ飛んで、とりあえず「秘密基地」に逃げ込んだ。

大人たちが山狩りを始めたらしいので、そこからもこっそり逃げて、今まで「子どもだけで入っちゃいけません」と言われていた、奥の奥の神山のふもとへ逃げ込んだ。

そこから、山伝いに、歩いて、歩いて...

...おなかが空いて、でも街へは降りられなくて...

歩いて...寒くて...

いつもの夢だ。怖い夢。

もう、起こってしまったこと。

そして...

「...リツコ！ リツコ！ 起きて！ ...夢だよ、起きて！」

「...お母さんッ！」

リツコは飛び起きて、声をかけてくれた人に、必死でしがみついた...

3-0-1. リツコ、起こしてもらおう。

3-0-1. リツコ、起こしてもらおう。

「...リツコ！ リツコ！ 起きて！ ...夢だよ、起きて！」

「...お母さんッ！」

リツコは飛び起きて、声をかけてくれた人に必死でしがみついた。

「ああ良かった...無事だったのねっ！」

「...リツコ...」

...ん??

ぎゅっと抱き着いてみたら...違う...?

硬いし、細いし...

これ、お母さんじゃないし...お父さんでもないし...お姉ちゃんでも、大叔母様でもないし...

「.....あ！？ 鋭?.....ごめんね??...あ、あたし...寝ぼけて...っ」

びっくりして飛びすさったら、「ううん。」と、美青年は優しく笑ってくれた。

...やっぱり美形すぎて、思わず目をハートにして見惚れる。

鋭はまた苦笑して、

「それにしても、度胸がいいねーえ？ 天荷籠のなかで気がついたら爆睡してたって。鳥人のみんな、呆れてたよ？」

うなされて寝ぼけたことはとりあえず無視してくれて、にやにやとからかってくる。

「え? ...ええ？」

リツコは慌ててあたりを見回した。

...知らない部屋だ。

「.....ここ.....??」

「うん。日が暮れるちょっと前くらいに仮皇都に着いたんだけど。いくらゆすっても起きないからさ。失礼ながら運んじやった。」

「.....うわーっ??? ごめんね???」

「ううん~? 軽かったし。」

「え~? 軽くないよ~??? あたしけっこう重いよ~???」

リツコはばたばたと無闇に暴れ、顔とか髪とかに慌ててて手をやって赤面した。こんな美形のお兄さんの前で小さなコドモみたいに寝こけるなんて... いや~ん...っ

「...だってさっ！ だって向う側の地球の木の穴からえいって出発したのは昨日の夕陽が沈んだ後だったのにな！ こっち着いたらまだお昼前で！ お昼ご飯2回もしかたたくさん食べたでしょ？ 飛んでる間、あたしは暇だったしいっ！」

とりあえず赤い顔して必死で言い訳してみる。

「...うん。きみが適応能力のとても高い、度胸のいい大物の卵だってことは、よく解ったよ？」

「いや～んっ！」

「知らないところでさ。一人で目が覚めたら、いやでしょ？ お腹もすいてるだろうと思って。」

優しい口調ながらふいとまじめな顔に戻って言うと、リツコが寝かされていたベッドを覗き込んでいた鋭はひょいと立って歩いて行き、部屋の中央に置いてあった食卓と椅子らしい家具のほうへ戻った。

机の上には色々...本らしいものとか大きな紙？ の図面とか地図のようなものが広がっている。

部屋のようなすは何というか...和モダン？ 木と紙と竹？ と布で出来てて...清潔で、優しい色だ。

明かりはすごく明るい障子紙の灯籠のような感じで、開け放した窓からは月明り？ まで射してる。

暑くはないし、寒くもない。...秋の初め？...かな？ とリツコは思った。

「ごはん用意しておいたから...あ、手と顔が洗いたかったらそっちね。トイレもそっち。」

「...ありがとっ！」

リツコは清潔で気持ちのいい木の床に敷かれた草編みらしい模様入りのゴザのようなものの上をぱたぱたと裸足でかけていって、教えられた場所でトイレと洗手と洗顔を済ませて、ぱたぱたと走って戻った。

置いてあった箱形の木製のお盆？ 日本語だと箱膳ていうのに似てるかな？...の蓋をとると、ふわりと優しい香りが立った。

「...わぁ、美味しい！」

「そお？ 良かった。」

何種類かの野菜と何かの柔らかい肉と小海老?...を、香草と一緒に蒸して和えたらしい簡単だけどすごく美味しいおかずが山盛りと、濡れせんべいと焼き味噌おにぎりの中間のような、しっかりしっとりした噛みごたえの、何かの穀物の粉を練って平たくして焼いた、主食らしいもの。

箸休め？ 的なちょっと摘まめるコリコリした歯ごたえの何か。浅漬けみたいな感じの新

鮮な生野菜が数種類。それからデザートに、食べやすいように綺麗に切ってあった汁けたっぷりの甘酸っぱい香り高い果物！
それらを猛然とがっついていいる間に、卓上焔炉的なものの炭火の上でしゅんしゅん沸いていた鉄瓶からお湯を注いで、鋭が温かいお茶を淹れてくれていた。

3-0-2. リツコ、情報交換する

3-0-2. リツコ、情報交換する

「…………ふ〜う。おなかいっぱいーい！…ごちそうさま！」

「おなか落ち着いたらもう一度眠るといいよ。まだ朝まで時間あるから。」

「…もしかしなくてもあたしのために起きててくれたの？」

「まゝやることも色々あったし。『夜中に寝ぼけますからよろしく』って、清瀬の律子さんからの手紙にも書いてあったし。」

「ええ!？」(…はずかし〜！)

…と、身もだえしてみせると、鋭はまたふふっと笑った。

「まゝフツウ組のひとが朝日ヶ森に保護されてるからには、何か事情があるとは思ってたけど」

「…鋭は、地球のジジョウについては、どれくらい知ってるの？」

リツコは思い切って聞いてみた。なにしろ知らないことだらけだ。

「う〜ん。清瀬さんからは何も聞いてないの？」

「そんな暇なかったもん。初恋の人だ〜ってノロケ始めちゃったし。」

「ええ？ それ初耳！」

「え、うそ？ しまった！」

リツコは慌てて口をふさいだ。遅いけど…

「…言っちゃったこと、内緒ね…？」横目で様子をうかがうと、

「う〜ん、まゝ時効だし…？ なにしろぼくはこんな見た目のまんまだけど、そっち時間だと五十年くらい経ってるし…。でも清瀬さんとはほんと喋ったこともあまり無かったんだよ？ 数十年ぶりにやっと地球側と連絡がとれて、当代の朝日ヶ森の学園長が清瀬律子サンって署名してあっても、最初は同じ人だと思わなかったくらいで。」

「そうなんだ？」

「うん。…そもそもなんで彼女が朝日ヶ森にいるのさー？」

「え？ 同級生だったんじゃないの？」

「その前にいた全く普通の地元の小学校でだよ。今のキミと同じ4年生の時にね。彼女転校生だったし。そのころ口がきけなくて筆談だったし」

「あ、それは聞いたことある。一族みんな死んじゃった時に、心因性ナントカってショックで子どもの頃しばらく喋れなかったって。」

「そうだったんだ...」

『一族』という単語が出た時点で何かしら納得してくれたらしく、英は話題を切り換えた。
「それで僕はIQ高かったんで《センター》に誘拐されて。」

「ええ？」

「逃げ出して山の中で行き斃れかけてたらマーシャに拾われて朝日ヶ森に保護されて...そしたら何故か清瀬さんも朝日ヶ森に保護されて... まあ色々あって僕は天才組だし彼女はフツウ組だし、結局その直後に僕こっち側に飛ばされちゃったから、詳しい事情を聞く暇もなくて、以来数十年？ お互い音信不通。」

「...そうなんだー？」

リツコはちょっと目を丸くして混乱した。話の全体像がよく解らない...けど。

「あたしはほんとにフツウなのー。お父さんお母さんがハンセイフってカツドウやってて目えつけられちゃって。緑衣隊が逮捕に来たから『逃げて！』って言ったけど遅くて。あたしだけ走って逃げて山の中でサバイバルしてたら朝日ヶ森のひとが保護しに来てくれて。で、家族もみんな無事に救出されてたけど、先に西側に亡命しちゃってたんだ。で、次の亡命ルートが確保できるまで、朝日ヶ森で待ってなさいって。」

「...ほぼ僕と同じ状況らしいけど...。...それを『普通』って言っていいのかなあ...。」
鋭が苦笑して遠い目をする。

「それでか。『こっちとそっちの行き来を兼ねて、地球の別の場所に出られないか』って質問」

「え？」

「聞いてない？ リツコこっちに来たあとまた朝日ヶ森に戻すか、もし可能なら、地球上の別の場所に戻してくれてもOKって。」

「そうなんだ...」

「日本から外に出れば、まだ比較的移動の自由はあるって？ でもキミの今回の時差の問題の件もあるし、界間転移ルートは、まだほんと調査が足りてなくて、かなり不確実なんだ...。うっかり抜けたら下に受け止めるクッションがなかったとか、時代がズレて浦島太郎になっちゃったりとか、したら嫌でしょ？」

「ぜったい安全って確認できる扉が用意できるかどうか、もうちょっと待っててね。」

「...うん。わかった。」

それからしばらくは主にリツコの方が、地球と日本の最近の事件をリツコに解る範囲内でだったけど色々説明をして。うとうとはじめたら鋭が抱っこしてくれて布団に入れてもらって。

...最後にみた大きな満月が、地球より大きいな~と思ったところまでで、リツコの記憶は途切れた...。

3 - 1 - 0. リツコ、朝寝坊する。

3 - 1 - 0. リツコ、朝寝坊する。

再び目が覚めると、どうやらもうすっかり朝も遅い、という時間帯の雰囲気だった。大小色々いるらしい鳥の音が賑やかで、人の声や馬？ のいななきとかのざわめきも遠くから聴こえる。

「...んんん.....よっく寝た...?...あれ...???

あたりを見渡して知らない部屋だということを再確認して、昨日なぜか異世界とやらに来てしまったんだって...ということぼんやり思い出し、

「...夢じゃなかった！」

...と、正気にかえって、慌てて起き出した。鋭の姿はない。

着ていたのは持参した寝間着で、鋭に寝床に入れてもらう前に、慌てて自分で着替えたのは覚えている。

慌てて昼用の動きやすい服に着替える。...そうだ。脱いだ服の洗濯は、どうしたらいいのかな...?

昨日おしえてもらった場所でトイレと洗面とついでにちょっと冷たかったけど水浴びして髪も洗って、水はたっぷりあったし天気も良かったので、ついでだから置いてあった大きな盥でじゃぶじゃぶ洗濯もしてしまって、邪魔にならないかなー? と思いながら、土間のすみっこの植え込みの枝に紐をかけて勝手に干す。

昨日と同じように卓の上に用意されていた、冷めても美味しい朝食らしいものを勝手にたいらげる。

「いただきます!.....ごちそうさまでした！」

3分でががつ平らげると、物音を聴きつけてやってきたのか、旅館の中居さんのような感じの動きやすそうな服装をした知らない人間の女のひとが、にっこり笑って立っていた。

「あによんまるにえん、えなら？」

「...あっ! おはようございますっ! ごあん勝手にいただきましたッ！」

おもわずもごもごと囁んじやいながら慌てて挨拶すると、にっこり笑って「えんえん。」と返事をしてくれた。

「まによ？」

リツコの食べ終えた食器を手早くまとめてお盆ごと持って、「ついて来て？」という風に首をかしげるので、リツコは急いでリュックをひっかけて、あわててついていった。

行った先には鋭がいた。

大きな部屋で、同じような服装と髪型をした同じような雰囲気、頭が良さそうで性格が穏やかそうなおとなの人たちが（ほとんど人間と毛皮つきタイプと両方）沢山いて、地図だの一覧表だのを広げて、慌ただしくも賑やかに楽しげに、何かの打ち合わせをしている感じ。

真ん中の机の上には昨日リツコが渡した「お土産」のノギスと計算尺が置いてあって、みんなでその寸法を測ったり絵図に書き写したりしている。

「まるでえん。えーらんでーい。」

案内してくれた女のひとが声をかけると、鋭が降り向いた。

「あるっくあーい。...あ、リツコ起きた？ おはよう。」

「おはようございますっ。寝過ごしてごめんなさいっ！」

「い〜よ〜？」

それから鋭は周りの人に声をかけ、自分の見ていた書類は簡単に片づけて、なんだか高級そうな上衣を手にとった。

「じゃ、行こうか。」

「どこへ？」

「皇女サマにご挨拶〜。」

「ええ！？」

「あれ、ゆうべ言わなかったっけ？ ここの皇女サマって前は地球に亡命して朝日ヶ森に居たんだよ。『霧の校庭・運動会行方不明伝説』って、今じゃ学園七不思議になってるって聞いたけど。」

「え〜っ？ 何十年か前の、障害物競走の途中で生徒3人がイキナリ消えた謎？...あれ実話だったんだ...」

「そうそう。そんな時に巻き込まれた僕がここに居るからねえ。」

...つくづくあの学校はフシギだらけだ...とリツコがあきれながら鋭と一緒に歩いて行くと、玄関らしき場所に出て、

「あっあたし靴っ？」

「だいじょうぶ、昨日ここで脱がせたから、ここにある。」

「あっそうなんだ〜。」

ほんとに鋭って気配りというか、用意がいい人だなあ...と感心する。

玄関先の気持ちの良い木立ちのなかの小径を歩いていくと、すぐに大きな道に出た。

「うわ...」

市場だった。いや...大きな町?...商店街...? と、きょろきょろしてしまう。

「...とりあえず質問と観光は後にしてー。皇女サマは怒らせると怖いからー」

見慣れない物だらけで呆然と立ち止まってしまったリツコの肩を押して鋭が苦笑する。

「それでなくてもキミきのう寝ちゃったからさ？ 歓迎パーティーすっぽかしたんだよー」

「...きゃーーーっ！ ごめんなさいっ！」

リツコは恥ずかしくて悲鳴をあげた。

3 - 1 - 1. リツコ、右将軍にあう。

3 - 1 - 1. リツコ、右将軍にあう。

さらに歩いて行くと街並みが活気のある商店街から、高級そうな広い庭のお屋敷？ が立ち並ぶ区画に変わって... 行き当たった大きな街道を右に曲がると、つきあたりに、開放的な感じの大きな門があって...

特に検問とか見張りとかは何もなくて、行き交う人々や獣たちと一緒にひょいと無雑作にくぐると、入ってすぐのところに、大きな男の人が立っていた。

「おう鋭！ 来たか！ そのコか？」

「うん雄輝。この子だよ～、高原リツコ嬢。」

「あっこんにちわっ！ タカハラですっ！ よろしくお願ひしますっ！」

「リツコ、これが『校庭行方不明事件』の三人のうちのもう一人。翼雄輝。」

「おう、よろしくな。リツコって何県のタカハラ家？」

リツコは質問されてることに返事ができなかった。紹介された人の背中に大きな翼があったから。

「.....羽根.....！」

昨日みた「ほぼぜんぶ鳥の人」とは違って、ほぼ人間な姿の、背中にだけ大きな両翼があるタイプだ。

「ん？ 珍しいか？ 朝日ヶ森なら今も何人か居るんじゃないか？」

「居るけど... すごく怖くて、殆ど話せなかったし...」

「あ～、地球の天狗系のやつらは、気難しいからな～...」

...そういう問題だっけ...

「おれは善野の鷹羽の一族の、元主家の翼一族の最後の一人。...って言って解る？」

「ごめんなさい。わかんないです。うちは一族ってずいぶん前に滅んじゃって誰も残ってないので。」

あたしたちは、分家の分家で。...大叔母様か、お父さんかお母さんなら、知ってるかもだけど...

地球には古くからの伝説とか神力とかを伝えて来たそれぞれの「一族」や「部族」に属する「古い人々」と、それとは別の「新しい人々」の区別があるという、漠然と話だけしか、リツコは知らない。

「あ～気にすんな、そんなもんそんなもん。」

からからと笑って男の人はリツコの肩をぽんと叩いた。

「マダロ・シャサ！」

ちょっと離れたところから大声で呼ばれたのは、その翼のある人の、こっちの世界での名前らしい。

「じゃな。マーシャ怒ってるからな～。せいぜい庇ってやれよ？」

「...うへえ...」

リツコには謎の言葉を聞いて、鋭が、ものすごい嫌そうな声を出した...(リツコはびっくりした。)

3-1-2. リツコ、皇女に会う

3-1-2. リツコ、皇女に会う

心なしか少し足早になって歩いて行く。そこはかなり大きな広場で、馬？ 車や人が曳く荷車らしきものや、きのう乗せてもらったような鳥の人が運ぶ用のカゴと似たものが大量に並べられ、ひっきりなしに人や獣が荷物を運び込んできて、移し替えたり、整理して積み上げたり...何か同じようなものを観たことがある...とリツコが思い出してみると、前にテレビで見たシルクロードのキャラバンの準備風景に似ていた。

どうやら大勢で旅に出る？ 仕度をしているらしかった。

その前庭を抜けると両脇を綺麗に手入れされた植え込みで飾られた広い道に出て、少し伸びすぎた芝生のような、そこで昼寝したら気持ち良さそうだと思うような草の花壇？ の脇を少し歩くと、正面に宮殿？ らしいものがあった。

リツコの知識でいうと一番似ているのが奈良とか日光とかにあるハチマンサマとかの女性的な寺院建築で...鮮やかな朱金と紅と緑の曲線的な飾り彫の細工で覆われた広大な木造建築。ってところなんか、かなり似てると思う。

鋭は案内も請わずにすたすと宮殿の奥の奥の廊下にまで入っていくのでリツコも遅れないようにがんばって後を追う。

通りすがりの役人らしい人たちが鋭を見るとみな頭を下げる。

「マウレイディア！」

「マウレイディア、リレク、エイセス！」

「マウレイディア。」

「アノエ、カイネ。」

鋭はうなずくだけで軽く返して、どんどん歩いて行く。

「アウレクセス、マルニエン、エネ？」

広間の入り口前の椅子に何かの順番待ちらしく並んで腰かけている人たちの先頭に、頭を下げて手刀で拝むようなしぐさをしながら声をかけると、

「マウレニエン、エネ、エネ！」

(どうぞお先に！)と言っているのだろう仕草で、相手の人は喜んで順番を譲った。

広間で拝謁の最中だった人がそのやりとりの声にふりむいて、慌てて自分のいる場所を譲ろうとする。

「アウネ、ソノ！」

若い女性の声が鋭く響いて、その人はちょっと困った顔で、また前に向かいなおした。

(構わない、続けて！...って言った?)

リツコは推測する。

どうやらそこが謁見の間...正面に座っているのが、これから挨拶する「皇女サマ」らしかった。

若い女の人だ。さっきの男の人...翼雄輝...と同じくらいの年齢に見える。つまり、鋭よりは何歳か年上?

...まァ地球人の時間の感覚で、だけど...

碧緑色の豪華な巻き毛を肩のまわりにふわっと広げて、瞳の色も髪と同じ碧緑色だ。朱色と金色の華麗だけどすっきりと美しい衣装を身にまとい、色が白くて唇が真紅で、ものすごい美女だけどころかなり性格がキツそうな顔立ちで、ちょっとかなり苛苛した感じで眉をしかめながら、前に座った人の報告を聴き、いくつか指示を出してその返事を得てから、仕種と声とで退出を命じる。

「...遅いわよ、あなた！」

次にいきなり日本語で怒鳴られてリツコは飛びあがった。

「は、はいッ！...ごめんなさいッ！」

「昨夜は歓迎の宴を用意したのにすっぱかすし！今日は私もう出かけなくちゃいけないのにいつまでも待たせるし！...それになに？チビな上にタダビト組なの？...なんで清瀬律子が自分で来なかったのかしら！」

これはもう挨拶とか自己紹介とか、マトモにさせてもらえる状況ではない。

リツコは震えあがり、涙目になりかけながら必死で言い訳をした。

「あのう...ゆうべと今朝はすいませんでした。あたし時差ボケで、寝ちゃって...それに大叔母様たちは今すごく忙しいんです。最近かなり大掛かりなテキハツがあって、大勢タイホされちゃったんで...」

「...あら、そう...」

美人皇女は、素早く眉をしかめた。

「鋭、その報告は後で聞いわ。今はとにかく忙しいのよ。その御チビさんで大体揃ったし。明日もう出発するわよ！正午発！あなたも準備急いで！」

「らじゃ。」

鋭はちょっとふざけた感じで地球式の挙手の礼をすると、あわあわしているリツコの肩をさっきと反対側に押して、とっとと逃げ出そうとした...

3 - 1 - 3. リツコ、マシカとあう。

3 - 1 - 3. リツコ、マシカとあう。

さっき順番を譲ってくれた先頭の人に軽く頭を下げてとっとと退出しようとした時、鋭は急に気がついておっと！と立ち止り、慌ててふり向いた。

「...マーシャ。今の。決定事項でいいんだよね？」

「え？ ああ。...日本語で言っちゃったわね。」

「伝令まわすよ？」

「ええ。お願い。」

鋭は部屋と廊下に並んでいる者たちみなに聞こえるように大声で呼ばわった。ぴんと張った声だ。

「アウレイメイ！ ミウンテア！ ソンナイ！」

列をなしていた人たちの間にざわ！と波がはしる。

鋭は繰り返して言った。

「アウレイメイ！ ミウンテア！ ソンナイ！...ディウンディアーイ！」

「アウッ！ ディエンディアーイ！」

短く返事をして走り出していく、何かの制服を着て剣や槍を帯びている人たち。

並んでいた列から慌てて離れて、宮殿の外へ急ぎ足で去って行く人たちも大勢。

「...いま、何て言ったの？」

おそるおそる鋭に聞いてみると、

「マーシャが言ってたことだよ。出発は明日！ 正午！...伝令ッ！」

それから鋭も今度はリツコの歩調を気遣いながらも、足早に歩き始めた。

「行こうか。...怖かったでしょう？」

苦笑している。

「ううん。あたしこそごめんなさい。きのう寝ちゃったりしなければよかった。」

「いや〜、彼女は最近ずっとあの調子だから。きみが悪いわけじゃないんだよ。」

「そうなの？」

「きみとは全然関係ない理由で機嫌が悪いんだ。八つ当たりされてるだけなのに、かばってあげられなくて、ごめんね？」

「ううん。それならいいけど...」

やがて宮殿の外に出ると、先ほどの広場でごったがえしていた荷駄や人のざわめきが、さらにいっきに活性化していた。

「ミウンテア！ ソンナイ！ ディウンディ！」

「ミウンテア！」

「ミウンテア！」

大声で伝達しながら駆けて行く複数の声がどんどん遠ざかり、周囲に復唱されてまた広がっていく。

「...ねえ、もしかして鋭ってかなり偉い人なの？」

いっせいに動き出した人々や動物たちの騒ぎをきょろきょろ眺めながら聞いてみる。

「なんでそう思った？」

「だって若いのに宮殿のみんなが膝を曲げてあいさつしてたし。順番もすぐに譲ってもらえたし。とってまエラそ～な、あのお姫さまのこと名前で呼んで、ため口きいてたし。」

「...うーん、そっか。いい観察力だね。」

鋭はまた苦笑した。

「まァ偉いって言うか... 皇女サマの幼馴染の友人... と言うか、今は側近って立場かな?... ってことになってるし... 最近じゃなんかヨーリア学派の... あ、さっき居たあの家の連中だけど、長っぽくなってるし...」

「...やっぱり、かなり偉いの？」

「うーんまァ、さっき会った雄輝ほど有名人ではないよ。まァぼくは、たんなる雑用係だねえ...」

「そうなんだ？」

「そう。それで、明日出発ってことはぼくも準備しなくちゃで忙しくなっちゃったんで、旅のあいだキミの世話をしてくれる人のところにこれから連れてくからね。」

「そうなの？」

リッコは旅と聞いてもずっと鋭と一緒にのだろうと思って安心していたので、びっくりして目を丸くした。

「うんそう。だって昨日はもうしょうがなかったからぼくのところに泊めたけど、旅のあいだずっと男のぼくの部屋に女のコのきみが同室ってわけにはいかないでしょ？ ほんとは昨日からそっちに泊めてもらうはずだったんだけど... あ、いたいた！」

広場の一角に妙にたくさんの生き物たちで混みあっている場所があって、鋭がかまわずまっすぐ突っ込んでいくと、小鳥たちや猛禽たちや小動物や四足獣や人間の子どもや大人が、一斉にわっと散って通路をあけてくれた。

「マシカ！」

「リレク！」

呼ばれて振り向いて鋭の名前を嬉しそうに呼びかえたのは、鋭と同じくらいの年齢に見える... 大人に近いけどまだ少女というか... かなり若い女の人だった。

秋の黄葉と紅葉をまだらにまぜたような華やかな色彩の長い巻き毛を首の後ろでぎゅっと結んで、緑と茶色の動きやすそうな服装に、歩きやすそうな柔らかい皮の靴。

瞳の色は皇女サマと同じ碧だ。色が白くて額の広い、すっきりした美人なところもちょっと似ている。

手には草の束？ のようなものを持って、大きな黒馬の世話をしていた。

「動物たちの調子はどう？」

鋭はそのまま日本語で話しかけ続けた。

「モンダイないわ。あしたシュッパツですって？」

驚いたことにその人は、ちょっと発音が怪しかったけれども、なめらかな日本語で答えた。

「そう。で、この子が例の子。頼める？」

「わかったわ。よろしくね、リツコ？ あたしは、マシカよ。」

「こんにちわ！ びっくりした。日本語が話せるんですね！」

「リレクやマーシャたちからナラッタのよ。」

「そうなんだー！」

リツコはほっとして笑った。さっきの怖い皇女サマと違ってだんぜん優しそうだし、異世界の人なのに、言葉が通じるなんて！

「マシカこれから時間ある？ リツコを市場に連れて行って、着替えとか旅に必要なものを一式買ってあげてほしいんだ。これ予算。足りるかな？ 諸侯会議にも出るからさ、ちょっと豪華っぽい正式な服も必要なんだけど。」

「ええ。足りると思うわ。知り合いの店が安くしてくれるのよ」

マシカは渡された袋の中身をかろく確認してにこっと笑った。

「あと例のあの、言葉の術のやつも頼める？」

「あら？ マーシャに会いに行ったんじゃないか？」

「ものっすごい機嫌が悪くてさー。頼むどころじゃなかった。」

「あらあら...」

マシカも、よ〜くワカッタ、という身内に特有の仕種で肩をすくめた。

「わかったわ。あたしの神力じゃ弱いけど。全然ないよりマシでしょ。」

「じゃ、ごめん、リツコ。また明日ね。もしぼくに用がある時はマシカにそう言ってくれれば、すぐに連絡がつくから。」

「うんわかった！ ありがとう！」

リツコが慌てて手を振るうちにも、鋭はどンドン歩いて行ってしまった。

それを後ろから追いかけてきていた人たちが次々に群がって話しかけたり、書類らしいものを渡したり左印をもらったりしている。

...やっぱり、本当は偉い人で、ほんとうに忙しかったらしい...

リツコは、二日間もあたしみたいな子どもの世話なんかさせて、悪いことしたなー、と、

ちょっと反省した。

3-1-4. リツコ、市場へ行く。

3-1-4. リツコ、市場へ行く。

「ちょっと待っててくれる？」

鋭を見送ったあとリツコにそう言って、大きな立派な黒馬の世話を最後まで仕上げたマシカは、まわりの人間たちや動物たちに挨拶らしい言葉をかけてまわると、広場のすみの水場に行って手と顔を洗い髪をほどいた。

ふわりと広がった朽葉色の巻き毛は、とても豪華だ。

「きれ〜い！」

リツコが思わずそう誉めると、マシカはにこっと笑った。

「そう？ ありがとう。リツコの髪もすてきよ？」

「ええ？ あたしのなんか焦げ茶色で癖毛でへろへろで〜。全然ダメ」

「そうなの？ ダレムアスでは《大地の色》って言って、一番いい色だけど？」

「そうなの？」

「ええそうよ。ほら可愛い。あたしたち姉妹みたいね？」

マシカはそう言ってリツコの固く縛っていた癖毛もほどいてふわっと広げてしまった。

リツコは「姉妹みたい」と言ってもらったのが嬉しくて、「えへ〜」と照れた。

マシカはそんなリツコを見てにこっと笑って、それからちょっと下がった。

何をするのかなどリツコがキョトンとして見ていると、リツコのことを上から下までじっくり観察している感じで、それからにこりと笑い、リツコの両頬に両手を添えて、額を合わせて、氣息を整えて、...歌うように叫んだ。

「ま〜りえった！ れっと、せっと、えっ！」...（ことばよ、通じよ！）

「え？」

「まうれいにあ、あむにや、あむねえむね？」...（わたしの言うこと解る？）

「えっ？ ...解る！ ... ???！」

リツコは目を丸くした。何がどうなったの？

「マーシャは神力ってヤクしてるけど、鋭はマホウって呼ぶわね。あたしは血の力は弱いから、マーシャみたいに言ってることを相手に解らせるようにする術まではむりなの。効き目も弱いし、時間も短いと思うんだけど... とりあえず、それでやってみましょう？」

リツコはまったくわけが解らなかったが、とりあえずうんとうなずいた。

マシカは追いかけて来る小鳥や小動物たちに話しかけたり構ったり、ちょっとあっちへ行行ってと追い払ったりしながら、とても楽しそうな顔でリツコを連れてずんずん市場に分け入っていく。

リツコはきょろきょろしてしまっていて大変だ。質問したいことを全部聞いていたら一歩も前に進めなくなるだろうって思うくらい、目にはいるものがすべて珍しい。

長年使いこまれた木彫りの柱の立派な天幕や、掘っ立て小屋のように粗末な屋台。二階建ての大きな飲食店に、屋根と柱だけで壁がない気軽で安そうな茶飯屋。

色とりどりの布地屋、服屋、装飾品の店、革細工の店、野菜の店、果物の店...

占い屋さんかしらと思う地べたに座った賢そうなお婆さんや、兎の人や羊の人たちをおしゃれな感じに毛刈りしている店。

ひたすらまわりじゅうを見回しながら歩いていたリツコは、やがて、自分のほうも周囲の人たちから、びっくりした目で眺められているのに気づいた。

「...チケット？」... (地球人?)

「チケットティアナン？」... (地球人か?)

「あやけたていか！」... (おっとびっくり！見てごらん！)

市場を行き交う通りすがりの人々が、リツコのTシャツと短パン姿を見て珍しいものを見るように目を丸くして声をあげている。

(.....え？ なんであたし、言ってる意味が解るの？ チケット... ってチケット？ 英語？ 切符?... じゃないよね... ??? こっちの言葉だと「地球人」って意味？ なの... ????)

まったく解らないはずの言葉が、一瞬遅れてだけど、だいたいの意味がするっと判る。まるで頭の中に映画の字幕でも映っているみたいな感じだ。

(???????)

目を丸くして混乱しているリツコをしりめに、すたすたと前を歩いていたマシカがひょいと曲がって入ろうとした店先で、続こうとしたリツコを睨んで鋭い声をあげた男がいた。

「エベルディン、スレイガ！」... (出て行け、敵め！)

「...あんま、のうでいあ、あーろんでーい。」... (なにか御用で？ お客さん)

店員らしい人も、誰だこの怪しい奴め、という顔で、リツコを見ている。

リツコは知らない人から突然（敵め！）と言われたらしい事に心底びびった。

「まるまっかあれ。」…（あたしの連れよ。）

どうやら鋭と同じくらいに周りの人たちから顔が知られているらしいマシカがびしりと言うと、ざわめきが収まった。

「ジョルディイリヤン、ダレッカ。リレキセース、オルディイイン。」…（諸侯会議に出るお客様。リレク様からお預かりしたの。）

出て行けと言った男の人が、困った顔で不機嫌そうに口をつぐんだ。

「あんにや、ましか！」…（いらっしゃい、《星の娘》！）

奥から転がるように店主が出てきて、あとはもう買い物が大変だった。

あれやこれやと店主が出してきてくれる衣類や旅行用品？ の山を見て、

「ちょっと待ってマシカ！ こんなにたくさん買っても背負いきれないよ？」

リツコが悲鳴をあげると、

「馬車で運ぶから大丈夫よ」とマシカは余裕で笑った。

マシカがかけてくれた言葉の魔法？ とやらのおかげで、相手が言っていることは何語であれリツコにはなんとなく意味が解るのだけど、リツコが喋ってる日本語は、相手には全く通じてないらしい。

半分はマシカに通訳してもらって、マシカにもうまく翻訳できない時はとにかく身振り手振りで、好きな形や嫌いな色や、肌触りがどうかを色々説明しまくって、それから試着してみてあーだこーだと、似合うとか似合わないとかと集まってきたみんなで品定めをして、最後にマシカが押しの一手で強気の値切り交渉までしてくれて…

一通りの品物を揃えて支払いを済ませて配達まで頼んで店を出た時には、リツコはもう疲れてしまって、喉が枯れて、おなかもぺこぺこだった…。

マシカが気を利かせてくれて、通りすがりの屋台で何か甘いものを食べさせてくれる。色とりどりの豆と何かぷにとした食感のものが入った、あんみつとぜんざいが混ざったような味のおしゃれなスイーツだ。

「おいしーい！」

叫んだリツコに、マシカは笑った。

「元気でた？ じゃ、ちょっと遠いけど私のテントまで歩きましょう。」

「あ、ちょっと待って！ あたし今朝、洗濯物を干してきちゃったの！」

「センタクモノ？」

なぜかこれがマシカに通じなかった。リツコはがんばって身ぶり手ぶりで説明してみた。

「服を洗って～、干して～、こう…。昨日泊めてもらった部屋の中に、干して置いてきちゃったの！」

「…ああ。洗った。干した。で、…乾いた？」

「そう。洗濯物。」

「センタクモノ。」

マシカはうんとうなずいた。

「リツコ、わたしのニホンゴまだまだみたいだわ。旅のあいだ、たくさん教えてね？」

「うん！ こっちの言葉も教えてね？」

リツコとマシカはすっかり意気投合して、大の仲良しになった。

3-1-5. リツコ、天幕に泊まる。(2018年9月11日)

3-1-5. リツコ、天幕に泊まる。

じゃあセンタクモノを取りに一度戻ろうという話まで進んで、リツコは困った。

「どうしよう！ あたし帰りも鋭と一緒にだと思ってたから、道を覚えてない！」

「ヨーリア学派の寺院でしょ？ わかるから大丈夫よ」

「ほんと？ よかった～！」

しばらく歩いて、なるほど見覚えのある植え込みの門のちかくまで着くと、マシカはその手前の店先で買い物をしてくるからその間にセンタクモノをとってきて、と言う。

ひとりで門に入って、見覚えのある玄関まで行って、勝手に上がるのもまずいかと思って、とりあえず声をかけてみた。

「すいませ～ん！ ...誰かいませんか？」

「...もうどれいやなっ、えんにやえん。」...（*****）

（??? ...あれ...! ???）と、リツコは困った。

さっきまで声と一緒になんとなく判っていた「ことばの意味」が...また、分からなくなってる！

魔法？ をかけてくれた時にマシカが言った「時間も短いと思うんだけど」の意味のほうが判ったー！

と思いながらも、幸いにして出てきてくれたのが今朝リツコを部屋から案内してくれたあの女の人だったので、もう一度「センタクモノ！」を説明する身振り手振りをして、「取りに行きたいので部屋に入っているか？」という許可を得るのは、そんなに難しいことでもなかった。

どうやら鋭の私室だったらしい今朝の部屋に案内しなおしてもらって、洗濯物がきれいに乾いていたのをこれ幸いと、急いで畳んでリュックに詰め直す。

「どうもすみません！ ありがとうございます！」

べこりと頭を下げてお礼を言って退出すると、女の人にはにこにこして手を振って見送ってくれた。

それからまた教えられた店の前で誰かと談笑していた小動物まみれのマシカと合流して歩きだしながら、もう言葉がわからなくなったということを説明する。

「う～ん、だいたい半日なのね...」

マシカはちょっと悔しそうな顔をした。

すぐにまた術をかけなおしてくれるかなと思ったけど、そういうわけでもないらしい。

「もしかして、実はすごく難しいとか、マシカがものすごく疲れるとか...する？」

「そんなことはないけど。だってもともとあの三人といっしょに旅してた時に、あたしだけ言葉が通じなくて不便だったから覚えようと思って、意味が解るようになれて自分で自分に毎日かけてた術なのよ。でもあれ使っている間、アタマがとても疲れるでしょう？」

「...そう言われてみれば、そうかも...。」

頭よりむしろおなかのものがすごく空いたけど。と思いながらリツコは一応うなずいた。

「今日はもう眠るだけだから、また明日にしましょう。」

それから日本語で色んな話をしながら平坦な街道を歩いて、沈み始めた夕陽と夕焼けを眺めて一番星が光りはじめる頃まで30分くらい歩いて、マシカの仲間たちが寝泊まりしている旅天幕の村に着いた。

マシカの仕事は薬師と言って、医者と看護師と薬剤師と獣医さんと村の学校の先生まで兼任しているような職業集団らしい。

みんな明日の出発に向けて忙しそうに飛び回っていたので、簡単な挨拶だけして温かい夕飯だけ分けてもらって、リツコたちはすぐにマシカの天幕にひっこんだ。

何枚かの革と布を張り巡らせて木枠で支えた一人用の天幕は、二人で入るとちょっとだけ手狭になったけど、居心地よく乾いて清潔で暖かくて、きちんと整理整頓の行き届いた、いかにもマシカの部屋！という感じがするすてきな場所だった。

「マシカは用意はしなくていいの？」

「たぶん明日出発になるだろうというのは昨日のうちに解っていたので、もう準備は済んでるの」

「そうなんだ」

「でも明日は早起きしなくちゃだから、今日はもう寝ましょう？」

「うん！」

寝間着に着替えて、くせ毛の髪の毛の梳かしっことかして、くすくす笑いながら秘密の内緒話なんかして。

それからマシカとリツコは本当の姉妹よりも仲良しになって、一つの寝床で寄り添って一緒に眠った。

ただし問題は、リツコのために追い出されてしまったマシカの沢山の同居動物さんたちだった。

ぶうぶうきやあきやあびいびいと、それぞれの鳴き声で文句を言いながら脇の長椅子に移動させられた栗鼠や仔猫や小型犬や小鳥やフクロウや翼の生えたヘビみたいな生き物

や...その他いろいろ...だったが、けっきょく朝になってリツコが目を覚ましてみると、二人の少女のあいだとまわりじゅうに、たくさんの動物たちがぎっしり集まって、詰まって乗っかって、一緒に眠っていたのだった...

4-0. リツコ、早起きする。

第4章. リツコ、旅に出る。

4-0. リツコ、早起きする。

翌朝、天幕のすぐ上で鳴き交わす鳥たちの声がすごくて、リツコはびっくりして目が覚めた。

すでに開け放ってあった天幕の戸布の向うに見える空はまだ夜明け前で、東？ の山並みの上に広がった薄い金色の線から、反対側の闇青色と最後の星の瞬きまでの、雲ひとつないグラデーションが見事だ。

...う~ん、これは地球と同じに見えるんだけど...と、う~んと伸びをして深呼吸もしながらリツコは思った。

一番の違いは空気だ。すごく何というか...すがすがしくて...さらりとして...透明な感じで...美味しい。

最初の日にそれを言ったら鋭が「この世界には工場も原発もないんだよ！」と笑ってた。「...あら、起きた？」

広い空の下で美しい髪に櫛をかけてふんわりとまとめていたマシカがふりむいてにこりと笑った。

「今日もお寝坊さんなのかと思ってたわ」

「うーん。だって昨日は早く寝たし。マシカがいてくれたから嫌な夢も視なかったし。」

「うん。よく寝てたわね。ミーボナンにほった踏まれてるのに全然起きなかったもの」

リツコは苦笑して、自分も起きる仕度を始めた。

寝ている間にベッドの上は動物だらけで、まだ寝こけているやつもたくさんいて、先に目を覚ました連中は今もマシカの髪にまとわりついたりして、色々と仕度の邪魔をしている。

まわりの天幕の薬師たちもみな起きだしているようで、あちこちで出発の準備を始める賑やかな物音や声が出ている。

寝間着のままで教えられた川辺に降りて手と顔を洗い、その水場より下流に用意された木造のトイレ！（川の流れの上に付き出していて、床に穴が開けてあって、全自動水洗式？ だ...）で用をたす。

言葉が判らないまま、すれ違う薬師の人たちにはとりあえず大声で「おはようございます！」と挨拶しておく。

戻ってきて、はたと悩んだ。

「ねえ？ マシカ。今日って何を着たらいい？」

「あ、そうねえ...、どれしましょうか？」

昨日買ってきた装束類の小山と、自分が持ってきた少しの着替えを並べて、天気と気温を考えて、マシカの意見も聞いて、結局「地球式」の略礼装？ が良いだろうということになった。

白い半袖シャツに動きやすい七分丈の水色のガウチョパンツを合わせて、その上に、おしゃれな私立校の制服みたいな襟のチェックの夏ワンピースを羽織って、前ボタンは適当に開け放って、ちょっとこなれた感じに着崩してみる。

靴はやっぱり履きなれたスニーカーのままにする。だって相当、歩くらしいから。

「...きゃー、リツコ可愛い♪」

そう褒めてくれながら、マシカは以前から決めてあったらしい衣装にさっさと袖を通して

やっぱり昨日の仕事着？ と同じような、日本で言うとな務衣？ みたいな動きやすそうなデザインだけど、超新品で、手織りらしい布地がすごく手が込んでいて高級な感じで、何だか民族調っぽい刺繍とか金色の飾りとかが色々付いていて、ふわりとした軽い布のマントも羽織ったら、とても上品に華やかだ。

「きゃー！ マシカすてき！ とっても綺麗！！」

リツコが手放しで誉めると、うふんと得意そうに笑った。

「そうでしょう？ この布を織るのは苦労したのよ！...リツコ、髪型はお揃いにしましょうよ！」

もうそれだけですごく盛り上がりながらの身支度が終わると、マシカは昨日の昼にやってくれたように、ちょっと気分を改めるしぐさをして息を整えてから、リツコの頬に手を添えて額を当てて、唱えた。

「...ま〜りえった！ れっと、せっと、...えっか、ろう！...ぐん！」

（あれ？ 昨日と少し違う...）とリツコが思う間もなく、

...（ことばよ、通じよ！ ...せめて日暮れまで！ もつように！）

...という意味が、頭のなかに字幕が映るような感じで、急に流れ込んできたのだった...

4-1. リツコ、パレードに参加する。

4-1. リツコ、パレードに参加する。

ちょうどその頃に朝日がしっかり差し込んできた。からりと晴れた秋の初めらしい上天気だ。

『朝ごはん出来てるよー、早く食べちまっとくれ!』と、食堂? の係の人から声がかかったので大急ぎで出かけて行った。

『おはよう!』とか『よく眠れた?』とか色々声をかけてくれる年上の薬師の人たちに、リツコは日本語と手振り身振りで挨拶を返ししながら、食堂や集会室として使われているらしい大天幕に行って、色々な野菜とか豆とかキノコ? がどっさり入った温かいスープをおなか一杯食べさせてもらった。

食器は各自で持参制で、昨日マシカに買ってもらった新品一式を持っていった。

また水場に行ってリツコが二人分の食器を洗って戻って拭いて収納しているうちに、マシカはどんどんと自分の天幕の中にあったものを大きな木箱と布袋の中に詰めて行き、リツコもがんばって出来るところは手伝ってみて、最後に一緒に天幕を畳むと、うんうんと二人で担いで何往復かして、少し離れたところに停めてあった木製の荷車に運び入れた。

それからマシカが耳の短い小型の馬のようなずんぐりして大人しい動物を連れてきて繋いで、出発の準備は完了だった。

『...ごめんなさい。先に行くわねー!』

マシカが声をかけると薬師の皆が口々に返事をして、手を振って見送ってくれた。

荷物満載の台車を牽いた小型馬の手綱を引いて、人間二人はその横をとことこ二本足で歩く。

「これは《白の街道》というのよ。日本の言い方だと《国道》って意味ですって。」

マシカが教えてくれる。

夕べはもう薄暗くなった中を星を見上げながら歩いて来たので気がつかなかったが、歩きやすいように白い石畳できちんと舗装された、幅は4メートルほどの道だ。

「あ、いたいた、鋭! 雄輝!」

「マシカ、おはよう!」

「似合うぜ。綺麗だな!」

街道から街中を通して、昨日の仮皇宮前の広場に入ってすぐのところに、鋭と雄輝と、他にもたくさん重臣? ばい人たちがいた。

みんなきちんとしたおしゃれというか正装ばい服装で、ぱりっと格好良く整えている。初めて会う人たちもみんなマシカとリツコの女のコ二人に対してきちんとした挨拶してくれるので、リツコも一生懸命「おはようございます！ よろしくお願ひします！」と日本語で言ってきちんと頭を下げた。

「リツコ、おはよう。それ可愛いね」

「おー、地球式の服にしたんだ？」

鋭と雄輝がお世辞でもなく本気で誉めてくれたので、リツコは照れて、えへへと笑った。「どうかしら？ 一応こっち式の礼服もちゃんと用意はしたんだけど。地球からの御客人が諸侯会議に参加するってことは、皆にセンデン？ しといたほうが良いのよね？」

「うんそうなんだ。これだと一目見て地球人で判るね。さすが！ ぼくじゃ思いつかなかったよ。やっぱり女の人に任せてよかった。」

「あら... 褒めても何も出ないわよ？」

鋭に褒められてマシカがすこし照れて頬を赤くしたので、リツコはちょっとあれっと思った。

それから少し打ち合わせがあって、せっかくだからと、リツコはなるべく目立つように、後方の荷馬車隊ではなくて先頭に近い鋭の馬の前に乗せてもらうことになった。

牽いて来た荷車は雄輝たちの部下の人が列の後方から持ってきてくれることになる。

「じゃ、私はマブイラに騎せてもらうことにするわ」

そう言ってマシカがどこかから連れてきたのは... なんと！

見事に枝分かれした角を堂々と掲げた、ものすごく立派な... 銀灰色の雄鹿だった。

「..... マシカが、鹿に乗る.....」 ついつい小声で言ってしまうと、

「...ね、やっぱりちょっとそこで笑っちゃうよね？」と、鋭がこそっと相槌を打ってくれた。

それからどんどん広場に人が増えてきて、中央に列をなした着飾った旅装束の人たちと、周囲に並んだ見送りらしい町の服装の人たちで、ぎっしりと隙間もないくらいになっていった。

(昨日みた山のような荷馬車や荷車は、後方と脇に順序良くきちんと寄せられていた。)

『... 刻限！』

『まもなく！』

『刻限！』

これ以上もう広場に人が入れない... という頃、ドンドンと威勢よく大鐘と太鼓が打ち鳴らされた。

居並んだ人たちが、ざっと威儀を正す。

『みな、御苦労！』

例のおっかない皇女サマが、昨日マシカが世話をしていた特別に大きくて立派な黒馬にまたがって、みごとに華麗な正装で着飾って、堂々と広場の中央の人並みを分けてまっ

すぐに進んできた。

『少し長い旅になりますが、みな無事であちらへ着くように！ 留守の者たち、不安もあろうが、必ず和平を為して来る。しっかり頼みます！』

『...道中、御無事で！』

留守役の代表らしい身分の高そうな衣装の女の人が門の脇から進み出て来て、深々とお辞儀した。

みな、唱和する。

『道中、御無事で！』

『...出発！』

雄輝が、みごとな金鹿毛の馬を皇女のすぐ後ろの右脇に並べて号令した。

『出発！』『出発！』

伝令が次々と声を並べていく。

「...行くよ？ 笑って！」

白い優雅な馬に身軽にまたがり、鞍の前にリツコを引き上げて乗せてくれながら、鋭はやはり皇女殿下のすぐ後ろ、雄輝と並ぶ左側の位置に、するりと当たり前のように並んだ。

(.....えーーーーーッ！！)

...つまり、リツコの位置するところは、一国の代表として和平会議の旅に出る皇女サマの、すぐうしろ。という順番だ。ってことで..... その後ろに、偉そうなお爺さんとか、賢そうな女官たちとか、着飾った美女の集団とか、武装した兵士の集団とか... 何百人もいそうな大行列が堂々と居並んで続く。

(..... 嘘っ！ 聞いてなーーーーーい.....ッ！)

心の中で絶叫してみても後の祭り。リツコはとにかく、必死で愛想笑いを、してみた...

4 - 2. リツコ、誇大広告される。

4 - 2. リツコ、誇大広告される。

後から思いかえしてもつくづく、前から二番目なんて身の程知らずの大それたポジションに強制参加じゃなくて、ただの沿道の観客でいたかった...というのが、リツコの素直な感想だった。

豊かな碧緑の巻き毛を風になびかせて紅朱に金糸の刺繍織のあでやかな衣装をまとい、その腰には同じ意匠で飾った華麗な大剣を佩き、美しい無紋の黒毛の大戦馬にまたがった、華麗なる美人皇女殿下をその先頭に。

右後ろに並ぶ金色馬にまたがるのは真紅と漆黒の戦士装束の背中に鷹の翼を堂々と掲げている雄輝。

左後ろに並ぶのが白銀の馬にまたがり青と水色の控えめな礼装を整えた、絶世の美青年の鋭。

二人のすぐ後ろにぴたりとつけて、堂々たる枝角をそびえ立たせた大鹿に騎る薬師装束の美女マシカ。

(...鋭の鞍にちょこんと載ってるあたしみたいな小荷物なんかこの際この絵づらのジャマだ。...とリツコは真剣に思った...)

沿道に居並ぶ見送りの人々は、歓呼の叫びと噂話で、ぶんぶん唸るハチの巣のような有り様だった。

『見ろよ！ あのかたがたが戦を終わらせてくれた四軍神だ！』

『なんてお美しいのかしら皇女様！』

『きゃーーーっ！ リレク（鋭）様すてきっ！ お凜々しいッ！』

『ちょっと何よ、あのチビ？』

『泥球界（地球）からのお客人らしいよ。何でもさる有力な部族の長の縁者とか』

『泥球界の？ 王族なの？』

『お使者様なんだから、そうじゃないかい？』

(ええええっ！) とリツコは思った。

いくらちょっとだけオシャレめワンピースを着てみたからって、実は通販のしかもバーゲンで買った安物だ。『さる有力な部族』ってなに！

たしかに大叔母様は朝日ヶ森の学長だけど、それって別に王家でもなんでもナイわよ！??

むしろこの国の言葉が喋れなくて良かった。と、つくづく思った。

話が出来たら絶対に、必死になって噂話を否定しにまわってしまったら...から...

「...鋭ッ？ なんかあの人たち、すごい大誤解してない？」

思わず小声で叫んでしまったリツコの赤くなったり青くなったりの一人百面相をにやりと笑い飛ばして、行列の間中、鋭はとにかく、「笑って！ ほら笑って！ 手を振って！」としか言ってくれなかった。

その鋭自身も率先して、まわりじゅうに手をふり愛想をふりまき、観るひとすべてをその超絶美形な笑顔でうっとりさせさせていた...

(その間、二頭の龍たちは、上空でゆったりと浮いて旋回しながら「出立の騒ぎを見届けて」いるようだった。)

(街から行列が出るのを見届けて、西の空へと飛び去って行った。)

そんなこんなで街から出るだけでもしばらくかなりの時間がかかり。

「ねえ鋭。もう笑うのやめていい？」

ようやく道沿いに見送りの人が少なくなってきて、やっと聞けたころには、むりやり笑い続けていたリツコの顔は、ばりばりに強張っていた...

それから歩いて来た時よりゆっくりぐらいの速度で《白の街道》を西の方角に戻ると、途中の河原で待っていた薬師たちの一行の、半分くらいが荷馬車隊を率いて皇女の行列の最後尾に入る。

あとの半分くらいは、列には入らずそのまま流れ解散する？ らしい。

休憩をはさみながらゆっくり進んで夕暮れ前にその日の野営地らしい場所に着き、行列の後ろから荷馬車隊ががらごろと追いついてきて、食糧や天幕を降ろし火を起こして大人数分の食事の仕度を始める。

荷を降ろすと、そのまま手を振って別れて元の方角へと戻る人たちも百人くらいいた。

「リツコ、今日もあたしと一緒に天幕だけど、いいわよね？」

あいかわらず小鳥とかの群れに取り囲まれながら大鹿から降りてやってきたマシカにそう言った頃、ちょうどリツコの「聞いた話が解る魔法」はとけてしまったのだった...

(鹿は勝手に歩いて行って、そのへんの草で食事を始めた)

そんな風にして、この旅は始まった。

(次の日はみな普通の旅装束に着替えて、荷馬車隊が置いていった荷物の山は皇女の馬の背にまで積まれた。

軍人は3隊に分かれて半日先と後と左右の脇道の警護にまわる。

雄輝が前に行っちゃってマーシャの機嫌がますます悪くなる。

ご飯の仕度は現地スタッフが饗宴してくれる場合が多い。)

(鋭が手配係)

5 - 1. リツコ、旅をする。

第5章. リツコ、旅に出る。

5 - 1. リツコ、旅をする。

そこからの旅の日々は最高だった！

夜は毎晩マシカと一緒に天幕で動物たちに囲まれてぐっすり眠って、朝は鳥たちや動物たちの騒ぐ声で賑やかに起こされて、マシカに《言葉の魔法》をかけてもらってから、冷たい川の水や新鮮な泉の水で女性陣みんなと一緒に水浴びや身支度をきゃあきゃあ騒ぎながら済ませると、皆と大天幕でご飯を食べて、えいやっと自分たちの天幕を畳んで荷物を荷馬車に乗せて、準備の出来た者から順にばらばら出発して、歩いたり馬の乗り方を練習させてもらったり荷馬車に便乗して昼寝したり。

お昼ご飯は各自で勝手に、停まって休憩したり荷馬車で進みながらでも適当に、朝に配ってもらったお弁当プラス各自で用意したお菓子や何かを食べて、午前と午後のお茶休憩も同様で、あいまに遊んだり喋ったり歌ったり色々しながら、とにかく西へ向かって《白の街道》をのんびり進み続けて、陽が傾いた頃に次の宿営地に辿り着く。街道沿いの警備を兼ねていつも半日分だけ前を進んで次の宿営地に先乗りして夕飯の支度をして待っていてくれる雄輝たちの先行隊と夕飯だけは大人数と一緒に食べて。

(なぜかその夕飯の間だけは皇女サマの機嫌がちょっとだけ良くなる？ のを、リツコは興味深くこっそり観察していた)。

その警備隊が日暮れ前にまた先を急いで出発してしまうので見送って、残った面子は毎晩のように夕飯の次の夜食の仕度をしながら飲んだり歌ったり笑ったり踊ったり、口説いたりフラレたり楽しい酒宴会になるのでリツコも眠くなるまでは果汁とお菓子でつきあって、《言葉の魔法》が切れる頃にマシカと一緒に天幕に引き上げて、あとは眠くなるまで二人でお喋りして、色々なことを教えたり習ったりしあった。

ただしマシカは旅団中の参加者の健康管理をする《薬師代表》という役職も兼ねていたので、合間合間に行列のすべての人と動物の健康状態をチェックしたり、体調の悪い人

に薬草の調合をしたりでなかなか忙しかった。薬師の集団は日によっては先に行って地元の村の半日健診みたいなこともして日暮れ後の遅い時間によろやく追いついて来たりもしていたし、時には沿道の村の人から往診の依頼があったりして、夜中でも大鹿にまたがって急いで出かけて行ったりする。

リツコも始めのうちはそんなマシカについて一緒に行ったり簡単な作業なら手伝ったりもしてみたのだが、どうやら薬師の才能はまったく無いようだった。大体、人の血をみるのがけっこう苦手で、包帯を巻くのを手伝おうとか思っても、どうしても傷口から目をそらしながらの作業になってしまうので、うまく出来る筈がない。

針と糸で大きな怪我を縫い合わせたりまでするマシカは凄いなあとリツコは心底尊敬したが、たいがいの薬師は今のリツコくらいの年齢には助手から一人立ちして一つの村や街を預かり、プロの薬師として働き始めるのだという。

ちょっとそれはリツコには絶対に、無理そうな職業だった。

そんなわけで足手まといになるだけだと自覚してから往診について行くのはやめたので、時々リツコは夜更けに一人でとり残された。そんな時は鋭が自分の天幕に呼んでくれて淋しくないように気を使ってくれたが、多忙を極めている鋭のそばにいるとしばしば皇女サマやその側近の重臣の人達が真夜中に訪ねて来て、なかなか面倒くさそうな気難しい話し合いをBGMに眠るはめになったりするの、少々厄介だった…。

雄輝が旅団の警備の総責任者なら、鋭のほうは全体の経理とか色々な雑用全ての総責任者らしくて、人の出入りや資材や食糧の調達と支払いや、旅程の管理に気を配っていて、さらにはヨーリア学派の長としては医術の心得もあるそうで、しばしばマシカと一緒に怪我人や病人の治療にも当たっていた。ほんとに忙しそうだった。

だからリツコはとにかく周りの人たちの仕事を出来る範囲で手伝いながら、少しでも暇があればマシカと鋭と（可能ならば雄輝と、ついでにもう怖いとは思わなくなっていたので。いつも不機嫌な皇女様にまで突撃して！）質問攻めにしていた。

そんな風にして、旅は《大地世界》の西半分を超え、丸二ヶ月ぐらいもかけて進んで行くのであるらしかった。

5 - 2. リツコ、記録する。 (2018年9月12日)

5 - 2. リツコ、記録する。

そんな日々が続いて、やっと自分の置かれた状況の全体像が判ってきたので、とにかく戻ってから整理して大叔母様に報告しようと、大学ノートの山に手書きでガリガリ記録を残した。

それはこんな風だった。

【この世界のこと。】

名前はダレムアス。

意味は《大地の国》。または《大地平界》。

平らな世界で、地球みたいに丸くない。(と言われている)。

ブツリホウソクが、いろいろちがう。(と鋭が言ってる)。

昔々、女神マライアヌ様と仲間の神様たちがつくった。

神様たちは沢山いたけど、ほかの世界の神様たちと戦争して全部ほろんじゃった？

今は二本足の人間がいちばん多くて、

他に色々な《毛皮の人々》とか、《樹木の人々》とか、

その他の竜とかマホウの生き物もたくさんいる。

女神マライアヌが《ダレムアス》をつくったのと同じ頃に

別の神様たちがつくった別の世界《ボルドム》が

何十年か前にとつぜんシンリャクしてきたので、最近まで戦争してた。

戦争はなんとか勝ったけど、
まだ色々と戦後ショリ問題というのが残っているらしい。
(よく分らない)

【ショコウ会議のこと】(※マシカは字が判らないって。あとで鋭に聞く！)

戦争してたボルドムとテイセンの話し合いかと思ったら、そうじゃないみたい。

ダレムアスの前の王さま？ 皇さま？ (皇女サマのお父さんとお母さん) が、
前の戦争の最初にボルドム軍に殺されちゃって、今いないので、
誰が王位をつぐかとか、そういう話し合い？

(なんで皇女サマがつかないの？ って本人に聞いてみたら、聞くなっておこられた。)

【地球からのシンゼン大使のこと】

あたしが (ダイリだけど) なんでもここに呼ばれたか？ というと、
ボルドムと戦争して終わったばかりで弱っているダレムアス世界に、
「今度は地球人が攻め込んでこないか？」と心配している人たちがいて、

「攻め込んで来ないように万全の手は打ってるから、安心してほしい」という
「ハッターをかませる」ことが、会ギのコウショウのために必要なんだって。
(よくわかんない。)

【この世界と地球のこと】

地球のことは《ティカーセル》または《テイカーセラス》って呼ばれてる。

「泥の球」って意味らしい。

あんまり、ほめてない感じ？

丸くて宇宙に浮かんでる星。っていうのが「信じられない！」らしい。

この《大地世界》はとにかく平らなんだって。
そして果てとか終わりが無い。(と信じられている。) なんだって。

地球にもどったら、社会科の教科書のゾウが大地を支えている世界カンとかの図版と見比べたいな。

それでこの世界の神話では《地球》と《大地世界》は「弟と姉」の関係なんだって。つくった神様たちが姉と弟だったからなんだって。

昔からずっと行き来はあったらしいけど、時差の関係？ で地球では「大昔のこと」になっちゃって、ほとんどの人からは忘れられてしまった、らしい。

ウラシマ太郎とかコチュウテンとか伝説があるでしょ？
と鋭が言った。
コチュウテンて何？

【ツバサとかのこと】

雄輝が地球の「翼」家の人間だったり。
昔から「地球に移住した人たちの子孫」とか、その逆とかが居たらしい。

とにかく、地球で「一族」とか名乗ってる人たちは、

こっちの世界から移住した人たちの子孫だったり、

その記ろくを語り伝えてきた人たちが多い。(らしい。)

【魔法のこと】

女神さまの子ソンとかが特に使える。
鋭は地球人だから全く使えない。(と言ってるけど、なんか怪しい?)

皇女サマは「直系だから」特別チカラが強い。

マシカはレイガイ的に？ マホウが巧い。

【朝日ヶ森のこと】

あの学園にいる「妖怪とか系」や「まほう組」の人たちって、

つまり、そーいうこと???

そこまで書いて書きかけのまま書卓につっぷして寝てしまったリツコを寝床に運んでくれて、『諸侯会議』だと鋭が漢字を書き足してくれていたのに、翌朝になって気づいたリツコは、リュックに詰めて持ってきていた小さい紙の辞書をひいて、がんばって意味を調べた。

5-2. リツコ、話せるようになる。

5-2. リツコ、話せるようになる。

それにつけても皇女サマはいつ見ても機嫌が悪かった。

せっかく超のつく美人なのに、眉間にシワを寄せては誰かれなく睨みつけ、ちょっとしたことで色白な肌が真っ赤になるくらい怒ったり怒鳴りつけたり。いつもイライラしていて、「ヒステリー」としか言いようがないくらい。

こんな性格では、いくら戦争に強くて敵に勝っても、平和になったら国民は誰もついて来ないんじゃないかしら。だから後継者問題でモメてるのかしら？ とリツコは疑ってみたが、その割には鋭や雄輝やマシカたちも含めて、すべての部下たちからの信頼とか人望というやつは、ものすごく厚いらしい。

(「今日もまた機嫌が悪いー！」という嘆きと愚痴は毎日のようにそこらじゅうを飛び交っていたが。)

楽しい旅の毎日の中でも、皇女サマの天幕づきの次女や従者の人たちだけはいつも戦々恐々としていて、どよんとしたくら〜い空気が漂っていた。

のだが...

ある日。

よく晴れた西の空に鳥や雲とは違う小さい細長い影がくっきりと視え始めた。

『.....龍だ！ フェルラダル様も居らっしゃる！』

誰かが叫んだ。

『皇女殿下にご報告を！』

『聴こえたわ！』

すごい勢いで皇女サマがすっ飛んで出てきた。

あれあれ？ とリツコは見守った。

空のむこうの影のうちひとつは、自分で飛んでる？ らしい人間で、もう一つは、出発式の日にあ挨拶して西の空へ消えていった、あの伝令役の龍たちのうちの白いほうのように思える。

『...お兄様！ 伯父様！』

びっくりしたことに《大地世界》の皇女殿下サマはふわりっといきなり空に浮かびあがった。

そのまま文字通り「飛ぶように」すっつとんでいって、空の真ん中で『お兄様』と『伯父様』を交互に抱きしめて嬉しそうにあ挨拶している。

『遅くなって済まなかった。出立式の日までには戻りたかったのだが。』

鋭とはりあうぐらいのものすごい美形の鋭と同じような長い髪をした年輩の男性がそう言いながらふわりと地面に降りてきた。年齢が上だから、こちらが皇女サマの『伯父様』なのだろうとリツコは推測した。

『...フェルラダル様ッ!』

皇女と同じぐらいのものすごい勢いでもう一人すっ飛んできたのは... マシカだ。

『...御無事で!』

皇女サマの伯父様に、飛びつくように抱きついて挨拶している。

あれあれ...とリツコはすぐに解った。マシカが言った『鋭とちょっと似ているところもある』『一番好きな人』...って、この人だ!

『...マシカ...。わたしも居るんだけどなー...』

白龍にまたがって運んでもらってきたもう一人の男の人が、なぜかそうぼやきながら降りて来る。

『...あら、ごめんなさいミヤセル様? 御無事で何よりですわ?』

...ミヤセル様?... 皇女サマの『お兄様』ってことは、名前はマリシアル皇子って言わなかったっけ...?

リツコは聞きかじりの話とつなぎ合わせながら、興味津々に目を点にしてなりゆきを見守った。

「あ〜、...また話が賑やかになった...」

苦笑しながら、いつのまにか鋭がリツコの隣に立っていた。

「...さて、吉と出るか、凶と出るか... 吉かな?」

龍は集まってきた顔見知りだけに簡単に挨拶すると、また天空を悠々と飛んで西のほうへ戻って行った。それを手を振ってしばらく見送ってから、皇女サマは同じ碧の巻き毛と碧の瞳で双子のようにそっくりな雰囲気の上やあまり似ていない外見の落ち着いた物腰の伯父上や重臣たちと額を突き合わせて話しはじめた。それを鋭は自分には関係ないとばかりに離れたところから見守って、やがて笑った。

「...安心して、リツコ。これでマーシャの機嫌は直ったみたいだから...」

話のとおり、その後すぐ宿泊地点に着いて雄輝たち先行班と合流した時の皇女サマは、これが本当に昨日までのあの嫌な性格の意地悪女とほんとに同一人物? とリツコが目を疑うくらい、にこにこして、上機嫌で、頬なんかピンク色で、みんなに親切で、歌まで歌っちゃって、食欲もものすごく旺盛だった。

側近の人たちがみんな嬉しそうに後ろでこそそと情報のやりとりをしていたが...

鋭はあまり気にしていなかった。それから食後のお茶を呑み終わった皇女サマたち主賓席のところへ、おもむろにリツコを連れて訪ねた。

『お久しぶりです。御無事で何よりでした。フェルラダル様、マリシアル様。』

こちらが地球から来たリツコです。最近はマリーツ（地栗鼠）という愛称で呼ばれています。

...で、マーシャ？ 機嫌が直ったところで... いい加減、この子、みんなと喋れないと不便なんだけどな？ 諸侯会議で代表挨拶だってする、大事な貴賓なんだし...？』

『.....わかったわよ！ もうッ！』

皇女サマはなんとも可愛らしく（リツコは目を点にした）ぷくっとふくれてすねた。

『ちょっと待っててリツコ。今まで八つ当たりしてたことは謝るわ。それで...』

すらりと立ち上がってこちらへ来る。

リツコは思わずびびって逃げかけた。

その肩を遠慮なくがしっと捕まえて、

「だから、謝るわ。って言ってるでしょう？」

ものっすごく高飛車に言い切ると、それからすうっと息を吸い、大地を両手で抱えあげるような独特の舞のようなしぐさをして、謡うように唱えた。

『...マレッタ！ れとけいえる、せるかろまろうで、いええん！』...（汝がことば皆に通じよ！）

それから急に、リツコがそれまでマシカが毎日かけなおしてくれる《言葉の魔法》のおかげで相手が言ってる言葉の意味を理解できるようになっていたのと同じように、リツコのほうは日本語でごくふつうに喋っているだけの言葉を、聞いたダレムアスの人がみんな「なぜか意味が理解できる」ようになった。しかも半日とかで効力が切れてしまうような時間限定の魔法ですらなかった。

「ありがとう！」次の日に改めてお礼を言いに行ったリツコに、

「だから、遅くなって悪かったわよッ！」と皇女サマはもう一度ふくれて拗ねた。

6-1. リツコ、囚われてはいないお姫様にあう。

6-1. リツコ、囚われてはいないお姫様にあう。

なにしろリツコは元々かなりのおしゃべりの質問魔で、好奇心旺盛だ。今までは人が勝手に言うてくることを一生懸命聞きとるだけで、こちらから質問できる相手はマシカと鋭だけだった（日本語が通じるあと二人のうち雄輝は周辺警備の任務に就いていて基本不在だったし、そのせいで？ 皇女サマはいつも不機嫌だった！）...が、今度からは、自分が知りたいことについて、こちらから聞いて回れる！

もう大喜びで鉛筆と沢山のノートを持って、キャラバン中を前から後ろまで朝から晩まで、雑用があればちゃんと手伝いもしながらだが、すべての人を質問攻めにして歩く姿が、名物のひとつになった。

さて。

途中で合流したり離れて行ったりで増えたり減ったりしながら常時何百人もの規模で動き続けている旅の一行の内訳はといえば、《西方諸国》の首都《西皇都》で開催される諸侯会議に《白皇家》代表として出席する皇女とその兄と伯父と、鋭やマシカを含めた側近役や重臣たちと、旅を手伝うために参加している従者や侍女や料理人や職人や荷運びの御者や資材や宿の調達系の商人たちと、旅の仲間を護衛するために参加している雄輝たち軍の一隊。

それから、見るからにとっても家柄の良さそうな超のつく豪華な服で旅をしている謎の美女軍団のお姫様たちと、そのまた美形ぞろいの侍女たちと侍従たちと護衛の兵士たち。

この人たちは何故こんな野宿の長旅に参加しているのか？ 律子は前から不思議でしかたがなかったので話せるようになるとさっそく尋ねてみた。するとお姫様たちは一様に笑って、『さて、何故でしょうね？』と答えをはぐらかす。

その深窓の令嬢風な着飾った美姫たちの車列の前、重臣たち側近たちの行列との間に。いつもひっそりとしてくる謎の馬車隊があるので、リツコはずっと気になっていた。

他の学者や家臣や美女たちからは、なんだか距離を置かれていて、それまでもリツコが何かのついででそこへ話しかけに行こうとすると、なんだかやんわりと引きとめられたりもしていた。

「...ねえ鋭？ あの馬車隊の中の人たちには、話しかけてはダメなの？」

念の為、リツコの行動の管理責任者であるらしい鋭に確認してみる。

「うーん。悪いってことはないよ？ 彼女も退屈しているだろうし...ただ。」

「ただ、なに？」

「ボルドムのね。敵国のお姫様なんで...見た目がちょっと。こっちの人たちには怖いらしくって。」

「...見た目ー？ だってこっちの人って普通に、毛皮だったり四足だったり羽根が生えてたり...」

「まァ、ぼくら地球人からすると、区別が判らないんだけどねー。」

苦笑してうんうんとうなずきながら、鋭がべつに話しかけに行っても誰からも怒られはしないと保証してくれたので、リツコは早速、昼ごはんが終わった頃らしくてゆっくり動き始めたばかりの目あての馬車に、正面から訪問してみた。

「...こんにちわー！」

それぞれ自前の近衛兵たちを連れてきている美女たちの馬車群とは違って、この馬車隊だけはキャラバン全体の護衛とも別に、皇女サマ直属隊の兵士たちが交代で護衛についている。侍女や従僕もみんな大地世界の人たちだけで、ボルドム人なのは客分？ のお姫様ひとりだけ？ らしい。

取次を頼むと、

【だれか？】

それまで聞いたことのないシュウっという音の多い言葉で、馬車の奥から女のひとの声がかきこえた。

「リツコっていいますー！ あのね、退屈じゃないかと思って、遊びに来たんですけど！」

【...おや？ あの地球人の子どもか？ 我の話し相手に？】

声の感じはむしろ嬉しそうだった。

【マーライシャにでも言いつけられたか？ 我が怖くないのであれば上がっておいで。】

リツコはむろん大喜びで超豪華な大型の箱馬車に上がり込む。

どのくらい豪華かという皇女サマ用のやつよりも手が込んでいるぐらゐの丁寧な細工で、ものすごく値段が高そうだ。

お姫さまはリツコが馬車の扉を開けたとたん、それまで脱いでいたらしい大きな布を頭の上からするりとかぶって全身を隠してしまった。

「...えーと...」リツコは面食らって固まった。何かの宗教の衣装のような気もする。

「お顔を見ちゃったらまずいのかしら？」

ちょっとだけ遠慮しながら聞いてみる。

「あたし《ボルドム》の人ってまだ見たことがなくて〜」

【...大地世界人と同じで、《焔洞界》の者の姿も、千差万別なれど。】

するりと布がはずされた。

【怖くなければ見るが良い。】

七色に光る華麗な鱗に覆われた貌の、縦長に切れた大きな金緑の瞳の、なんというか巨大トカゲな感じのする、だいたいは人形で、美しい黒いたてがみ付きの姫様だ。虹色の肌に真珠色の爪が鋭くて長くて、何て言うか...キラキラしたネイルアート? のような文様が入れてある。

怖いかと聞かれればその眼と爪はなかなか恐いかもだったが、旅の同行者の中には横長に切れた山羊目のもふもふ毛並みの人だっているし、もっととんでもない爪飾りの人は、地球にだって多い。

「.....キラキラして、きれいなウロコね！」

すなおにリツコは褒めた。それから色々とおしゃべりをした。

こちらの世界の唯一の知人であるマーライシャの機嫌が悪かったせいで長らく話し相手に餓えていた敵国ボルドムからの亡命姫さまは、すっかりリツコが気に入ってしまったようだった。

「じゃあみんなが言ってるみたいに、人質として捕まってるわけじゃないのね？」

【我はみずから来た。あちらに捕らわれていたマーライシャを助け出して、こちらへ送り還すついでにな。我は我が《焰洞界》の後継の公主であるが、あの界の今の有り様は好かぬのじゃ】

「どうということ？」

【我は弱い者いじめを好かぬ。娯しみのためにいたぶり殺すがごとき我が婚約者どもらも厭じゃ】

「ふーん...。あたしも、そういうの嫌い。」

【気が合いそうじゃの】

「そうだね！」

【我が名は《焰洞界》ボルドレイガースダルムが公主、ディ・デュイ・リジューディーリヤという】

「...でい...」

リツコは絶句した。何度か練習してみたけれども、どうしても発音するのは無理だった。

【...我のことは愛称のダーモレアで呼ぶが良い。】

そう言って、別れ際には特別あつらえの美味しいお菓子をおみやげに持たせてくれた。

それから長い旅の間、しょっちゅう一緒にお昼ごはんを食べておしゃべりをする親友の間柄になった。

第6章 リツコ、旅をする。

次の日はみな普通の旅装束に着替えて、ゆうべのうちに用意してあった朝食をめいめいで摂って、荷馬車隊が置いていった荷物の山はあらかじめ手分けして持つことになっていたらしく、皇女の馬の背にまで積まれた。

軍人は三隊に分かれて半日先と後と左右の脇道の警護にまわる。

雄輝が前に行っちゃってマーシャの機嫌がますます悪くなる。

ご飯の仕度は現地スタッフが饗宴してくれる場合が多い。）

（鋭が手配係）

(第 1 稿)

(第 1 稿)

(第 1 稿)

(あらすじ) (2018年8月17日)

<http://85358.diarynote.jp/201808180013462979/>

(2018年8月17日)

『リッコ冒険記』 - 夏休み・異世界旅行 -

霧樹里守 (きりぎ・りす)

(あらすじ)

高原リッコは家族の事情で、私立学園の寮に住んでる。

その学長から「夏休みの手伝い」を頼まれた。

なんと、「異世界への親善大使」！

ええ？！

...っと思ったけど大人たちや先輩たちはみんな忙しくて行けないらしい。

「行って、みんなと仲良くして、まわりをよく観察して、レポートを書いてきてくれば、それだけでいいの。」

行ってくれたら他の宿題はぜんぶ免除してあげる！」

大好きな学長がそう言ってくれたので、喜んで引き受けた。

「姉弟世界」と呼ばれる大地世界ダレムアスでは、優しいお兄さんに世話してもらっちゃ
うしい♪

食べ物は美味しいし、お祭りは楽しいし…、

…皇女サマには意地悪されたけど…。

もうひとつの異世界ポルドムとの戦争終結のための講和準備会議？ とか、

同じ大地世界のなかでも、民族紛争とか、皇位継承争い？ とか…

そういう問題には、ショックを受けたけど…。

たっぷりのレポートを抱えて、友達と涙でお別れして、

リツコは夏休みの終わりとともに、元気に帰国しました。

(目次) (2018年8月18日)

<http://85358.diarynote.jp/201808181451568839>

『リッコ冒険記』 -夏休み・異世界旅行-

霧樹里守 (きりぎ・りす)

(目次)

0. まずは、朝日ヶ森学園
1. リッコ、親善大使になる
2. リッコ、異世界へ行く
3. リッコ、清峰鋭にあう
4. リッコ、皇女殿下にあう
5. リッコ、お祭りであう
6. リッコ、キャラバンにはいる
7. リッコ、虜囚公女とであう
8. リッコ、小鬼をたすける
9. リッコ、思い出す
10. リッコ、会議に参加する

00. リツコ、帰国する。

0 - 1. (おもて) (2018年8月18日)

<http://85358.diarynote.jp/201808181638312153/>

0. まずは、朝日ヶ森学園。

0 - 1. (おもて)

朝日ヶ森学園。

知ってるかな？

「天才児が集まる」ので秘かに有名。

超のつく贅沢な校舎と自由奔放なカリキュラムで知られていて、
子どもを私立に進学させたい親たちにとっては、憧れの学園だ。

基本は全寮制だけど、都心から新幹線で通勤・通学してくる生徒や先生もいる。

緑の豊かな地方都市の新幹線の停車駅から、自動車なら迂回して20分くらい。

歩くなら、ほぼ直線コースの県立公園の遊歩道を抜けてくるのが速い。

自転車？

...まァ、モトクロスを乗りこなせる人なら、抜けられる道だと思うよ...？

学園の敷地は広くて、一見すると壁とか塀とか柵とかは何もない。

でもセキュリティは万全で、目立たないところに監視カメラ網がばっちり。

不審者は立ち入れないけど、内部の見学とかは許可制の予約ツアーに参加すれば入れる。

校舎や講堂や寮の建物は、一見シンプルだけどしっかりお金のかかった造りで、見た目は柔和な感じだけど、どんな災害にもまけない頑丈な骨格なんだって。

もちろん、屋外と屋内（温水）の両方のプールがあるし、体育館とか柔道場とか剣道場とか弓道場とか、もちろんスケートリンクもスキー場もテニスコートも、全天候対応型のやつが、それも複数個所にある。

さすがにサッカーコートとラグビー場は、屋外だけらしいけど。

図書館ときたら外部の大人がまる一日かけて調べものしに訪ねてくるほど蔵書数が多い。

広大な敷地はゆるやかな起伏があって、種々沢山の緑が豊か。

天気の良い日は生徒たちがあちこちの芝生や木の下で、寝ころがったり自由課題を片づけていたりする。

時間割は自習が多くて自由で、給食もメニューを自由に選べて美味しいらしい。

都心から新幹線で週1のスクーリングに通ってくる通信制の生徒たちには芸能関係の子役とかが多い。

全寮制の一番奥の建物に住みついているのは、三歳から二十五歳までの、「天才」と呼ばれる、生まれつき知能指数の高い、ちょっと変人が多い。

それから一番多いのはやはり親が金持ちとか有名人とかで、コネと金をふんだんに使って我が子をここにがんばって押し込んだ！ という家の子たちらしいけど。

それ本当はちょっとだけ、気の毒な話なんだ。

なんでかって...？

ここはあくまでも、関係者からは「おもて」と呼ばれている場所（学苑）で...

本当の朝日ヶ森「学園」は「うら」と呼ばれていて、別の場所にあるから。

なんだ...

0 - 2. (うら) (2018年8月18日)

<http://85358.diarynote.jp/201808181752415407/>

0 - 2. (うら)

さて。

「うら」とか「真」とか呼ばれている、「ほんとうの」朝日ヶ森について...

説明するのは、難しい。

場所は秘密で、首都からは「裏日本」と蔑視されている、辺鄙な山中にある。

こちら敷地は広大だけど、頑丈なレンガの壁にきっちり囲われて、特殊な警備隊が昼夜わかず厳重な監視をしている。

生徒の種類はおもに2つに分かれる。

ひとつは国内外の要人の子女で、家族と一緒にいれない事情のある者... 病弱とか、テロや誘拐の危険とか、相続争いとか、隠し子で正妻には内緒とか... そんな感じの。

だからちょっとひねた性格のやつらが多い。

もう一方はもっと特殊で...

「ふつうの」人間じゃない能力... や外見... を持って生まれた、「特別な家柄の」子孫とか跡継ぎとか...

とにかく、そんなのだ。

角や牙があったり、翼や鱗があったり、呪術や魔術が使えたり、人の心が読めたり…

本人たちは、「一応、神でも悪魔でもないから、人間なんだけどー」と主張する 경우가多いが、

今の世の中ではうっかり一般社会を出歩くことができない。

「一族それぞれの隠れ里にこもってばかりでは世間にうとくなるし、幼なじみと親戚以外は友達も恋人もできないし！」という理由で「遊学」しに来て、文字通り「羽根を伸ばして」学園生活を楽しんでいたたり…する。

そんな、観た感じからして不思議な…「地球内治外法権」の…

「朝日ヶ森学園」。

このお話は、そんな場所から始まる。

1. リツコ、親善大使になる (2018年8月18日)

<http://85358.diarynote.jp/201808181850402014/>

1. リツコ、親善大使になる

1-0. リツコ、呼ばれる

リツコは平凡な子どもで、セレブの子女でも天才児でもなく、残念ながら美少女戦士でも子役アイドルでもないかわりに、妖怪変化の類でもなかった。

(こう書いたら「失礼ね!」とクラスメイトに怒られた。)

しいて言うなら特技は木登り。

親から習ったのでキャンプとか大好きで野外炊飯とか年齢のわりには大得意。

虫とか蛇とか平気で、まゝ女子からは引かれるけど、いざって時のサバイバルには向いてる。

見た目は凡百。顔はのっぺりして日焼けとソバカス。黒目だけデカイかな。

へろへろのくるくる天パがコンプレックスで、
ご飯はよく食べるけど、それ以上に暴れてる。

から太ってはいない... たぶん。

前いた学校ではソフト部でいいセンいった。

投げたら当たる。これはけっこう、長所?

まゝそんな程度のリツコが「うら」朝日ヶ森にいるのには...

事情があった。

そんな事情のひとつ、「大叔母様」からの呼び出しがあったので、とある7月の昼下がりに学長室までとことこ歩いて行った。

大叔母様というのは都合上の呼称で、本当は実の祖母のイトコだ。

学園はすでに夏休みで、生徒たちの大半は帰省か旅行に行ってる。

セミ時雨のほかは静かな構内をえんえん歩いてようやく事務棟に辿りつくと、勝手知ったる建物内には無言のまま入って、こんこんと学長室のドアを叩いた。

「はい。どうぞ！」

若々しい声の大叔母様の返事でドアを開けて一応「失礼します」と頭を下げる。

「なんですか？」

「お願いがあるのよ！」

元気な声でいきなり言われて、リツコはかなり面食らった。

「欠員が出ちゃってね！ 代わりに行ける人がいま他にいないの。バイトと思って引き受けてくれないかな。お礼として、他の夏休みの宿題は、ぜんぶ免除するから！」

…この「大叔母様」の名前は清瀬律子という。リツコと同じ「りつこ」だ。

やはり妖怪でも天才でもない「ただびと」のはずだが、何故かこの卒業生で、当代の学園長まで務めてる。

リツコの産みの母はこの気さくな美人叔母（ほんとうは母の母の従妹だ）が大好きで、彼女が一時行方不明になって死んだと思われていた頃にたまたまりツコを身籠ったので、思わず名前をもらって付けてしまった。という話…

まあそれはいいけど。

「...朝日ヶ森の生徒の欠員で... それ、あたしでも務まる用事？」

「だいじょうぶよ！ なんて言うか...そう！ 親善大使！ みたいな役目なの。
行って、滞在して、皆さんと仲良くして...最後の会議で、コレを私の代理で音読してく
れればいいの！」

渡された手書きの紙にざっと目を通して、それから声に出して読んでみた。

...べつに、難しい漢字とかは、無いよね...

「...行っても、いいけど... どこ...??」

「異世界よ！」

大叔母さんの無邪気な一言に、リツコは「はぁ？」と口を開け、目を点にした...

1 - 1. リツコ、出かける

<http://85358.diarynote.jp/201808182007137491/>

1 - 1. リツコ、出かける

「...あ、あらっ？ ウケなかったかしらっ？ イマドキの、『ただびと』...いえ、ふっ『普通世界』の子どもには、こういう言い方のほうがウケ.....いえ、判りやすいかな〜と、...思ったんだけど...っ！???」

いつも穏やかでニコニコしている大叔母様が真っ赤になってわたわた取り繕うという珍しい光景を、リツコは口をあけたままあんぐり眺めた。

「...べつに危ないこととかは無いと思うのよ？ 戦争は終わったっていうし、和平会議だし、おばさまの初恋の人とか、向うに行ってるしっ」

「はぁ？」

「だからねっ！...だから、私と同じ名前の遠縁のあなたが、向うでその人に逢ってきてくれたら、本当に、わたし嬉しいのよ...っ！」

「.....わかった。とにかく、行ってくるから.....。」

「ほんとっ？」

としがいもなく頬なんか染めちゃった大叔母様（たしか七十歳は過ぎているはずだ...）が、慌てて咳払いなんかしながら色々と説明してこまごまと持たせてくれた資料と道具

に一通り目を通し、リュックに最低限の着替えと小物を詰め、お気に入りの藤のバスケットには往きの列車内で食べるお昼と果物とを詰めて...

三日後、リッコは学園前から無人の送迎バスに飛び乗った。

最寄駅から鈍行に乗って、乗り換え駅から特急に乗って、検札のひとに

「小学生が一人で？」と尋ねられたら教えられた通りに

「ママのお墓参りに行くんだけどパパは夏休みが取れなかったのー！」

と無邪気なふりしてにこにこ返事して。

慣れない長距離列車に揺られてクーラーが寒くて辛くて鼻水垂らしてぐずぐず言いながら、ちょっとだけ肘枕で窓にもたれて眠って。

乗り降りする他の乗客たちの会話の声の大きさにはたと目が覚めると、もうすぐ、降りる駅で...

二面戸町駅のホームの待合室でくると振り向いて教えられていた秘密のドアを開けると。

「高原リッコ様ですね？ 異世界旅行社の送迎サービスの者です〜！」

どう見ても二足歩行の巨大カエルな人？ に曲がりくねった不思議な山道を案内されて....、

教えられた大樹によじよじと必死で登って。

教えられた通りの樹上の空洞から、えいっと、勇気を出して、

飛び降りて、どすんと...

いえ、ふわっと...

なにか柔らかいものの上に、落ちて...

目を開けたら、そこは、異世界？

だった...

2. リツコ、異世界へ行く。

<http://85358.diarynote.jp/201808191550129196/>

2. リツコ、異世界へ行く。

2-0. リツコ、異世界に着く。

はじめ何も見えなかった。とにかく眩しかった。

(...太陽...? ...は、...地球とおんなじ光? なのかな...??)

とりあえず薄目だけ開けて、手のひらで顔の上を遮ってみた。

反対側の手でからだとまわりを探ってみる。

...怪我はない。まわりは...もふもふ? もそもこ?...している...???

しばらくして、自分が何か柔らかくて細かいもの? のやまの中に埋もれこんでいる...?
ということが判った。

薄目だけ開けながら、もっそもっそと手探り膝さぐりで、何かふかもこしたものが、上から落ちて来たリツコを受け止めた衝撃で弾け跳んだらしい綿埃?...らしきものが光の中を舞い踊っているなか、1mほどの斜面をのそのそよじ昇る。

ちょうどそのくらいから、まわりのあちこちから、声が聞こえ始めた。

「...ま〜るめる! まるった! えら。えららう。まるる〜ん...???

「えるった！ らう！」

「まるえ？ えら。あらう。…あろ、…あっかせっか！」

「か～いせ！ えのっかあるっか、らうらうらう。あごん！」

「まれった！」

…そんな感じのまるまるした可愛い声の、可愛いコトバで…

…もちろん、ひとつことも、解らない…！

(……………ほんっとに、異世界？ 来ちゃった～???)

…そう思いながら、もこもこの白い山の上からようやく顔を出すと。

「えらっ！ あまっあまママあま、あそっ？」

可愛い仕種で、どうやら「だいじょうぶ～？」と心配してくれているらしい声が、かかった。

(…か、かわいい…っ♡♡♡)

語尾と目じりが思わずハート型になってしまうような生き物たちが、そこらじゅうにいた。

全体的に、白くてもこふわ。

うさぎのようなふわふわ毛並みの、見た目はむしろ猫？…二足歩行の…猫？？

サイズはかなり小さそうだ。リツコの膝上までぐらい？

「あいじゃ！ うにゃう？」

リツコはへろっと笑いながら、とりあえず手を振ってみた。

「ごめん！ コトバわかんない！ ケガはないよ～。だいじょぶ！」

それからちょっと心配になって体の下のもふもふを手にとってよく見てみた。

白猫？ たちとよく似た色だから、下敷きにしたのかと思って。

(…違うみたい…これは…毛玉？…繭…???)

なんかカイコのような大きさの、毛玉…毛糸玉？ のようなものが、いかにも「落ちて来くるもの受けとめ用クッション」という形に盛り上げられた…

そこは、大きなテント…ティピ？ のような… 布だか皮だかでまわりをぐるっと囲まれた…

大樹の、下だった…

2 - 1. リツコ、挨拶する。

<http://85358.diarynote.jp/201808191754076232/>

2 - 1. リツコ、挨拶する。

古びて節くれだってぼこぼこ溝やウネができてところどころに緑の苔まで生えた大樹の根元、眩しい陽光が燦燦とさしこむあたり。

巨木の幹にできた大きな空洞（うろ）から「何かが落ちてきたら」受けとめられるように...と、高さ三～四メートルほどに積み上げられていた「もこもこ」の山の斜面をずらずると滑り降りてみて、そこでリツコはしばらく困り果てていた。

膝丈ほどの二足歩行の「喋る猫」...としか思えない白くてふわふわの生き物の群れにわらわらと取り囲まれて、

「まうまうまう」

「あうれ？」

「あっかのおっか？」

「おねうおねう！」

などなど...ちっとも解らない言葉で、おそらく質問責めに？ されたあげく、よじよじとリツコのからだに登り始めて頭の上に乗っかっちゃったりする、おちびさんまでいる...

(.....えーとお。これは～.....☆)

ふかふか可愛い生きものにまわりつかれて思わず撫でてみたり、へろ笑いをしながらも困り果てていると、すこし離れたところから、すこし違う声が響いた。

「えっけれねん！ あうら！ かなりっこさる！」

とたんに、リツコをとりまいていたチビさんたちが慌てて動き始めた。

「あけーーーーーね！」

なんとなくリツコにも意味が分かった。

『あんたたち何やってるの、だめでしょ！ 離れなさい！』

『はーい！』

くらいの話じゃないかな？ たぶん...

ちびさん達がどいてくれた隙に慌てて立ち上がると、やってきた人？ たちの姿がようやく見えた。

(...あれ...?)

膝丈ほどのちびさん達は、とにかく「仔」猫(?) だったらしい。

やってきたのは大人？ で...そして。

横丸な顔で耳も短くて猫似の子どもたちに比べると、やってきた数人？(匹?) は、おそらく育つにつれて顔も手足も縦長になり...

耳が長く立ち上がり...やがては垂れて...地球でいう「垂れ耳うさぎ」が二足歩行で、服を着て荷物も持ってきた...としか見えない、人？ たちだった...

(...えーと！)

リツコはとりあえずとにかくピシッと「気をつけ！」の姿勢を試してみた。

「こんにちは！ はじめまして、高原リツコっています。よろしくお願ひします！」

きちんとした大人たちがきちんとした時にきちんとやるみたいに、きちんと手をそろえてきちんと頭を下げて、きちんとした挨拶を試してみる。

おとな兎？ たちは、ちょっとキョトンとした後、やおら長い耳を頭上に掲げて左右にばたばたとうちふり、片手で巻きスカート？ の脇をちょっとつまみながら膝をかがめて、

「まうまうまう！」と声をそろえた。

(まうまうまう？) とリツコは考える。

(さっきから何度も聞いたコトバだな～、あいさつだったのか！)

まねっこをして両手を耳のかわりに頭の両脇にたてて左右にふってみて、スカートは履いてないのでそこは省略して、膝だけまねっこしてびよこんとかがんで、

「まうまうまう？」と、首をかしげながら挨拶を試みた。

おとな兎たちはリツコの発音の悪さにウケたらしくて笑いながら、「まうまう！」と返事をしてくれた...

リツコはえへへと笑った。

「えっけれねん、あうりっこさるれうある？」

「あっかいおす、おっかいねん？」

再び意味が解らない...

困り笑いをしていると、おとな兎たちのうしろから、新たな声が響いた。

「ごめんごめん！ 遅れた！ やっぱりちょっと時間計算に誤差があったね！」

(.....日本語だぁ～！！！！)

こんな短時間でことばの壁からホームシックになりかけていたリツコは、自分がものすごいほっとしていることに、むしろ驚いた...

2 - 2. リツコ、清峰鋭にあう。 (2018年8月19日)

<http://85358.diarynote.jp/201808191830401117/>

2 - 2. リツコ、清峰鋭にあう。

膝丈のおちびさん達よりはだいぶ大きいとはいえ、地球の日本の小学校高学年としては標準サイズのリツコと同じくらいの身長しかない、おとな兎たちの群れの後ろから、ひょひょいと胸半分ほど上に現われた青年は、ものすごい美青年？ だった。

(...うそっ？ 少女漫画かアニメかなんかっ?)

リツコはちょっと呆然とする。

すらりと伸びた細身で、薄茶色のさらりとした髪は肩にかかるくらい長くて、優しそうな色白で、瞳も澄んだ明るい茶色で、きらきらしていて、とても優しそう...

ぽかんと口を開けて上を向いて見惚れているリツコにちょっと困った笑顔で、

「...リツコさんだよね？ 遅れてすみません。迎えの者です。」

「はいっ！ 高原リツコですっ！ 高天原からテンを抜いたタカハラ！ リツコはぜんぶカタカナっ！」

見惚れていたのが決まり悪くて、リツコは思わずフルサイズで自己紹介をしてしまった。

(...あ、恥ずかし〜！)

「...どうぞよろしく？ ぼくは、清峰鋭といいます。」

「……………嘘っ?!」

「え？」

「…だって! それ大叔母さんの初恋の人!…の名前!…ってことは、七十歳は過ぎてる筈でしょうっ？」

「…あ〜、…聞いてないかな? 向うとこっち、時間の流れもトシのとりかたも違うんだよ…」

「聞いてないっ！」

…美青年なお兄さんは、困ったような笑顔で、にっこり笑った。

「じゃあ、解らないことは後で話すから、道中、何でも聞いて？」

(…つまり、今はその場合じゃない。ってことよね…?)

いちおう考えたリツコは、とりあえずハイと頷いた…

2 - 3. リッコ、運ばれる。

<http://85358.diarynote.jp/201808191925435874/>

2 - 3. リッコ、運ばれる。

わきゃわきゃとからみついてくる仔猫なこどもたちと垂れ耳ウサギなおとなの女性たちと一緒に歩いて村まで降りて行くと、そこにいたどうやら垂れ耳が広くて犬似の顔のひと？ たちは、どうやら同族の男性らしかった。

案内された村一番の大きな家の庭先の木の下居心地のいいテーブルで、出してくれた果汁や香草のお茶や飾り切りの果物や木の実を潰して焼いたお好み焼きみたいな見た目のお菓子をすべてたிராげた後、やおら大学ノートを取り出して、リッコは清峰鋭に尋ねた。

まずは日付を書こうと思ったけど、リュックから出してみた電子機器類はすべて圏外どころか教えられていた通り画面が真っ暗で、スイッチをいくら押してもうんともすんとも、電源すら入らない。

「...ほんとだ...」

「それは聞いてた？ こっち電気を使うものは全部ダメなんだ。物理法則が根本から違うらしくて。」

「空とか木とか、見た目はおんなじなのにねー。」

「空と太陽と風だけが共通項、って言われてる。」

「ふーん...」

日付と時間はあきらめて、「訪問1日目。昼ご飯のあと。」とだけ書いて。

大叔母様から山のように渡された体験報告記入用の大学ノートの一冊目に、やはり1
ダース入りの匣ごと渡された鉛筆の1本目をがりがり削って、ざっと報告のメモだけ書
いて、仔猫とおとな兎とおとな犬？ の見本を家族風に並べた落書きを手早く描いて、

「ねえねえ、このひとたちは、なんていう名前？」

「本人たちはマウレイレイって名乗ってる。うさぎひと族。みたいな意味かな。
まわりからはもっばら猫兎とか犬兎とか... リツコ、イラスト巧いね？」

「あ、ほんと？」

「うん。簡単な線なのに、特徴をよく捉えてる。」

「わーい褒められたー♪♪」

素直に喜ぶリツコの笑顔に、美青年もつられて笑った。

「適任者が行くわよ！ って清瀬さんが手紙に書いてきた意味が分かったよ。」

「なんでー？」

「前に来たオトナは、電波が通じなくてもデジカメとパソコンで記録は撮って帰れるだ
ろ。...って思ってたらしくて...機械全滅で、アイデンティティーが崩壊してた。」

「うーん...」

リツコは苦笑する。オトナって...ときどき、「使えない」よね...。

「ところでリツコ、きみは馬には乗れる？」

「...動物園とかの10分1000円のやつしか乗ったことない...」

「じゃあやっぱり、運んでもらったほうがいいねー。」

「はい？」

リツコがきょとんとしている間に、うさぎ人たちと普通にネイティブ言語で会話して、
打ち合わせだの連絡だの会議だの？ していた清峰鋭は... (うさぎ人たちからは何故だか
「ミキール」と呼ばれていた) ...何か指示をひとつ追加すると、しばらくしてその返事が
返ってきたらしく。

「そろそろ、行くよ？」とリツコに声をかけて、どうやら「ごちそうさま」に相当するらしいお礼のコトバを言って、席を立った。

リツコも慌てて同じコトバで挨拶してみて、荷物をまとめて後を追う。

そこに待っていたのは...

背中に翼の生えた...鳥人間?...の一族の人たちで...

や、...槍刀? 剣かな?...で、武装? していて...

なにか運動会の球入れのカゴのようなでかい蔦網の籠を持って...

「リツコ、高所恐怖症じゃないよね？」

にっこり笑った清峰鋭に指示されて、リツコは恐る恐る、その籠に乗って...

翼人間たちが4人かかりでロープを持って舞い上がり...

(..... きゃーーーーーっ!)

必死で声を呑みこむリツコだけを乗せて、カゴはどんどん空高くに上がって行き...

恐る恐る見下ろしてみると...

清峰鋭は騎馬の一団とともに下のはるか下の草原を駆けているのが...

遠目に見えた...

(嘘つきーっ! 「道中、何でも聞いて?」って言ってたくせにーっ)

心中で絶叫すること数時間。

夕陽が赤く燃え上がる頃、空飛ぶ籠は、ようやく地面に着いた...

3. リツコ、白王都へ着く。 (2018年8月22)

<http://85358.diarynote.jp/201808221403234175/>

3. リツコ、白王都へ着く。

3-0. リツコ、寝こける。

リツコは、うなされていた。

「お母さん！ お父さんっ！ 早くっ！ ...早く！ 逃げてっ！！！！」

いつもの夢だ。怖い夢。もう、起こってしまったこと。そして、...

「...リツコ！ リツコ！ 起きて！...夢だよ、起きて！」

「...お母さんッ！」

リツコは飛び起きて、声をかけてくれた人に必死でしがみついた。

「あぁ良かった...無事だったのねっ！」

「...リツコ...」

...ん??

ぎゅっと抱き着いてみたら...違う...?

硬いし、細いし...

これ、お母さんじゃないし...お父さんでもないし...大叔母様でもないし...

「.....あ！？ 鋭?.....ごめんねっ?...あ、あたし...寝ぼけて...っ」びっくりして飛びすさったら、「ううん。」と、美青年は優しく笑ってくれた。

...やっぱり見惚れる。

鋭はまた苦笑して、

「それにしても、度胸がいいねーえ？ 天運籠のなかで気がついたら爆睡してたって。鳥人のみんな、呆れてたよ？」

うなされていたことは無視してくれて、にやにやからかってくる。

「え? ...ええ？」

リツコは慌ててあたりを見回した。

知らない部屋だ。

「...ここ...??」

「うん。日が暮れる寸前くらいに白王都に着いたんだけど。いくらゆすっても起きないからさ。...運んじやった。」

「.....うわーっ?? ごめんね??」

「ううん～? 軽かったし。」

「え～? 軽くないよ～?? 重いよ～??」

リツコはぱたぱたと顔とか髪とかに手をやって赤面した。いや～ん...っ

「だってさっ! だって向う側の木の穴からえいっって出発したのは夕陽が沈んだ後だったのっ! こっち着いたらまだお昼前で! お昼2回も食べたでしょっ? 飛んでるあいだあたしは暇だったしいっ!」

とりあえず必死で言い訳してみる。

「うん。きみが適応能力のとても高い大物の卵だってことは、よく解ったよ?」

「いや～んっ!」

「知らないところでさ。一人で目が覚めたら、いやでしょ? お腹もすいてるだろうと思って。」

優しい口調ながらまじめな顔に戻って言うと、リツコが寝かされていたベッドを覗き込んでいた鋭はひょいと立って歩いて行き、部屋の中央の食卓と椅子らしいセットのほうへ戻った。

「ごはん用意しておいたから。...あ、手と顔が洗いたかったらそっちね。トイレもそっち。」

「ありがとっ!」

リツコは清潔で気持ちのいい木の床の草編みらしい模様入りのゴザのようなものの上をぱたぱたと裸足でかけていって、教えられた場所でトイレと洗手洗顔を済ませて、ぱたぱたと走って戻った。

置いてあった箱形のお盆? の蓋をとると、ふわりと優しい香りがする。

「わぁ、美味しい!」

「そお? 良かった。」

何種類かの野菜と何かの肉と小魚...を、香草と一緒に蒸して和えたらしい簡単だけどすごく美味しいおかずが山盛りと、おせんべいと焼きおにぎりの中間のようなしっかりしっとりした噛みごたえの、何かの穀物の粉を練って平たくして焼いた、主食らしいもの。

箸休め? 的になちょっと摘まめるコリコリした歯ごたえの何か。浅漬けみたいな感じの新鮮な生野菜が数種類。それからデザートに、食べやすいように切ってあった汁けたっぷりの甘酸っぱい香り高い果物!

それらががついている間に、鋭が卓上焔炉的なものの鉄瓶からお湯を注いで、温かい草のお茶を淹れてくれる。

「ふ～う。おなかいっぱい!」

「おなか落ち着いたらもう一度眠るといいよ。まだ朝まで時間あるから。」

「もしかしなくてもあたしのために起きてくれたの?」

「まあやることも色々あったし。夜中に寝ばけますからよろしくって、清瀬さんからの手紙にも書いてあったし。」

「ええ!？」 (...はっずかし〜っ!)

...と、身もだえしてみせると、鋭はまたふふっと笑った。

「まあフツウ組のひとが朝日ヶ森に保護されてるからには、何か事情があるとは思ってたけど」

「...鋭は、地球のジジョウについては、どれぐらい知ってるの？」

リツコは思い切って聞いてみた。なにしろ知らないことだらけだ。

「う〜ん。清瀬さんからは何も聞いてないの？」

「そんな暇なかったもん。初恋の人だ〜ってノロケ始めちゃったし。」

「ええ？ それ初耳！」

「え、うそ？ しまった！」

リツコは慌てて口をふさいだ。遅いけど...

「...言っちゃったこと、内緒ね...？」

「う〜ん、まあ時効だし...。なにしろそっち時間だと、五十年も経ってるし...。

でも清瀬さんとはほんと喋ったこともあまり無かったんだよ？ 数十年ぶりに地球側と連絡がとれて、当代の朝日ヶ森の学園長が清瀬律子サンって署名してあっても、最初は同じ人だと思わなかったくらいで。」

「そうなんだ？」

「うん。...そもそもなんで彼女が朝日ヶ森にいるのさー？」

「え？ 同級生だったんじゃないの？」

「その前にいた全く普通の地元の学校でだよ。今のキミと同じ4年生の時にね。彼女転校生だったし。そのころ口がきけなくて筆談だったし」

「あ、それは聞いたことある。心因性とかのショックで喋れなかったって。」

「それで僕はIQ高かったんで《センター》に誘拐されて。」

「ええ？」

「逃げ出して朝日ヶ森に保護されて...そしたら何故か清瀬さんも朝日ヶ森に保護されて... まあ色々あって僕その直後にこっち側に飛ばされちゃったから、以来五十年？ お互い音信不通。」

「そうなんだー？」

リツコはちょっと目を丸くして混乱した。話の全体像がよく解らない...けど。

「あたしはほんとにフツウなのー。お父さんお母さんがハンセイフって目えつけられちゃって。逮捕に来たから『逃げて!』って言って。走って逃げたらばらばらになっちゃって。それで山の中で一人でサバイバルしてたら朝日ヶ森のひとが保護しに来てくれて。でもお母さんたちは先に亡命しちゃったんだって。次のルートが確保できるまで、朝日ヶ森で待ってなさいって。」

「...ほぼ僕と同じ状況らしいけど。...それを『普通』って言っているのかなあ...。」

鋭が苦笑して遠い目をする。

「それですか。『こっちとそっちの行き来を兼ねて別の場所に出られないか』って質問」

「え？」

「聞いてない？ リツコこっちに来たあと朝日ヶ森に戻すか、もし可能なら、地球上の別の場所に出してくれてもOKって。」

「そうなんだ…」

「でもキミの今回の時差の件もあるし、ルートがほんとかなり不確定なんだ…。」

「ぜったい安全って確認できるかどうか、もうちょっと待っててね。」

「うん。わかった。」

それからしばらくはリツコが地球と日本の最近の事件の話をして、うとうとしはじめたら布団に入れと言ってもらって。

…最後にみた大きな満月が、地球より大きいな～と思ったところまでで、リツコの記憶は途切れた…。

3-1-0. リツコ、寝坊する。 (2018年8月22日)

<http://85358.diarynote.jp/201808222012536184/>

3-1. リツコ、謁見する。

3-1-0. リツコ、寝坊する。

再び目が覚めると、どうやらもうすっかり朝も遅い、という時間帯のような雰囲気だった。大小色々いるらしい鳥の声が賑やかで、人の声や馬？ のいななきとかのざわめきも遠くから聴こえる。

「...んんん.....よっく寝た...?...あれ...??？」

あたりを見渡して知らない部屋だということを再確認して、昨日なぜか異世界とやらに
来てしまったんだった...ということぼんやり思い出し、

「...夢じゃなかった！」...と、正気にかえて、慌てて起き出した。

着ていたのは持参した寝間着で、自分で着替えたのは覚えてる。

木と竹？ と紙と布でできたシンプルな...何というか和モダン?...風なしつらえの部屋のなかで慌てて昼の服に着替える。...そうだ。脱いだ服の洗濯は、どうしたらいいのかな...？

昨日おしえてもらった場所でトイレと洗面を済ませて、水はたっぷりあったし天気も良かったので、ついでだから大きな盥でじゃぶじゃぶ洗濯もしてしまって、邪魔にならないかなー？ と思いながら土間のすみっこの植え込みの枝に紐をかけて勝手に干す。

昨日と同じように卓の上に用意されていた朝食らしいものを勝手にたいらげる。

「いただきます！.....ごちそうさまでした！」

3分でがつつ平らげると...物音を聴きつけてやってきたのか、旅館の中居さんのような感じの動きやすそうな服装をした知らない女のひとがにっこり笑って立っていた。

「あにょんまるにえん、えなら？」

「あっ！ おはようございますっ！ ごあん勝手にいただきましたッ！」

おもわず囁んじゃいながら慌てて挨拶すると、にっこり笑って「えんえん。」と返事をしてくれた。

「まによ？」

リツコの食べ終えた食器を手早くまとめて持って、「ついて来て？」という風に首をかしげるので、リツコは急いでリュックをひっかけて、あわててついていった。

行った先には鋭がいた。

大きな部屋で、同じような服装と髪型をした同じような雰囲気の人たち沢山と、地図だの一覧表だのを広げて、慌ただしく何かの打ち合わせをしている感じ。

「まるにえん。えーらんでーい。」

女のひとが声をかける。鋭が降り向いた。

「あるっくあい。…あ、リツコ起きた？」

「おはようございますっ。寝過ごしてごめんなさいっ！」

「い〜よ〜？」

それから鋭は周りの人に声をかけ、自分の見ていた書類は簡単に片づけて、上衣を手にとった。

「じゃ、行こうか。」

「どこへ？」

「皇女サマにご挨拶〜。」

「ええ!？」

「あれ、ゆうべ言わなかったっけ？ ここの皇女サマって朝日ヶ森に居たんだよ。

『霧の校庭・運動会行方不明伝説』って、学園七不思議になってるって聞いたけど。」

「え〜っ？ 何十年か前の、障害物競走の途中で生徒3人がイキナリ消えた謎？

…あれ実話だったんだ…」

「そうそう。そんな時に巻き込まれた僕がここに居るからねえ。」

…つくづくあの学校はフシギだらけだ…とリツコがあきれながら鋭と一緒に歩いて行くと、玄関らしき場所に出て、

「あっあたし靴っ」

「だいじょうぶ、昨日ここで脱がせたから、ここにある。」

「あっそうなんだ〜。」

ほんとに鋭って気配りというか、用意がいい人だなあ…と感心する。

玄関先の気持ちの良い小径を歩いていくと、すぐに大きな道に出た。

「うわ…」

市場だった。いや…大きな町？ 商店街…？

「とりあえず質問と観光は後にしてー。皇女サマは怒らせると怖いからー」

きょろきょろしながら呆然と立ち止まってしまったリツコの肩を押して鋭が苦笑する。

「それでなくてもキミきのう寝ちゃったからさ？ 歓迎パーティーすっぽかしたんだよー」

「…きゃーーーっ！ ごめんなさいっ！」

リツコは恥ずかしくて悲鳴をあげた。

さらに歩いて行くと開放的な感じの大きな門があって…

特に検問とか見張りとかは何もなくて、ひょいとくぐると、入ってすぐのところに、大きな男の人が立っていた。

「おう鋭！ 来たか！ そのコか？」

「うん雄輝。この子だよ〜、高原リツコ嬢。」

「あっこんにちわっ！ タカハラですっ！ よろしくお願ひしますっ！」

「リツコ、これが『校庭行方不明事件』のもう一人。翼雄輝。」

「おう、よろしくな。タカハラって何県のタカハラ家？」

「.....翼.....！」

リツコは質問されてることに返事ができなかつた。紹介された人の背中に大きな翼があつたから。

「ん？ 珍しいか？ 朝日ヶ森にも居るだろう？」

「居るけど... 怖くて殆ど話せなかつたし...」

「あ〜、天狗系のやつらは、気難しいからな〜...」

そういう問題だっけ...

「おれは善野の鷹羽ヶ峰の一族の、元主家の翼の最後の一人。...って解る？」

「ごめんなさい。わかんないです。うちは一族って滅んじやて残ってないので。

あたしたちは、分家の分家で。...大叔母様か、お父さんなら知ってるかもだけど...」

「あ〜気にすんな、そんなもんそんなもん。」

からからと笑つて男の人はリツコの肩をぽんと叩いた。

「マダロ・シャサ！」

ちょっと離れたところから呼ばれたのは、その翼のある人のこっちでの名前らしい。

「じゃな。マーシャ怒つてるからな〜。せいぜい庇つてやれよ？」

「...うへえ...」

鋭が、すごい嫌そうな声を出した... (リツコはびっくりした。)

3 - 1 - 1. リツコ、皇女に会う (2018年8月22日)

<http://85358.diarynote.jp/201808222150112690/>

3 - 1 - 1. リツコ、皇女に会う

少し足早になって歩いて行く。そこはかなり大きな広場で、馬車？ や荷車らしきものや、きのう乗せてもらったような飛び籠と同じようなものが大量に並べられ、そこへひっきりなしに人や馬が荷物を運び込んできて、移し替えたり、積み上げたり...何か同じような風景を観たことがある...とリツコが思い出してみると、前にテレビで見たシルクロードのキャラバンの準備に似ていた。

どうやら大勢で旅に出る？ 仕度をしているらしかった。

その前庭を抜けると綺麗に手入れされた植え込みに飾られた広い道に出て、そこを少し歩くと正面に宮殿？ らしいものがあった。

リツコの記憶でいうと一番似ているのが奈良とか日光とかにある寺院建築で... 鮮やかな朱紅と緑の飾り彫りで覆われた木造建築。ってところなんかそっくりだと思う。

案内も請わずに鋭はすたすと宮殿の小道の奥まで入っていくのでリツコも遅れないように後を追う。

通りすがりの役人らしい人たちが鋭を見るとみな頭を下げる。

「マウレイディア！」

「マウレイディア、リレク、エイセス！」

「マウレイディア。」

鋭はうなずくだけで軽く返して、どんどん歩いて行く。

「アウレクセス、マルニエン、エネ？」

広間の入り口の椅子に並んで腰かけている人たちの先頭には頭を下げて手刀で拝むようなしぐさをしながら声をかけると、

「マウレニエン、エネ、エネ！」

(どうぞお先に！) と言っているのだろう仕草で、相手の人は喜んで順番を譲った。

広間で謁見の最中だった人がそのやりとりにふりむいて、急いで自分の席を譲ろうとする。

「アウネ、ソノ！」

若い女性の声が鋭く響いて、その人はまたちょっと困った顔で、前に向かいなおした。

(構わない、続けて！...って言った?)

リツコは推測する。

どうやらそこが謁見の間...正面に座っているのが、これから挨拶する「皇女サマ」らしかった。

若い女の人だ。さっきの男の人...翼雄輝...と同じくらいの年齢に見える。つまい鋭よりは何歳か年上? まあ地球人の時間の感覚で、だけど。

碧色の豪華な巻き毛を肩のまわりに広げて、朱色と金色のすっきりと美しい衣装を身にまとい、美人だけどころかなり性格キツそうな顔で、ちょっと苛苛した感じで眉をしかめながら、前に座った人の報告を聴き、いくつか指示を出して確認を得てから、仕種と声とで退出を命じる。

「遅いわよ、あなた！」次にいきなり日本語で怒られてリツコは飛びあがった。

「昨夜は歓迎の宴を用意したのにすっぱかすし！今日は私もう出なくちゃいけないのにいつまでも待たせるし！それになに？チビな上にタダビト組なの？

なんで清瀬律子が自分で来なかったのかしら！」

これはもう挨拶とか自己紹介とかさせてもらえるどころじゃない。

リツコはふるえあがった。

「あのう...ゆうべはスイマセンでした。あたし時差ボケで、寝ちゃって...それに大叔母様たちは今すごく忙しいんです。最近大掛かりなテキハツがあって、大勢タイホされちゃったんで...」

「...あら、そう...」美人皇女は、素早く眉をしかめた。

「鋭、その報告は後で聞くわ。今日とはとにかく忙しいのよ。その御チビさんで大体揃ったし。明日はもう出発するわよ！あなたも準備急いで！」

「らじゃ。」

鋭はちょっとふざけた感じで地球式の挙手の礼をすると、あわあわしているリツコの肩をさっきと反対側に押して、とっとと逃げ出した...

3 - 1 - 2. リツコ、マシカにあう。 (2018年8月24日)

<http://85358.diarynote.jp/201808242054253271/>

3 - 1 - 2. リツコ、マシカにあう。

謁見の順番を譲ってくれた先頭の人に軽く頭を下げてとっとと退出しようとした時、鋭は急に気がついたようにおっと！と立ち止り慌ててふりむいた。

「...マーシャ。今の。決定事項でいいんだよね？」

「え？ ああ。...日本語で言っちゃったわね。」

「伝令まわすよ？」

「ええ。お願い。」

鋭は部屋と廊下に並んでいる者みなに聴こえるよう大声で呼ばわった。

「アウレイメイ！ ミウンテア！ ソンナイ！」

ざわ！と列をなしていた人たちの間に波がはしる。

鋭は繰り返して言った。

「アウレイメイ！ ミウンテア！ ソンナイ！...ディウンディアーイ！」

「アワッ！ ディウンディアーイ！」

短く返事をして走り出していく、制服を着て剣や槍を帯びている人たち。

並んでいた列から離れて慌てて宮殿の外へ急ぎ足で去って行く人たちも大勢。

「...いま、何て言ったの？」

おそるおそる鋭に聞いてみると、

「マーシャが言ったことだよ。出発は明日！ 正午！...伝令ッ！」

それから鋭もリツコの歩調を気遣いながらも足早に歩き始めた。

「行こうか。...怖かったでしょう？」

苦笑している。

「ううん。あたしこそごめんなさい。きのう寝ちゃったりしなければよかった。」

「いや～、彼女は最近ずっとあの調子だから。きみが悪いわけじゃないんだよ。」

「そうなの？」

「きみとは全然関係ない理由で、機嫌が悪いんだ。八つ当たりされて、ごめんね？」

「それならいいけど...」

宮殿の外に出ると、先程の広場でごったがえしている荷駄や人のざわめきが、さらにいっきに活性化していた。

「ミウンテア！ ソンナイ！ ディウンディ！」

「ミウンテア！」

大声で伝達しながら駆けて行く複数の声がどんどん遠ざかり、周囲に復唱されて広がっていく。

「...ねえ、もしかして鋭ってかなり偉い人なの？」

いっせいに動きだした人々や動物たちの騒ぎをきょろきょろ眺めながら聞いてみる。

「...なんでそう思った？」

「だって若いのに宮殿のみんなが膝を曲げてあいさつしてたし。順番もすぐに譲ってもらえたし。とってま偉そ〜な、あのお姫さまのこと名前で呼んで、ため口きいてたし。」

「...うーん、そっか。いい観察力だね。」

鋭はまた苦笑した。

「まゝ偉いって言うか... 皇女サマの友人... と言うか側近かな?... ってことになってるし... 最近はヨーリア学派の長っぽくなってるし...」

「...やっぱりかなり偉いの？」

「うーんまゝ、さっき会った雄輝ほど有名人ではないよ。まゝ雑用係だねえ...」

「そうなんだ？」

「そう。それで、明日出発ってことはぼくも準備しなくちゃで忙しくなっちゃったんで、旅のあいだキミの世話をしてくれる人のところにこれから連れてくからね。」

「そうなの？」

リツコは旅とかいってもずっと鋭と一緒になのだろうと思って安心していたので、びっくして目を丸くした。

「うんそう。だって昨日はもうしょうがなかったからぼくのところに泊めたけど、旅のあいだずっと男のぼくと女のコのきみが同室ってわけにはいかないでしょ？」

ほんとは昨日もそっちに泊めてもらうはずだったんだよ...

...あ、いたいた！」

広場の一角のへんにたくさんの生き物たちで混みあっている感じの場所へ鋭がまっすぐ突っ込んでいくと、小鳥たちや大鳥たちや小動物や四足獣たちや人間の子どもやら大人やらが、一斉にわっと散って隙間をあけてくれた。

「マシカ！」

「リレク！」

呼ばれて振り向いて鋭の名前を嬉しそうに呼びかえたのは、鋭と同じくらいの年齢に見える... 大人に近い少女というか... まだとても若い女の人だった。

秋のイチョウの黄葉とモミジの紅葉をまぜまぜにしたような明るい色彩の長い巻き毛を首の後ろで結んで、緑と茶色の動きやすそうな服に歩きやすそうな柔らかい皮の靴。手には草の束？ のようなものを持って、大きな黒馬の世話をしていた。

「動物たちの調子はどう？」

鋭はそのまま日本語で話しかけ続けた。

「モンダイないわ。あしたシュッパツですって？」

驚いたことにその人は、ちょっと発音が怪しかったけれども、なめらかな日本語で答えた。

「そう。で、この子が例の子。頼める？」

「わかったわ。よろしくね、リツコ？ あたしは、マシカよ。」

「こんにちわ！ びっくりした。日本語が話せるんですね！」

「リレクやマーシャたちからナラッタのよ。」

「そうなんだー！」

リツコはほっとして笑った。さっきの怖い皇女サマと違ってだんぜん優しそうだし、言葉が通じるなんて！

「マシカこれから時間ある？ リツコを市場に連れて行って、着替えとか旅に必要なものを一式買ってあげてほしいんだ。これ予算。足りるかな？ 諸侯会議にも出るからさ、ちょっと豪華っぽい服も必要なんだけど。」

「ええ。なんとかなると思うわ。知り合いの店が安くしてくれるのよ」

マシカは渡された布袋の中身をかろく確認してにこっと笑った。

「あと例のあの、言葉の術のやつも頼める？」

「あら？ マーシャに会いに行ったんじゃないか？」

「ものすっごい機嫌が悪くてさー。頼むどころじゃなかった。」

「あらあら...」

マシカも、よ〜くワカッタ、という仕種で肩をすくめた。

「わかったわ。あたしの神力じゃ弱いけど。全然ないよりマシでしょ。」

「じゃ、ごめん、リツコ。また明日ね。もしぼくに用がある時はマシカにそう言ってくれば、すぐに連絡がつくから。」

「うんわかった！ ありがとう！」

リツコが慌てて手を振るうちにも、鋭はどンドン歩いて行ってしまった。

それを追いかけてきた人たちが次々に話しかけたり、書類らしいものを渡したりしている。

...やっぱり、本当は偉い人で、ほんとうに忙しかったらしい...

リツコは、あたしみたいな子どもの世話なんかさせて、悪いことしたなー、と、ちょっと反省した。

3 - 1 - 3. マシカ、市場へ行く。 (2018年8月24日)

<http://85358.diarynote.jp/201808242228407081/>

3 - 1 - 3. マシカ、市場へ行く。

「ちょっと待っててくれる？」

鋭を見送ったあとリツコにそう言って黒馬の世話を最後まで仕上げたマシカは、まわりに挨拶らしい言葉をかけると手を洗って髪をほどいた。

ふわりと広がった朽葉色の巻き毛は、とても豪華だ。

「きれ〜い！」

リツコが思わずそう誉めると、マシカはにこっと笑った。

「そう？ ありがとう。リツコの髪もすてきよ？」

「ええ？ あたしのなんか焦げ茶色で癖毛でへろへろで〜。全然ダメ」

「そうなの？ ダレムアスでは大地の色って一番いい色だけど？」

「そうなの？」

「ええそうよ。ほら可愛い。あたしたち姉妹みたいね？」

マシカはそう言ってリツコの固く縛っていた癖毛もほどいてしまった。

リツコは「えへ〜」と照れた。

マシカはそんなリツコを見てにこっと笑って、それからちょっと下がって氣息を整えて、ひとこと歌うように叫んだ。

「ま〜りえった！ れっと、せっと、えッ！」((ことばよ、通じよ！))

「え？」

「まうれいにあ、あむにや、あむねえむね？」((わたしの言うこと解る？))

「えっ？ ...解る！ ... ???」

リツコは目を丸くした。何がどうなったの？

「マーシャは神力ってヤクしてるけど、鋭はマホウって呼ぶわね。あたしは血の力は弱いから、マーシャみたいに喋るほうまで出来るようになる術はむりなの。

時間も短いと思うんだけど... とりあえず、それでやってみましょう？」

リツコはまったくわけが解らなかったが、とりあえずうなずいた。

マシカは楽しそうな顔でずんずん市場に分け入っていく。

リツコはきょろきょろしてしまっていて大変だ。質問したいことを全部聞いていたら一歩も進めなくなるだろうってくらい、目にはいるものがすべて珍しい。

それはリツコを見る側からもそうらしかった。

「チケット？」((地球人？))

「チケットナン？」((地球人か？))

「あやけたていか！」((おっとびっくり！見てごらん！))

通りすがりの商街の人々がリツコのTシャツと短パン姿を見て目を丸くする。

(.....え？なんであたし、意味が解るの?? チケット...ってチケツト? 英語? 切符?...じゃない。よね...???)

「エベルディン、スレイガ！」((出て行け、敵め！))

マシカが入ろうとした店の角で、鋭い声をかけてきた男がいた。

「...あんま、のうていあ、あろんでろい。」((なにか御用で? お客さん))

店員らしい人も誰だこの怪しい奴め、という顔で見ている。

リツコは知らない人から突然((敵!))と言われた事にびびった。

「まるまっかあれ。」((あたしの連れよ。))

マシカが言うと、ざわめきが収まった。

「ジョルディイリヤン、ダレッカ。リレキセース、オルディイイン」((諸侯会議に出るお客様。リレク様からお預かりしたの。))

「あんにや、ましか！」((いらっしゃい、星の娘!))

奥から店主が出てきて、あとはもう買い物が大変だった。

マシカがかけてくれた魔法?のおかげで、相手が言っている言葉は何語であれリツコにはなぜか意味が(なんとなく)解るのだけど、リツコが喋ってる日本語は、相手には全く通じてないらしい。

あれやこれやと店主が出してきてくれる衣類や旅行用品?に、半分はマシカに通訳してもらって、マシカにもうまく翻訳できない時にはとにかく身振り手振りで、好きな形や嫌いな色や肌触りかどうとか説明しまくって、試着してみてあーだこーだと、最後にはマシカが値切り交渉までしてくれて、一通りの品物を揃えて店を出た時には、リツコは喉が枯れて、おなかもぺこぺこだった...

マシカが気を利かせてくれて、通りすがりの屋台で何か甘いものを軽く食べさせてくれる。色とりどりの豆と触感の違う何かが入った、あんみつと冷しるこの混ざったようなお菓子だ。

「おいしーい！」

叫んだリツコに、マシカは笑った。

「元気でた?じゃ、ちょっと遠いけど宿まで歩きましょう。」

「あ、ちょっと待って!あたし今朝、洗濯物を干してきちゃったの！」

「センタクモノ？」

なぜかこれがマシカに通じなかった。リツコはがんばって説明してみた。

「服を洗って～、干して～、こう…。部屋の中においてきちゃったの！」

「ああ。洗った。服を干した。乾いた？」

「そう。洗濯物。」

「センタクモノ。」

マシカはうなずいた。

「リツコ、わたしニホンゴまだまだみたい。たくさん教えてね？」

「うん！ こっちの言葉も教えてね！」

リツコとマシカはすっかり仲良しになった。

3 - 1 - 4. マシカ、天幕に泊まる。 (2018年8月24日)

<http://85358.diarynote.jp/201808242323141303/>

3 - 1 - 4. マシカ、天幕に泊まる。

じゃあセンタクモノを取りに一旦戻ろうという話まで進んで、リツコは困った。

「どうしよう！ あたし帰りも鋭と一緒にだと思ってたから、道を覚えてない！」

「ヨーリア学派の寺院でしょ？ わかるから大丈夫よ」

「えっほんと？ よかった～！」

しばらく歩いて、なるほど見覚えのある植え込みの門のちかくまで着くと、マシカはその手前の店で買い物をしてくるからその間にセンタクモノをとってきて、と言う。

ひとりで門を入れて、見覚えのある玄関まで行って...勝手に上がるのもなんだと思ってとりあえず声をかけてみた。

「すみませ～ん！ 誰かいませんかー！」

「...もうどれっ、えんにやえん。」((*****))

(??? ...あれ...???)と、リツコは思った。

さっきまで声と一緒になんとなく解っていた「ことばの意味」が...分からなくなってる！

さっきマシカが言った「時間も短いと思うんだけど」の意味のほう判ったー！ と思いつつも、幸いにして出てきてくれたのが今朝リツコを案内してくれたあの女の人なので、再び「センタクモノ！」の身振り手振りをして、取りに行きたいので部屋に入っているのか？ という許可をとるのは、そんなに難しいことでもなかった。

鋭の私室だったらいい部屋に戻って今朝ほした洗濯物がきれいに乾いていたのをこれ幸いと、急いで畳んでリュックに詰め込み直す。

「どうもすみません！ ありがとうございます！」

ぺこりとお礼を言って退出すると、女の人にはこにこして手を振って見送ってくれた。

それからまたマシカと合流して、店を出て歩きながら、言葉がわからなくなったことを説明する。

「う～ん、だいたい半日なのね...」

マシカはちょっと悔しそうな顔をした。

すぐにまた術をかけなおしてくれるかなと思ったけど、そういうわけでもないらしい。

「もしかして、実はすっごく難しいとか、マシカが疲れるとか...する？」

「そんなことはないけど。だってもともとあの三人といっしょに旅してた時に、あたしだけ言葉が通じなくて不便だったから覚えようと思って、意味が解るように自分に毎日かけてたのよ。でもアタマがとても疲れるでしょう？」

「...そう言われてみれば、そうかも。」

「今日はもう眠るだけだから、また明日にしましょう。」

それから色々な話をしながら歩いているうちにマシカたち薬師の一行が寝泊まりしている天幕の仮村に着いた。薬師たちはみんな明日の出発に向けて忙しそうに飛び回っていたので、簡単な挨拶だけしてリツコたちはすぐに天幕にひっこんだ。

「マシカは用意はしなくていいの？」

「なんとなく明日だろうというのは昨日のうちに解っていたので準備は済んでるの」

「そうなんだ」

「でも明日は早起きしなくちゃだから、今日はもう寝ましょう？」

「うん！」

それからマシカとリツコは本当の姉妹のように一つの寝床で一緒に眠った。

問題は、リツコのために追い出されてしまったマシカの沢山の同居動物さんたちだった。ぶうぶう（それぞれの鳴き声で）文句を言いながら長椅子に移動させられた栗鼠熊や仔猫や老犬や小鳥や虹フクロウやシマヘビや...その他いろいろ...だったが、けっきょく朝になってリツコが目を覚ましてみると、二人の人間のあいだとまわりじゅうに、たくさん動物がぎっしり詰まって乗っかって眠っていたのだった...

4 - 0. リツコ、目覚める。

<http://85358.diarynote.jp/201808251552274769/>

4. リツコ、西へ行く。

4 - 0. リツコ、目覚める。

翌朝、天幕の上で鳥たちの鳴き交わす声がすごくて、リツコはびっくりして目が覚めた。すでに開け放ってあった天幕の戸布の四角い部分から見える世界はまだ夜明け前で、空は東？ の山並みの上の薄い金色の線から、反対側の闇青色と星々の瞬きまでのグラデーションが綺麗だ。

...う～ん、これは地球と同じに見えるんだけど...とリツコは思った。

「あら、起きた？」

広い空の下で髪に櫛をかけてまとめていたマシカがにこりと笑った。

「今日もお寝坊さんなのかと思ってたわ」

「うーん。だって昨日は早く寝たし。マシカいてくれたから嫌な夢も視なかったし。」

「うん。よく寝てたわね。ミーボナンに踏まれてるのに起きなかったもの」

リツコは苦笑して、自分も起きる仕度を始めた。寝ている間にベッドの上は動物だらけで、今も目を覚ました連中はマシカの髪にまとわりついたりして、色々と仕度の邪魔をしている。

まわりの天幕の薬師たちもみな早起きなようで、あちこちで出発の準備を始める賑やかな物音や声がしていた。

教えられた通り川辺に降りて顔を洗い、水場より下流に用意されたトイレ！（川の上に付き出していて、全自動水洗？ 式だ...）で用をたす。

戻ってきて、はたと悩んだ。

「ねえ？ マシカ。今日って何を着たらいい？」

「あ、そうねえ...、どうしましょうか？」

昨日買ってきた装束類の小山と、自分が持ってきた少しの着替えを並べて、天気と気温を見て、マシカの見解も聞いて、結局「地球式」の略礼装？ が良いだろうということになった。

ちょっと学校の制服みたいなカッコリしたデザインの明るい色の動きやすい夏ワンピース、Tシャツを下に重ね着して、ボタンは適当に開け放って、動きやすいように七分丈のズボンと合わせた。

靴はやっぱり履きなれたスニーカーのままにする。だって相当、歩くらしいから。

「きゃー、マシカ可愛い♪」

そう褒めてくれながら、マシカは以前から決めてあったらしい衣装にさっさと袖を通して

いる。
やっぱり昨日の仕事着？ と同じような、日本で言うと作務衣みたいな動きやすそうな簡素なデザインだけど、新品で、手織りらしい布地が上等な感じで、何だか民族調っぽい刺繍とか金の飾りとかが付いていて、ふわりとしたマントも羽織ったら、とても上品に華やかだ。

「きゃー！ マシカすてき！ とっても綺麗！！」

リツコが手放して誉めると、うふんと得意そうに笑った。

「そうでしょう？ この布を織るのは苦労したのよ。... リツコ、髪型はお揃いにしましょうよ！」

身支度が終わると、マシカは昨日の昼にやったように、ちょっと気分を改めるようなしぐさをして、息を整えてから、リツコの頬に手を添えて、額を当てて、唱えた。

「...ま〜りえった！ れっと、せっと、...えっか、ろう！」

(あれ？ 昨日と少し違う...) とリツコが思う間もなく、

((ことばよ、通じよ！ ...日暮れまで！ もつように！))

...という意味が、頭のなかに字幕が映るような感じで、急に流れ込んできたのだった...

4 - 1. リツコ、行列に参加する。

<http://85358.diarynote.jp/201808251707334319/>

4 - 1. リツコ、行列に参加する。

ちょうどその頃に朝日がしっかり差し込んできた。からりと晴れた上天気だ。「朝ごはん出来てるよー、早く食べちまっとくれ！」と、食堂？ の係の人から声がかかったので大急ぎで出かけて行った。

「おはよう！」とか「よく眠れた？」とか色々声をかけてくれる年上の薬師の人たちに、リツコは日本語と手振り身振りで挨拶を返ししながら、食堂や集会室として使われているらしい大天幕に行って、色々な野菜と豆とか干物？ とかがどっさり入った温かいスープをおなか一杯食べさせてもらった。

食器は各自で持参制で、昨日マシカに買ってもらった新品一式を持っていった。

また水場に行って食器を洗って、簡単に拭いて収納して、マシカはどんどんと自分の天幕の中にあつたものを大きな匣と布袋の中に詰めて行き、リツコもがんばって出来るところを手伝ってみて、最後に天幕を一緒に畳むと、うんうんと担いで何往復かして木製の頑丈そうな荷車に運び入れ、それからマシカが耳の短いロバのような小型の馬のような、四足の荷駄を連れてきて繋いで、出発の準備は完成だった。

「ごめんなさい。先に行くわねー！」

マシカが声をかけるとまわりの皆が口々に返事をして、手を振って見送ってくれた。

荷物満載の荷車を牽いた小型馬の手綱を引いて、人間二人はとことことその横を二本の足で歩く。

「これは《白の街道》というのよ。」

マシカが教えてくれる。

夕べはもう薄暗くなった中を星を見上げながら歩いて来たので気がつかなかったが、歩きやすいよう白い石畳できちんと舗装された、けっこう幅の広い道だ。

「あ、いたいた、鋭！ 雄輝！」

「マシカ、おはよう！」

「似合うぜ。綺麗だな！」

街道から街中を通して、昨日の皇宮前の広場に入ってすぐのところに、鋭と雄輝と他にもたくさんの、重臣？ ぼい人たちがいた。

みんなきちんとしたおしゃれというか、正装？ ぼい服装で、ぱりっと格好良く整えている。

初めて会う人たちもみんなマシカとリツコの女の子二人に対してきちんとした挨拶をしてくれるので、リツコも一生懸命「おはようございます！」と日本語で言って頭を下げた。

「リツコ、おはよう。可愛いね！」

「おー、地球式の服にしたんだ？」

鋭と雄輝がお世辞でもなく本気で誉めてくれたので、リツコは照れて、えへへと笑った。「どうかしら？ 一応こっち式の礼服もちゃんと用意はしたんだけど。地球からの御客人が諸侯会議に参加するってことは、皆にセンデン？ したほうが良いのよね？」

「うんそうなんだ。これだと一目見て地球人で判るね。さすが！ ぼくじゃ思いつかなかったよ。やっぱり女の人に任せてよかった。」

「あら... 褒めても何も出ないわよ？」

鋭に褒められてマシカが照れて頬を赤くしたので、リツコはちょっとあれっと思った。それから少し話しあいがあって、せっかくだからと、リツコは目立つように、荷馬車ではなく鋭の馬の前に乗せてもらうことになった。荷馬車は雄輝の部下の人が列の後方から連れてきてくれることになる。

「じゃ、私はマブイラに騎せてもらって行くことにするわ」

そう言ってマシカが鋭にリツコを預けてどこかから連れてきたのは... なんと！

大きな枝角を掲げた、ものすごく立派な銀灰色の鹿だった。

「..... マシカが鹿に乗る.....」 ついつい小声でこそっと言ってしまうと、

「ね、やっぱりちょっと笑っちゃうよね？」 鋭がこそっと相槌を打った。

それからどんどん広場に人が増えてきて、中央に列をなした着飾った旅装束の人たちと、周囲に並んだ見送りらしい服装の人たちで、ぎっしりと隙間もないくらいになった。(昨日の山のような荷馬車や荷車は、後方の脇に寄せられていた。)

「... 刻限！」 「まもなく！」 「刻限！」

これ以上はもう人が入れない... という頃、ドンドンと威勢よく大鐘と太鼓が打ち鳴らされた。

居並んだ人たちが、ざっと威儀を正す。

「みな、御苦労！」

例のおっかない皇女サマが、昨日マシカが世話をしていた特別に大きく立派な黒馬にまたがって、みごとに華麗な正装で、広場の中央の人並みを分けて堂々と進んできた。

「少し長い旅になりますが、みな無事であちらへ着くように！ 留守の者たち、不安もあろうが、必ず和平を為して来る。しっかり頼みます！」

「道中、御無事で！」

留守役の代表らしい身分の高そうな衣装の年輩の女の人が門の脇から進み出て来て、

深々とした礼をとった。

みな、唱和する。

「道中、御無事で！」

「...出発！」

雄輝が、皇女の後ろ脇にみごとな金鹿毛の馬を並べて号令した。

「出発！」「出発！」

伝令が次々と声を並べていく。

「行くよ？ 笑って！」

白い優雅な馬にまたがり、鞍の前にリツコを乗せて、鋭は皇女サマの後ろ、雄輝と並ぶ位置に、するりと当たり前のように並んだ。

...つまり、リツコの位置は、一国の代表として旅に出る皇女サマの、すぐ、真後ろ。と
いうことで.....

(きゃーーーーーっ！ 嘘っ！ 聞いてなーーーーーいッ！)

心の中で絶叫しながら、リツコはとにかく、必死で御愛想笑いをして、皇女サマと同じように、笑顔で出発の行列を、やりとげた....

4 - 2. リツコ、センデンされる。

<http://85358.diarynote.jp/201808251917305969/>

4 - 2. リツコ、センデンされる。

後から思いかえしても、つくづく、前から二番目なんていう身の程知らずの大それたポジションに強制参加じゃなくて、沿道の観客でいたかった...というのが、リツコの素直な感想だった。

豊かな碧緑の巻き毛を風になびかせ朱紅に金糸の刺繍飾りのあでやかな衣装をまとい美しい黒毛の戦馬にまたがった、物語の主役たる風格ばつぐんの、文句なしの華やかさを誇る美人皇女殿下を先頭に。

右後ろに並ぶ金色の馬にまたがるのは背中に翼ある戦士装束の雄輝。
左後ろに並ぶのが白銀の馬にまたがる優しそうな絶世の美青年の鋭。
二人の後ろに堂々たる角をそびえ立たせた大鹿に乗った美女マシカ。

(鋭の鞍にちょこんと載ってるあたしはこのさい余計だ。とリツコは思った)

沿道に居並ぶ見送りの人々は、歓呼の叫びと噂話で、ぶんぶん唸るハチの巣のような有り様だった。

『見ろよあの先頭のかたがたが、戦を終わらせてくれた四軍神だ!』

『なんてお美しいのかしら皇女様!』

『きゃーーーーーっ! リレク(鋭)様、お凛々しいッ!』

『ちょっと何よ、あのチビ?』

『泥球界(地球)からのお客人らしいよ。何でもさる有力な部族の長の縁者とか』

『泥球界の? 王族なの?』

『そうじゃないかい？』

(ええええっ!) とリツコは思った。

いくらちょっとだけオシャレめワンピースを着てみたからって、実は通販のしかもバーゲンで買った安物だ。『さる有力な部族』ってなに! たしかに大叔母様は朝日ヶ森の学長だけど、それって別に王家でもなんでもナイわよ!??

むしろこの国の言葉が喋れなくて良かった。と、つくづく思った。話が出来たら絶対に、必死になって無責任な噂話を否定しまわってしまったら...から...

「...鋭ッ? なんかあの人たち、すごい大誤解してない?」

思わず小声で叫んでしまったリツコの百面相をにやりと笑い飛ばして、行列の間中、鋭はとにかく、「笑って! ほら笑って! 手を振って!」とだけ主張して、自分自身も率先してまわりじゅうに愛想をふりまき、観るひとすべてをその超絶笑顔うっとりさせていた...

そんなこんなで街から出るだけでもしばらく時間がかかり。

「ねえ鋭。もう笑うのやめていい?」

ようやく道沿いに見送りの人が少なくなってきて、やっと聞けたころには、リツコの顔はばりばりに強張っていた...

それから歩いて来た時よりゆっくりぐらいの速度で《白の街道》を西の方角に戻ると、途中の河原でキャンプしていた薬師たちの一行の、半分ぐらいが荷馬車隊を率いて皇女の行列の後ろに入る。

あとの半分ぐらいは、列には入らず解散する? らしい。

夕暮れ前にその日の野営地らしい場所に着き、行列の後ろの荷馬車隊ががらごと追いついてきて、食糧や天幕を降ろし火を起こして大人数分の食事の仕度を始める。

荷を降ろすと、そのまま手を振って別れて元の方角へ戻り始める人たちも数十人

あった。

「リツコ、今日もあたしと一緒に天幕だけど、いいわよね？」

あいかわらず小鳥とかの群れに取り囲まれながら大鹿から降りてやってきたマシカにそう言った頃、ちょうどリツコの「聞いた話が解る魔法」はとけてしまったのだった…。

(鹿は勝手に歩いて行って、そのへんの草で食事を始めた)

そんな風にして、この旅は始まった。

5 - 1. リツコ、記録する。

<http://85358.diarynote.jp/201808252044381803/>

5. リツコ、西へ旅する。

5 - 1. リツコ、記録する。

そこからの旅の日々は最高だった！

夜はマシカと一緒に天幕でぐっすり眠って、朝は鳥たちや動物たちの騒ぐ声で起こされ、身支度を済ませると《言葉の魔法》をかけてもらって、皆と挨拶をしながら大天幕でご飯を食べさせてもらい、えいやっと自分たちの天幕を畳んで荷物を荷馬車に乗せて、準備の出来た者から順に出発して、歩いたり荷馬車に便乗して昼寝したり馬の乗り方の練習をさせてもらったり、色々しながらとにかく西へ向かって白の街道を進み続けて、陽が傾いてきた頃に次の宿営地に辿り着く。

(お昼ご飯は各自で勝手に、停まって休憩したり荷馬車で進みながらだったりして、適当に食べた)。

半日先行して街道沿いの警備がてら宿営地で食事の支度をして待っていている雄輝たちの隊とご飯は一緒に食べて (なぜかその夕飯の宴の間だけ皇女サマの機嫌がちょっとだけ良くなる？ のを、リツコは興味津々で観察していた)

その警備隊が日暮れ前にまた出発してしまうのでそれを見送って、残った面子は毎晩のように食後は飲んだり歌ったり踊ったり楽しい宴会になるのでリツコも途中まではつきあって、《言葉の魔法》が切れる頃にマシカと一緒に天幕に引き上げて、あとは眠くなるまでお喋りして、色々なことを教えたり習ったりしあった。

ただしマシカは旅団の《筆頭薬師》という役職だったらしいので、合間合間に朝から晩まで行列のすべての動物の健康状態をチェックしたり、具合が悪くなった人に薬草の調合をしたりしていた。時には沿道の寒村の人から往診の依頼があったりして、夜中でも大鹿にまたがって出かけたりするので、時々リツコは取り残された。

そんな時は鋭が自分の天幕に呼んでくれて、淋しくないように気を使ってくれた。

ただし、しばしば皇女サマやその側近の人達の、気難しい話し合いに巻き込まれてしまったりするのが、厄介だったけど...

鋭は旅団の経理責任者？ らしくて、人の出入りや体調に気を配っていて、しばしばマシカと一緒に怪我人や病人の治療にも当たってた。

リツコはとにかく周りの人たちの仕事を出来る範囲で手伝いながら、暇さえあればマシカと鋭と (可能ならば雄輝と皇女様も！) 質問攻めにしていた。

そんな日々のなかで、やっと自分の置かれた状況が判ってきたので、とにかく戻ったら
大叔母様に報告しようと、大学ノートの山に手書きでガリガリ書いて記録を残した。

それはこんな風だった。

【この世界のこと。】

名前はダレムアス。

意味は《大地の国》。または《大地平界》。

昔々、女神マライアヌ様と仲間の神様たちが創った。

神様たちは沢山いたけど、戦争して滅んじゃった？ らしい。

今は人間がいちばん多くて、他の生き物もたくさんいる。

同じ頃に別の神様たちが創った別の世界《ボルドム》と、

最近まで戦争してた。

戦争はガンバッテ闘ってなんとか勝ったけど、

まだ色々と問題が残っている？ らしい。

【ショコウ会議のこと】（※マシカは字が判らない。後で鋭に聞くこと！）

戦争してたボルドムと話し合うのかと思ったら、そうじゃないみたい。

ダレムアスの王さま？ 皇帝さま？

（皇女サマのお父さんとお母さん）が、

前の戦争で殺されちゃって、今いないので、

誰が後を継ぐかとか、そういう話し合いが必要？

（なんで皇女サマが継がないの？ と聞いてみたら、なんだか難しかった。）

あたしがなんでここに呼ばれたか？ というと、

ボルドムと戦争して終わって弱っているダレムアス世界に、

今度は地球人が攻め込んでこないか？ という心配があって、

「攻め込んで来ないように万全の手は打ってるから、安心してほしい」というハッター？ をかませることが、会議のコウショウのために必要。
(よくわかんない。)

【この世界と地球世界のこと】

地球のことは《泥の球》って呼ばれてる。
丸くて宇宙に浮かんでる。っていうのが「信じられない！」らしい。

この《大地世界》はとにかく平らなんだって。
そして果てとか終わりが無い。(と信じられている。) なんだって。

戻ったら、社会科の教科書の歴史の図版と見比べたいな。

それで神話では地球と大地世界は「弟と姉」の関係なんだって。

昔から行き来はあったけど、
時差の関係？ で地球では「大昔のこと」になっちゃって、
記録が失われている、らしい。

浦島太郎とかコチュウテンとか伝説があるでしょ？
と鋭が言った。
コチュウテンて何？

【魔法のこと】

女神さまの子孫とかが特に使える。
鋭は地球人だから全く使えない。(と言ってるけど、なんか怪しい?)

皇女サマは特別チカラが強い。マシカは例外的に？ マホウが巧い。

【翼とかのこと】

雄輝が地球の「翼」家の人間だったり。
昔から「地球に移住した人たちの子孫」とか、その逆とかが居たらしい。

【朝日ヶ森のこと】

あの学園にいる「妖怪とか系」の人たちって、つまり、そーいうこと???

そこまで書いて書きかけのまま寝てしまったリツコの肩に毛布をかけながら、
『諸侯会議』だと鋭は漢字を書き足した。

5 - 2. リツコ、観察する。

<http://85358.diarynote.jp/201808252146433109/>

5 - 2. リツコ、観察する。

それにしても皇女サマはいつ見ても機嫌が悪かった。

せっかく超のつく美人なのに、眉間にシワを寄せては誰かれなく睨みつけ、ちょっとしたことで色白な肌が真っ赤になるくらい怒ったり怒鳴ったり。いつもイライラしていて、「ヒステリー」としか言いようがないくらい。

こんなんではいくら戦争が上手で敵に勝っても、平和になったら国民は誰もついて来ないんじゃないかしら。だから後継者問題でモメてるのかしら？ とリツコは疑ってみたが、その割には鋭やマシカたちも含めて、部下たちからの信頼というか人望は、ものすごく厚いらしい。

(今日もまた機嫌が悪いー！ という愚痴は毎日のように飛び交っていたが。)

楽しい旅ぐらしの毎日の中でも、いつでも皇女サマの天幕まわりの侍従の人たちだけは、戦々恐々として、どよんと昏い空気が漂っていた。

のだが...

ある日。

よく晴れた西の空に鳥や雲とは違う影がくっきりと視え始めた。

『...龍だ！ フェルラダル様も居らっしゃる！』

誰かが叫んだ。

『皇女殿下にご報告を！』

『聞こえたわ！』

すごい勢いで皇女サマがすっ飛んできた。あれあれ？ とリツコは見守った。

空の影は一人は自分で飛んでる？ らしい人間で、もう一つは、出発式の日に挨拶して西の空へ消えていった、伝令役の？ あの白いほうの龍のように思える。

『お兄様！ 伯父様！』

びっくりしたことに大地世界の皇女殿下サマはいきなりふわりっと空に浮かんだ。

そのまま文字通り「飛ぶように」すっとなでいって、空の真ん中で『お兄様』と『伯父様』を抱きしめる。

『遅くなって済まなかった。出立式の日までには戻りたかったのだが。』

年齢からするとこちらが『伯父様』なのだろう凄い美形の年輩の男性が言いながら地面に降りてきた。

『フェルラダル様ッ！』

もう一人、ものすごい勢いですっ飛んできたのは... マシカだ。

『御無事で！』

飛びつくように抱きついて挨拶している。

あれあれ... とリツコはすぐに解った。マシカが言ってた『一番好きな人』って... この人だ？

(たしかにちょっと... 鋭に雰囲気とか見た目も... 似てるかなー?)

『... マシカ... わたしも居るんだけどな...』

『... あらごめんなさいミヤセル様？ 御無事で何よりですわ？』

... 皇女サマから『お兄様』と呼ばれたということは、その人の名前はマリシアル皇子って言わなかったっけ... ?

リツコは聞きかじりの話とつなぎ合わせながら、興味津々に目を点にしながらなりゆきを見守った。

「あ〜、また話が賑やかになった...」

苦笑しながら、いつのまにか鋭がリツコの隣に立っていた。

「... さて、吉と出るか、凶と出るか...」

「吉かな？」

『兄上』と額を突き合わせるようにして何か話をしている皇女サマを鋭は静かに見守って、やがて笑った。

「... 安心して、リツコ。これでマーシャの機嫌は直ったみたいだから...」

話のとおり、その日の夕飯時に雄輝たちの先行班と合流した時の皇女サマは、これが昨日までのあの女性とほんとに同一人物？ と目を疑うくらい、にこにこして、上機嫌で、頬なんかピンク色で、食欲も旺盛だった。

側近の人たちがみんな後ろでそこそと情報のやりとりをしていたが...

鋭はあまり気にしていなかった。それから食後のお茶を呑み終わった皇女サマたち主賓席のところへリツコを連れて行った。

『お久しぶりです。御無事で何よりでした。フェルラダル様、マリシアル様。』

こちらが地球から来たリツコです。最近はマリーツ（地栗鼠）という愛称で呼ばれています。

... で、マーシャ？ 機嫌が直ったところで... いい加減、この子、喋れないと不便なんだけどな？ 会議で挨拶だってするんだし... ?』

『..... わあかったわよ！ もうッ！』

皇女サマはなんとも可愛らしく、(リツコは目を点にした)

ぷくっとふくれてすねた。

『ちょっと待っててリツコ。今まで八つ当たりしてたことは謝るわ。それで...』

すらりと立ち上がってこちらへ来る。リツコは思わずびびって逃げかけた。

その肩を遠慮なくがしっと捕まえて、

「だから謝るわ、って言ってるでしょう？」

高飛車に言い切ると、それからすうっと息を吸い、大地を抱えあげるような独特の舞のようなしぐさをして、謡うように唱えた。

『...マレッタ！ れとけいえる、せるかまろうでい、いええん！』

それから急に、リツコがマシカのマホウで相手の言葉を理解できるようになっていたのと同じように、リツコが日本語でふつうに喋っている言葉を、聞いたダレムアス人はみんな意味が理解できるようになった。しかも半日とかの時間限定でもなかった。

「ありがとう！」と後からお礼を言いに行ったリツコに、

「だから、遅くなって悪かったわよッ！」と皇女サマはもう一度ふくれた。

6-1. リツコ、囚われてはいないお姫様にあう。（2018年8月26日）（）

<http://85358.diarynote.jp/201808261445484961/>

6-1. リツコ、囚われてはいないお姫様にあう。

なにしろリツコは元々かなりのおしゃべりの質問魔で、好奇心旺盛だ。今までは人が勝手に言うてくることを一生懸命聞きとるだけで、こちらから質問できる相手は主にマシカと鋭だけだった（日本語が通じるもう二人のうち雄輝は周辺警備の任務に就いていたので基本不在だったし、そのせいで？ なのか、皇女サマは恐かった！）が、今度からは、自分が知りたいことについて、積極的に聞いて回れる！

大喜びで鉛筆と鉛筆削りと沢山のノートを持って、キャラバン中を前から後ろまで、そして朝から晩まで、雑用があればちゃんと手伝いもしながらだが、すべての人を質問攻めにして歩く姿が、旅の名物のひとつになった。

行列の順番は日によってかなり変化した。特にマシカたち薬師の一行はその日によって、病気や怪我の人間や獣がいれば看護を先にして半日遅れで追いかけてたりもするし、先発して地元の村の広場に乗り入れて出張往診大会？ 的なものを開催したりもしていた。

が、だいたい鋭たちヨーリア学派やその他の学者さんや役人さん？ たちが普段から整理整頓が良くて身支度が簡単なせいとか朝一番に出発することが多く、ほぼ同時に旅慣れていて気の短い皇女サマと侍女や侍従たちの一行が続き、続いて軍臣たちと重臣たちとその家臣と侍従たちが続き、それから何故か家柄のいいお嬢様たちらしい美人の集団が、いつもきゃあきゃああと賑やかに遅れがちに続き、その侍女たちと賑やかな掛け合いをしながら商人組合と職人組合の代表者たちや手伝いの見習いさんたちが続き、そのまた最後から列の後ろをゆっくりついてくるのが、その土地ごとに一日二日交代ぐらいで参加してくる応援の人たちが多くいる荷駄隊だった。

さて。

なぜこの旅に参加しているのかが不思議で尋ねると皆一様に、『さて、何故でしょうね？』と含み笑いをして答えをはぐらかす深窓の令嬢風な着飾った美姫たちの車列の前、重臣たちの車列との間に。

いつもひっそりとしてくる、謎の馬車隊があるので、リツコはとても気になっていた。他の大地世界の学者や家臣や美女たちからは、なんだか距離を置かれている。

リツコがそこへ話しかけに行こうとすると、なんだかやんわりと引きとめられたりもする。

「ねえ鋭？ あの馬車の中の人に話しかけてはダメなのかしら？」

思い切って、リツコの行動の管理責任者、ということになっているらしい鋭に質問してみる。

「うーん。悪いってことは何もないよ？ 彼女も退屈しているだろうし...ただ。」

「ただ、なに？」

「ボルドムのね。敵国の御姫様なんで...見た目がちょっと。こっちの人たちには怖いらしくって。」

「...見た目ー？ だってこっちの人って普通に、毛皮だったり四足だったり羽根が生えたり...」

「まあ、ぼくら地球人からすると、区別が判らないんだけどねー。」

苦笑して、うんうんとうなずきながら、鋭がべつに話しかけに行っても誰からも怒られはしないと保証してくれたので、リツコは早速、昼ごはんが終わった頃合いらしくてゆっくり動き始めたばかりの馬車に、正面から訪問してみた。

「こんにちわー！」

他の美女たちの馬車群とは違って、この馬車隊だけはキャラバン全体の護衛とは別に、皇女サマ直属隊の兵士たちが交代で護衛についている。侍女や従僕もみんな大地世界の人たちだけで、ボルドム人なのは客分の姫様ひとりだけ？ らしい。

取次を頼むと、

【だれか？】

それまで聞いたことのないシュウっとした音の多い言葉で、馬車の奥から低めの女のひとの音がきこえた。

「リツコっていいますー！ あのね、退屈じゃないかと思って、遊びに来たんですけど！」

【おや？ あの地球人の子どもか？】

声の感じはむしろ嬉しそうだった。

【マーライシャにでも言われたか？ よければ上がっておいで。】

リツコはむろん大喜びで豪華な箱馬車に上がり込む。

どのくらい豪華かというと皇女サマのより手が込んだ細工で値段が高そうだ。

お姫さまはそれまでは脱いでいたらしい大きな布をすりとかぶってリツコから視えないように姿を隠したところだった。

「えーと...見たらまずいのかしら？」

リツコはちょっと遠慮しながら聞いてみる。

「あだしボルドムの人ってまだ見たことがなくて~」

【...大地世界人と同じで、焔洞界の者の姿も、千差万別なれど。】

すりと布がはずされた。

【怖くなければ見るが良い。】

七色に光る鱗に覆われて、縦長に切れた大きな瞳の、なんというか...巨大トカゲに似た感じの、だいたい人型で黒髪のお姫様だ。良の手の爪が長くてとがっていて、何て言うか...キラキラしたネイルアートがしてある。

怖いと言えばその眼と爪は恐いかもだったが、同行者の中には横長に切れた山羊目の人だっているし、とんでもない爪飾りの人は、地球には多い。

「……………キラキラしてて、きれいなウロコね！」

すなおにリツコは褒めた。

こちらの世界での唯一の友人であるマーライシャの機嫌が悪くて話し相手に餓えていた敵国からの亡命姫さまは、すっかりリツコが気に入ってしまって、それから長い旅の間、しょっちゅう一緒におしゃべりをした。

6 - 2. リツコ、小鬼を救う。 (2018年8月26日)

<http://85358.diarynote.jp/201808261541145181/>

6 - 2. リツコ、小鬼を救う。

長くゆるやかな下り坂が続いた山岳地帯を抜けて大平原の太湖を何艘かの大きな船に分かれて渡ると、対岸の都城には諸侯会議の開催地である《西皇国》からの使者と護衛隊が待っていた。

どうも雰囲気は剣呑だ。和平交渉とか友好親善とか、そういう印象ではない。

リツコが挨拶するどきろりと睨まれたし、鋭も雄輝も『...地球人が!』とか、陰口をたたかれている。

「...俺ここで帰ろっかなー。」

陰険な扱いに閉口したらしい雄輝が歓迎の宴から息抜きに逃げて来て半分本気でぼやく。

「おいおい。」鋭が顔をしかめる。

「まあ約束通り、沙漠までは送るけどな。」

「とにかく逆に彼らにボルドム公女を暗殺されたら最悪なわけだから...」

(.....暗殺?)

目を丸くしてリツコが聞いていたのに気がついた鋭は慌てたように口をつぐんだ。

「...何でもないよ。心配ないから...」

「...でも一応、いつも鋭か俺かマシカのそばに居たほうがいいなー。」

「...うん解った。」

リツコは慎重にうなづいた。

天幕に戻ってからマシカに聞いてみる。

「あたしもよくは知らないのよ。まあ元々、西皇家のかたがたは女神の血が薄い白皇家を見下しているそうだし、そもそも西皇子の誰かがマーシャと結婚するはずだったって話らしいし。」

「え、そうなの?」

「本人は小さかった時に、親同士が話し合ってたんですって」

「えー、そんなの無効!」

「でも戦争も終わったしそろそろ婚約の話を、とか今になって蒸し返されたらしいわ」

「でも皇女サマの好きな人って...」

「...どうもやっぱり、雄輝が本命みたいよねー?」

最近もう誰の目にも明らかなので、実は婚約者がいたとか今頃になって急に言われたら、そりゃもうアノ不機嫌の謎にも説明がつく。

「...でも雄輝はたぶん、そうじゃないよねー??」

とても気の毒な話で、さらに皇女サマは片想いというかフラれているらしい。

「それにしても会ったこともない人と結婚話って、ふつうダレムアスでは言わないし。...地球ではよくある話なんですって?」

「うーん...昔はね? たぶん。」

そんな話をした後、歓迎の宴には参加せずにひっそりと籠っているボルドム皇女の馬車へ、状況説明係として行く。

その途中で、馬車のまわりで騒動が起こっているのに気がついた。

『こいつ! やはりボルドムの間者か!』

『えッ!...待って違うっ.....誰かー! 鋭ッ! 雄輝ッ!!』

小鬼が公女の馬車にしのびこもうといていた。

7. リツコ、まきこまれる。(2018年8月26日)

<http://85358.diarynote.jp/201808261627285233/>

7. リツコ、まきこまれる。

驚くほどあっという間に、鋭と雄輝と、率いられた数人の部下たちが馬を駆っててやってきた。

『キサマやはり裏切者！ 皇女殿下をたぶらかし、地球人とボルドムと結託して大地世界を裏切るつもりであろう！』

決めつけられて雄輝はげんなりする。

「ち～が～う～って。おれは文字通り背中のハネも自由に伸ばせない地球に戻るつもりはもうないの！ こっちに帰化して骨をうずめるつもりなんだよ！...でもマーシャを嫁にもらう気はないけどな！」

「雄輝いまそれ言ってもこいつらには通じない！」

「あいつはおれにとっちゃ妹なんだよ！ あくまでっ！」

知ったことかという感じで敵が白刃を抜いて斬りかかり、金属音が鳴り響き、敵味方ともに剣を抜いて戦闘が始まった。

「マシカ、リツコを頼む！」

反対側から来たマシカのほうにリツコを押しやって、鋭と部下の一人が公女の馬車の両脇の護衛につく。

他の部下たちは雄輝にならって敵の群れに正面から突っ込んで行った。

『マルレエッタ！ ポグン！ エ！ カ！』

どうやら向こうの皇族関係者らしい人の何かの呪文が響く。

激しい衝撃音がして何人かが馬ごと吹っ飛んだ。

見たかんじ味方のほうが苦戦を強いられている？

リツコはマシカの背中にかばわれながら焦った。

『四軍神』の一人に数えられているマシカは短い弓を構えていて、たぶん戦列に加われれば、もっと力になれるはず。

...リツコがいるせいで見方が一人減ってるんだ...

足手まといになっていることに気づいて、リツコは激しく落ち込んだ。

「...あたしを公女の馬車に入れて！ そうしたらマシカも戦えるでしょう？」

【...良い案だが、少し無駄じゃな】

そう言って、公女自身が中から箱馬車の扉を開いた。

【仔細が判らぬが、我も闘おう... カ！】

彼女が気合をこめて念じると同時に、その右腕に巨大な武器が現われていた。

そんな場合じゃない、と思いながらもリツコは目を丸くする。

【誰ぞ！ 我の敵手を務めよ！】

箱馬車や天幕の中ではいつもずっと膝を抱えるようにうずくまっていたけれども...外に出て背すじを伸ばすと、公女はとても長身なのだった...

そう。馬に乗った大地世界人と、対等に、渡りあえるほどに...

『まぁびっくり。』

リツコと同じく、知らなかったらしいマシカが呟いた。

乱戦。

敵の動きをおちついて観察すると、明らかに「殺すつもり」で襲われているのはボルドム公女と地球人マダロ・シャサの二人だけで、大地世界人には手加減している。

とはいえ敵のほうが魔力がある分、絶対に優勢だった。

しかも...

「雄輝！ 危ない！」

敵の一人が手近の樹に登り、短矢に何かを塗りつけた上で、雄輝に向かって弓を構えた。

雄輝は敵隊長と激しく斬りあっていて、リツコの声には気がつかない。

リツコはウェストバッグからパチンコを取り出した...

枝が邪魔で、狙撃兵を狙えない。

後ろの樹上に身軽に駆けあがった。

銀玉をこめて狙う。撃つ！

『キサマぁッ！』

戦闘員と見なして、敵が下から突き上げてきた。

『リツコ！』

斬られて真っ逆さまに墜ちるリツコを見てマシカと鋭が悲鳴を上げる。

『...そこまで！』

マーライシャの氣勢の籠った制止の声が響いた。

『双方、剣を引きなさい！ 何の騒ぎなの、これはッ！』

『...リツコ！ リツコ！ ...大変！』

...マシカの悲鳴を聴きながら、リツコは、気を失った...

8 - 1. リツコ、魘される。

<http://85358.diarynote.jp/201808261839172015/>

8. リツコ、夢を視る。

8 - 1. リツコ、魘される。

リツコは夢を見ていた。またあの夢だ。

お母さんとお父さんが捕まりかけている。

お姉ちゃんが泣いている。腕をガッチリ掴まれていて逃げられない。

「逃げて！」

リツコが叫ぶと、お母さんとお父さんが首をふった。

「カノコを置いては行けない…。おまえは逃げなさい！」

「逃げて！」

…あの時、リツコは何も出来なかった。何も…

うなされているリツコの額の汗を拭いてくれているのは、マシカだ。

ぼんやりと目を覚ますたびに、それは他の薬師の人だったり鋭だったりした。

リツコのスリングショットの弾は当たった。みごとに命中した。

狙っていた奴はギャッと悲鳴をあげて毒矢の弓を取り落とした。

それは、覚えている…

「逃げて！」

…夢の中で、リツコはスリングショットを構えた。

もちろん、あの時は遠すぎた。弾もショットも持ってはいなかった。

でも、もし…

ピシッと、スリングショットを構えて放つ。

ギャッと悲鳴を上げて、緑の制服のやつらが次々と倒れる。

「逃げて！」と、また叫ぶ。

お父さんとお母さんと御姉ちゃんが声をそろえて、「ありがとうリツコ！」

一目散に、逃げ出す…

逃げて、逃げて、無事で…

…もう、会えなくてもガマンするから、生きのびて…！

「...リツコ！...リツコ！」

うなされている。夢をみている。

そうだった。

下から短剣を投げられて...左胸に真っ直ぐ刺さりそうになったのを危うく避けて、バランスを崩して...

墜ちる途中で木の枝に後頭部を打った。それから真っ逆さまに、地面に落ちた...

「リツコ！」

胸の切り傷と全身の打撲で、リツコは何日も、熱を出して眠っていたらしい。

はっと目が覚めると、枕元で心配そうにのぞき込んでいたのは...

ずっとついて居てくれると思っていたマシカでも鋭でも薬師の人でもなくて...

驚いたことに、皇女サマ、その人だった。

「..... あぁ良かった！ 起きたわね！」

「...あたし... 死にかけてた...??」

かすれた声で、ぼんやりきいてみる。

「危ないところだったわね... もう大丈夫よ。鋭たち交代で、ずっと心配して徹夜で付き添ってたんで、もういい加減に寝かせたわよ」

半分涙目で、皇女サマが答える。

「悪かったわね？ 私で！」

ううん。とリツコはにやりと笑った。案外、この性格、可愛いかも、しれない...？

「雄輝は？」

「無事だったわ。あなたのおかげよ。猛毒でね。矢に塗ってあったの。いくら雄輝でも、あれが当たってたら、私でもマシカでも、治療をする暇もなく死んでるところだったわ。」

「そうなんだ。...あたし、役に立った...？」

「ええ！ とても！」

ずっと苦手と思っていた皇女サマが、ぎゅぎゅっとリツコの手を握ってくれた。

「彼を救ってくれてありがとう！」

「..... えへ〜。」

照れて笑うと、リツコは、再び眠った...

8 - 2. リツコ、龍にのる。

<http://85358.diarynote.jp/201808261901124456/>

8 - 2. リツコ、龍にのる。

それからまた何日か、眠ったり起きたりして、熱が下がって傷の腫れがひいたら、とたんに食欲がもりもり湧いてきたので、がつがつ食べた。

「よかった～！」

マシカがどんどんお代わりをよそってくれながら、それにしてもすごい勢いねと、ほっとした声でけらけら笑った。鋭も何度も、様子を見にきてくれた。

ようやく起き出して歩きまわれるようになったころ。

何だかんだでずいぶん行列は遅れてしまっていた。

「足ののろい連中は先に行かせたわよ！」

皇女サマがにやりと笑って言う。

「要するに白皇家の血をひく姫が誰か西皇家に嫁げばいいわけなんだから！ 私が着く前にちゃっかり皆で西の三皇子を攻略しておいてくれるといいんだけど！」

「.....あ、あの人たち、そーいう目的で...」

「むちゃくちゃ着飾ってたでしょー？ そうよ、玉の輿狙いよ！」

リツコは納得した。...なるほど、『オトナの事情』だ...

そして西皇家よりのあの使者たちははっきりろ叱責された上で、追い返されていた。

残っていたのは皇女の一番の側近の精鋭数十名ばかりで、それもリツコが死なずに済んだことを確認するのとほぼ同時に、かわるがわるで枕元に挨拶に来て、徒歩での砂漠越えに出発してしまった。

リツコの体力ではまだ歩いたり駱駝に乗っての砂漠越えは無理なので。

行程ははしょって、最後に残った一行はみんな空を飛ぶことにしたという。

また鳥人の籠で運んでもらうのかと思っていたら、なんと！ 先日みたあの龍が背中に載せてくれた。

飛仙族と呼ばれるフェルラダル様と手をつないでもらってマシカはそのまま宙に浮かんで、飛んでいくという。それを悔しそうな横目で見やって、兄上マリシアル様は皇女サマと手をつないで飛んでいった。

鋭と一緒に龍に乗ってくれて、リツコの後ろでしっかり背中をささえてくれる。

「きゃーーー！ 最高！」

はるか眼下の広大な砂漠と岩山とオアシスと、霞む広大な地平線（丸くない）を眺め渡して叫んでいるうちに、わずか半日ほどで、半月前に出た一行の後に追いついた...

9. リツコ、会議にでる

<http://85358.diarynote.jp/201808261936285813/>

9. リツコ、会議にでる

砂漠のほとりの大きな隊商都市で先行していた側近の人たちと待っていた荷駄隊と合流し、衣装と体調を整えて、そこから数日の駱駝行で、西皇家の都についた。

開放的で慌ただしく雑多な民族で賑わっていた白の仮皇宮とは何もかも違って、数千年？の時代を経た石造りの皇都は重厚で、壮麗で、格式高くて、絶対的な身分の差。というものが大きいのしかかっているようだった。

宮殿に上がる前に市場の庶民の街で見物とか観光とかしたい。と仰せの皇女サマの『わがまま』は、『とんでもございません！』と新たに迎えに来た使者から厳として却下にされた。

まあとにかく、期日通りに間に合って、東の白皇家の代表者たちは、西の皇家に挨拶する。

その儀式にはリツコや鋭やマシカたち『平民と余所者』は参加が許されなかった。代わりに白皇家の旅のあいだは居心地悪そうだったボルドム公女は《公主》と呼ばれてマーシャと同格に厚遇された。なんでって、「ボルドム世界の創造主たる男神グアヒィギルの血を濃く引く特別な一族」の出だから。だそうだ。

そのほか、各方面から大地世界各国諸勢力の代表者たちが続々と集まって...

いよいよ、諸侯会議が開催された。

リツコは初日と最後の日に、『地球から来た地球人代表』ということで一言ずつ挨拶をするのが役割だった。

また一生懸命マシカと相談して、今度は初日はユカタを着て出た。

可愛いと好評だった。

大叔母様から出発前に渡されていたあの挨拶状を声に出して呼んだ。

朝日ヶ森学園というのは国とか民族ではなく、こちらの世界のヨーリア学派と同じように、有力な学者の集団だ。ということにしておいた。

それから会議はたくさんの分科会に分かれて、あちこちで紛糾したり白熱したり和合したり満場一致で拍手喝采のあと大宴会になったりしていた。

リツコとマシカは終りの日まで暇になった。市場に繰り出して買い物に明け暮れた。

皇女サマや鋭たちは、ものすごく忙しそうだった。

10-1. リツコ、よばれる。

<http://85358.diarynote.jp/201808262000216747/>

10. リツコ、地球に帰る。

10-1. リツコ、よばれる。

明日は会議の最後の挨拶だというその晩、リツコは慌ただしくマーシャの部屋へ呼ばれた。

鋭もマシカも皇子様たちも公女も、なぜかみんないた。

「なあに？」

「リツコあなた案外有能だから。このままこちらに居てもいいのよ？」

いきなり不機嫌丸出しの声で皇女サマがぼそっとのたまう。

「へ？」目を点にすると、鋭が言い出しにくそうに苦笑しながら補足した。

「地球の欧米側に出られる通路があったらそちらに。って清瀬律子さんから頼まれてたのは、前に話したよね？」

「あ、うん。聞いた。」

「西のヨーリア学派とも連絡とってて。どうやら確実に通れる通路が、今夜だけ、開く。」

「今夜!？」

「...急だから...みんなびっくりしててさ。」

「うん。」リツコもびっくりして、うなづく。

「それを逃すとしばらく地球に帰れる通路は確定できてない。へたすると数年先かな？」

「...そうなんだ...」

「それで、今夜、地球に帰るか、数年先までこっちに居てくれるかな?...って」

「.....そうなんだ.....」

「リツコきみこっちで楽しそうだったし。」

「もうしばらく居てくれたら、あたしは嬉しい。けど...」

「言わないのは卑怯でしょ!」

また唐突に皇女サマがぶすくれた声でつぎ足す。

「...実は、リツコのお父さんとお母さんと、連絡が、取れたよ。」

「ほんとッ!？」

「うん。今夜、行くなら、迎えに来てくれるって...」

鋭の眼から涙が溢れるのを、リツコは二重にびっくりして見ている。

マシカも泣き出してしまった。
リツコも泣き出した。でも、言った。

「うん。…急だけど… あたし、帰るよ！」

もう一回、声に出して、自分に確認してみた。

「地球人だから… 地球に帰る。」

「あたしね。ずっと…自分のこと… 天才でも魔法使いでもないし…
役に立たなくて、残念だな！ って思ってた。

でもね、こっち来て、ほんとの天才の鋭とか、魔法が使える王女様のマーシャとか、見たけど…

…べつに天才じゃなくてもね。凡才でも、マホウも使えなくても…

…あたし、結構、役に立つよね?！」

「ええ。役に立ってくれたわよ。」皇女サマが悔しそうに涙をにじませて言う。

「だから… こっちの世界はこれからもう、平和になるから…」

「自分の世界に帰って、がんばれることを、やってみる！」

「そうだね。」

雄輝がちょっとそっぽを向き、鋭がうん。とうなずいた。

10-2. リツコ、地球にかえる。 (2018年8月26日)

<http://85358.diarynote.jp/201808262021089892/>

10-2. リツコ、地球にかえる。

慌ただしく、来たときのリュックとバスケットに荷物を詰めて、来た時の服に着替える。こっちでマシカと買ったばかりの服や小物や甘いものの大半は、残念だけど諦めるしかなかった。

「リツコ... あたし本当の妹みたいだなーって、思ってたのに...！」

マシカはもう泣いて泣いて大変で、手伝いは期待できない。

やっぱりぐすぐす鼻を鳴らしながらでも、鋭はさくさくと荷造りを手伝ってくれた。

挨拶を出来る人たちには挨拶をして回って、会議の後の宴会であちこち賑やかな城のすみから、地元のヨーリア学派の人たちの案内で、そっと抜け出す。

皇女サマと公女様は宴会から抜けられない立場なので、門の中で最後のお別れをした。

二人とも眼が赤くなっていた。

短い夜の道を歩き、寺院のような場所から地下の泉水井戸に入る。

小さい祠があって、それをどけると短い洞窟があった。

『入って。』ヨーリア学派の人が言う。

『リツコ!...リツコ行かないで!』マシカがうしろからしがみつく。

『マシカ...!』リツコも涙で前が見えなくなる。

『あまり時間はない。すぐに通路はまた塞がってしまう。』

「リツコ、

「鋭、また...いつか、どこかで、会えるかな...？」

「手紙を書くよ。小さいものなら、通せる通路は確保してあるから」

「うん...」

動けない。やっぱり...行きたくない! 帰りたくない!

リツコは思った。

すると洞窟の向うから、真夜中なのに、太陽の光? らしいものが射しこんできた。

「リツコ！...リツコなの？居るの?!」

「リツコ!？」

「...お母さんッ？お父さんッ！」

...マシカが、抱き着いていた腕を、放した...

「ごめん！みんな！あたし、行くね！」

『リツコのお母さん！リツコとっても良いコでした！ありがとう！大事にしてあげてね!』

マシカが洞窟の奥に向かって叫ぶ。

「リツコ!？そこに居るのよね?!」

リツコはがんばって一歩踏み出し、それから駆けだした。

後ろを振り返る暇もなく、あっと思う間もなく、ステン！と転んで...

明るい場所に、お母さんとお父さんが、立っていた...

「リツコ！元気で！」

最後に鋭の声が聴こえて...

それっきり。

その後ついに、大地世界に戻る機会は...

なかった。

f i n.

(草稿&没原稿)

(草稿&没原稿)

(草稿&没原稿)

(1) 朝日ヶ森 (2018年6月3日)

<http://85358.diarynote.jp/201806031952559575/>

<http://85358.diarynote.jp/201806031952559575/>

2018年6月3日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201806031952559575/>

ひみつ日記

『リッコ 冒険記』～夏休み・異世界旅行～(1)

霧樹里守(きりぎ・りす)

(1) 朝日ヶ森

もちろんみなさん御存知でしょうが「朝日ヶ森」といったら「IQがとても高いスペシャルな天才児が集まる」ことでこっそり有名な、私立の学校です。

ただし生徒がぜんぶ天才児だけではなくて、両親がものすごい金持ちだとか、昔から続く古い古い家柄の娘や息子であるとか、外見がとてもすてきに生まれついたおかげで赤ちゃんのころから芸能界で人気の子役をつとめているとか...

なにかひとつ優れているところがあれば、入学できる、とも言われています。

ただし「お受験で。」...は、ないんです...

どんなに頑張って受験勉強させても、「ウチの子をぜひぜひ！ 入れてやってください！」と、ご両親や祖父母やお偉い親戚さんとかが、大金を積んで土下座しても...

「招待」されないと、入学できません。

その「招待される・されない」の、基準が...いまひとつ、よく解らないので...

ウチの子はとてもスペシャルに、すばらしい！...と思っている親たちオトナたちは毎年、「ウチの子はとても優秀だと思うけれども...あの、朝日ヶ森ガクエンに、...入れてもらえる？...ほど特別？ かしら...？」と...

入学や編入を許可する「招待状」が届く季節と噂されている秋の終わり頃には、使者の先生がたの来訪を待って、やきもき、そわそわ、するはめになります。

どこかの魔法学校みたいでしょ？

...え？ そんなこと、みんな知ってます！...って...？

...あらあら、あなた、詳しいのね...？

...招待状を、待ってるクチかしら...？

...でも、これは知ってるかしら...？

「有名な」朝日ヶ森には、じつは「学苑」と「学園」の、2つがあるんです。

それを知っている「関係者」はみんな、「学苑」のことは「オモテ」、「学園」のほうを「ウラ」または「ナカ」とか「真」とか呼びます。

「学苑」のほうは南東北の、東京からも新幹線で日帰りできる、便利な地方都市の便利な郊外にあるんですよ。

きちんと申し込めば、取材だって見学だって、できます。

そして、「学園」の、ほうは...

...どこにあるのか...？

一般には、知らされていない。と、いうことを...

『 リツコへ。 第一日 』 (@中学.....1年か2年?)

<http://76519.diarynote.jp/200607310030320000/>

2006 年 7 月 31 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=2 <http://76519.diarynote.jp/200607310030320000/>

> リツコへ。

>

> 理事長に就任したとの報、聞きました。まずはおめでとう。大人しかったきみが、そういった組織に携さわることになっていたとは少なからぬ驚きだったけれど、たしかに僕はきみを覚えていました。よく気にいった本を貸してくれたりしてましたよね。給食の時間いっしょに食べましたよね。

> もう大昔のことです。

> きみが、キヨセ律子が、(ごめんなさい字を忘れました)、そちらの、代表としてこの大地世界を訪れたいと言っていると、マーシャ.....旧名、有澄真里砂.....から聞かされた時には、僕は、まだ小学生だったあのきみにもう一度会えるものだと一瞬なつかしく、それから、地球という世界における 50 年という歳月の意味を思い出して、おばさん (失礼!) になったきみを想像するのに苦労をしていました。ところが門を抜けて姿をあらわしたのは、ぼくの記憶にあるままの、頭に白いリボンをつけた女の子だったわけです。

> (※> p.2.) きみの、息子さんの、お嬢さん.....孫、ですね、つまり.....タカハラのほうの律子、責任を持ってお預かりします。僕自身にかえても次の月踊の蝕には再び門の前へお返ししますので、安心して下さい。.....もっとも、この手紙はその高原律子ちゃんへ託すわけですから、このノートが手元へ届いた時には、僕の言葉は実証されているわけですが。

> それにしても、ほんとうにきみにそっくりです。僕自身がまだ少年と言って通る外見でいるうちに、かつての幼なじみに、僕の妹で通るようなのよなとしの、孫がいるとは!!

>かつて決裂の 3 マグチュアリ (大歴または上歴とでも訳せばいいでしょうか、1 マグチュアリは約 4000 年にあたります。) の昔以来、相似た文化と文明を持っていたはずのダレムアス (大いなる母神ダーレム=大地、の世界ウアス) と地球 (ティカーセル) (ころがる世界ティクス・ウワセル) が何故ここまで違ってしまったか。結論はここにつきるような気がします。

> 神を喪った地球の人類は、世代交代が早い!!

> 現代医学、なる術のすべてをつくしても僕がいたころの平均寿命の公称は男女とも 80 歳前後だったと思います。先進国の日本で、です。一方ダレムアスでは病気や事故で（ご存知の通りこれに近年は“戦争”が加わりますが）でなく 200 歳を迎える前に死ぬ者というのは、ごく稀なのではないでしょうか。“統計” だの“戸籍調査” だのは、そもそも概念からしてありませんから正確かつ科学的なことは何も言えないのですが。つけ加えるならマルクワス（王族、つまりダレムアスにおける創世主、女神マリアンディアの子孫）の直系であるマーシャなどは、前例からして 400 年前後はかるく生きるのではないのでしょうか？

>

> なにはともあれ、タカハラのほうの律子、責任をもってお預かりします。僕自身にかえても次の月蝕の蝕には再び門の前へお返しますので、安心して下さい……もっともこの手紙はその高原律子ちゃんへ託すわけですから、手元へ届いた時には僕の言葉は実証されているわけですが。

>

> 今日は見張り番の時間ですので、このへんで。

>

>

>

>

> 第二日、

>

> 孫のほうの律子嬢はよく眠れたようです。“リツコ” という音はダレムアスの言語体系にはなじみにくいもので、早速に愛称がつけました。“リーツ”。平野にいる小動物です。このあたりでは見られないようなので絵に描いて説明したところ、本人も気に入ってくれた様で、ふだん、口語で呼ぶときにはこれに接頭的美辞がついて“マリーツ” になります。

>

> それにしても、そちらから律子=マリーツに託された“さし入れ”がこのノートと筆記用具だった、という事実！……あいかわらずの洞察力ですね。朝日ヶ森は。

> たしかにダレムアスには、紙の製法は知られていないわけではないのですが、あまり流布していません。街道をゆく隊商や一部の商人は和紙と不織布のあいこのようなものを帳簿として使っていますが、一般のダレムアトは“樹が泣く”と言って、そのような加工法を好みません。昔の日本画のように絹布をその都度洗いなおして使うか、木簡、石板、あるいは交易路ぞいではイムエレ樹の広葉。ダレムアスにおける文盲率はいたって低いのですが、おおむね、“すぐに消すものなら書く必要はない” 式の、口頭伝達の方が好まれます。優れた記憶力であるからこそでしょう。

>

> で、話は戻りますが、朝日ヶ森の洞察力と親切が、しっかり下心に裏打ちされたものであることも忘れていませんでしたよ、僕らは。どうせこちらに“物書きぐせ”があるのを見込しての（ずいぶん長いあいだ忘れてましたが！）ことでしょう。それに、こちらの

国内で広く保存・利用するには、シャーペン、消ゴム、安価な紙、という三種の神器は、文明のレベルも文化の質も違いすぎるものですし。

>

> 暗黙裡の御要望通り情報入力の後、そちらの世界へお返し致します。

> 三者協議の結果、マーシャはダレムアスの代表たる女王の公文書として、ダレムアスの歴史（神話と）のあらましと現在の地誌、情勢、それらを含んだ対地球との関係をどうありたいと望んでいるか.....を、雄輝は將軍メイデリオの資格でもっばら現在の対“地球・ボルドム連合軍”戦争の経緯を、そして僕は、あくまでも在地の地球人として僕ら3人自身のこと、こちらでの文化・生活など気づいた事をルポとして片はしから補足する.....という分担が決まりました。

> まぁ実際には、身辺雑記を兼ね、私信を兼ねているのは御覧の通りです。

> なにしろ日本語で長文など書くのは数十年ぶり（たいていは3人で話す時にでもダレムアナロクです.....地球の言語類は、まぁ“暗号”ですね）、間違いがいっぱいあると思います。

> あと、残りのノートは3人協同で、ダレムアナロク<>日、英、の、簡易文法書と主要語辞書をあむことになるでしょう。出来上がりがいつになるかは判りませんが。

.....さて。

まだ小学校高学年～中学2年までの間に、漫画家になることを目指して書き溜めていたイメージイラストや絵コンテもどきがかなり残っているのですが、それはまた、スキヤナの使い方をマスターした頃に、改めて.....(笑)。

予定通り、沈没原稿のサルベージあんど虫干しの、「大地世界編」は、これにて終了です。

明日からは、「地球世界の日当たり編（プラスアルファ付き）」行きます♪

(^_^) ☆

(あらすじ) (プロット&目次)

(あらすじ) (プロット&目次)

(あらすじ)

(プロット&目次)

【投稿用】プロットメモ (2018年7月22日)

<http://85358.diarynote.jp/201807221810208838/>

<http://85358.diarynote.jp/201807221810208838/>

<http://85358.diarynote.jp/201807221810208838/> <http://85358.diarynote.jp/201807221810208838/>

2018年7月22日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201807221810208838/>

ひみつ日記

『リッコ冒険記』～夏休み・異世界旅行～

朝日ヶ森

朝日ヶ森 (表裏)

高原リッコ

清瀬律子

異世界へ

清峰鋭 (リレキセス・ジューンナール)

翼雄輝 (マダロ・シャサ)

有澄真里沙 (皇女マーライシャ)

叔母上 (前皇妹) (名前?)

伯父上（前女皇兄）フェルラダル
「星の娘」マシカ

「人質」（敵国からの亡命帝女）

「人質」を助けにきた少年

「戻れない国」へと「抜ける道」の入り口はあるのか？

・・・

異世界へ行く道

ふもとの街

・・・

諸侯会議

西の都の三皇子

鬼王

鬼王と亡命皇女

そして、夏休みの終わり。

400字～800字程度のあらすじ。 (2018年8月17日)

作品冒頭に、400字～800字程度のあらすじ（物語の最初から最後まで

説明したもの）をつけてください。

=====

<http://85358.diarynote.jp/201808180013462979/>

『リッコ冒険記』 - 夏休み・異世界旅行 -

霧樹里守（きりぎ・りす）

（あらすじ）

高原リッコは家族の事情で、私立学園の寮に住んでる。

その学長から「夏休みの手伝い」を頼まれた。

なんと、「異世界への親善大使」！

ええ？！

...っと思ったけど大人たちや先輩たちはみんな忙しくて行けないらしい。

「行って、みんなと仲良くして、まわりをよく観察して、レポートを書いてきてくれれば、それだけでいいの。

引き受けてくれたら他の宿題はぜんぶ免除してあげる！」

大好きな学長がそう言ってくれたので、喜んで引き受けた。

「隣の世界」と呼ばれる大地世界ダレムアスでは、優しいお兄さんに世話してもらっちゃうし。

食べ物は美味しいし、お祭りは楽しいし…、

…皇女サマには意地悪されたけど…。

もうひとつの異世界ポルドムとの戦争終結のための講和会議？ とか、

同じ大地世界のなかでも、民族紛争とか、暗殺未遂とか…

そういう難しい問題には、ショックを受けたけど…。

ぶあつい日記を抱えて、友達と涙でお別れして、リツコは夏休みの終わりとともに、

元気に帰国しました。

(設定資料集)

(設定資料集)

(設定資料集)

このコだ！ 「鍵になるキャラ」...っ！ WWW (2018年
6月30日)

<http://85358.diarynote.jp/201806301929408102/>

<http://85358.diarynote.jp/201806301929408102/>

2018年6月30日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180630/85358_201806301929408102_1.jpg

...ってことで、定例これ2つ、
2016年5月6日~12日まで、やりました~☆

../../../../book/119239/page/3306103

【復讐は、ビシソワズ。】(三年目)

> 労働条件が掲載されててコーヒー噴いた。

../../../../book/122681/page/3306077

リステラス星圏史略 sin 資料ファイル $\Omega - X - 2016 - 5$
(霧樹りすはアルパカ狼さんの夢を視るか?) (2016年05月)

> 「逃げていいし間違えてもいい。弱音は吐け!!」

では...休憩? したら、情報チェックに戻りりす~☆

(19:19...をかなり過ぎた...w)

(以下↓ 先に書いてた分☆)

=====

https://www.youtube.com/watch?v=xbqyAd_sZG0

1-Hour Fantasy Music - Aura (Full Album)

(承前)

やべえ。(^^;) この新設定、忘れてた...w

<http://85358.diarynote.jp/201605062015573333/>

> いやいや...(^^;) ...

> 古資料の再入力作業で、予想外の時間を食われまくりましたが、大回り？ したのは、ムダじゃなかった...☆

>

> どお〜りで！(□)！

>

> この後続く『皇女戦記編』の総構成が、いつまで経っても！

>

> ちっとも！「うまくまとまらない」

>

> (物語の全景が視えてこない。) と、思っていたら...☆

>

> ...w(□)w...

>

> 「ここでミヤセルが死んでるはずがない。」

>

> (マシカはそこまで愚かな小娘じゃない！)

>

> ...という、大前提が...間違っていた...wwwww

>

> ...w(^^;)w...☆

>

> ...なにしろ、マシカというキャラが「勝手に脳内に生まれてきた」時期と、

> 私が『指輪物語』に大ハマリした時期が、「たまたま偶然に」一致していたため...

>

> なにか、「美しい妖精物語は、理不尽な悲劇でなければ！」みたいな、

>

> むだな思い込み？ があって...??(^^;)??

>

> 14歳の時にざっくり出来上がっていたコンセプトをそのまま再考せずに、

>

> 何度も！ なんっども...！（--；）！
>
>（細部だけ）描き直していた。というところに...
>
> 敗因があった...<（--；）>...★
>
> まず！
>《道の果ての村》は、もっと大きな、「辺境だけど、薬師のメッカ」の、村...。
>
>「マシカの育ての親のおば様は、生前けっこうな大物だった」
>
>「マシカは《星ヶ沼》から、浮かんできた子ども」
>（は、薬師内でのみ周知の事実。）
>
>「大地世界内では、鬼族や球界系移民の子孫に差別や偏見がある」
>
>「にも関わらずマシカは薬師（知神ヨーリャ学派）の理念として、偶然目にした鬼族の重傷の子供を（命懸けで？）平等に救助した」
>
>（ので、鬼王に岡惚れされた...w）
>
>「鬼王がマシカに求婚したのはマシカが可憐で気高い美少女（笑）かつ薬師として有能だったから、妃に適任。と思っただけで...宝玉の存在が目当てだったわけではない。」
（存在自体を知らなかった）
>
>「マシカは鬼族を憎んでいて、滅ぼしたかった」という旧設定は、没！
>
>「マシカは鬼王に誘拐された後、鬼城で侍女たちや重臣たちの歓待を受けていて、必ずしも鬼族全般に対する心象は悪くなかった」（でも鬼王と結婚は嫌！）

...「どおーりで！」

今夏の「投稿用」課題原稿の、コンセプトが、うまく、まとまらなかったわけだ...www
w

>「にも関わらずマシカは薬師（知神ヨーリャ学派）の理念として、偶然目にした鬼族の重傷の子供を（命懸けで？）平等に救助した」

このコだ！「鍵になるキャラ」...っ！ www

参照⇒ <http://85358.diarynote.jp/201806031952559575/>

『リッコ冒険記』～夏休み・異世界旅行～(1)

(2018年6月3日)

よし☆ やっとリブースト、できるぞッ？

(やっぱ「天中殺中」の原稿は、難航...★)

> Kazuki Fujisawa @kazu_fujisawa ù 13 時間 13 時間前

>

> たいていのことは努力で何とかなるけど、努力とか言ってる時点で、そいつの負けはすでに確定しているんだな。ダイエットが成功しないように、あらゆる努力は続かない。つまり、好きこそものの上手なれ。

=====

> <http://85358.diarynote.jp/201605072238599694/>

>> 4月16日？ 以来「入眠障害」だった「眠れない私」は、一体どこへ...??

>

> 2016年5月7日

↑

あらまあ★w (^ ^ ;) w...?

=====

(ここで前項コメント欄が入る...☆)

=====

<https://hailstorm.c.yimg.jp/iwiz-weather/lightning/1530342000/1011-0010-101000-201806301600.gif?t=1530342656>

(15:50～16:00)

<https://www.youtube.com/watch?v=dmji4-Piokg>

ジブリ で ska

...眠いッ★

...のに、眠れないッ★(ーー#)★

<http://85358.diarynote.jp/201605072250452412/>

> United Flow さんがツイート

> 殺せんせーの教え @teacher _oshie ù 3 時間 3 時間前

>

> 昨夜寝つけなかった人へ

> 寝転がりながら両手足を 30 分 開いて、

> 全身の力を抜いてみてください。

> それから目を瞑って、

> ゆっくり腹式呼吸。

> これを 15 分行うだけで

> 身体が 2、3 時間の睡眠を

> 取ったと同じくらい休めるんですよ。

...お?! ...後でやってみよ...♪

<https://www.youtube.com/watch?v=4e2csANJoSE>

Ghibli In The Mix [FULL ALBUM]

<http://85358.diarynote.jp/201605111428261244/>

> 今日元気 緊急事態条項はナチスの手口さんがツイート

> ブラウン研究 @BROWN _criff ù 19 時間 19 時間前

>

> 水素水なんか飲んでないで二酸化炭素水で満足しとけ、という内容のツイートを見て「ソーだソーだ」というダジャレを思いついたが、発表するべきかどうか迷う。

<https://www.youtube.com/watch?v=5okimSbxjWM>

ジブリ で レゲエ

<http://85358.diarynote.jp/201605121121106470/>

> 繭子←∞楽愛善力∞薬師如来さんがリツイート

> nekocom @nekocom ù 5月2日

>

> サバイバルで最後まで生き残った人の名言で「楽観は死ぬ確率を高める」がある。

>

> 「明日は仲間が助けに来てくれる」「この状況を楽しもう」

> 「悲観していても仕方がない」という人は続々と息絶えた。

>

> 生き残る術は「助けは来ない」

>

> 「状況を直視し危険を回避」

> 「時が過ぎるのを待つのみ」だという。

>

> 深い。

<http://85358.diarynote.jp/201605090818289861/>

> ...それでも。アシタ。

>

> ...物語の種を、私は、育て続けよう...

((ことばよ、つうじよ！)) (2018年8月9日)

<http://85358.diarynote.jp/201808090444322941/>

<http://85358.diarynote.jp/201808090444322941/>

2018年8月9日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201808090444322941/>

「ま〜るめる！ まるった！ えら。えららう。まるる〜ん...??？」

「えるった！ らう！」

「まるえ？ えら。あらう。...あろ、...あっかせっか！」

「か〜いせ！ えのっかあるっか、らうらうらう。あごん！」

「ま〜りえった！ れっと、せっと、えッ！」

((ことばよ、つうじよ！))

コメント

<http://85358.diarynote.jp/>

<http://85358.diarynote.jp/>

2018年8月9日 4:45

「まれた！」

(サ行前の雑談など)

(サ行前の雑談など)

(サ行前の雑談など)

【ぐれてる理由】。(- - ;)。 (2018年5月13日)

<http://85358.diarynote.jp/201805131657248536/>

<http://85358.diarynote.jp/201805131657248536/>

2018年5月13日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180513/85358_201805131657248536_1.jpg

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180513/85358_201805131657248536_2.jpg

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180513/85358_201805131657248536_3.jpg

> 【郵便局】配達完了報告メール

> info@delivery.post.japanpost.jp

> 返信 |

> 05/01 (火) , 8:02

> 自分

>

> 日本郵便株式会社「配達完了メール通知サービス」をご利用いただきありがとうございます。

>

> 受付けをいたしました郵便物の配達状況についてお知らせいたします。

>

> 【受付日時】

> 2018年04月22日(日)

> 21:02

> 【受付番号】 x x x - x x x - x x x

> 【お問い合わせ番号】

> x x x x - x x x x - x x x x

> 【郵便物等の種別】

> レターパックプラス

> 【取扱店舗】

> 小石川郵便局

> 【取扱日時】

> 2018年04月01日(日)

> 06:51

> 【配達状況】

> 郵便物等の配達完了が追跡期間中に確認できませんでしたので、お近くの取扱店へお問い合わせください。

>

> 「配達完了メール通知サービス」は送信専用アドレスで送信しております。

> このメールに返信されましても回答いたしかねますのでご了承ください。

↑

いつまで経っても「配達完了」してない？ ので、

確認したら、この返事...(--#)...

(あんなに頑張って書き上げて校正いれてプリントして自転車ダッシュして投函したのにッ！！！！)

...もはや、問い合わせる気力も、次の書き上げる気力も、

残っておりません...(--#)...

<https://www.youtube.com/watch?v=8xMk1s8IZzk>

斉藤和義 大丈夫高画質 高音質

『リッコ 冒険記』 ～ 夏休み・異世界旅行～ (1)
(2018年6月3日)

<http://85358.diarynote.jp/201806031952559575/>

<http://85358.diarynote.jp/201806031952559575/>

2018年6月3日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201806031952559575/>

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180603/85358_201806031952559575_1.jpg

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180603/85358_201806031952559575_2.jpg

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180603/85358_201806031952559575_3.jpg

https://www.youtube.com/watch?v=qfsr0S_QG0U

SEKAI NO OWARI 「Hey Ho」

(参照コメント欄)

⇒ <http://85358.diarynote.jp/201805012155373355>

めも。(2018年5月1日)

んで。(^^;)

コレを先に...(今年は「敢えて!」「天中殺」ど真ん中まっさいちゅうに!)

書きまーす☆

↓

http://aoitori.kodansha.co.jp/news/1/literature_award.html

> 第2回「青い鳥文庫小説賞」大募集!

>

> 昨年度より開催し、ご好評いただいた「青い鳥文庫小説賞」。

> 今年度も、第2回「青い鳥文庫小説賞」を開催いたします!

- >
- > 明日の青い鳥文庫をつくる、「おもしろい話」を書いてみませんか？
- > 青い鳥文庫にふさわしい小説であればジャンルは問いません。
- >
- > 小・中学生を読者対象とした
- >
- > オリジナリティあふれるエンターテインメント作品をお待ちしております！
- >
- >
- > 【応募受付期間】
- > 2018年7月27日（金）～9月27日（木）（当日消印有効）
- >
- > 【賞】
- > <大賞> 正賞の盾ならびに副賞の50万円
- > <金賞> 正賞の賞状ならびに副賞の20万円
- >
- > 【応募資格】
- > 年齢およびプロ、アマチュアは問いません。
- >
- > 【選考委員】
- > 青い鳥文庫編集部
- >
- > ☆応募要項☆—————
- > 【原稿枚数】
- > ●1ページ40字（E28行の縦書きプリントアウトで、80ページ以上100ページ以内。
- > （短編の連作の場合は、主人公が同一、あるいは内容に関連性があること。）
- >
- > ●A4サイズ of 用紙に横向きで印刷してください。（印刷は片面のみ、ページ番号をつけてください。）
- > ●手書き原稿は不可です。
- >
- > ●作品冒頭に、400字～800字程度のあらすじ（物語の最初から最後まで説明したもの）をつけてください。

…ってことで、「投稿用」なので…

...本文は、な〜いしょ〜...♪

(...落ちたら来年くらいにブログで後悔処刑にします...w)

<https://www.youtube.com/watch?v=PBI0i5OVcKs>

SEKAI NO OWARI 「RAIN」 Short Version PV 主題歌映画「メアリと魔女の花」

↑

...ちょっと待て！

こりゃ『青い鈴の花の草原』じゃないか...ッ?! (まだ観てない。)

=====

[https://hailstorm.c.yimg.jp/iwiz-weather/lightning/1528022400/1011-0010-101000-](https://hailstorm.c.yimg.jp/iwiz-weather/lightning/1528022400/1011-0010-101000-201806031940.gif?t=1528023046)

[201806031940.gif?t=1528023046](https://hailstorm.c.yimg.jp/iwiz-weather/lightning/1528022400/1011-0010-101000-201806031940.gif?t=1528023046)

(19:30~19:40)

コメント

<http://85358.diarynote.jp/>

<http://85358.diarynote.jp/>

2018年6月5日 8:21

やげざわ@造形コス作ります。 @yagezawa ù 22 時間 22 時間前

返信先: @FUDEGAMI さん、 @Yuigi_sekido さん

そういう脱出計画や反乱を先導する人は、もう最初の方でとっくにナチに殺されて、

収容される人達にはリーダー格は居らず、

(失礼な事言うと) 使われる側の人達だった。だと思います。

<https://twitter.com/FUDEGAMI/status/1003366696105725953>

(案の定【天中殺中】で頓挫している) (2018年7月22日)

<http://85358.diarynote.jp/201807221810208838/>

<http://85358.diarynote.jp/201807221810208838/>

<http://85358.diarynote.jp/201807221810208838/> <http://85358.diarynote.jp/201807221810208838/>

2018年7月22日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201807221810208838/>

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180722/85358_201807221810208838_1.jpg

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180722/85358_201807221810208838_2.jpg

https://www.youtube.com/watch?v=1R50eb1LL_U

君の名は。(プレビュー)

脳みそ停止中。悠宙舞さん自動推奨でイキナリこれ。↑

(^^;)

17:59。札幌の現在気温+... 20°C... ☆

(むしろ寒い!)

<https://www.youtube.com/watch?v=e3Ze62AL9r0>

Kimi no Na wa. 『君の名は。』 Official MV - Sparkle

↑

実はまだ観てない... w (その前に原作を読みたい☆)

(難航中... といつか完全放棄中... のプロットメモは投稿用なので「秘密」～☆)

コメント

<http://85358.diarynote.jp/>

<http://85358.diarynote.jp/>

2018年7月22日 18:13

あ、違う。画像1はさきおととの通勤中... かな？

画像2は昨日の通りすがりの爆笑大賞。w (^◇^ ;) w

西区の「サイクルショップ冬眠」さん。(すげえ気が合いそう... w)

あと何だっけ... 書くこと一杯あったはずなんだけど... w

<http://85358.diarynote.jp/>

<http://85358.diarynote.jp/>

2018年7月22日 18:24

『りすパカ』の「固定読者」サマ？ 確定人数??

⇒閲覧数：263

...ちっ! ...やっぱり...『落ちた』か...★ (2018年8月12日)

<http://85358.diarynote.jp/201808121431479423/>

<http://85358.diarynote.jp/201808121431479423/>

2018年8月12日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201808121431479423/>

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180812/85358_201808121431479423_1.jpg

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180812/85358_201808121431479423_2.jpg

http://diarynote.jp/data/blogs/1/20180812/85358_201808121431479423_3.jpg

...い、いやなことは、1回で済ませるに限る...ッ!!

http://ehon.kodansha.co.jp/literature_award/report/2018/a.html

> 第59回(2018年)講談社児童文学新人賞

> 選考経過・報告

>

> 第二次選考の通過者を発表! 2018.7.27

>

> 今年で59回を迎えた児童文学新人賞に、530作品のご応募をいただきました。

> バラエティに富んだ、個性あふれる作品の数々をご応募くださったみなさまに、心からお礼申し上げます。

>

> このたび、第二次選考に残った34作品をご報告いたします。どの作品も力作揃いです。

>

> 8月上旬に最終候補作を、8月下旬に受賞作品を、このページで発表いたします。

> 今年度の栄冠はどの作品に輝くのか？ どうぞ、ご期待ください。

>

>

...ちっ！...やっぱり...『落ちた』か、『郵便事故で届かなかった』か、

...どっちか？ だったか...ッ！（TへT）！...★

（そして...おそらく...「要求されてる方向性と、違った。」らしい...www

↓

http://ehon.kodansha.co.jp/literature_award/report/2018/b.html

> 第59回(2018年)講談社児童文学新人賞

>

> 選考経過・報告

>

> 最終選考の通過者を発表！ 2018.8.8

>

> このたび、最終選考に残った5作をご報告いたします。

>

> 今年度は、どの作品が栄冠に輝くのか？

> 受賞作品は、8月下旬に発表いたします。どうぞ、ご期待ください。

>

> ヌック・マッティの銀の夢 釘子乃一

>

> たたきつぶす国語くさかべ かさく

>

> 青の楽園黒木 ぶどう

>

> お絵かき禁止の国 長谷川 まりる

>

> 14歳日和 水野 瑠見

>

> (順不同)

...ふむ...(^^;) ...

...「この賞」の「受賞傾向」は...「わたし向きじゃない」かも...w

...(とりあえず、この項終わり!)

コメント

<http://85358.diarynote.jp/>

<http://85358.diarynote.jp/>

2018年8月12日 14:33

...あっ!

てことで!

「落ちた作品」は「ブクログで公開処刑」

(有料!)の予定〜っ!

(作業はそのうち...)

次い征くぞ！ 次っ！ (2018年8月12日)

=====

さっ！ 天中殺オワッタシッ

次い征くぞ！ 次っ！

↓

http://aoitori.kodansha.co.jp/news/1/literature_award.html

> 第2回「青い鳥文庫小説賞」大募集！

>

> 昨年度より開催し、ご好評いただいた「青い鳥文庫小説賞」。

>

> 今年度も、第2回「青い鳥文庫小説賞」を開催いたします！

>

> 明日の青い鳥文庫をつくる、「おもしろい話」を書いてみませんか？

>

> 青い鳥文庫にふさわしい小説であればジャンルは問いません。

>

> 小・中学生を読者対象としたオリジナリティあふれるエンターテインメント作品をお待ちしております！

>

> 【応募受付期間】2018年7月27日（金）～9月27日（木）（当日消印有効）

>

> 【賞】

> <大賞> 正賞の盾ならびに副賞の50万円

> <金賞> 正賞の賞状ならびに副賞の20万円

>

> 【応募資格】年齢およびプロ、アマチュアは問いません。

>

> 【選考委員】青い鳥文庫編集部

>

> ☆応募要項☆—————

- >
- > 【原稿枚数】
- > ●1 ページ40 字 (E 28 行の縦書きプリントアウトで、
- > 80 ページ以上100 ページ以内。
- >
- > (短編の連作の場合は、主人公が同一、あるいは内容に関連性があること。)
- >
- > ●A4 サイズの用紙に横向きで印刷してください。
- >
- > (印刷は片面のみ、ページ番号をつけてください。)
- >
- > ●手書き原稿は不可です。
- >
- > ●作品冒頭に、400 字～800 字程度のあらすじ
- > (物語の最初から最後まで説明したもの) をつけてください。
- >
- >
- > 詳細
- >
- > 【応募方法】
- >
- > ●講談社青い鳥文庫サイトの小説賞ページ
- > http://aoitori.kodansha.co.jp/news/1/literature_award/
- > よりご応募ください。
- >
- > ①上記サイト上で必要事項を入力し、応募票を印刷のうえ、原稿の1 枚目につけてく
ださい。
- >
- > ②2 枚目に、あらすじ(400 字～800 字程度)をつけてください。
- >
- > ③3 枚目以降に原稿をつけて、右上すみをひもでとじてください。
- >
- > 【応募原稿の送り先】
- >
- > 〒112-8001
- > 東京都文京区音羽2-12-21
- > 講談社 第六事業局「青い鳥文庫小説賞」係
- >
- > 【発表】
- > 2019 年2 月中旬、青い鳥文庫サイトにて発表します。

- >
- > (2018年12月中旬に1次選考通過作品、
> 2019年1月中旬に2次選考通過作品を発表します。)
- >
- >
- >
- > Q. 青い鳥文庫の対象年齢は何歳ですか。
- > A. 小学3年生～中学生が読めるものとお考えください。

...ってことで...「小学校3～4年生のころに、私が読みたかった話」を...

...これから...(けっきょく「天中殺中」は全く書けなかった! ので...w)

...突貫工事で.....

書きますッ!

(1ヶ月(正味2週間)で、文庫本1冊分の投稿用原稿を書く! という娯楽w)

★ 【講談社『青い鳥文庫』の呪い!?!】の謎。 ★

<https://85358.diarynote.jp/201902221016555033/>

<https://85358.diarynote.jp/201902221016555033/>

2019年2月22日 https://85358.diarynote.jp/?theme_id=6

https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190222/85358_201902221016555033_1.jpg

https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190222/85358_201902221016555033_2.jpg

https://diarynote.jp/data/blogs/1/20190222/85358_201902221016555033_3.jpg

<https://www.youtube.com/watch?v=AhVQucm-U8k>

疾走感のあるカッコイイ 戦闘曲集【Battle Music】

↑

(タイトル参照)

⇒ <https://85358.diarynote.jp/201902212001225080/>

> ... 落ちた落ちた... www

> ⇒ <http://aoitori.kodansha.co.jp/news/1/98.html>

> 【速報!】第2回「青い鳥文庫小説賞」

> 最終選考結果発表!

⇒ <https://85358.diarynote.jp/?day=20180906>

⇒ <https://85358.diarynote.jp/201809081846266111/>

> コメント

> 霧木里守⇨畑楽希有 (はたらけきあり)

> 2018年9月8日 22:01

>

> ... とりあえず、「最低作業目標 (1日目)」まで完了!

> これな! ⇒ http://aoitori.kodansha.co.jp/news/1/literature_award.html

↑

★投稿原稿用！「10連休初日！」に【震度7】が来て...w

★投稿原稿「落選！」確認した日に...【震度6】が来た...www

...なんなの？『青い鳥』呪いな...??！ www

=====

> チャーリー (Lv53) さんがリツイート

> 気早し @you4935 ù 8 時間 8 時間前

> 気早しさんが鳩山由紀夫をリツイートしました

>

> これ、2月頭のツイートだからね。それで2月19日にCCS再開ですからね

> <https://twitter.com/you4935/status/1098598603495563264>

> チャーリー (Lv53) さんがリツイート

> 鳩山由紀夫 認証済みアカウント @hatoyamayukio ù 10 時間 10 時間前

>

> 先ほど

> 北海道厚真町の地震は苫小牧での炭酸ガスの地中貯留実験 CCS によるもの

>

> ではないかと思いたばかりの本日、

>

> 再び厚真町を震源とする震度6の地震が起きてしまった。

>

> 被災された方々にお見舞いを申し上げると同時に、

> 本来地震に殆ど見舞われなかった地域だけに、

>

> CCSによる人災と呼ばざるを得ない。

> <https://twitter.com/hatoyamayukio/status/1098563237774209024>

>

> ↑

> youai @youai11 ù 10 時間 10 時間前

> 返信先: @hatoyamayukio さん

>

> 2/19 に圧入再開しています！！

>

>

> しょーこ @hozkdUzPulGSovs ù 10 時間 10 時間前

>

> 詳しい訳では無いんですが、自分なりに地震との関連を調べたんですが、CCS が始まって以来地震凄いですもんね…。場所も不自然だし。

>

> ちゃんと事実を皆が分かってくれたら、鳩山さんのこのツイートも理解されるんでしょうね…。

> 固定されたツイート

> JUMPILIKYOU @jumpilikeyou ù 11 時間 11 時間前

> JUMPILIKYOU さんが鳩山由紀夫をリツイートしました

>

> 鳩山由紀夫元首相、2019.2212122 厚真地震について、再び人工地震に言及

> <https://twitter.com/jumpilikeyou/status/1098566210466111489>

> JUMPILIKYOU さんがリツイート

> かんち @RxxkqZ ù 11 時間 11 時間前

>

> 苫小牧と厚真町は隣接しています。

> CO2 を 2018 年 8 月までに 20 万トン埋め立てて、9 月 1 日からは何らかの理由で中止をしています。

>

> 今回も 2 月 19 日から、CO2 の埋立を開始しています。

> CCS の再開と地震は関係あるだろ！

> 今すぐやめなさい！

> <https://twitter.com/RxxkqZ/status/1098566774688165888>

> <https://twitter.com/yuki02377614/status/1098566431799631872>

> JUMPILIKYOU さんがリツイート

> 鳩山由紀夫 認証済みアカウント @hatoyamayukio ù 15 時間 15 時間前

>
> 先日昨年の北海道厚真町地震が高圧で CO2 を地下に貯蔵する CCS により人工的に引き起こされたのではないかと書いた。実際、北大の研究者が 5 年前にその可能性があるとする論文を発表していた。

>
> 日本では地震の影響を考慮すると CCS は非現実とも述べている。
>
> 政府は決して認めないだろうが CCS は再考すべきだ。
> <https://twitter.com/hatoyamayukio/status/1098510732864311296>

> JUMPILIKEYOU @jumpilikeyou ù 6 時間 6 時間前
>
> 順に
> 平成 16 年中越地震
> 平成 28 年熊本地震
> 平成 30 年胆振地震
> の山崩れ
>
> 発破のような
> 人工的な印象が共通
> <https://twitter.com/jumpilikeyou/status/1098639288344821760>

=====

> JUMPILIKEYOU @jumpilikeyou ù 12 時間 12 時間前
>
> 2212122
> 語呂合わせだろ
> また自衛隊がやったな
> <https://twitter.com/jumpilikeyou/status/1098562174098714625>

=====

> JUMPILIKEYOU さんがツイート

> 村手 さとし @mkmogura ù 10 時間 10 時間前
>
> 北電が停電のための訓練とかいって、CSS でこの地震。
>
> 次の地震のための停電をさせるリハーサルかな？
> <https://twitter.com/mkmogura/status/1098579837336211458>

> JUMPILIKEYOU さんがリツイート
> Toru _Nan @Toru _Nan ù 11 時間 11 時間前
> Toru _Nan さんが YAF をリツイートしました
>
> 311 以降、何回「今の地震で、〇〇原発には異常はないということです」という言葉を聞いたろう...。
> https://twitter.com/Toru_Nan/status/1098566375847542784

=====

> チャーリー (Lv53) @charlie24K ù 7 時間 7 時間前
>
> あー、2 日前のこの雲の収束方向は...
> 厚真の方だねえ。
> <https://twitter.com/charlie24K/status/1098605329129107464>
>
>
> チャーリー (Lv53) さんがリツイート
> Yoshihiko @yoshiworldpeace ù 10 時間 10 時間前
>
> 後だしになってしまいましたが、今日は午後から雲の動きが変だったのと、こちらのグラフから地震を予想していました。
>
> 僕のところで震動 4 でした。
> <https://twitter.com/yoshiworldpeace/status/1098561038222422016>
>
> <https://twitter.com/charlie24K/status/1098568267185020934>
>
>

> チャーリー (Lv53) @charlie24K ù 10 時間 10 時間前
>
> これも前兆だったんだらうなあ...
> ここまで極端に出ると、何かのノイズなのか人為的なものなのか、前兆なのかは
>
> 俺たちには判断のしようがない。
> <https://twitter.com/charlie24K/status/1098573624829571072>
>
>
> チャーリー (Lv53) @charlie24K ù 10 時間 10 時間前
>
> 制限でデータ見られない時に来るなよなー！
> 予測が出来ん (-▽-)
>
> まあ、ここんとこ体調が最悪だったのは体感だったんだらうなあ...
>
> 停電にはならんでくれんかなあ (t ; 㐂 ; ‘)
> <https://twitter.com/charlie24K/status/1098563477403197440>

=====

> utako @sasakurautako ù 8 時間 8 時間前
> 返信先: @UN_NERV さん
>
> こういう時に原発動いてればとか言う奴いるけど、
>
> ①原発は震度4で必ず停止する
>
> ②原発事故っても雪で避難は不可能
>
> ③どっちみち「大規模一極集中電源」である以上
> ブラックアウトのリスクは同じ
>
> 以上の理由からただの火事場泥棒的なクズだと思っている。
>
> 北海道だけは頼むから分散電源化しろ
> https://twitter.com/UN_NERV/status/1098559679892905985

- > JUMPILIKEYOU さんがリツイート
- > 一井唯史 (元東電 賠償 労災申請中 無党派) @IchiiTadafumi ù 2018 年 9 月 16 日
- > 一井唯史 (元東電賠償 労災申請中 無党派) さんが堀江貴文 (Takafumi Horie) をリツイートしました
- >
- > 真実を知らない者の言うことは軽い
- >
- > ホリエモンって意外と頭悪いんだって初めて思った
- > <https://twitter.com/IchiiTadafumi/status/1041410735597748224>

=====

- > 千鳥・ボブ @5PNj9invMmx1Ejk ù 10 時間 10 時間前
- > 返信先: @MomentsJapan さん、@CAO_BOUSAI さん
- >
- > 人間って怖いよね。東京住みだけど、ホントに不謹慎でダメだと思うけど
- >
- > 「東京じゃなくて良かった」って一瞬でも思った自分に嫌気がさす。
- > <https://twitter.com/MomentsJapan/status/1098560613758861317>

↑

いやいや...(^^;) ...フツウだし、当然でしょ...w

=====

- > 黒酢 三太 @c_h_i_o_n ù 2 月 19 日
- > 返信先: @kazparis さん、@ms9005fw さん
- >
- > 被ばく線量を一桁小さく表示されて居る広告の説明アリ。
- > <https://twitter.com/kazparis/status/1097860221345574912>

- > アナキスト @4cylinder ù 12 時間 12 時間前
- >

- > 安保さん 近頃見ないと思ってたらアカウント制限されていたようですね
- >
- > おまけにフォロー外されました。
- > <https://twitter.com/4cylinder/status/109856059555540993>

=====

- > JUMPILIKEYOU さんがリツイート
- > オウム事件説明 bot @aumjikenkaimei \ 2月20日
- >
- > 【地下鉄サリン事件】化学兵器の専門家三人が、サリンではありえないとの見解を ABC ニュース番組の中で指摘したが、日本ではこれが全く報道されていない。
- >
- > 誰が圧力をかけたのか？
- > https://twitter.com/aumjikenkaimei_/status/1098251664379633665

=====

- > cmk2wl さんがリツイート
- > アドラー心理学サロン (アドサロ) @AdlerSalon 2月20日
- >
- > 無駄に仲間なんて作らなくていい。
- >
- > 特に日本人は、無意味に結束したがりがり過ぎる。
- >
- > 共通の目的を達成する為に力を合わせることに、
- >
- > 安心感を得る為にただ群れるのは訳が違う。
- >
- > 無駄に結束して、自分を見失うのでは何の意味も無い。
- >
- > 自分には自分の人生があり、幸せの形は人それぞれ。
- >
- > 目を覚まして！
- > <https://twitter.com/AdlerSalon/status/1098151807484715008>

=====

- > ma-chan @machan0168 ù 11 時間 11 時間前
- > 返信先: @tomcat2013 さん、@haggy1109 さん
- >
- > 守る家族、彼女なし、アニオタやニートに訴求してるかな
- > <https://twitter.com/tomcat2013/status/1098051317426094080>

=====

https://twitter.com/doubutu_kawa_d/status/1098345431803850754

奥付

奥付

『リッコ 冒険記』

～夏休み・異世界旅行～

<https://puboo.jp/book/123124>

講談社『青い鳥文庫』小説賞（2018年）

！ 応募⇒落選！

☆ 著者 ☆

霧 樹 里 守

（きりぎ・りす）

（2018.07.22. 分冊）

（2019年2月22日）

⇒「落選記念」公開処刑！）

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/123124>

電子書籍プラットフォーム：パブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

『リッコ冒険記』 ～夏休み・異世界旅行～

著 霧樹 里守 (きりぎ・りす)

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
